

梅尾得三郎

明治九年九月十日生
京橋區加賀町一四番地
電話 電座 一五八八番

東都の華銀座によつて京橋區は輝かしき生命を躍動させてゐる。流行は銀座より、實に現今文化の魁として流行界の範を生むものは銀座である。而して銀座は京橋區の全生命であり、又東都の華である、隨つてそのこゝに區會議員として區政に參與する人々の双肩にかゝる荷は如何に重且つ大を極むることであらう。然して我が梅尾得三郎氏は銀座の愛好者であり、且つ銀座將來の發展を限りなく希望して已まざる現京橋區々會議員である何と適材適所ではないか。顧みれば未だ世人の記憶に生々しい大正十二年九月一日の大震災は帝都の大半を烏有に歸した。江戸三百年の文化も東都の華銀座も可惜一朝にして灰燼となつた。當時乃ち昨日までの歡樂とを陶酔を種花一朝の夢と歎ぜざる人々が果して幾人ゐたことであらう。轉禍爲福「復興は銀座より」を標語として即ち銀座は復興の先陣承つた。當時我が梅尾氏の献身的活躍振りは今尙土地の人々の話柄となつてゐる。氏は現に手廣く米穀商を営んでゐるが、固より震災當時は家財の大半を焼失したのであつた。然し天性の義侠は氏の愛好する銀座復興の爲め不眠不休の活動を續けた。今や銀座は漸次災前の俤を恢復してゐる。されど氏は災前の銀座恢復を以つて足れりとせず、更に其の地域の延長に奔走し、その實現の第一要件として現在の外濠線を加賀町線に改設するの計畫を樹て、目下同志と共に着々實現運動を進行せしめてゐる。氏は常州鹿島産、目下區會議員として區政に參與するのみならず土地區劃整理委員、加賀町曙會長として町内自治に當つてゐる。夫人との間に二男二女がある。

清水義俊

明治十一年五月五日生
小石川區林町九六番地

「渴へたる者よ、汝の立てる所を深く掘れ、其處には必ず泉あらん。智を求めんとする者よ、汝の心の中を探せ、そこには世の凡てが藏されてゐるであらう」。而してこの言葉は、よく己を知り、又よく己の立てる處を知る人へのみ得たる、境地である。然るに現代人は他に求めて己に求めず、焦慮奔走して却つて徒なる幻影を掴むの愚を演じ、而もこれを悟らずして得々たるが如きものが多い。憐むべき錯覺である。此の間にあつて、わが清水義俊氏は獨りならず、常に己れに顧みて取捨する所を擇み、其上に自己の生活を營みつゝある精神的努力家である。氏はその昔より仁俠を以つて知られたる上州は碓氷郡の産、郷費を卒へ暫く家業に勤んでゐたが、夙に軍人たらんを志し、幸にも徴兵検査に合格したのでを機として下士志願兵として入隊し、精勵よく軍紀を守り、演習に常に拔群の成績を修め、次第に累進して遂に特務曹長と迄なつたが、家事の都合により三十九年軍職を辭し、翌年東京市の聘に應じて水道課に勤務し、敏腕を發揮して上司同僚の信任する所となり、明治四十四年日本橋改築當時の如きは全く驚異すべき技術を示して顯著なる功績を擧げ、市長より金一封を授與さるゝに至つた。かくて爾來なほ精勵する所あり、大正五年には累進して物品出納吏代理を命ぜられ、十年水道事務に關して京都、大阪、神戸等の地に仔細なる研究視察を遂げ、以來水道事務に關して貢獻する所多きを以つて大正十三年には遂に上げられて現在の榮職に進んだのである。才腕已に老練、今後俟つべく尙幾多のものが残されてゐる。

阿部五郎

明治十五年九月九日生
北豊多摩郡二丁藤村四四五番地

東京府農林課長として常に卓抜なる手腕を發揮し、豊富なる識見を披瀝して令名を馳せて居る人に阿部五郎氏がある。氏は東北岩手縣盛岡市の出身で、土地の中學を卒えて盛岡農林學校に入り、更に専門學理討究の必要を痛感して進んで東京帝國大學に學び、又駒場農大に於て實際學理の研鑽を經、明治四十一年東京府農商課に職を奉じ、爾來滿二年間、同課事務に献身的の努力を續け、四十三年郷里盛岡に歸り、岩手縣廳に入り、天分の才能を發揮し又は母校盛岡高等農林學校に教鞭をとつて豊富なる學識を以て之に携つてゐたが、明治四十五年再び東京府の懇望する所となり、府の農林課に奉職し、數年に亘る長時日を或は農産に或は植林に私事を忘れて東奔西走し、幾多の顯著なる功績を残すに至つた。その不斷の努力は遂に酬ひられて、去る大正八年同課々長に陞進して其の事務を管掌し、成績大いに見るべきものがあり。更に同十二年には氏の天分豊かなるを認められて商工課々長を兼任したが、之亦奮闘良く事務の進歩を圓滑ならしめ、各方面に異常な發達を促すと共に衆人をして驚異の的たらしめたものである。彼の實業成績の著しい進歩、伊豆七島に於ける青牛牧養の改良、多摩川水源地に於ける植林事業、内灣漁業改良、水産試験所設立等枚擧に遑なき程の氏の功績は、氏の如何に敏腕家であり、如何に明晰な頭腦の所有者であるかを最も雄辯に物語つてゐる。本年未だ四十有五歳、將來に期待すべき功績たるや、蓋し大なるものがあらう、夫人とみ子との間に一女あり、極めて趣味に豊かな士である。

勝間田信太郎

文久三年八月十二日生
芝區田町一の十三
電話 高輪 二〇五三番

芝區會の重鎮として令名ある勝間田信太郎氏は千葉縣の人、曾て劍道指南として堀田藩中に聞えた勝間田彌太郎氏は氏の嚴父である。少年の頃文武の道を嚴父に就いて學んだが、長ずるに及んで將來身を育英の事に捧げんと決心し、首尾よく文部省檢定試験に合格して職を神奈川縣下の某學校に奉じた。所が當時横濱の地は日と共に泰西の文明を輸入し、目まぐるしい程の發展を見せてゐた。人一倍血の氣の多い氏が黙つて之を見てゐられる筈はない。そこで遂に心氣を轉じて實業界へと志し、同地の清水商店に入つて實際的の手腕を磨き、其後上京して洋酒類の販賣に手を染め、次で馬糧會社をも目論んだが、何れも機熟なかつた爲、徒に失敗の歴史を繰返へすのみであつた。然し鐵の如き強固なる意志を有する氏は、艱難に直面して益々勇氣を倍し、遂に萬難を排して現在の地に店舗を設け、鋼鐵並に機械類の販賣に従事することになつた。以來寢食を忘れて奮勵したが、時恰も日露戰役に際會したので、業績次第に上り遂に今日の如く斯界に嶄然頭角を抽んずるに至つたのである。思ふに氏が今日の成功は一面氏の頭才が然らしたものと云へ、又粒々辛苦實に血と膏の結晶である。氏は又夙に公共の事に心を砕き、居町の共榮共存に貢獻する處多く、衆望の歸する處義に推されて區會議員となり、區政の樞機に參畫して常に正義を高調し、區民の福祉を増進すべく不斷の健闘を怠らない。此外氏は從來國勢調査其他の委員に擧げられて公共の爲に盡す處多く、其功績は定に没すべからざるものがある。夫人しげ子との間に二男三女がある。



小林 國次
明治十五年二月二十三日生
府下大崎町五反田
電話 高輪 一六・六三・三三

大崎町の五反田に、恰も御殿を思はせる様な壯麗を極めた廣大なる一構、これぞ有名な松泉閣で、小林國次氏の經營にかゝるものである。氏は信州長野市の名門の生れで、その祖先を尋ねるに、信州長沼の城主たりし佐久間勝平は、實に氏を邁る十數代前の祖である。勝平は姓を小林と改め傳兵衛と名乗つた。後六代茂左衛門に至りて居を長野に移し、數代を経て氏の祖父榮次郎氏とはなつたのである。榮次郎氏は若年の頃より普光寺の世話人として、伏見尼公の宮文秀女皇に奉仕し、夙に勤王の志を抱き、志士を語ひて回天の偉業に力を致し、殊に信州の偉傑佐久間象山と親交があつたと云ふ。又武道にも秀で、正真流の體術の極意を極め、文武兩道學徳兼備の志士として名聲を天下に馳せてゐた。父の茂三郎氏からは郷里にありて吳服商を營み、氏もその始め郷にあつて父の家業を継いだ。向上進取の氣性に富める氏は、郷土にくち果つることを屑しとせず、明治三十年、大望に脚を踏らせつゝ、上京した。氏は始め身を實業界に投じ相當見べきものがあつたが、明治四十年向金猿町に牛肉問屋を開き、一意専心家業に勉勵し、忽ちにして非常なる進展振りを見るに至つたので、大正二年には神田錦町に刺蒸業を開いた。あの隆盛を極めつゝある池國がそれである。大正八年に至り、氏は五反田の松泉閣を買収し、これが經營を兼ねると共に、今では寧ろこの方面の全力を傾倒し、遂にあの壯麗を極むる料理店を造るに至つたのである。氏は又自治公共の事業にも心を注ぎ、大崎町の土木委員として盡してゐる。家族は母、夫人、外に三子がある。



藤田 關四郎
明治十五年五月十五日生
芝區車町八四番地
電話 高輪 一三七番

多年その尊い經驗と蘊蓄を傾けて交通機關の改善に努力しつゝある人に我が東京市電氣局自動車課長藤田關四郎氏がある。千葉縣山武郡東金町東金は氏の懐しい搖籃の地である。明治三十六年職を日本鐵道株式會社に得、出納課に勤務したのが氏の獨立生活への第一歩であつた。同時に氏が半生をかうした交通機關に終止すべく運命付けられた第一の關門だつたのである。越へて同三十七年、東京市街鐵道の運輸課へ轉じ、勤務大に力むる處があつた。此市街鐵道は市電の前身で、今は全く何處の山間僻地からも影を消めてしまつたあの非文明極まる馬車鐵道であつたのだ。其後時勢の進運と共に馬車鐵道は電車に改められ、東京市街鐵道は市營となつた。それは明治四十四年の事であつたが、卓越せる手腕を有する氏が其材能を認められぬ筈はない。氏は市營と共に電氣局に迎へられ、引續き運輸課に勤務することになつたのである。後大正二年電車課の運輸部に轉じ、職務の傍學術的研究に没頭しつゝ、正直に、眞面目に、忠實に、格闘そのものゝやうな奮闘を續けたものだ。それが總て芽ばえて、大正九年九月には東京市電車課の主任に拔擢せられ、電車課三田出張所長となつたのである。震災後市電の補助機關として、乗合自動車兼營するに至るや、氏は選まれて乗合自動車掛長に任じ、從來幾多の試練によつて得た尊い經驗と蘊蓄を傾けて之が改善を行ひ、功績の見るべきものが多かつた。次で大正十四年六月遂に電氣局自動車課長に任じ、以て今日に及んだが、前後二十有四年間終始一貫帝都交通機關の爲に力めた氏の勞は大に多とすべきである。

小田切泰作

慶應二年十二月二十日生
府下世田谷町三宿二十五

「登る程聲高くなる富士詣」これは氏の最近での傑作である。氏は山梨縣東山梨郡加納岩村に呱呱の聲をあげた人であるが、幼い時から俳句に天才的の閃を見せ、十六歳より十九歳まで専心これが研鑽を積み、城南堂と號して此の界限の俳人間には相當に重きを爲す様になつたが、十九歳の時更に弓術に志し、長野藩士山田半九郎に就いて腕を鍛へた。併し間もなくこれを止め、俳句を以つて世に出でんとし、有名なる宗匠を尋ねて各地を遍歴し、關西から北陸へ、北陸から佐渡、佐渡から又松前へと風流なる旅を續け、遂に一廉の宗匠となつた。併し時世は宗匠としてのかうした永遠の旅を氏から奪ひ去り、精神生活から物質的生活へと引き戻した。そこで氏は東京に戻り、神田に藥屋を始め經營宜しきを得て忽ち非常な繁盛を見るに至つた。其の後世田谷に移り現在の地に店を開いた。其の當時は此の近所に五六軒の家しなかつたので、勿論その地の住民相手の商賣では充分でなかつたが、其の直前に出来た砲兵旅團が賣り込み先だけに、非常なる發展を極める様になつた。かくて此の界限で誰知らぬ者のない小田切泰作とはなつたのである。氏は大正五年町會議員に選ばれて以來今日迄それを續け、その間代々幡に至る道路の大改修を行ひ、當時町民から兎角非難されたが、今こそその如何に必要なかゞ解つて、恩人として敬される様になつた。又大正二年以來在郡藥種商組合顧問として、同業者の共同的伸展に盡してゐる。氏は俳句の外俳畫にも非凡の手腕を持つてゐる。子實に恵まれない氏は孝吉氏薫子の兩養子を迎へ孫二人を擁して團樂してゐる。



山田 釜次郎
明治二十五年一月一日生
市外玉川村奥澤四一七

普通教育發達の如何は國家の消長に關するもので、歐米先進國に於ては國を擧げてその發達に力を注いでゐる。我東京市も之に鑑み震災を一區劃として校舎の改築其他施設の改善に努力しつゝあることは定に喜ぶべきことである。此學校建築に深遠なる學識と卓越せる才能とを以て令名を馳せてゐる人に我が山田釜次郎氏がある。天孫降臨の地たる日向國西臼杵郡高千穂村は氏の夢寐にだも忘れることの出来ぬ故郷である。長ずるに及んで延岡中學校に學び、卒業後熊本高等工業學校土木課に入學して、専門の學理を討究し大正二年優秀なる成績を以て卒業するや、一年志願兵として工兵隊に入營して軍隊生活を營み、大正七年小隊長としてシベリヤの地に出征し、後金山守備に當り、功を以て工兵中尉に任じられた。後東京市に聘せられて技師となり職を建築局學校建設課に奉じ同十五年十二月の職制變更に土木局と改稱された後も引き續いて、學校建設に従事し、多年の蘊蓄と技能とを以て職務に精勵し今日に及んでゐる。氏は流石に軍隊生活をして來た丈けあつて、何處となくギビクした明るい性格の所有者で、人に接するに城府を設けず、平和な寛ろぎを覺へしむるものがある。氏は趣味として登山を好み、時に山岳を踏破して雄大なる自然に親しみ、その靈的感化によつて豪爽なる氣を養ふと云ふ。従つて氏の登山は趣味と云ふよりは餘りに氏の性格を如實に物語つてゐる。氏は又花卉を愛し、業務の餘暇を以つて土に親しみ、その栽培にいそしんでゐる。以て其情操の豊かなるを見るべく、夫人との間に一男一女あり、一家團樂して圓かな清福に浸つてゐる。

畔 高 定 行

芝 區 中 門 前 三 ノ 五 番 地
電 話 高 輪 六 〇 六 七 番

科學者は科學を以つて絶對なりと云ひ、宗教家は宗教を以つて、道德家は道德を以つて各絶對なりと云つてゐる。併しこれは客觀的に見ると、只各々が宇宙間必須の一要素たるに過ぎない。人類は實に此等要素の完全なる一致融合を必要としてゐる。クリストは宗教家道德家として完全なる人物には相異なかつたが科學者としては全く零に近い。然らば科學を加へた完全なる一致は誰に求める事が出来るか？曰く聖エドワード・ジェンナー！狂人と迄罵せられても屈せず、漸く發見した種痘に依つて人類を永遠に救つた聖エドワード・ジェンナーこそその人である。以上は我が畔高定行氏のジェンナー觀であるが、延いては氏の人類愛觀でもある。氏の出生地は山梨縣南巨摩郡富川村であるが、醫者たらんとして上京し慈惠院醫學專門學校に入り、大正三年卒業し、大正五年中門前に醫業を開いたが、同九年に現在地に移り次第に發展して芝區醫師會理事に推されるに至つた。氏が科學宗教道德の一致融合せる人物を歴史上に求めてジェンナーを得たのはこの頃の事であつた。氏は十二年はジェンナーの百年忌に當るを機として、同志を語らひ國際自由協會を組織して、有樂座にジェンナー劇を催ふし盛大なる百年忌を舉行した。氏は又醫は仁術なりと云ふ言葉を如實に顯現せしめんとし、震災當時家族を擧げ自費を以つて罹災民患者の救護に盡したのであつた。目下は中門前三丁目町會副會長大門青年團顧問として、自治公共の爲に盡してゐるが、その他刀圭家の政治結社たる國平會委員として、又慈大愛宕新聞經營者として働いてゐる。



坂 井 俊 三 郎

明 治 十 七 年 三 月 三 日 生
府 下 巢 鴨 町 一 一 三 〇 番 地

長野縣安曇郡大町は都下教育界の俊魁として令名ある東京市教育局普通教育掛長たる我が坂井俊三郎氏の懐かしい故郷である。環境は人を作る高山と清流とによつて莊嚴に聖き山嶽美を形作つてゐる日本アルプスが目下我國教育界の大勢を支配してゐるのも亦宜なる哉と首肯される。氏は幼にして學を好み、長ずるに及んで將來教育界に身を捧げんと欲し、長野縣立師範學校に入學して登壇の功を積み、優秀なる成績を以て卒業するや、職を縣下の小學校に奉じて、専ら兒童の教養に心血を盡いでゐた。職に在ること六ヶ月、然ゆるが如き氏の向學心は、永く氏をして教壇の人たらしめず、遂に職を辭して東京高等師範學校に入學し、體育及地理歴史の專攻に幾春秋を累ねた。かくて琢磨の功空しからず優良なる成績を収めて同校を卒業するや、直に職を東京府立第一高等女學校に奉じて再び教鞭を執るに至つたが、後幾何もなくして東京府屬となり、卓抜なる技能と學識とを以て職務に精勵した結果、忽ち認められて東京府視學に拔擢せられ、府下教育界の爲に幾多の改善を行ひ、功績の大に見るべきものがあつた。超えて大正十三年東京市に聘せられて視學となり、後擧げられて教育局普通教育掛長に任じ、都下教育界の爲に不斷の努力を續けてゐる。我身を持つことと雖に、而かも慎密の思慮と着實なる性行とを具備し、稀に見る努力の人である。氏は又讀書を好み業務の餘暇書籍を耽讀して旺盛なる知識慾を満足せしむると云ふ。夫人を末子と云ひ、貞淑の譽高く、二人の間に子實はないが鸞鳳の契濃かである。



朝 賀 喜 一

文 久 元 年 七 月 生
牛 込 區 赤 城 元 町 一 六

朝賀家は世々武州北豊島郡石神井の里に在り、郷鎮守氷川神社の神職であつた。氏は文久元年七月石神井の地に生を享け、明治五年井上頼園翁の門に入りて研鑽勉めるところあり、神教導職十四級試補となり、同七年、官幣大社大和神社主典に任じ、權少講義に補せられ、同社説教掛となつた。翌八年、父君の跡を承けて氷川神社社掌となり、次いで社司となつた。然れども氏は考ふるところあり、明治十一年身を教育界に投じ、十二年豊石小學校長に任命され、爾來二十有餘年その職に在り、この間教員試験委員となり、或は學務委員となりて貢獻すること多大であつた。又東京府神官取締所創立に際しては議員より推されて委員長となり、主事となつた。明治三十三年山室山神社保存會事務員囑託三十四年郷社赤城神社々司兼務等を歴て三十六年官幣中社日枝神社主典となり、幾くもなくして禰宜に累進した。三十九年神職管理所が神職會と改稱と共に、これが理事となり、東京府皇典講究分所理事を兼任し、大正八年六月日枝神社禰宜を解かれて赤城神社司本務となり、今日に及んでゐる。氏は性恬淡、事に當つては眞摯而かも人格高潔にして頗る氏子の信頼を得てゐる。其他山室神社昇格問題に付ても尠からず努力したが、曩に赤城神社に於ける氏子間の軋軋甚だしく爲に社殿、境内廢頽に赴かんとしたが、氏は當時その間に在つて調停斡旋の勞を執り日夜東西に奔走し遂にその間を融和せしめ能く今日の面目を保つに至らしめた、その他公共事業に力を致せしこと多く、四十五年神職會總裁官の表彰を辱ふしたのは氏の人格を語つて餘りあるものである。

平 林 久 藏

明 治 二 十 三 年 生
市 外 池 上 町 久 ヶ 原 四 三 一

素封家の子弟と云へば概ね遊惰安逸を事とし、醉生夢死する徒輩の多い中に在つて、氏は獨り然らず、夙より公共事業に携りて居町の發展と町政の刷新とを謀り、銳意福利の増進に努力してゐるのである。氏の家は祖先代々この地に居住し、近隣に聞えた素封家、名望家である。殊に氏の祖父増五郎氏が家業精勵してより益々家運の興隆を見るに至つた。氏はこの祖父の英邁なる氣象を承け、幼時から俊才の聞えがあつた。普通教育終了後家にあり家業にいそしみ父君判次郎氏を輔佐して餘す處がなかつたが、八年前父君逝去と共に家督を相續し、益々家業にいそしみて今や舊に倍する興隆を見るに至つてゐる。氏夙に産業の發展を思ひ、時に我國民の常食である米穀の増收こそ焦眉の問題なりとし、耕地整理を斷行してその増收を計らんとし、同志の賛成を得てこれを施行するに至つたが、施行に先立ち、氏は百年の長計を樹てて徹底的な工事を斷行するを可とし、評議員に擧げられて監督の任にあたり精密調査してその進歩に努めたものである。氏は又教育方面にも意を盡き、設備の完成を期して現に校舍増築中である。かくてその誠意は町民の信望を博し、大正十四年町會議員改選の際に選ばれて町會議員に當選するや、更に一層の努力を加へて町政の刷新と發展とに資しつゝある。又近來郊外發展の著るしきものあり、庭園に要する樹木の需要日を逐ふて多からんとするを見、樹木栽培に意を盡き、昨年より令弟與一郎氏と共力してこれを經營し、業績を擧げてゐる。氏は尙この外池上軍人分會副會長の公職に在りてその指導に盡力してゐる。



寺尾 鐵 二
明治七年一月二十九日生
本所區北二葉町三四
電話 墨田 四 九 九 番

江東に於ける牛乳業者の權威者として、又公共事業の功勞者として各方面の信望を得てゐる寺尾鐵二氏は、新潟縣刈羽郡高柳村を故郷とし、幼時より儕輩に優れ郷黨に將來を囑目されてゐた。明治二十四年新潟縣立農業學校を卒業、後家業に従事してゐたが、雄心勃勃たる氏はこの山間僻地の地に朽つるを屑よしとせず、二十九年青雲の志を抱いて上京し、牛乳搾取販賣業の有望なるに着眼して寺尾牛乳店を創立し、自ら先立つて搾取販賣に當り、従業員を督勵するところがあつた。一方乳質の改良に意を用ひ優良種の乳牛を購入する等品質本位の營業方針を採つたので、各方面に絶大なる信用を得て遂に江東一帯に販路を擴むるに至り、現在従業員二十有餘名を有し各地に牧場を所有するの盛況を呈し、市内同業者間に在つて重きをなしてゐる。かく家運隆盛を圖ると共には又一方各種の公共事業に携り、諸施設の完備、町政の刷新に努力するところがあつた。殊に大震災當時に在つては、悪疫流行豫防の爲に公衆浴場を設け、又は臨時市内特設電話架設を企て、通信省に交渉して交換臺を設置し通信機關の復興を計る等目覚ましき功績があつた。大正十四年には町會幹部と圖つて火災報知機の設置を企て十五年二月までに八本の報知機を完成せしめた。なほ氏は南北双葉青年團分團長、本所區第二方面委員、第四十七區區劃整理委員、獎勵會幹事等の要職に在る。資性温厚にしてその圓滿なる人格は町民の崇敬的となつてゐる。夫人との間に二男三女あり、長男は商大卒、二男は京都帝大在學中、長女、次女次女正子は本邦女子競技界の花形として有名である。

西田 常 吉

高邁なる學識と、鮮かなる事務的才能とを兼備し、現に深川區役所戸籍掛長として名ある西田常吉氏は、福岡縣の産んだ俊才で、彼の有名な不知火燃ゆる有明の海に近い山門郡大和村を其懐かしい桶笠の地とし、漁業を業とする西田善藏氏の四男として生れた。夙くに郷里の小學校を卒業するや、前途に輝く希望を抱いて上京し、東京法學院に入學して、切かに未來の法官や辯護士を夢見て只管奮闘の功を積んだが、氏は其後數寄な運命に弄ばれ、事毎に學究に不利な境遇に陥つて行つた。そこで己むなく夙志を翻して、深川區役所に稅務掛として勤務したのには、丁度明治三十八年の日露戰役當時であつた。かくて同四十年戸籍掛に轉じ、爾來數十年の永い年月を、恰も一日の如く職務に精勵し、大正十一年戸籍掛長に拔擢せられ先年奠都五十年記念の際、十年以上勤務の功に依り銀時計を贈られた。其の間氏は戸籍事務に執掌して幾多の功績を残したばかりでなく、失業調査委員として失業統計調査に資する處の多かつた事を忘れてはならぬ。性清膏潔白、明快なる頭腦と、圓滿な人格の所有者で、人に接するに城府を設けず、平和な寛ろぎを覺えしむるものがある。性來優雅な趣味の人で、俳句に長じ、事に當り折に觸れて襟懷を吐露し、又義太夫は已に素人の域を脱すと云ふ。氏も亦一面情の人たるを失はぬ。長兄は郷里大和村で大規模な瓦製造業に従事して各地に取引を持つており、つねに夫人亦貞節の譽高く、二人の間に二男六女があり、家庭は何時も和氣霽々として賑つてゐる。

龜 山 忠 之 助

明治九年一月六日生
麻布區北日ヶ窪町四四の一
電話 青山 七七八八番

東京市の大御所と稱せらるゝ三木氏並に市會議長小島氏の共に居住する牛込區は目下東京市政の上に並びなき異彩を放つてゐる。そのこゝに區長たる龜山忠之助氏の得意や亦想ふべしであらう。氏は栃木縣安蘇郡の産、郷黨を出づるや暫くは家業に従事するの己むなき境遇に置かれたが、青雲の志抑へ難く遂に斷然意を決して東都に上り、苦學力行の末裁判所書記登用試験に合格し、採用せられて長野區裁判所書記を拜命し、明治三十四年栃木地方裁判所勤務に榮轉し、故山飾錦の裡に縦横の才能を發揮したのであつた。後東京府知事官房に勤務中偶々日清戰爭勃發するに逢ひ從軍して鮮滿の曠野に馳驅して偉功を樹て、其の功により勳八等に叙せられた。凱旋後直に北海道廳土木部會計主任となり、郷里を後に彼地に轉勤となつた、之れより先き氏の手腕はその透徹せる頭腦と共に大いにその將來を囑望せられ、信望の的となつてゐたが、爾來年々に其の頭角を表し、明治四十五年拔擢せられて栃木縣河内郡長となつた。越へて元年五月下都賀郡長となり、斯して七年には高知縣土佐郡長となり、その間氏の性來の政治的手腕は益々洗練されその深奥なる思慮と共に各地に令名を博するに至つた。後岩手縣西磐井郡長、膽澤郡長に歴任し、十三年には青森縣津輕郡長となつて勇退した。されど豊富なる經驗と共に既に圓熟なる手腕を有する氏は、十四年特に選ばれて牛込區長に就任し爾來自治政の上に碎身努力今日に及んでゐる。牛込區が現在の優秀なる治績を得たのも氏の優れたる才幹に俟つもの多く、更に今後の發展は特に刮目に値する。

福 原 敬 治

明治十六年九月五日生

水道局庶務課計理掛長として、計理事務に當つて天才的手腕を見せてゐる人に福原敬治氏がある。氏は生粹の江戸つ子として、明治十六年九月五日に四谷區六番町二十三番地に呱呱の聲をあげたが、明治三十二年の四月年齢僅に十七歳の少年にして早くも市役所に職を奉じ、出納掛に雇はれて實務の身となつたのである。かくて明治三十七年徴兵検査に合格し、第一師團へ應召の爲一旦之を辭して軍隊の人となつたが、當時は日露開戰直後の事として、氏の敵氣心は發して強烈なる愛國心となり、報國の念は火と燃えて一日も早く戦線に立たん事を願つてゐた。併し氏が未だ出世に至らずして早くも榮えある勝利と共に平和に復し、次いで氏も亦除隊となつたので再び東京市役所に入りて稅務掛附屬雇となり、轉じて出納掛勤務を命ぜられ、明治四十年五月水道課に入り、四十一年三月には水道局理事課勤務となり、同年十二月には次第に昇級を重ねて水道課に榮轉し、大正二年十二月東京市事務員として第二部水道課に就任し、又翌年十二月には水道課に房り、大正十三年三月水道課庶務掛を経て、大正十四年七月遂に現職たる水道局庶務課計理掛長の榮職を膺ち得るに至つたのである。斯くその經歷が物語る如く、氏は全くの模範的事務家であつて、職務に忠實なるは勿論、あらゆる事務に通じ、殊に計理事務に關しては稀に見る技能を有し、水道給水事務、療養所創設事務、水道使用條例改正事務、其他市特別臨時事務等に關して異數の功勞をたて、來たのである。今や歲漸く圓熟の境に入りつつあるので、今後の發展見るべきものありとされてゐる。

石川 信雄

明治十五年四月二十三日生
牛込區藥土八幡町三十八番地

人生は坂に車を押す如しとは古い言葉ながら不滅の眞理である。日本橋區役所戸籍掛長石川信雄氏が今日の地位を得たのも全く過去二十年間の努力の賜であつた。氏は愛宕下町の醫家に生れ幼にして俊敏、芝中學卒業後明治三十九年日本橋區役所に職を奉じ稅務掛勤務となつた。爾來春風雨二十年一日の缺動もなく孜々營々として職務に勉勵し、遂に今日の地位を得たのである。その間に於ける氏の稀に見るの精勵振りは今日東京市の勤績表彰者としての首位に擧げられ、日本橋區役所に於ては第一の寶として上下の敬愛を集めてゐる。四十三年水道課に轉じ、大正六年被擯せられて戸籍掛長の要位を占め今日に及んでゐる。彼の十二年の震災に遭遇するや、氏は帳簿運搬殘務の整理にあたり、危険を冒してよくその重責を全うし、一方濱町小學校に避難せる罹災者の爲めに配給を一手に引受け、三月月開殆ど不眠不休罹災者の救護に従事した、之等のことはもとより氏の天性至明至篤の質のよくなることで、又以てその熱誠の至情を見るべきである。氏は頭腦明晰なるに、事理に徹するの明があり、己を持すること嚴なるも、他に對しては頗る寛に、何時も温情を以て之れに處するの同僚間にも推服されてゐる。部下に對して愛撫の念強く、爲めに部下も亦慈父の如くに敬慕してゐる。人一度氏に面接すれば忽ち十年知己の如き親しさを覺へしめ、殊に氏の部下は氏の爲めに献身的努力を惜しまず、その日々業務の遂行上非常に裨益する所が多い。運動を好み、テニスには特に妙技を得てゐる。夫人コトとの間に二男二女がある。

澁谷 徳三郎

明治五年三月廿日生
市外西巢鴨町池袋一二三四番地
電話 小石川 四三二七番

過去に豪壯潤達の英主伊達政宗を生み、日本三景の一なる松島を有する宮城縣は現本郷區長澁谷徳三郎氏の懐かしい産土の地である。その潤達たる資質は之を政宗に比すべく、その心情は松島の如く高潔なるものがある。氏は夙に教育家たらんとして宮城縣立師範學校に入學し、卒業後策を東都に負ひ、日本大學法科に學び、卒業の後直に宮城縣下の小學校長に任じ、後擡擢せられて、同縣視學となり、更に千葉縣視學を経て、文部省普通學務局第一課長に榮轉し、小學校及師範學校等諸法令の審議に精進して大に功績の見るべきものがあつた。後高等師範學校教授、埼玉縣女子師範學校長等に歴任して、東京市教育課長となり、多年の蘊蓄と卓越せる手腕とを以て學制統一、其他幾多教育界の刷新を斷行し、帝都教育界に貢獻する處極めて多く、當時名教育課長として聲望を馳せたものであつた。後擡擢られて麹町區長となり、更に本郷區長を経て大正十五年十二月現京橋區長に轉じたもので、傍ら東京女子專門學校講師をも兼任し精勵今日に及んでゐる。氏は其過去の道程が遺憾なく物語る如く、就中教育と行政に對する造詣深く、從來教育に關する著書が極めて多い。氏は人格の人、熱の人、意志の人で常に正義を愛し教育界出の人として珍しい程果斷に富み一度意を決するや、凡ての情實に超越して之を斷行し、恰も快刀亂麻を裁つが如き愷がある。震災後の帝都復興と自治の發展にありては今後頗る多事なる時、氏の如き偉材を以てすれば、必ずや見るべきものが多からうといはれてゐる。

鯨井 恒太郎

明治十七年七月十九日生
府下中野町大塚一七一九番地



去る大正十年六月東京電燈株式會社は創立三十五週年に際し獨り自ら私榮を謳歌することを屑とせず、將來我國電氣事業の發達を助長せしめんが爲め、之が記念公益事業として、電氣研究機關を創立せんと欲し、之が基金とし金壹百萬圓を東京市へ寄附したのであつた。此意義ある資金によつて、新に設けられたのが即ち今の東京電氣研究所である。従つて此重大なる運命を完うするには、之が主腦者たる所長は、斯界に於て學識並に技能を兼備せる有用の人材を要することは勿論で、各方面を物色した結果、遂に其選に當つたのが即ち我が帝大教授工學博士鯨井恒太郎氏である。以て氏が已に常備凡介の士にあらざるを知り得るであらう。氏は夙に學序を経て東京帝國大學工學部に學び、専門學の蘊奥を極め、明治四十年優秀なる成績を以て卒業するや、直に職を遞信省に奉じ精勵格動大に其職に力め功績の見るべきものがあつた。在職半ケ年、その學に對する天才的閃めきは、遂に氏をして母校たる東京帝國大學の助教授たらしむるに至つたが、大正元年學術研究の爲に英、米、視察を命ぜられ大正三年歸朝した。かくて新知識を齎らして再び教壇の人となり、大正五年には教授に進み、更に大正十一年には東京電氣試験所長をも兼ね各名を恣にしてゐる。之より先氏は學界最高の名譽たる博士の學位を授けられ五位勳三等に叙せられた。資性溫雅、頭腦の明晰な學者肌の人で、親しむべく敬すべき人格者である。而もそして暇さへあれば讀書に目をさらし、旺盛なる知識慾を満足せしめてゐる。夫人ちか子は良妻賢母として知られその間に三男三女がある。

三橋 義雄氏

明治二十七年二月十五日生
小石川區大塚町三三番地



現今スポーツ熱の高潮に、鄙と云はず都會と言はず、又老若男女の差別もなく運動競技に興味を持つやうになつた。この反面には何かと弊害を指摘するものもないでもないが、先年來夥しく劣化して來て居る國民的體質は、單にその悪化の心細きに止まらず、此の悪化を通じて表れる國民的精神、即ち凡ての産業方面の成績や、各事業に表れる能率の減退に見れば、少許の弊害に顧慮して居られない程に、今は體育鼓吹の必要な時代になり、其の最も憂心すべきはむしろ體質の悪化に誘發される國民の精神方面の悪化であるとされて來た。げに浮華に流れ輕佻になづみ、奇矯に走ると云ふのも、一つは時代的國際的な思想の動搖期の影響する所もあらうが、一つは少なくともかうした優情な生活から來た體質の悪化に歸せしめる事は、あながち曲解ではないであらう。近頃社會局あたりで頻りに茲に心を引出したのも無理からぬ事である。如上の如き見解から、市民體質改善のために骨身を砕いて其の局にあたつて居る我が三橋義雄氏は、三十三歳の今日尙獨身をつけて熱心に其の道の研究に従事して居る。氏は鳥取縣氣高郡米垣村内海に生れ、大正六年東京高師を出て千葉師範に奉職する事三ケ年、辭して三ケ年を研究科に磨き、十二年東京市に入り、體育掛新設と同時に掛長として就任したが、運動方面の先輩であり、我が運動界の會でのレコードホルダーとして高師在學時代から鳴らし、遠く上海マニラにまで遠征し、我が國のために萬丈の氣を吐いた人である。その専門家たる氏が今や市の要路に當る。運動界には必ずや多くの施設を爲すであらう。

枇杷坂龜吉

本郷區菊坂町一〇番地
電話 小石川 六四一六番

點商石を穿つといふ。刻苦勵勵七轉八倒幾多の苦患の地を往來し、而も自若として自ら信する所を斷行して今日の成功を見るに至つた人に本郷菊坂町副會長枇杷坂龜吉氏がある。氏は風光明媚を以つて天下に有名なる和歌山縣日高郡御訪町の人であつて、青雲の志を抱いて明治二十九年上京し、苦心慘憺大に努めるところが、漸くにして萬朝報專賣業を現在の地に開業するに至つた。それより氏は一層の努力を加へ、萬朝報の販賣擴張を謀りて已まず、次第に業績の擧がるを見るに及びてその熱誠は同業者間に認められ、遂に推されて萬弦舎の取締役となり、兼ねて社長代理に就任するに至つた。大正四年の頃、氏は考ふところありて本邦新聞界の權威東京朝日新聞の專賣に轉じ、本郷區東京朝日新聞一手販賣業を引受け、同新聞の販路を擴張し、その聲價を擧げること努めるところがあつた。現下同新聞の同區に於てその聲價を得るに至つたのは、一に氏の奮闘努力に負ふところが多い。爲に此の營業日一日と盛大に赴き、店員二十有餘名を使用するに至り、更に衆望に擁せられて本郷新聞販賣業會長兼幹事の勞を辭せないので、大正九年には町會副會長に推擧されるに至つた。資性穩健着實而も内に進取の氣を藏し邁進して倦まない所が今日の成功を贏ち得たのである。旅行を好み、閑を得て異郷の山川に接するのを楽しんでゐると、襟懷想ふべきものがある。家庭には夫人との間に六人の子女があり長男實若は早稻田大學理工學部に在學中で、秀才の譽があると。

小池 三平

明治十七年二月二十六日生

職に止まること十有餘星霜、其間恰も一日の如く恪勤其ものゝやうな奮闘を續け、年と共に信望を高めつゝある我が日本橋區役所會計掛長小池三平氏は靜岡縣が産んだ俊魁で、鏡の如き濱名湖に高潔なる人格を培つて育つて來た。幼にして學に秀で、夙に郷費を卒へるや縣立濱松中學校に學んで登壇の功を積み、優秀なる成績を以つて校門を辭するや青雲の志を抱いて上京し、専修大學に入學して秀才の名を馳せてゐたが、家庭の都合上餘儀なく中途にして退學し、後金原明善翁の經營に係る金原銀行に入り重要な出納事務に執掌し、明晰なる頭腦と事務的才能とを以て金原翁の信任を受け其前途を囑望せられてゐた。後翁の頭取を辭するに及んで同時に氏もその職を退き、明治四十四年六月日本橋區役所に入つて會計掛となり。爾來多年の經驗と蘊蓄とを傾けて益々其特異性を發揮し、業績の大に見るべきものがあつた。かくて囊中の維は次第に其銳鋒を脱し、震災後事務の繁劇を加ふるに及び、拔擢せられて會計掛長の要職に就き、財政の釐革其他事務の刷新等を行ひ、令名を恣にしてゐる。氏は清廉潔白、細心周到の好丈夫、而かも會計事務に精通せることは實に驚くばかりで、常に吏僚の範を以て稱され、曾て出納検査員よりその成績の優秀なる故を以て、特に表彰せられたのを見て、氏が如何に非凡の技能を有するかを知り得るであらう。氏は流石に金原明善翁の部下にあつて親しくその薫陶を受けた丈けに實質剛健の氣風に富み、而かも剛毅、寫眞等に趣味を有する處一面亦情の人たるを失はぬ、夫人を久子と云ひ、その間に一女孺子があつた。

鈴木 重一貞

明治十六年二月十八日生
牛込區戸山町二番地

世界戦争の殘虐なる試練によりて、幾多有要なる施設が講ぜられ、國際聯盟も鞏固なる基礎を作つて平和を促進すべき種々の努力を試みてゐる。最も喜ぶべき事である。併し人間に争鬪の本能の存在する限り、世界はなかく弱肉強食の現状を代へず、言ふ事善美を極めて而も爲す事は依然として舊態をつけてゐる。されば現在及び將來に亘りて深く國家國民の向ふ所を省察すれば、猶且つ内に富強の實を蓄へて外に國威を張ることではなくてはならぬ。吾が澁谷町大同尋常小學校長鈴木重貞氏は、夙に此點に眼を著けて銳意國民教育の充實を謀り、躬行實踐しつゝある士である。氏は小學を終へて後、東京府師範學校に學びて明治三十九年卒業するや、直ちに女子師範學校附屬小學校に訓導となり、性來の熱誠を以つて教導の任に當り、六年の後牛込余丁町小學校主席訓導に榮轉するに至つたが、此間氏は兼て研究に耽りつゝあつた學校教育及び教授訓育養護方針等に就いて自信を得たので、更にこれを實行に移した所が、氏の推薦に違はず非常なる好結果を收めたので、總て教育界に一つのセンセーションを起すに至り、牛込余丁町小學校の名を高からしめたものであつた。東京府は其効績の顯著なるを認め、特賞を與へた程である。後現在の澁谷町大同小學校長に榮轉し、爾來なほその教育方針をつゞけ、兒童の個性を尊重し、自發心を培ひつゝ適當に之を輔導訓育し、且は日本國民としての自覺心を刺戟することに心を傾け、銳意其實現を謀つて職員兒童の愛敬と父兄の信頼とを博して居り、名校長として讃へられてゐるのである。



三木 勇次郎

安政四年十一月二十六日生
市外池上町久ヶ原八九二番地

氏は本門寺で名高い池上の人であつて、三木幸右衛門氏の長男である。時恰も維新の大業なり、學制發布されて教育は國民の三大義務の一となつたが、當時未だその普及を見るには至らなかつたので、氏これを慨し、急先鋒となつてこれが普及を圖り、その第一歩として池上村久ヶ原に私塾小學校を創立し、舊龜井藩士米村善太郎氏を聘して教師となし、晝は兒童、夜は一般の教育に當つた。明治十一年池上學校創立と同時にこれに合併したが、同十二年氏は同校分校を久ヶ原に建設せんことを提唱し、村民の賛成を得て、これを建設し、氏これが監督の任に當つた。かくて氏の誠意は當局の認むるところとなり東京府學務委員を委囑するに至つた。二十三年市町村制施行と同時に一時職を辭し、氏再び復歸し、爾來二十五年間一日の如くその職に精勵し教育界に貢獻する處が極めて多い。氏は尙村政の刷新と自治の發展に努力し、明治十七年、村會議員に擧げられ、二十二年市町村合併委員として十ヶ村を池上村に合併するに際しての苦心は非常なもので、東奔西走殆んどその席が暖らなかつたほどだといふ。又明治二十七八年、三十七八年の際には兵事掛として出征軍人に後顧の憂ひながらしめ過般同地に火葬場設置案の起るや、氏は町の發展と衛生上の見地よりこれの不成立に盡瘁して警視廳に迫り、遂にその案を擯廢せしむるに至つた。斯く氏は常に正義を執りて譲らず、一たび動けば千萬人と雖我ゆかんの慨を以てし、稜々たる氣骨を以て郷人に稱せられてを。今や老齡を以て意氣尙壯に、よく壯者と談論して感悟せしむる所ありといふ。



小幡 勇治

明治三年十月五日生
市外雜司ヶ谷町三四九

都會の兒童は日夕騒然たる間に育て、デリケートな感受性を欠き大綱を掴むの明を缺く。従つて完全なる教育を實施し難いものである。特にこの點に留意し健全なる思想と健全なる身體の發達に留意して、よくその實を擧げてゐる人に我京橋尋常高等小學校校長小幡勇治氏がある。氏は岐阜縣土岐郡土岐村の出身であつて、夙に岐阜師範學校を経て東京高等師範學校に入學し明治三十二年同校を優秀なる成績を以つて卒業し、直に石川縣師範學校教諭に任命され、後濱松中學に轉じ、舎監を兼任し、能く一校を醇化するものがあつた。明治三十八年清國袁世凱の招聘に應じ清國天津師範學校教授となり、同地の教育界に貢獻する處極めて多く、在ること實に十ヶ年間、清國政府は氏の功績を認め、三等第一勳章を授與するに至つた。後歸朝後も、引續きて清國學生の氏の徳を慕ひて來朝するものが多いといふ。大正三年、長野縣諏訪蠶糸學校創立と同時に、これが校長に就任してその經營に當り、後女子部を獨立せしめて平野女學校を創立したのも氏の努力に依るものである。後同校を辭して現任たる京橋高等尋常小學校長となつたのであるが、氏は常に自學自習をその根本義とし、教師補導の下に自由研究を奨勵し、又自治會を組織して自治教育の發展を完全ならしむること等に努め、着々その實を擧げつゝある。又病弱なる生徒には臨海學校、林間學校等を設け、その養育に資してゐる。外にも京橋高等女學校長、青年訓練所主事を兼任し、鋭意その發展に努力しつゝあるが、流石に經驗と蘊蓄とに深いだけあつて、著しく實効を奏してゐる。



櫻井 賢三

明治十三年三月生
市外高田町上り屋敷三六二九

氏は岐阜縣安八郡墨俣町の出身である。明治三十四年優秀なる成績を以て岐阜縣師範學校を卒業し、直ち同校訓導に任命され、後東京高等師範學校英語科に入學して大に斯學の研鑽に努め、明治三十九年同校卒業後滋賀縣師範學校に教諭として赴任し舎監を兼任した。同校に在つては學窓にて蘊蓄るところを傾注し新進氣鋭の教諭として好評噴々たるものがあつた。後再び學窓に志し京都帝國大學文科大學哲學科に入學し、教育學と哲學との研究につとめ、四十三年優秀なる成績を以つて卒業し、直ちに福島縣馬中學校首席教諭として就任し、次いで一年有餘にして同校校長に榮進し、理想の實現に努むるところがあつた。大正三年山口縣室積師範學校創設に際し、氏は校長に就任して新設校の經營の任にあたり、大に見るべきものがあつた。大正八年靜岡師範學校校長を経て大正十一年東京府豊島師範學校長に任命され高等官三等正六位勳六等に叙せられた。氏の教育方針とするところは第一に人格の陶冶、第二に道德的學術的に進歩的なる精神の涵養、第三には教師たる前に善き人たること、及び青年の心理に立脚せる澗淵たる意氣の向上を圖ること、第四に生徒の個性を尊重しその長所を伸張せしむること、第五獨立獨行の氣概を培うて自治の精神の樹立に努めること第六生徒の自發的學習と永續的研究の態度を確立せしめ、知識技能の正確精練を期すること等であつて、就任以來着々とその實現を見てゐるが、これ氏の温厚にして熱誠なる性格が職員生徒に反映したものと云ふべきであらう、まことに氏に於いて天成の教育家を見る。



小宮山 信治

麻布區竹谷町五番地

古聖の言に「智者言に怯に勇者行に暴」と、我が芝區長小宮山信治氏が漫にはしして言へば必ず其實を見る事は即ちこの謂に庶幾くはあるまいか。氏は靜岡縣阿部郡富士見村舊幕臣の家に生れ、早く笈を東都に負ひ、中學を経て中央大學の前身東京法學院法科に學び、明治三十五年卒業後引き続き法學の研究に没頭して居つたが、知友の勧めで三十八年芝區役所水道掛長に就任した。之れが芝區に奉仕する第一歩で、隨つて同區とは最も深い因縁を持つて居る譯である。其の後材幹の次第に認められ、幾許もなく稅務掛長に榮轉し、爾後累進して大正十一年一月躍進して區長に就任し區政萬般を攝理して裁斷停屯なく、釐革着々功を奏して今日に及んで居る氏は政治家たるの一面に宗教哲理を究め、敬神崇祖の念篤い人で、彼のありふれた一介の政治家に終らない敦厚なる人間味の所有者である。氏は言ふ「敬神崇祖は人倫の序であり、行ひのもとづく所である」と。日常職務する區長室に迄神棚を安置して朝夕之に頼づくこと聞く丈でも其の熱心が知られる。曾つて少年時代、英語教師の或る牧師について神を説かれ研究を續けて居つたものだが、法學院時代の或る暑中休みに房州の一寺に於いて繪本釋迦八相記を繕いて以來熱心な佛教信者となり、爾來今日までピウリタントの様な敬虔な信仰をつとめて居る。従つて性情は頗る純眞で而も何處までも公正な態度で事を運んで行く所は自ら人を懐かしめて人望をひきつけて行く。區民が氏によく安んじてゐるのも其所以である。運動と謡曲が趣味で謡曲に至つては素人ばなれの域に達してゐると。



山本 勘助

明治二十年十月二十二日生
府下駒澤町上馬引澤九一一

婦人問題の解決は婦人自身の自覺に待たなければならぬ。併してこの自覺は生理的に男性よりも別の方面に重大なる天賦の使命がある事を認めたる上で、思想的にのみ平等觀を主張する事に依つて、始めて眞の解決は得られるものである。かうした主義の下に女子育英の事業にたづさわつてゐる人に我が山本勘助氏がある。氏は三重縣飯南郡宮前村の生れで、三重縣師範學校を卒業するや、直ちに上京して東京高等師範學校英語科に入り、大正二年卒業と共に職を福島師範に奉じ、二年間の勤務の後、文部省普通學務局に轉じて三年間を送つた。此の間氏は専ら學校衛生事業に掌り、英國文部省と交渉して英國體育科要目を翻譯して出版し、大いに體育向上を計つた。その後東京市視學となるや、教育に關する制度及兒童成績を各國と交換し、國民教育をして世界的に引き上げる事に關心し又市の訓導協議會を設け教員選賞等に參加し、其の他社會教育課の新設に當り、此が事業の内容組織の成立に參じて大いに貢獻する處があつたが、大正十三年五月東京市立第一實科高等女學校に聘されて校長となつたのである。氏が此處に來た當時は、此の學校は非常に小規模のもので、従つて設備等に於ても不完全のものであつたので、先づそれが充實擴張を計り、着々實現せしめて今日に至つた譯である。氏は前記の如く、教育方針を主として婦人の自覺におき、日本婦人の美點の發揚を奨勵し、自發的に勞働を厭はぬ婦人たらしめるの習慣を付け、其の間に、情操を陶冶し、主婦として特に必要なる實科に重きを置き、孜々としてその顯現に努めてゐる。

角田庄太郎

安政元年生
日本橋區堀江町三ノ四番地
電話 浪花 四六〇三番

ペルリの來航で名高い三浦半島浦賀町に生れた氏は、明治元年、年十五歳の時、すでに大志をたて、單身上京した。當時は黒船が浦賀港に乗り込んだ時でその暴慢無禮は沙汰の限りであった。國民の血はわき、肉はおどつた。そして漸く十歳許りの氏がどんなにその横暴を憤慨したか、それと同じ時にその憤慨は次には驚異と變り、恐怖に變じて行つた。幕府の役人の不甲斐なさにも心から愛想づかした。かくして君の新しい文明を慕つて止まぬ熱情は、遂に十五歳にして憧れの都江戸へと旅立たせたのである。氏は徹頭徹尾意志の強であつた。勿論薄志弱行一度や二度の災厄に屈古たれずその雄志を托るやうな弱さは一寸もなかつた。全身これ熱と努力の塊であるやうにすら見えた。それは後、主家が分散した時、僅か十兩の金子を與へられて、獨立すべき運命にたちあつたときの活動振りに樺土重來ともいふべき熱があつたことに見ても明かなことである。初め日本橋區伊勢町の某荒物店に見習ひ奉公した氏は、弱冠にみたす而もその働きは遙かに先輩をしのぐものがあり、主人からは非常に愛され、既に將來大いになするものと囑望されてゐた。不幸前記の如く主家を離れた君は獨立して只管自家の開拓に没頭したが、當時と雖も僅か十兩の金子を以てしては仲々に發展といふ域には到達しなかつた。しかも遂に今日の大をなし得たことは一に君の不斷の努力によるものといはねばならぬ。今や家事萬般を長男徳造氏に委ね、君は餘生をあげて町内自治公共のことに盡瘁せられ町會副會長として寄與する所が多い。

田中太郎

明治三年十一月十日生
府下北興島郡板橋町一〇一四

我が東京市養育院總務課長田中太郎氏は日本橋區濱町の武家に人となつた氏が始めて官界に乗り出したのは、明治二十六年の十二月で、内閣屬としてあつた。後三十七年東京商業會議所統計事務顧問を兼ねる事となつたが、四十一年五月内務省を始め、東京市及び子爵澁澤榮一氏の囑託を受け、感化救済事業視察研究の爲歐米に派遣せられ、翌年十月此れが研鑽蘊奥を極めて歸朝し、明治三十三年東京市より臨時施療の事務を、更に同年七月には特別救済事業調査の囑託を受け、爾來専ら此の方面に多年の蘊蓄を見せ、四十四年並に大正二年に何れも内務省感化救済事業講習會に聘せられて講師となり、大正三年東京大正博覽會の開かるゝや、それが出品事務に執筆し、同年十二月には和英東京概觀の起稿及び編纂に關して功績をたてた。又大正六年の東京市統計講習會に關しての功勞は、氏の爲に没すべからざる事である。其の他七年休戦條約成立東京市祝賀會事務、又八年の戸口整理事務に關して貢獻する處多く、八年六月主事に拔擢せられて、養育院幹事となり、庶務課勤務を兼ね、同年十一月には東京市臨時國勢調査部副部長を兼務する迄に至つた。かくて東京祝典事務、第三回東京市統計講習會事務、國勢調査施行準備事務等に關して到る處に才鋒顯絶し大正九年五月遂にあげられて東京市養育院總務課長となつたのである。氏は資性聰明謙讓有徳の士で、敢へて鋒銜を現はさざりとも其蘊蓄の儀容は自ら發露して信望を集めてゐる。其の後明治神宮鎮座祭奉祝年時委員、臨時市勢統計課長兼務等に於て、敏腕を振つて今日に至つたのである。



野尻雄三

明治十年七月三十日生
下谷區池の端仲町九番地
電話 淺草 四一三〇番

氏は加賀百萬石を以て誇れる石川縣金澤の出身である。抑も金澤の人は決して剝削的な享樂を逐はない。飽迄も濃茶のやうに地味ではあるが、膠着力の強いことで知られた氣質の所有者が多い。線々花火式ではなく耐火煉瓦式である。ラジカルではなく穩健である。この地方の氣質を承けた氏が嚴父野尻半治氏の膝下を去つて、上京したのは十四歳の時であつた。そして有名な服部時計店に小店員として入つた。文字の如く格闘精勵、店務をおろそかにせぬその忠實さに店主服部金太郎氏の信頼を得、遂にその夫人の妹を娶はされた。かくて拾數年の後に獨立して時計卸賣業を開始し、やはり刻苦力行、更に明治四十二年店舖を現在の場所に移し、やがて株式會社雄工舎を起し、大規模な時計製作を開始し、工場を府下瀧の川中里に設け斯界の權威となつたのである。その外名古屋に特約工場を有しその商標ルビー印掛時計は舶來品を凌駕する優秀品として知られてゐる。その外貨金屬類、時計附屬品等も製作し、みな品質の精撰で著名である。更に氏は従來の電氣時計に満足せず、秒時をも正確にする精巧なものを製作しやうと、全力を傾注し、今ではほほその完成を得るに至つた。なほ瑞西國ゼネヴァコメット時計會社の東洋總代理店として、優良な時計の提供に努め、なほ銀座街で誇る寶屋の代表者をも兼ねて、斯界の雄將と唱はれてゐる次第。氏はその繁劇な業務の餘暇に第三十地區々劃整理委員として、公共のために勞を惜まない。また東京時計卸賣同業組合幹事である。夫人をせん子と云ひ子息健太郎氏は帝大在學中の秀才である。



横尾多吉

明治十年一月二十五日生
赤坂區青山南町五丁目
電話 青山 五六七一番

新興思想に煽られ軍備のアンチ、ヒューマニズムであるとの説が一般の頭に滲み込んで來たと共に、國際的協定に依つて之が制限は實現せられ、軍費は緊縮され在營年限は亦半減された。人々は今や永久平和の到來に意を安じてゐる。併し徐ろに四海列強の大勢を覗へば猶一脈深憂に堪えないものがある。兵は凶器之を戦むべきは論なき所であるが、國家の存在を確保し民族の平和と福祉とを擁護して人類平和に資せんとするには、若し其所に非道暴虐のものあらば軍力を以て之を膺懲するより外はない。愛の聖書にも商は商を以て酬ゆるの外なきを説いて居る。愛と闘争は畢竟人類生活のつゞき限り對峙して附き纏ふべき二條の道である。斯く觀じて來ると常設軍備から削減された國防上の負擔は奈邊に加へられたであらうか。それは國民全體に於てである。國民皆兵は我が國是であるが、その主力は即ち在郷軍人である。此所に於て在郷軍人の使命はなかく、重いものとなるのである。從來在郷軍人の團體的行動は公共に對して多大の貢獻があつたが、同會の使命は決して是に止まるべきものでない。此の自覺に醒めて常に適切の指導をつゞけてゐる人に横尾多吉氏がある。氏は現に赤坂區支部常任理事兼副會長を勤め、在郷軍人として外に對しては最も嚴密に躬行し、又指導に當つてゐる。千葉縣印幡郡木下町の出身で地方の中學を卒業して後軍隊生活に入り特務曹長迄昇つた人。赤坂に居をトし薪炭商を營んで同業組合支部長に任ぜられ、町事などにも貢獻する事が多い。區内の道路改正に際して奔走され府知事から木杯を寄贈され現に親交會の顧問に推されてゐる。



磯國太郎
明治十年一月十五日生
本郷區弓町二丁目二番
電話小石川二四〇三番

馬上ゆたかに寛濶の反打つた佩刀に威容を示し、大江戸の城下を狭まるとばかりに、調歩したのはそのかみの徳川旗下八万騎であつた。その直参の旗下の中でわが磯家は、殊更に勇名の高い家柄であつたとときく。先代を武啓氏と云ひ、幕末當時の多事多端なる時局に際し、將軍慶喜公を奉じての苦衷は並大低の事柄でなかつた上に、公が駿府に盤居するに及び供奉して憂悶を慰め、臣事を盡くしたと云ふ。さてその舊家に生れた磯國太郎氏は、幼ない頃を本郷車竹町に在つた漢學の權威林村塾に學び、出藍の譽れが高かつたけれど、何分にも明治維新改革直後の事であり、急激な經濟的變動に襲はれた武家は、まづ自ら街頭に立つてパンを求めねばならなくなつた。そこで國太郎氏は中途にして塾を退き父君を補佐して家事に就いたのである。明治三十年父武啓氏の逝去の後、雨傘、提灯製造業に専念し、一意家業の復興に努め、今日の繁榮を購ふに至つた。なほ氏は町政自治に心を至し、現町會の前身有志會當時には、その役員として幹旋に努め、改稱と共に組織變更業務擴張等に意を用ひ、既に二十餘年に亘つて會長の重責についてゐる。會費徵集方法、衛生施設等には同町會なればこそと盡精せられてゐる。點が少くないのは、氏に負ふ所が大であると云へやう。なほ氏には國勢、市勢調査委員として盡瘁し、現に本郷中學校評議員、元町小學校家庭會理事等を兼ね教育方面にも功勞が多い。氏は當年五十歳、遠洲流生花及び俳句等に堪能で、日蓮主義の渴仰者であり、家庭には夫人波子、令息岩吉、氏同妻女輝子等何れも圓滿である。



歌橋憲一
明治二十二年五月一日生
荏原郡品川町二日五丁目
電話高輪二一九一番

歌橋製菓所長として、製菓界に活動して獨自の地歩を占めてゐる氏は、舊尾州藩士歌橋三郎氏の長男である。父君はわが國での藥劑師としては最古参者で、日本橋に藥局を開設して歌橋家今日の隆盛を築き上げた人だつた。氏はその長男で、立教中學校を卒へて東京藥學專門學校に學び、明治四十年に優れた成績で卒業、直ちに藥劑師試験にパスして後は、一意専心父君の事業を補けてその實地を研修した。やがて家業を繼いで經營の第一線に立つや、其異常な才幹を發揮して、父君に倍する飛躍を示した。歌澤の名を冠する各種の絆創膏やピツク類は、内地はおろか遠く樺太、露領沿海州、朝鮮、支那、南洋まで販路を見出し、その品質の優良と、價格の低廉なこととで製菓界の權威だとせられてゐる。で今ではその工場に働く職工は百名を超え、年産額數十萬圓に達してゐる。それに氏は自ら職工の間に伍して、技工の指導、製作の敏速を督勵して倦まないことだ。そのみに止らずして氏は、時々各地の商況や、製菓界の實狀等を視察して廻り時代の慾求に添ふことに腐心し、常にダイナミックな活動ぶりを示して、少壯事業家として押しも押されぬ聲名を購つてゐる。この不斷の努力は報ひられて、宮内省侍醫察御用品として製品を納入するの光榮に浴し、より一層の信用を世間から博してゐる次第。怖らく氏の最後の活躍はわが國製菓界の麒麟兒として斯界に、獨歩し得るものと云へやう。家庭には夫人はな子との間に一男三女があり、その麗しい團樂ぶりを發揮してゐる。

高橋辰治

明治十三年十月二十七日生
府下立川町

宮城縣栗原郡一泊村を産土の地とし、明治二十八年四月宮城縣立第一中學校に入學し、翌三十九年現在の府立第四中學校の前身城北中學校第二學年に編入を受けて、三十三年三月全課程を了り、更に三十五年十月東京農業講習所養蠶本科に入學、三十七年七月修了して翌三十八年郷里に歸つて郡立栗原農學校教員を囑託され養蠶學の教授に任ずること二年明治四十年十月二月辭して翌四十年八月東京府蠶病豫防吏員として職を奉ずるに至つた四十四年三月埼玉縣農事試験場技手として赴任、大正四年原蠶種製造所に勤務して良蠶種製造に努める所が多かつた。同年同所々長心得を命ぜられ、全責を負ふて其の局に當つたが、大正七年再び京府技手に轉じ内務部農商課に勤務傍ら同蠶種製造所に製造實際に任じ八年四月所長代理に擧げられ、九年技師に陞進、從七位に叙せられ、所長事務取扱ひとなり更に府出納吏を、十二月に入つて所長に任ぜらるゝに至つた。越えて十一年正七位に陞叙され、十二年には農事講習所長をも兼務して府下農産の發達を計つて功績の大に見る所が多かつたが昨十四年地方農林技師に陞進し、陞叙されて從六位を賜り、現在尙引き續き其の職に留つて専ら盡瘁を怠らない、府下の蠶業は猶發達の途にあつて、飼育法にも改善すべき點多く、殊に原蠶種たる交配種の優良なるもの、供給は必須の事業である、氏が常に熱心な態度を持つて改良の途を講じてやまないのは洵に頼母しい事である。恭謙な人格者で部内に於ける信望も厚い本年四十七歳の氏には今後尙なすべき幾多の仕事が残されて居る。

今關大造

明治十六年三月十五日生
府下澁谷町中澁谷七三七番地

人を教へ人を導くは難中の難事である。常住自己の養修の足らざるを思ふて、不斷に省察を忘れず、而も學校經營上には其の方針を確立し、一般職員にも明示して之を實踐せしめ、常に改善を施して着々實績をあげて居る我が澁谷町常盤松尋常小學校校長今關大造氏は、福島縣郡山町を橋籠の地とし現青山師範學校の前身たる東京府師範學校に學び、卒業後直ちに澁谷尋常高等小學校に奉職すること一ヶ年、有爲非凡の材を認められ、短時間にして主席訓導に擧げらるるに至つた。次いで同校長が中野町小學校として弱年すでに同校經營の任を擔當したのであつた。後昨十四年二月に至り、現小學校新設と同時に此の方面有志の切なる招致いなみ難く轉じて校長の任に就いて今日に及んで居る。氏は教育上の主義方針を充實せる誠意と意氣とを以つて人格陶冶にあたること、兒童をして自發的努力を誘起し、理性及び情操の涵養をはかること等に置き、而も教育は其の基調を教師の人格に置くべきものとして、常に優越せる人格の所有者たらんことを思念し、且之を體現すべく自己の最善を致し、更には學校外の兒童生活として、環境及び家庭に於ける實情を觀察し父兄との連絡的指導に努めて居る。爲めに兒童は母校を以つて自らの樂園たり修養場たる事を體念して日毎に學びの道にいそしんでゐる。かく氏はこの天職を身に奉じて更に倦まず、心中唯澁谷町の教育界に献げ、以つて其の改善發達を思ふて餘念がない。まことに同町教育界の重寶と云ふべきであらう。

林慶四郎

明治十三年五月二十七日生
埼玉縣浦和町常盤一〇九番地

帝都將來の發達に従つて其の土地關係は今後益々複雑を極めて行くであらうが、就中土地の評價、地名及び公用地等に關する事項は市民生活の上にて密接の關係を有してゐるので、之が對策に就き市當局も亦愈々多忙を極め更に一層の重要性を帯びて來ることには明かである。果して現在區劃整理の實行され更に東京實現の計畫するに當り該方面の事項の解決は焦眉の急務として最も重要視されるに至つた。此間に於て二十年の長月日を市役所に奉職し、専ら該方面の事務に携つて來た我が林慶四郎氏を東京市地理課第一用地掛長に有することは實に東京市の慶とすべきところである。今は昔氏は代用教員として郷里埼玉縣北足立郡三橋村小學校に奉職してゐたが、胸裡に鬱勃たる雄志押へ難く、遂に明治三十八年二月意を決して上京し、先づ陸軍省に身を寄せ東京豫備病院戸山分院附經理被服掛を拜命し翌九年同掛主任に拔擢せられたが、同年十一月東京市役所に轉じ、臨時市區改正局經理課勤務となり、後幾何もなく用地課に轉じ、爾來二十年の間致々として格勤精勵の結果現在の要職を占むるに至つたのである。今や氏は齡五十に達し、漸く圓熟の域に達せんとするの折、地理課の事務は愈々重要且繁忙を加へ行くに當り、目下氏はその多年に亘る豊富な經驗と熟達せる手腕とを以つて之が圓滿なる進行に大なる貢獻を爲しつゝある。資性濃厚にして篤實、一度び事に當れば倒れて後己むの概を示し物質に恬淡にして又克く人を容るゝの襟度あり、爲めに同僚及部下に慈父の如く敬慕されてゐる。

深澤良雄

明治十三年八月生
赤坂區丹波町五番地
電話 青山 五六三三番

資性高潔にして志操雄大世界の情勢を洞觀し、社會の耳目を新たならしむるの識見は良く各國各地に於ける醫器の粹を集め今や帝都一流の醫器器械商として斯界に名を馳せつゝある人深澤良雄氏は他面自治方面にも貢獻する所多く現在赤坂區丹波町自治會幹事として町民敬慕の的となつてゐる。氏は幼にして好學、長ずるに及んで明治大學法科に學び明治三十八年同大學を卒業するや、更に志を立て、遠く米國に遊學し、法制學の研究に没頭したのであつたが、偶々彼地に於いて醫界の趨勢を窺ひ、顧みて當時我國醫學界の急速なる進歩に比し、その必需品たる醫器器械の著しく幼稚なるを嘆じ、翻然意を翻して具さにその方面の趨勢を研究し、又實際的知識を養ひ得て歸朝し、早くも茲に開業の運びとなつたのである。即ち先づ居る現在地に卜し精巧なる醫器器械の輸入を企て爾來日夜致々として奮闘した結果は遂に今日の榮を成するに至り今や帝都一流を以つて斯界に誇るべきものとなつた。而かも氏餘力を以つて自治公共の爲に努力するを惜しまず、町内非榮融和の爲に奔走して寄與する所甚だ多く、目下丹波町の自治會幹事に擧げられてゐる。誠に人生は不斷の苦闘である。氏の如きは全く不拔なる意志と不撓なる精神を以つて高き理想を貫き、飽くまでも向上を求めて己まざる人生の闘士である。本年未だ四十七歳、精氣益々旺盛に、思慮已に圓熟の域に入らんとするの時にあり、隨つて氏今後の活躍は當に括目して待つべき幾多のものがある。同町の自治も亦氏を有する限り將來益々發展を來すべく祝福されてゐると云ふべきであらう。

柴崎淺五郎

明治八年三月十九日生
京橋區南八丁堀三ノ三

今は宮内省御用商人に指定され、全國に廣き取引を有する銅鐵商の柴崎淺五郎氏が、現在の殷盛を贏ち得るまでには並大抵ならぬ忍辱の試練と尊い汗の代價が仕拂はれて居る。氏も實に裸一貫の體を資本に今日を築き上げた努力家であつた。氏が銅鐵商を志したのは可成り早かつた。郷費を了へたばかりの少年が郷里を後に上京して銀座の某金物商に入つた時は未だ十五歳のいたいな氏であつた。其の後二十四の時芝區櫻田本郷町の或銅鐵商の店に轉じたが、之が明治二十九年の年で、引續き店務に従つて主家を扶けると共に、銅鐵商としての腕前を練り、其間に努力と修養の尊い月日を送つた。此の尊い努力が報ひられて漸く一本立ちに開業したのは大正五年の事で、當時歐州戰爭の酷なる頃とて、固形鑄物類は空前の奔騰を告げて居た。氏は此の好況期に乗じて巧みに營業の伸張を計り、以來數年を出でずして長足の發展を招米したのである。而も戦後の反動的逆境時代もさしたる打撃も蒙らず、同業外倒産する内にも外一人は舊勢を維持して今日に至つて居る。氏の經營的手腕は凡庸の比でない事が分る。今日では其の供給先の主なるものに東京鐵道局、市電氣局、市役所、仙臺鐵道局、仙臺電氣局、横須賀海軍工廠、海軍化學研究所、陸軍東京工廠等があり、尙公私各方面の需用に接して居るが、殊に大阪方面に對する銅鐵の取引は一手に捌つて居る。京橋南八丁堀を營業所とし下蛇窪四九〇の住宅より毎日早くから店頭立つて店員指揮にあたつて居る。家庭は妻女きく子の間に長男次郎君がある。早稻田大學商學部二年生在學中の俊才である。

本田昇一

明治二十年四月生
芝區金杉四「一」二十三番地
電話 高「一」〇七五五番
電話 高「一」〇五二番

近々數年の間に素晴らしい發展を遂げ、芝金杉通りで屈指の店舖として數へられて居る電氣器具商本田昇一氏は、公共方面に於ても區内の有力者を以て目されて居る。惟うに、現代人があらゆる方面に互つて通弊とされてゐるものは信念の缺乏と云ふ一事である、かうした秋に當りて凡てを信念の二字に結びつけ自己の所信に向つては斷々乎として邁進するの概あるわが本田氏の如き蓋し稀に見る人物であらう。氏が短時日に異數の盛業を招き得たのも、出でては亦一般區民の厚き信望を雙肩に擔つて居るのも、透徹の才、綿密の思慮に加ふるに此の確固たる信念を把持して居るからであらう。氏は山口縣を郷土とし、厚狭郡萬倉村の農家に人として居る。由來長州は維新先覺を出し幾多の名將政客を出して居る。斯うして未來への強い光明と刺戟とを與へられて居る氏は、どうして發憤せず居られやう。縣立山口中學を卒つた氏は光明を胸に海軍經理學技に進んだのであつた。明治四十三年之を卒業し、大正三四年の日獨戰に際して、我が艦隊の青年士官として花々しい首途に膠州灣頭攻撃に参加したが、其の際受けた名譽の負傷から兵役免除となつて軍籍を去つたのであつた。斯くて先人の體を逐ふて成らず、轉じて決意上京したのが大正七年、京橋區木挽町株式會社黑板工業所に入り、大正十一年退して獨立前記の事業を成して居る。目下品川二日五丁目市に有する完大な工場に遺憾なく氏の事業の殷盛を物語つて居るのである。かくて氏は選ばれて前に區會の決議機關に列し、外に學務委員等の公職にあげられて尙公共の事にも奔走して居る。



原田吉兵衛
四谷區南町八八番地
電話 四谷 二八二六番

氏の家は土地での舊家で、界限に重きをなす事久しかった。氏は小學より中學に進み、更に高等學校に學びて研鑽に努め、蘊蓄大いに力めて練磨の功を積んだが、學窓を去るや直に家庭の人となり、家業の小間物商に従事したのであつた。幼名を百太郎と云ひ、後父君の名を襲ふにあつて吉兵衛に改めたものである。家業に就いてからは居常發展振作を策し、四時の流行から一般人の趣味嗜好の如何にまで精細な注意を拂ひて研究的經營法に腐心する所があつて、業績いちぢるしくあがり、曩きに店舗を擴張して麴町十三丁目に息留吉氏をして同様小間物商を開設せしめ、いよ／＼盛況を告げて居る。同家はもと武具商を營み、武家上流の士を客とし、其の常華客の中には紀州家佐竹家等もあり、代々繁昌してゐたが、先代吉兵衛氏の世に遇々明治維新の變に逢ひ、家業の衰微を見るもの多かりし中に、武具商の先代吉兵衛氏は炯眼よく將來を洞察して轉業を企て、而も新傾向の機先を覗つて逸早く洋品商を開業したので、幸に非運に陥るを免れたのみならず、時代傾向の先驅を爲して却て益家礎を固めたのであつた。かくて氏の代となり、業餘區政町事に參畫し、其の識見は早く認められて明治三十三年には始めて區會に當選し、續いて數回に互つて選任されて其の間の獻替は甚だ多かつた。日露戰役に當つては區内兵事議會のため大いに意見を獻じ、大正七年市會議員に擧げられて新宿合併問題に與つて力あり、現に警察後援會理事長として寄與し、實業方面でも四谷銀行取締役、區内小間物商組合幹事として重きをなして居る。

山崎 四六

明治六年十二月生
府下世田ヶ谷町世田ヶ谷一六〇
電話 世田ヶ谷 一〇〇番

都市集中文明發達の結果、閑靜なる住宅を求むるものは勢ひ郊外に住居を求めなければならなくなり、交通の便ある土地は幾何級數的に發達する。殊に世田ヶ谷町方面は玉川電車の便によつて著るしい發達を見せてゐる。この世田ヶ谷町政を司り、各種の施設を行ひて遺憾ならしめてゐる人に山崎四六氏がある。氏は長野縣東筑摩郡上川手村の人であつて舊家山崎惣治氏の分家で、氏に至るまで六代を経てゐる。教育園として名高い信濃に生れた氏は幼時から好學の志あり、松本中學に學び、上京して日本大學に學んだ其後一時故郷に歸つたが、志すところありて再び上京し、現在の地に居るとした。大正六年五月村民より推され村會議員となり、大正十年四月世田ヶ谷村助役に擧げられ、大正十四年一月町制施行と同時に町長に擧げられ今日に至つてゐる。大正十二年玉川電車が三軒茶屋下高井戸間の電車敷設に際しては、氏は努力して之を助け、遂にその完成を見るに至らしめたのである。なほ郡制廢止とともに大に自治制確立の必要を知り、各種の設備完成を圖り、殊に教育の進展、道路の補裝、下水道の布設、衛生、警備の完備に務り、更に小學校増設を企て、現に一校を増設中である。又道路敷設は民間の事業とし、費用の半を町費に負擔することとし、衛生設備は組合組織とし、又助役時代には信用購買組合を創立して村民の利便をはかつた。その他公共の爲め盡瘁したことは枚擧に遑がないほどである。資性恬淡、眞に町長として推服し得る人物である。かの子夫人との間に靖子嬢あり、日の出女學校在學中の才媛である。

伊藤 治作

明治二年十二月十五日生
麴町區下六番町四九

深く自らの天職を知り、常に毀譽褒貶に超越して只管區民の福祉と自治の進展に心を砕きつゝあるの人に、我が深川區長伊藤治作氏がある。氏は明治維新以來人材雲の如く輩出せる山口縣萩の出生であつて、毛利侯の藩士の家に生まれた。夙に秀才の譽あり、後東京に出で、東京府に勤務し、精勵格動見るべきものがあつた。後東京市に轉じて水道課に入り、諸般の事務に通達して而も熱情以つて事に當り、その精力と勤勉とは同僚間に推稱されてゐた。後深川區に轉じて衛生掛りとなり、衛生思想の普及とその實施に努力するところがあつた。併し同區には細民街多く衛生思想の何物たるかを解せない者が尠くないので、其苦心と努力は一と通りではなかつた。けれども自己の天職を知る氏は毫も之に屈する色なく、細思研究して第二第三の計畫を樹て、熱心にこれが普及と實施に力め遂に今日の成果を齎すに至つたと氏は美はしい熱誠と努力の賜である。殊に震災の際には氏は身を挺して罹災民救済の任にあたり寢食を忘れて奮闘した其尊い犠牲的精神の發露は尠からず區民を感動せしめたものだ。後擧げられて區長事務取扱となり、更に十五年十一月推されて區長となり、同區の復興に全力を傾注して倦む處がない。其の性温良玉の如く其心胸の敦厚にして其量の寛雅なる人をして自ら懐かしむるものがある。亂世に在つては統治的の英雄を必要とし、現代に在つては、自治指導に任ずる着實なる人を要する。氏の如きは此の意味に於いて現代必須の人材といふべきか。とら子夫人との間に二女あり長女典子嬢は共立女子職業學校専門部出の才媛である。

木村 政次郎

慶應元年七月十五日生
芝區白金三光町三九三番地
電話 高輪 五五九〇番

目下東都操風界の覇者として又政界の名士として知られてゐる。木村政次郎氏は、たゞに社會の木鐸に任じ、世を警醒するのみに止らず、其の立志苦闘の過去數十年の歴史は、擧げて以て世人の儀表たるべく、後人の景仰を聚むるに足るものがある。氏は千葉縣の人、君津郡下に生れ、明治七年同郡天神山村小學校に入學したが、餘り物資的に恵まれてゐなかつたので氏をして永く學窓に親ましむることを許さなかつた、仍で已むなく十一年退學した氏は、後京都に出で、一方に生活の糧を得、傍ら學究して五ヶ年の星霜を苦學力行の裡に送つた。かくて明治十六年土木請負業に着手し二十年轉じて村田銀行支配人に就任する迄には氏の不退轉の勇猛心と強固なる意志の下に涙ぐましい程の奮闘が繰返されて行つた、二十三年再び土木建築を開始し、後専ら實業界に驥足を伸べ、先づ横濱起業銀行に入り、頭取に推され同時に株式會社米糧雜穀取引所理事長に擧げられた。後同所が株式會社四品取引所と合併して横濱取引所となるや、其の専務理事に就任して大に天賦の才能を揮ひ、超えて三十二年東京毎夕新聞社長に就任し横濱取引所、起業銀行等を辭して専ら發展を計り、大正十年十二月更に合資會社中央新聞社長となり、十二年末同社株式組織に變更するにあつて取締役となつて今日に至つて居る。之より先大正十年十二月千葉縣から選出されて中央議政の府に送られ、降つて十三年再選されて引き続き國事の廟議に列し、尙大正十年六月文部省國語調査會委員に囑託された。蓋し氏の如きは近代稀に見る人傑であらう夫人いね子との間に七男四女がある。



杉山兼吉

明治三十一年十一月二十六日生
芝草區馬道町一丁目二五
電話 淺草 一八六一番

東京名所の淺草の仲店が、震災後に美事な新装で復興した裏には、土地の商榮を思ふ杉山兼吉氏の熱心な奔走が多大に與つて居る。氏は明治二十三年此の地に洋品商開店以來、一家の繁榮を計るの外に、一般商人、殊に同業者の共同發展のために粉骨の勞を厭はない人である。一體分業の進むに隨つて凡ての生産品は有無相通の法に依つて各自の需用を満し、其所に中間介在の商賣が物資媒介の圓妙な役目を果して居る。食婪な彼等が暴利をむさぼつてゐるために、寄生的な搾取者の如くに思はれた時代はすぎた。而も同業簇出に伴なう自由競争を緩和し各自の自滅をさけて相互扶助の麗しい提携から、同業組合なるものが盛んに生れて來た。而も組合の眞の使命は同業者の一方的利益に止らず、進んで各自の経験に鑑みて商品の長所をとり、缺陷を補ひて良品の提供に努め、更に一般の需用の動きや流行の何如を察して需用者に充分な満足と與へると云ふ所まで至つて始めて達せられる。同業組合が此所まで自覺して居るのはまだ甚だ鮮いかの感がある時にかうして模範的組合が商業活動の地淺草仲店の洋品商に依つて組織されて居る。同組合の成立發達には正しい自覺から發足して居る我が杉山氏の長い間の献貢が拂はれて居る事は申す迄もない。大正十三年以來其の組合長に推され、彼の震災直後のバラツク許可に八方奔走して、當時の復興のために多大の苦心を拂はれた等は、同地商家のために非常な功勞となつて居る。氏資性實直にして犠牲的精神に富み、正義の念強き事から見て、氏がかく公共の事業に當つて献身的努力を惜まない事がうなずける。

内田政三

明治三十一年十一月二十一日生
芝草區三田三丁目二五
電話 高輪 一三七五番

古語にいふ「天は自ら祐くるものを祐く」とは一見何等の奇なく陳腐の如く思はるれど、これを意味する時始めてその至言なることを知る。自らの中に天祐を求め、不撓不屈の精神と不退轉の勇猛心とを以て遂に今日の成功を贏ち得た人に、我が内田政三氏がある。氏は幼少の頃神田區佐久間町某下駄製造販賣店に業務見習ひの爲徒弟として住込み、夙夜業務に勤勵して主家の爲に忠勤を抽んで大に其前途を囑望せられてゐたが機を漸く熟すると共に、現在の地を選んで下駄製造販賣店を開業するに至つた。然し當時は資本も至つて少く氏の苦心は一と通りではなかつたが不撓の精神と強固なる意志とを有する氏は、艱難に逢つて益々勇氣百倍し、日夜奮闘努力した結果、信用次第に加はり、業務日を送つて繁榮し、現在では店員四名を使用するの盛況を來たし、芝草區内に於ける同業者中嶄然頭角を抽んずるに至つた。氏は此の地に在住すること三十有五年、爾來家運の隆盛を圖ると共に夙に公共事業に心を砕き、殊に自治制の確立は町會の設立に在りとなし、町内の有志を叫合してその設立に盡力した。併し謙讓の美德に富む氏は、自ら表面に立つことを屑とせず、専ら帷幕に在つてこれが發展を計り見るべき幾多の功績を残してゐる。氏資性熱實にして勤勉、而かも世路風霜を経た苦勞人丈けに人一倍思ひ遣りが深く年と共に信望を加へてゐる。蓋し氏の如きは眞に隠れたる自治發展の功勞者として推獎すべき人であらう。てい子夫人との間に二女あり、長女は東京女學校卒業後家庭に在つて家事を助け次女は同女學校在學中にして共に才媛の譽がある。

小林福三

明治三十年三月生
芝草區芝浦月見町二ノ四番地
電話 高輪 二八六八番

帝都家具製造界の權威たる旭家具裝飾會社の専務取締役とし、又一方帝都の大玄關とも云ふべき芝浦の有力者として縦横の奇才を揮ふは我小林福三氏である。氏は埼玉縣小林源三郎氏の長男に生れ、幼時より志望遠大にして、廣大なる異域に驥足を伸ばさんとて、遠く米國に渡航し、彼地に在つて家具製造並に屋内裝飾の實際に就きて親しく視察研究を遂げ、且つ自ら工場に立つて製造に従事した。明治四十五年歸朝するや獨力その製作に従事し、精巧と堅牢を具備せる製品は各方面の歡迎を受け逐次發展するに至つた。機を見るに敏なる氏は、乃ち家具の大量生産を圖り、大正九年旭家具裝飾會社を創立してこれが専務取締役となり、芝浦に工場を設置し、一方熟練せる米人技師を招聘してこれが監督の任に當らしめた。時代の推移と氏の努力によりその製品は各方面に多大の歡迎を受け、一方氏の獨創になる屋内裝飾は各方面の好評を博し益々その事業發展し、帝都斯界に在つて壓倒的勢力を得るに至つた。而もなほ幸に震災を免れた氏の工場は益生産力を増加して幾何級數的發展を遂げ、現在では職工二八餘人を有し、その生産高は全國第一と稱されてゐる。なほ同社の裝飾を擬らせるは松坂屋、松屋、國會議事堂、大阪住友銀行、北海道今井呉服店等の一流官衙會社大商店等であるが、殊に議事堂の裝飾に至つてはその妙技は當局の推稱するところとなり、感謝状を授與されてゐる。氏は尚ほかかる繁榮の間に在つて能く芝浦の發展に意を凝ぎ、町民の尊敬の的となつてゐる。よね子夫人との間に勝子嬢がある。



野村此平

明治二十二年生
芝草區南濱町十一
電話 高輪 五一四番

東京府會議員として府政の刷新自治の向上に無限の蘊蓄を披瀝し、府政壇上に獅子吼して侃諤の論を爲す我が野村此平氏は、明治二年を以つて岡山縣下の勝山に生れた人である。氏は幼より學才を抜き、鄉費を卒へて後、岡山中學に聘せられて此處に教鞭を執り、その卓越せる學識と深遠なる思想とは、濃厚なる性格と相俟つて忽ち生徒等の信望尊敬の的となり、少壯有爲な教育家を以つて稱せられてゐたが、一教育家として終るを潔しとせざるの氏は、二十五歳の時決然として教職を辭し、法學に志して上京し、中央大學の前身たる東京法學院に入り、研鑽大いに努めて優秀なる成績を以つて卒業し、直に辯護士試験に應じて見事第百一年來の宿望を遂げ、茲に自己本來の才能を發揮するの端緒として、愛宕下町に法律事務所を開いた。そして常に正義を身に體して事に當り、忽ち斯界に抽んずるに至りて業務頗る殷盛を極め、其の後現在地に移るに及んで更に發展し、法曹界に重きを爲すに至つた。氏は又公共の事に關して夙に意を注ぎ、芝草區の發展と其自治公共の爲に盡瘁する所多く遂には區民より選ばれて區會議員となり、次いで東京府會議員となり、よく寄託に酬めて益信望を加へ、現在に及んでゐる。氏は憲政會系の色彩を有する政治家として、區會府會に推選せるは勿論、教育方面にも蘊蓄多きを以て常に警務學務方面の委員長に推され、不斷に畫策貢獻するを怠らない。家庭に一男一女があり、長男は慶應大學理財出の秀才で、令嬢は既に他に嫁してゐる。

田村貫一

明治十四年一月生
芝區高輪町五三番地
電話 高輪 一二九〇番

今や電氣萬能の時代に入つて、其の利用に對する研究はますます廣汎にして且つ精細に入つて行く。而してその結果を以て世人の生活を擴充し、文化的價値を増加せしむるの寄與に對しては誰しも感謝せねばならぬ。現在電氣製造界の覇者たる田村貫一氏も、亦この意味に於いて電氣界には缺くべからざる重要人物である。氏は東京府の人で、父を田村英哲とし、其の第四男として生れ、同彰一氏の令弟に當つて居る。夙に慶應義塾大學理財科に入つて研鑽をかさね、明治三十六年二十三歳で同校を了り、後實業界に入つて父君の事業を扶けて活躍し、生來の俊敏な才を以つて業績を頓に擧げて行つたもので、當時早く出藍の手腕を驚嘆されて居つた。後明治四十年十一月分家して一家を創立し、獨立實業界に飛躍して尙次第に勢力を擴張して行つたのである。現時三保社、聯合紙器各株式會社に取締役社長として全局に渉る指揮に任じて居り、外に大阪電球株式會社取締役、大正電球、日本電球、關西電球、大日本電球、帝國聯合電球等の各株式會社監査役となり、天晴電球王として嶄然頭角をぬきんで居る。氏がかく斯界に名をなすまでには勿論非凡な才と機敏な活動が拂はれて居るが、氏の手腕をもつてしては今後尙驥足を展べる餘地は可成廣く殘されて居る。寬容よく人を入れ、社員に篤く、堪圓熟な處世的才氣に至つては大會社の重役として缺く所がないと云ふ。妻女弘子は海軍主計少將加藤八太郎氏の長女で、健夫、泰男、和子、頑男、京子等の子女を儲けて家庭は春日の様な和やかさを見せて居る。



神 絢 一

明治十年生
府下喜多見成誠學院住宅

吾が身を振つて人の痛さを知る。まこと我が東京市教育局教化施設掛長神絢一氏の過去と現在とは當にこの云ひふるされた古語に符合する。氏は青森縣の名望家神慶次郎氏の次男に生れ、青森縣立第一中學卒業後、明治三十九年上京して先づ職を中央郵便局に奉じ會計課勤務となつた。されど天性好學の氏は會計事務の己れに適せざるを知り、後幾何もなくして自己の進路を東京市役所教育局に見出し、而かも勉學に最も好都合なる一ツ橋圖書館に勤務することとなつた。當時前途の希望に燃ゆる氏の喜悅の程將に想ふべしである。爾來牛込・日本橋・日比谷・深川の各圖書館に轉勤して正に十年一日の如く恪勤精勵した。而かもこゝに特筆すべきは其の職務に執筆する傍ら早稻田大學英文科に學び、刻苦研鑽遂に拔群の成績を以て同校を卒業したことである。次いで大正十二年拔擢せられて教育局庶務掛長となり、同十五年現職に榮轉して今日に及んで居る。人生多難、而も氏の如きはあらゆる艱苦に能く堪へ遂に今日の勝利を贏ち得るに至つたのである。氏は曰ふ「私の唯一の希望は讀書を普及することにある。従つて現在の圖書館をより以上簡便有益に改善して一書を購ふにも容易でない貧しい人々に接近させたいと思ふ」と、實に家貧にして研學意の如くならざる人々の餘りに多い現代に於て、自ら克く其の苦酸を噛みめ來つた氏の如きを、我が東京市の教育施設掛長に持つことは何と適材適所ではないか。國民教育の益々高唱さるゝ今日氏の今後の活躍は當に期して待つべきである。家庭には琴子夫人との間に二男がある。

寶田一藏

明治十九年六月二十日生
府下淀橋町角管一〇〇

氏は一見して海上生活をしたらしい、頑健なタイプの中に男性的な氣魄が漂つてゐる。まことになんと云つてもマドロスの夢にひたつて來た人には、陸上人に見るやうなせしこましさがない。何處となく海洋の大を心にする豪放なところがある。四面環海のが日本はかうした寛いだ襟度の人達によつてこそ、世界に雄飛し得られるのではあるまいか。さて氏の郷里は新潟縣岩船郡村上本町である。村上中學校を卒業したのは明治三十九年のこと。常に渺茫たる海洋の廣さをなつかしんだ氏は、オゾンの薫りを慕つてやまなかつた。キャビテン・ルームに堂乎とおさまり込んでゐる精鋭の船長や、甲板上に颯爽たる姿を現してゐる若い機關長こそは、氏の希望の對照であつた。かくて勉勵の甲斐があり商船學校に入學し、大正元年六月には日出度く同校機關科を卒業し、まづ最初は佐賀縣立商船學校教諭に赴任して、若い未來の海員の薫育に専念してゐた。が教壇に朽ち果てるのは氏の意思でなかつた。かくて大正四年四月に日清汽船株式會社に入り、まづ近海航路に従つたのである。次には逕信省のケーブル敷設船沖繩丸に乗務して、遠洋航海をまでし心ゆくばかり海洋の魅惑に酔つた。更に國際汽船會社に移つて大正十一年五月まで多忙な海上事務を掌握してゐたのであるが、同十一年十二月に東京市淨水課機關係長に轉じて今日に至つてゐる次第。げに新進の技術者である。趣味がスポーツだとはあるは、氏の心意氣によく似通つてゐることを思はせられる。夫人との間には本年二歳になる坊ちゃんがあつて、氏のババぶりに無邪氣な微笑を漂はせてゐる。



齋 藤 留

明治七年三月廿三日生
府下平塚町小山六一
電話 高輪 六八七七番

千古の大森林に覆はれたる秩父の連山を脊後に背負ひたる埼玉縣秩父郡三田川村宇三山こそ齋藤留氏の出生地である。此の大自然の懷に抱き育まれた氏は、偉大なる自然の前に於て、人間の如何に無氣力なるかを若きより痛感してゐた。氏が東京に出た動機も全くこれが爲で、それは恰も日露國交の斷絶して人心は極度に緊張して悲壯なる氣の漲つてゐる明治三十七年三月十六日のことであつた。そして直に東京市街鐵道株式會社に入つた。かうした時期に上京した事はいろゝの意味に於て氏に發奮の氣を湧かした事は勿論である。明治四十四年電車は市營となつたが、氏は引き続き勤務してゐた。氏が人社當時の馬車鐵道も直に電車となり時勢は文明の潮流に乗つて進展してゐるのを見た、氏の感慨は益々深くなると共に更に發奮へと導いた。かうして氏は三田出張所長を振り出しに各線の出張所長を経て、大正九年十一月には現職たる運輸課の電車掛長となるに至り、次第に電氣局に於ける重要な人物となつたのである。此の間氏は東京市民を震駭せしめたストライキ事件焼打事件に異數な功をたてた。又震災復舊には寢食を忘れてそれが一日も早く復舊せん事を計り、一年を出でずして全線に電車の動くを見るに至つたのは主として氏の力によるもので、これが爲表彰せられた程であつた。氏は釣を好み自ら大公望を以つて任じてゐる。夫人美子との間に三男三女あり、長男辰雄は藥劑師となり藥局を開き、二男は中學に三男は小學校、長女は女學校を終へて已に嫁し、二女三女は共に女學校に通學中である。



關谷兵助

明治元年九月五日生
麴町區富士見町一丁目一番地
電話 四谷 四六九一

帝都實業界の重鎮として多年その名を馳せ、一方自治の刷新改善に身を挺し、現在麴町區富士一町會長として、常に其開發と施設に躬行實踐し、献身的努力を續けてゐる人に關谷兵助氏がある。氏は郷里長野縣高井郡小布施の村を後にして七歳の時叔父に當る關谷家に養子となつたのであつた。十四五歳の頃養父關太氏のすゝめに従つて或る株式仲買店に入り株式賣買の修業に入つた、そして四十四歳まで轉變波瀾多き株式相場界を游泳して俊敏なる腕を鍛へあげ、大正元年始めて獨立の店舗を現在の地に設けたのである。そして商機を掴むの快腕を以て顧客の便宜を計つてゐるので業績はすばらしい勢で學がつてゐる。氏は又近時三河輕便鐵道會社の設立を企て附近一體の交通を助け、地方の電化に依つて發展を招かうとする壯圖に着手して居るが、其の着想も企劃も共に當を得て居り、成功疑なきものとされて、一般の視聽を蒐めて居る。活動好きの氏はかくして種々の有望なる事業を企て常に活動の途を講じて居るから其の前途は洋々として、にはかに逆睹し難いものがある。一面氏は又風流な趣味に富み、美術骨董品を殊の外愛好して専門家其所退けと云ふ素人ばなれのした鑑識を備へて居る、其の居を訪ふと應接間の正面に高く掲げられた彫塑「融合」を目撃するであらう、代々木大樹氏の一代の作であり嘗ては東台彫塑會出品として好事家の人氣を騰かせ近くは巴里萬國彫展覽會に出品されて、世界的驚異觀賞的となつたものである、濃厚な氏の人格は此の嗜好の中に愈々まどやかさを加へて行く事であらう。



松原勉

明治十六年十二月四日生
本郷區本郷三丁目一〇
電話 小石川 五七二六番

氏は岐阜縣下の出身で、鶴飼ひで知られた長良川に近い惠那郡苗木町に生れ、早く小學校に入り學序を追ふて中等學校に進み、同校を卒業するや齒科醫たらんと志した。當時齒科の醫學上の地位は頗る低く、一般は之を輕視するが如き傾きがあつた。氏はこの舊來の偏狹な觀念を排して齒は生命なりの格言の通り必ずや齒科醫術の將來を見るべきものありとして直ちに東京齒科醫學專門學校に入學し此所に専修する事四年其の要諦を得て明治四十一年卒業したが、優秀な成績に見込まれて東京帝國大學齒科醫學部の招聘に接したのであつた。其所で學苑教授上大いに既修の學殖を披露し、實際治療に向つては郡部を問はず四集して來る患者に對して自由に其の技を試みる事が出來た結果、患者に福音を頒つと共に自家の修養にも甚だ資する所があつた。後齒科醫學界の發展を期して齒科醫師受験準備會を創立し一般篤學の士に學習の便を供した、茲に於て其の學を知つて來り學ぶ者夥しい數に上り近々數年に一千六百人に及んだといふ。かくて又一方には永樂病院に職を執つて治療に従事し後更に獨立開業して現在の地をトするに至つてから日を追つて盛業に向つた、かくて齒科醫界には多大な功績を貽すと共に自治方面に向つては常に改善の急先鋒となつて卓越な識見と豊富なる抱負とをのべて町會の完備やら衛生組合の刷新等其の從來與つた功績は決して尠なしとしない、震後自警團長となり町會長となつて町内公共事業に牛耳を執つて居り、日本齒科醫師會理事及評議員として重きをなして居る。



杉梅之治

明治七年六月二十八日生
中野町打越二一七四
電話 中野 五五四番

多年官界に在つて政務に執掌して常に民衆の安寧と福祉を圖つて名行政官の名を恣にし、轉じて東京市に入つては、帝都十五區中統治の難きを以つて知られてる淺草區長の要職に就き區政の刷新諸般の設備に多々益々辨んずる手腕を發揮して名區長として好評あるはわが杉梅之治氏である。氏は岡山縣眞庭郡落合村を播磨の地とし、郷譽を卒えるや直ちに笈を負ふて東都に出で、東京法學院、東京警察監獄學校に學び、斯學の研鑽に身をゆだね、明治三十二年學成り校門を辭した。明治三十四年文官普通試驗に合格すると共に郷里岡山縣に職を奉じ、警部に任命され、次いで四十一年山梨縣に轉じ警察部に勤務し更らに大正四年同縣警視に昇進し、翌年甲府警察署長に任命された。大正六年同縣北都留郡長を拜命し、更らに大正八年香川縣仲多度郡長に榮轉し、十年同縣綾歌郡長を経て、十二年には郷里岡山縣御郡郡長に榮轉した。この間銳意地方行政の刷新と地方産業の勃興に腐心して見るべき成績を擧げることを得た。大正十三年職を辭し、後東京市に入り、淺草區長に任命された。震災の傷手癒へざる同區の社會施設の復興と増設を圖りて、益々その機能を増進せしめ區民の安寧と福祉を圖り自治制の確立は町會の設立にあるとなし、銳意その設立を奨励するところがあつた。爲に區政益々圓滿なる發達を遂げ、今や淺草區が復興の魁をなすつゝあるに至つた。永年官界に在つて苦酸を経たるその老練さと快調なる天資よく自他を擁護する態度とは相俟つて區民並に輩下の敬仰するところとなつてゐる。功績により正五位勳五等に叙せられて居る。

關口曾兵衛

明治八年十二月二十五日生
府下 世田ヶ谷町
電話 世田ヶ谷 四二二番

我が國の警察力は實に世界に誇るべきものであつて、その施設と運用極關と相俟つて斯職にある人士の多く清廉謹直なるを以て稱せられてゐる。だが、警察存在の意味は、由來民衆の保護及犯罪の防止にあつて、犯罪者逮捕はむしろ第二義的のものである。所がともすれば警察といへば直に犯罪を聯想せしめ、人民をして嫌惡の情を起さしむるものは、第一義的な人民保護に於て、何等かの缺陷があるに違ひない。即ちこれにたずさはる人の誠意が一般に徹底せず、人民との連絡に於いて欠ける所があるのに原因するものであるまいか。其中にあつてよく道般の事情に徹し、個人的人格の光に於いてもその管轄地内に於ける人々から、恰も慈父の如く敬慕せられてゐる人に、世田ヶ谷警察署長の關口曾兵衛氏がある。氏は長野縣士田市の舊家に生れ、四時よりどりなる色に抱まれたる山川を友として、美しきも温き自然の懷に育まれた。長野縣と云へば今の世には稀に見る純朴なしかも智識慾の旺盛な處である。氏は勿論かうした性を郷土より惠まれて成長したのであつた。氏が志を立て上京したのは明治三十九年、日露の續く連勝に國民歡呼の聲が津々浦々に満ちてゐる時であつた。氏は先づ八王子警察署巡査を拜命し、此の方面の生活への第一歩を踏み出したのである。爾來精勵格闘よく努めて優秀な成績をあげ、品川五日市の各警察署に歴任して次第に登用せられ、遂に拔擢されて警視廳相談課長となり、後榮轉して千駄ヶ谷分署長となるに至り、大正十三年には昇進して世田ヶ谷警察署長に補せられた。氏の如きは眞に努力精進の士といふべきである。

岩本半三郎

芝區愛宕下町一ノ一
電話銀座 五五九四、七一九四番

長野縣の伊那郡を走る伊那電車を山吹下平停留所に降りると、其處が岩本半三郎氏の出生地山吹村である。氏は舊姓を熊谷と云ひ、小學校を卒へてから二十四の年迄家業を勤んでゐたが、奮然悟るところあつて明治二十一年上京し、歌舞伎座前の親戚なる吉野商店に業務見習の爲寄寓する事となつた。同店は玉突臺製造の元祖で、其の當時は専ら玉突臺の製造をしてゐたが、後擴張して各種家具製造をも兼ねる様になつた。氏は同店にあつて此等製造及び販賣に腕を磨くと共に、精勵格闘よく主家の爲に盡したので、遂に懇望されて吉野家の親戚で而も氏の親戚に當る岩本家を繼いだのであつた。岩本家は西洋家具製造界の元祖で、明治十一年頃の創業に掛り、當時は竹川町にあつたが、三十三年頃家具商の本場たる愛宕下町に移つたのである。當時より西洋家具は益々需要の多きを加へて來たので、爲に當家もその潮に乗じて遂に全く他の追従を許さぬ迄の仲展を見つて至つた。かくて震災後堂々たる西洋館の店舗を構え、十數人の店員を以つてしても、尚間に合ひかねる程の顧客を呼び集める様になつた。又諸官省大銀行會社等の多くは、全く當家が御用をつとめてゐると。氏は又一方公共の人として令名を馳せ、目下區會議員として區政の爲に盡す所多く、愛宕下町一丁目町會長當時、自治公共への盡瘁振りには氏の爲に特筆すべき事であり、現にこれが參與として盡してゐる。その外家具同業組合副組長、家具協和會理事として、同業の共同的仲展に力めてゐる。趣味、玉突。夫人をさと子と云ひ一人の愛兒を擁して、一家團樂してゐる。

村瀬誠一

明治二十年生
牛込區富久町三四
電話 四谷 六四四四番

氏は脊に雄大なる飛騨山脈の連山を擔ひ、潤然として展けた濃尾の大半原を有する岐阜縣の岐阜市畑目町に生れた。この自然の懷に育つた氏は生來不撓不屈の精神と進取の氣象に富んで、何事によれ一度手をつけた以上如何なる障害に逢はうとも屈せず、倒れて後止むといつた性格の所有者である。氏は郷里岐阜市に於て何不自由なく自轉車業を經營してゐたが、大いに感ずる處あつて、折角築上げたそれ迄の地盤を惜氣もなく投捨て、大京し、一職工として某工場に勤めて實地に研究を進めた。人情の常として一度安息の道を得れば、いつしか現在の境地に満足して只管安全を圖り、安逸に陥り易いものである。況んや自ら今日迄に築きあげた地歩を弊履の如く投捨て顧みず、新天地を開拓すべく一職工として道を踏始める丈の勇氣ある士は巷間その例を餘り見ない。氏の如きは實にこの意味から云つても範とするに足る精進の士であらう。氏は同工場に於て専心その研究を重ね遂に十年程前小資金を以て工場を起し、六名餘の職工を使用して自轉車製造業を始めた。自ら、一職工として細ゆる苦勞を嘗めて來ただけあつて、職工を愛する念厚く、自ら先に立つて彼等に範をたれ、主従の念を捨て、一意業務に勵み、遂に今日では車體一萬三千臺以上貫通式ハンドル三千本の生産能力を有する盛大を來した。氏は又我國に於て今猶ほ優秀なるオートバイの製造不可能なるを憂へ、研究に研究を重ね、多大の犠牲を拂つて著々オートバイの製造にも従事してゐる。正に成功立志傳中の人物と云ふ可きであらう。たま子夫人との間に一男一女あり。

山本朗三

明治十二年四月二十三日
芝區白金三光町九五番地
電話 高輪 七二三八番

氏は府下荏原郡池上村の出身である。若い時代には教育家にならうと志して、青山師範學校に入つて登雪の功を積んだ、明治三十六年に目出度く同校を卒業して、東京市及び郡部の各小學校に教鞭をとること九ヶ年餘その間はひたすら幼い兒童の薰陶に心を砕き、健やかに伸びてゆく少年達の喜びを喜びとしてゐたが、鬱勃たる朝氣はやがて教壇を去らしめ、まづ日本大學専門部に入つて法律學を専攻した。卒業後は更に思ひを轉じて實業界方面に驥足を伸べんとし、當時伊豆七島の椿油の帝都輸入を企て、日本橋區人形町に店舗を開き、主に三宅島より産出される椿油の販賣に當つた。やがて居を芝區三光町に移して店舗を開き、小賣業をも營んだのである。が椿油の優秀であること、氏の得意なプロパガンダより、瞬く間に聲價をあげ業績はめきめきと擧つて行つた。一方豪快な性質の氏は社會的活躍の舞臺面に乗り出し、區内教育會や兵事會の幹部として才腕を認められ、更に選ばれて芝區會議員になり、溢るゝやうな熱誠を以て區民のために働き、次で東京市方面委員として社會施設のために貢献するところが大である。氏が區會に席を有してからは、新橋復興委員長として我國最古の同様の復舊と、鎖道列車を停車せしめる等の問題につき、その解決の衝に當り功績非常に顯著なものがあつた。大正十四年度改選の際の如き、區民は芝からの躍起を切望してやまなかつたが、後進のために道を譲つてまた來るべき活躍の日を靜かに凝視してゐる。なほ化粧品問屋組合芝支部長としても、同業者の福利増進に勵んでゐる。

森田孝道

明治十九年九月十五日生
豊多摩郡澁谷町下澁谷九三四
電話 青山 五四六四番

氏は千代田電線株式會社取締役として、さては東京消防株式會社取締役として、堂々實業界に調歩する勇者である。郷里は任侠の氣骨を尊んだ群馬縣碓氷郡だと云ふ。東都に上つて、まづ早稻田大學商科に入り、明治四十一年に同科を卒業すると、直ちに古川電氣株式會社日光電機鐵道所に就職し、大正九年になるまで十餘年間を熱心に執務し、社員のお手本として讃へられてゐた。氏はその間に電線製作を實習しやがて千代田電線株式會社に轉じたのである。同社はもと秩父製作と稱してゐて個人經營であつたのが、大正四年に組織を變更し株式會社とし事業の大革新を加へ、氏の進言を容れて一般ゴム被覆電線の製作を開始したのである。茲に於て氏は多年の蘊蓄を傾けて製作を督勵したので、業績は異常の發展を示し、大正十二年更に増員して擴張を行ひ名稱を千代田電線と改め、氏を推して取締役となし一切の業務を掌握せしめるやうになつたのである。その製品の如きも東京市電氣局、鐵道省を始め、各官衙や大會社に供給して、非常な好評を博してゐる。これこそ一重に氏の不屈な努力と、卓越した手腕によるものと看做さなければならぬ。氏は會社の經營に當つては、所謂ギフト・ショアリングの意味に於て職工に二割を配當し、之を優遇しその外年二回の旅行會を催す等、徹底的に温情主義を發揮して、業績の成果を收めてゐる。苛酷な搾取を能とする一般企業家は模範とせねばなるまい。そしてこれこそ氏の全人格の美しい發露だと云つてよい。夫人あひ子はまた賢妻で知られ、内助の功を積んでゐる。



茂庭 忠次郎

明治十三年六月十六日生
高田町雜司ヶ谷四六番地
電話 牛込 八五八番

帝都の復興は回天の大業である。只に二百萬市民の將來永遠の利害に直接の關係を有するのみならず、本邦の中心首都であり、文化の淵源地である。随つて交通事業等の中心地をなし國際的に東亞を代表する都市である。かう考へると帝都復興の事業は餘程慎重に慎重を累ねなくてはならない譯である。當局も此大業に従事して完全に使命を果し得る人材の選擇に方り、工學界の雄、工學博士茂庭忠次郎氏を涉獵し得た事は吾人の共に快とする所である。併し今や理想都市建設の槍舞臺たる復興局第二出張所長の重席に在つて略略畫策に没頭して居る、氏の苦衷は、それだけ大且つ深きを察するに難くない、氏の家は伊達藩の武家で藩下で藩々の名を誦はれた茂庭氏である、父君秀清氏の次男として仙臺南光院十番の地に呱呱の聲を揚げつ、天性強記の質を琢磨する事幾歳學序を追つて帝國大學科工土木科に學び、明治三十七年卒業と同時に東京市區改正委員囑託技師として區劃整理に當られたのであつた、爾來手腕の存する所を認められ、四十年四月には名古屋市の水道敷設に際して設計工事に參画した。爾來同所の技師長となり下水道敷設事務所長等に歴任貢獻して傍ら名古屋高等工業學校に講師として學徒の誘掖に任じた。かくて大正六年には支那出張を命ぜられ歸朝後は早川電力會社の設立にあつて之がプランの主眼者となり、間もなく内務技師に任ぜられ歐米出張を承り歸朝して大正八年學位を授與され現在では尙津市の水道顧問を囑託され、日本大學高等工業學校講師を兼ねて居る。夫人とめ子女史との間に長女きよ子次女なみ子の二女がある。

津下 紋太郎

明治三年四月七日生
本郷區上富士前一〇四
電話小石川三二九七番

由來石油に貧弱なことは、常にわが國運の悩みである。假りに某大國と戦ふとしたならば、日本はまづ海軍に要する石油の缺乏を開戦後十日を出でずして告げるであらうとは、其消息通の話である。かう云ふ窮狀にあるわが國にとつては、石油事業の消長は國勢を左右するのに充分であらう。さてわが津下紋太郎氏はその石油界の重鎮として、現在では日本石油株式會社專務取締役の重職に就いて、縱横の腕を振つてゐる人。その外にカルピス株式會社社長、株式會社北辰會取捨役、日本工業株式會社取締役として、行くところ可ならざるはなしと云ふ健腕ぶりを示してゐる。氏は岡山縣兒島郡藤戸町の出身であつて、明治十八年に京都同志社に入學し同二十三年同普通科を卒業し更に同二十六年に専門部を優秀の成績で卒業した。卒業後は同校からの懇望を受けて暫く教鞭をとつてゐたが、根が旺盛な氣の所有者であつただけに、三十歳の時飄然として臺灣に渡航し山林開墾及び樟腦製造事業に着手し、新領土の開発に力を注いだものだ。かくて相當の財をなした氏は再び飄然として歸國し、上京後實田石油株式會社に入つて格闘精勵してゐる内に、同社が日本石油會社と合同するに及び、抜擢に次ぐに拔擢されて遂に專務取締役の重位に就き、同社の興廢を一身に背負つて今日に至つてゐる。氏は英國型の紳士であつて、舉措端麗あくまでも聲約を守り商業道徳に違背するところのない人物だ。家庭には夫人實子との間に二男三女があり、父君の英智と母上の謙讓とを兼ね備え、樂しい園樂にひたつてゐる。

土屋 米八

明治十四年七月二日生
本所區向島諸地二一番地

巧妙な新犯罪や、慘らしい罪惡に依つて都會の裏の姿は折々に其の影を現はして都人の心をさわがして居る。かうした事件の突發毎に必ず警視廳の活躍人物として報道される人は我が土屋米八氏である。氏は神奈川縣中郡の生れで、巡查から身を起し巡查部長に進み、大正六年十二月警視廳警部補に任命された。其の關係に見ても異狀なる氏の努力と、その才器の非凡さを思はせるものがある。かくて大正十年七月同廳警部に昇進し十五年七月現警部部長の重要な椅子を占むるに至つた。是より先氏は入廳以來、重大犯罪勃發ごとに晝夜活動して幾多功績を残して居るが、分けても迷宮に入らうとした難事件が氏の活動に依つて判明した事は尠くない。其の度毎に氏は市民の疑惑と恐怖を一掃し、以て治安の維持に貢献し警察の威信をして益々高からしめてゐるのである。是までに氏が殆んど獨占的に同廳功勞賞や賞状等を受けて居るのを見ても明らかにその榮ある奮闘の過去を偲ぶ事が出来やう。さて犯罪を依法處分すると云ふ事より、一歩進んで之を未然に防止し、更に積極的にはさうした犯罪を醸成する社會の病患を除く事は現在社會問題の一つである。此の病患は年々々々擴大して行く傾向を示し、就中化學的犯罪は年々々々恐しい勢で殖えて行きつゝある。されど氏の豊富なる經驗と並びなき慧眼とは相俟つて犯罪の防止と犯罪者の檢擧に現在全國的好成績を擧げつゝある。以つて市民も意を安んじて可なりと云ふべきであらう。姿性剛直にして果斷、責任觀念極めて強く事に當つて精悍。

藪部 久五郎

明治元年三月生
芝區愛宕町三丁目

都下各警察の任務が其の管轄内の特殊事情によつて夫々重要な責務を有してゐることは勿論であるが、就中愛宕警察署は其の管下芝公園、協調會館等の大舞臺を有するだけに、民衆政治並に労働運動の發源地として一層重大なる責務を負はされてゐる。さればこゝに長たるの人は人格識見共に群を抜く士にあらざれば到底其の重職に堪へ難いのである。現在そのこゝに長たる我が藪部久五郎氏は各種の方面に於て夙に普く知られた存在である。されど氏がよく此の重責に在つて毎毎に措置宜しきを見る時、又氏の天稟の才腕と共に人知れぬ勞苦の存するを思はずに切なるものがある。氏は茨城縣茨城郡上中妻村の人、明治二十三年上京して警視廳巡查を拜命したが生來の慧眼と誠實とは常に遙かに輩を抜き、三十年遂に拔擢せられて警部補に任ぜられ埼玉縣警部勤務となり傍ら巡查教習所教官を兼務した。越へて三十一年警視廳管下に戻り本所相生署勤務を命ぜられ爾來小松川、向島、府中、千住各署に歴任した後、大正元年遂に警視に昇進するに及んで北紺屋署長に榮轉し、續いて鳥居坂、富坂、上野の各署長を経て十三年一月現愛宕署長となり今日に及んでゐる。其間氏はよく部下の監督と教養に意を用ひ、又夙に民衆警察を標榜して特に巡查の素質改善に力を注ぎ以つて警察事務の完全なる遂行を期したのである。氏の圓滿なる人格と溢るゝばかりの温情は管下の住民に慈父の如く親まれ、目下民衆の名譽長として噴々たる令名を馳せてゐる。家庭は曩に夫人を娶ひ、愛娘房子は法學士立松慎清氏に嫁し、ソプラノの名手として汎く知られてゐる。

谷村 龜吉

明治二十九年生
芝區新堀河岸町十七號地
電話 高輪 三七〇五番

大黒屋嘉兵衛と云へば壁材料商として市内に開えた家柄である。祖先が此所に業を興して氏に至るまで五代に亘り、目下素晴らしい盛業振りを見せて益々家業盤石の堅きを致してゐるが、殊に震後復興途上にある建築界空前の需用時に遭遇し、經營一段と活況を呈して門前は自働車、馬車の輻輳の繁劇なる盛業振りである。氏は慶應普通部に通學し、卒業後進んで上級學府に修學せんとしたが、多忙なる事業を切り盛りしなければならぬ關係上、止むを得ず断念して、専心家業に従事し父子相共に家業の堅實を計つて今日に至つたのであつた。其の經營する壁材及びセメントは、目下都下各土木建築業者は勿論官衙大會社等を顧客の主なるものと、五代の相傳の古い暖簾と、氏獨特の新しい手腕とを以つて大正九年亡父の後を承け獨力其の衝に當つて居る。彼の堂々たる體軀と男性美其のもの、様なる風貌は如何にも磊落落然らしい所を發見するが、温顔莞爾たるさま兒童も親しむ程の温情を備へて居る。氏は而も多忙なる家業にあつて外常に公共のため奔走する事を惜まず特に町の自治並に町内各種の施設の上に多大の貢獻をなし、而も其の圓滿なる人格と卓抜にして際當なる識見とは、常に期せずして町民敬慕的となり、現に新堀町の青年團長に推されて町有志者會員に選ばれ、町事に奔走し居り、嘗つては市勢及び國勢調査委員として功勞があつた。目下東都は復興の途上にあり、氏の家業は益々其の發展を加ふるの時、其の多忙なるは勿論であるが、性來の公共的精神は氏を驅つて又町事に奔走せしめてゐる。町民は以つて多とすべきであらう。

櫻井 三右衛門

明治十四年二月二十一日生
淺草區田原町一丁目三番地
電話 淺草 九九六番

自治觀念の鼓吹者として帝都に令名を馳せ現に淺草區田原町一丁目町會長たるの要職を占め日夜公共事業に力を致し温厚篤實の士として知られて居る人に櫻井三右衛門氏がある。氏は生ツ粹の江戸つ兒として淺草區に呱呱の聲を揚げた。先代を三右衛門氏と云ひ、その業を繼承するに及んで名したのである。幼にして才氣業に優れ巷間の小兒と其の類を異にしたがけにや「梅檀は双葉より香し」氏の如きは實に之に例ふべきもので現在に至る迄の過程を見る時首肯すべき幾多の點を見出すことが出来る。氏の生家は代々質商を營み逐次發展に發展を重ねて來たが氏も亦長ずるに及んで其の業を繼承し日夜孜孜業務の發展に不斷の努力を惜しまなかつたが、其の結果は遂に先代をも凌ぐ盛業振りを示し同業者間に覇を唱ふるに至つた而かも氏は此の繁雜なる業餘、遊るばかりの自治的觀念の發露は或ひは町政に參與し、その改善に刷新に一身を捧げて奉仕し、或ひはあらゆる公共的施設に率先して寄與する處多かつたと。氏齡不惑を越ゆる七歳にして家業を令息忠太郎氏に委ね、尙洋々たる天地を有する身を、町會發展の第一線に投げ、同町會長の要職を占め、献身的の奮闘を續けて、よく刷新改善の實を擧げ、温厚にして篤實なる反面に燃ゆる様な至誠を持して今や町民思慕的となつて敬愛されて居る。實に氏の如き人物こそ、得難い人格者手腕奮闘家として推稱するに足るものがある。家庭には忠太郎氏の外に二男あり、頗る圓滿で之亦社會に範を垂れて居る。同町は今後尙氏に俟つもの多し事に相違なき。



木代 嘉七

明治三十年八月二十五日生
西巢鴨町宮仲 一九〇〇

少壯有爲なる土木技師として其前途を囑望せられてゐる水道局工事課の計理掛長たる工學士木代嘉七氏は、明治三十年八月二十五日を以つて茨城縣雨引村に呱呱の聲を擧げた。夙に青雲の志を抱き、中學を卒業するや直ちに仙臺第二高等學校に入學して登雪の功を積み、大正七年卒業と共に最高學府たる東京帝國大學工學部に、土木科を選んで入學し、研鑽蘊奥を極め、大正十年には工學士の榮冠を頭上に輝かせつゝ赤門を出た。氏の榮ある社會的生活への門出には、行手に諸會社其他が手を擧げて待つてゐた。けれども氏は自己の進むべき途を東京市に求めて、その第一歩を水道局に踏出したのであつた。かくて淀橋浄水場に勤務したが、氏の拔擢の技能と精勵其物のやうな献身的努力は、忽ち上司の認むる處となり、遂に拔擢せられて工事課の計理掛長に任じ、以て今日に及んでゐる。彼の大正十二年振古未曾有の大震災は帝都を擧げて悉く烏有に歸せしめ、二百萬市民を被害を受け、市民の生命とも云ふべき水道は之が爲全然給水が不可能となつたので、氏は身を挺して之が復舊に力め、晝夜を忘れた程だと云ふ。氏資性調達にして勤勉、而かも光風霽月の襟度を有し、温言能く人を懐かしむるものがある。氏は又都市計畫の上に非常なる興味を持ち、唯一の趣味として此計畫を頭の中に畫いてゐると云ふ。本年三十歳、其前途には光輝ある未來が發展されてゐるのである。

伊藤 直吉

芝區口藤町一ノ一
電話銀座 二二四 一一八

我が國をして數度の大戰に常に捷を得しめ、彈丸黒子の島帝國をして東洋の盟主と誇らしめ、文明國として列強の間に伍せしめるに至つた所以は一に帝國陸海軍の武勇によると雖も、斯うした國防の第一線に立つ軍部を關接に保佐扶掖して、常にこまかい注意と多大な努力とを拂つて居る人々の存在も、亦忘却することは出来ない。其の功は間接でこそあれ、同じく武備に盡し、國防に注いだ點に於ては變りはない筈である。此所に長い間我が陸軍に軍用品を供給し、軍需界の發達と相俟つて隱に軍部の發達に貢獻して居る人に我が伊藤直吉氏がある。氏は千葉縣君津郡天神山の出身で、伊藤太吉氏の第二男として呱呱の聲を揚げた。明治十年前途に輝く希望を抱いて上京し、具さに世路風霜を嘗めて後、明治二十一年東京鎮臺に入り、職務に精勵したが、軍需品の内容を知るに及んで之が販賣を志し、翌二十二年獨立して軍用品業を開始するに至つた。明治二十七年偶々日清戰役起るや、氏は軍に従ひて出征し、營口其他の激戦に加はり、屢々生死の巷を馳驅して到る處に武功を樹て、平和克復後凱旋して再び斯業に従ひ日夜營々致々として専ら業務の發展に力めた結果、信用日に加はり營業次第に繁榮するに至つたので、更に同志を糾合して株式組織に改め、氏は之を取締役として専ら經營の衝に當つてゐる。同店は屋號を壽屋と稱し、主として雜貨を取扱ひ、極めて良品を而かも廉價に各兵營等に供給し、頗る好評を博してゐる。

加藤 辨一

明治十二年二月十三日生
牛込區早稲田町十二番地

古くは傳説養老の瀧が天下に其名を誦はれ、長良川迂曲する畔、靜かに翠綠の影を蘸す金華山、さては其の流れに浮ぶ鴨飼船など、數々の華麗な風光に廣く都人士の憧憬をあつめてゐる岐阜は、兎も角特徴多い國である。吾が加藤氏はその岐阜に近き土岐郡日吉村に呱呱の聲を擧げた。夙に郷里の中學校を卒業するや、青雲の志を抱いて直に上京し、明治大學に入學して只管螢雪の功を積んだが、家庭の事情は遂に氏をして永く學窓に親しむことを許さなかつた。仍で已むなく中途にして退學し、後職を大阪市役所に奉じて土木課地理課に勤務することになった。在職五ヶ年、幾多の功績を残して明治四十三年上京し、職を東京市役所に奉じて地理課に勤務し、更に會計課下水課及地理課等を経て、大正十一年の初夏電氣局に入り、拔擢せられて經理課被服工場主任に任じ、熱實至誠以て職務に精勵して倦む處がない。顧みると氏が東京市に職を奉じてより春風秋雨茲に十有七星霜、其間、忠實に眞面目に自己の職責を全うして餘す處なく、或は會計事務に、或は下水事務等に執掌し、而も地理課在動中、淺草公園區劃整理の難事業を擔當して之を完了せしめたるが如き、其功績は定に没すべからざるものがある。氏は明るい性格と犀利なる頭腦と、而して鮮かな事務的才能の持主で尙あらゆる困難に堪へ得る丈の冷靜な力を持つてゐる。多藝多趣味で、撞球を能くし、餘暇を見ては撞球場に得意の妙技を揮ひ、又圍碁、將棋等にも素人離れのした技術を持つてゐると云ふ、家庭には母堂さんと子を奉じ、さん子夫人との間に一男克明君がある。



小管 吉藏

明治九年十月三日生
四谷區新堀江町一

如何に科學を絶對なりとする科學者と雖も、死に臨んで神の名を呼ばないものはない。こゝに宗教が人生にとつて必須の一要素である事が證明される譯である。併し死の彼方に安心立命を得る事に依つてのみ宗教の價値が認められるものでなく、寧ろ現實日常の精神生活に於いて、其の眞價は得られるものである。即ち人生の價値は宗教に依つて裏づけられて、その大きな土臺の上に總てのものが礎き上げられて始めて人間は正しき道を辿る事が出来るのである。殊に教育に於て然りと云はねばならぬ。かうした信念を持つて育英に携つてゐるのが我が小管吉藏氏である。氏は村下南多摩郡鶴川村の出身で、早く教育に志し、明治三十一年東京府師範學校を卒業するや、直に南多摩郡の忠生小學校に職を奉じ、次いで鶴川高等小學校に校長として榮轉したが、後上京して四谷區第三尋常小學校の校長に聘された。當時氏は未だ二十七歳で、少壯校長として持て囃されたものだ。在職二十年、その間東京市尋常夜學校の改善發達や、少年團などが盡瘁し、又司法省囑託少年保護司となつて少年の保護教化に力めてゐる。又曩には東京市より選ばれて北米に學事視察を命ぜられ、大に得る所あつて歸朝した後大正十四年現校長に就任したのである。外には東京小學校教員會幹事長として盡瘁し、國民教育の第一人者を以つて目せられてゐる。かくて今や生活充實主義よりする學習の指導、自律主義よりする訓練、自發的鍛練主義よりする養育など、氏の奉ずる所は着々として小國民の腦裏に植え付けられてゐるのである。

岡 蕃

四谷區笹塚町六八番地
電話 四谷 三三七八番

學者で、經世家で、而も町内屈指の有志と云ふ三拍子揃つた四谷區々會議員岡蕃氏こそは定に才識兼備の士と云ふべきであらう。氏は夙に最高學府に法政學を研究し、法曹界の一角に打つて出で、卓異の才識と老巧の辯論を以て斯界の花と誦はれて居た。久しい間區内操縦界に牛耳を執つて一流の煥發の才と高邁の識見とを披瀝し、時局批判に公衆指導に目醒しい活躍を演じて來て居る。亦近來自ら率先して憲政公和會を組織して區政の指針に供してゐる。かくて氏は、理想と論争との埒内に留らず、進んでは忠實な公僕として自治政改革の第一線に活躍して居る。此の活動的な反面には、靜かに一室に閉ぢ籠つて讀書に親しみ、思考を練ると云ふ學者肌なる一面をも具備して居り、現に二三校の囑託を受けて法政及經濟、倫理等の教課を擔任し、其の蓄積を傾けて居る。かくて氏の卓異な才識は玲瓏なる人格と相俟つて一段と異彩を放ち、區民の景仰を一身に聚めて居る爲め、久しきに涉つて區會議員の席を占め、今回亦果ねて當選して居る。更に居町の和親共榮の爲には常に心を砕き、町會組織以來の功勞者の一人に數へられて居り目下其幹事に推されて二千の會員の福祉のために盡瘁して、煩を厭はない。そして平居多忙な身を以て、區内公共問題の起ること處し、事公共社會に關するに於ては苟も理非曲直を正さずんば惜かない。多事なる區政の改革にも、多端なる町會の事業にも、なくてはならぬ人材である。區民は氏の將來尙幾多の貢獻あるべきを待望してゐる。

大久保 留次郎

明治二十年五月十二日生
麴町區有樂町一ノ二官舎
電話 大手 四六五六番

帝都刑事警察界の總元締たる警視廳刑事部長大久保留次郎氏は目下警視廳切つての敏腕家として鳴らしてゐるのみならず、正に今日我國警察界の一偉材として認められてゐる。而かも氏の閱歷を尋ねれば、警察界には珍らしくも東京高等師範學校の出身である。大正二年三月同校を卒業するや同年十一月高等文官試験に應じ、見事難關を突破して紳々たる餘裕を示し並居る赤門出を啞然たらしめた。翌三年八月警視廳警部を振出しに越へて五年五月長驅南下して臺灣總督府警視に任ぜられ、蕃地保安の爲めに縦横の奇才を揮つた。されど蹇蹇は徒らに僻遠の地に埋もるゝことなく八年八月招かれて警視廳に再動し、次いで十一年十月内務省警保局に榮轉して益々冴へたる才腕を中央警察界に發揮した。乃ち認められて十三年十二月新潟縣警察部長に任ぜられ、こゝに愈々後日大成の首途に立つたのである。十四年九月福島警察部長に轉じ、十五年九月現任に至り今日に及んで當初の就任より現在に至るまで常に息も繼かせぬ一氣呵勢の昇進振りである。この稀有の閱歷に見ても氏の力量手腕に就ては今更ら歎々を要しないであらう。云ふまでもなく帝都の警察界は現在未曾有の多忙を呈してゐる。而かも將に時代の進むに伴れて新犯罪や其他雜多の犯行は愈々多きを加へんとするの時、氏の手腕は益々發揮さるべく、氏の如き偉材を得て始めて市民も枕を高くすることが出来るといふものであらう。性温厚篤實にして一面斯界稀に見るの好紳士である。讀書及び散步を大の趣味としてゐる。

高野多助

明治十一年三月四日生
麴町區有樂町一ノ二官舎
電話 大手 四六六一番

「火事は江戸の花」と云はれた時代は既に去つた。これは市民の注意が及び耐火家屋の増加にも依る所であらうか、一に又消防機關の發達に負ふ所が多い。されど一般人家の稠密と未だ過半を占むる木造建築の多い結果、殊に冬季に於て火災頻發し人心をして不安ならしむるの憾みあり、是に於て目下警視廳消防部長の重職を占むる我が高野多助氏は就任以來鋭意之が防止に意を用ひ、一方消防の敏速に力を注ぎ、以つて斯界に偉大なる貢獻をなすつゝ好評噴々たるものがある。氏は茨城縣の名家に生を享け、天性の奇才は常に小中學を通じて拔群の成績を擧げ得、更に高等學校より進んで東京帝國大學法科に入學し、明治四十年優秀なる成績を以て卒業した。かくて大正三年十一月警部として警視廳に職を奉じ、敏腕を揮つて令名を馳せ、大正十一年高等文官試験に合格して同廳警視に昇進し、同時に京橋區月島署長に補せられた。後轉じて新場橋署長となり、次いで相生署長、元富士署長等に歴任して帝都警察界に幾多功績を立てた。更に大正十三年六月現職に榮轉して爾來今日に及んでゐる。氏は現職に就くや管下の防火設備の完備、消防組織の改良其の他各種の施設及び改良に努めた。爲めに現在其の面目の頓に革れるを見る。是全く格動なる氏の偉大なる功績と云ふべきであらう。氏は又自ら進んで一般市民の防火思想の喚起に努め、災厄を出來るだけ未前に防止することに腐心してゐる。一度發火に遭遇するや沈着且つ敏速以つて部下を統轄し眞に秋霜烈日の慨を示してゐるが、日常は部下をよく愛撫し、部下も亦氏は慈父の如く敬慕してゐる。



山本正英

明治十五年五月十七日生
府下澁谷町中澁谷七二八番地
電話 青山 八六五番

從來園藝の業は老人若しくは閑人の爲す業として閑却され勝ちであつたが、時代の欲求に従つて園藝の業も亦日を追ふて盛んとなり之に就業するものも漸次多きを數ふるに至つた。而かも今や社會必需の園藝に携はり致々としてその學徒養成に努力してゐる。我が東京府立園藝學校校長山本正英氏は人も知る靈峯富士を仰ぐの地、靜岡縣富士郡吉永村の人であつて、幼時から俊才の譽が高かつた。後東都に出て東京帝國大學農科大學に學び、明治四十年優秀なる成績を以つて卒業し、後直ちに大阪府立農學校に教諭として赴任し、園藝科を新設してこれが主任となり、同地方の園藝界に資すること多大、而かも其の在職九年に及び益々業績擧らんとしたが大正六年東京府立園藝學校の聘に應じ之が校長となつて益々卓越せる識見と技能の發揮に努め斯界に盡瘁して今日に及んで居る。氏は園藝を眞面目なる生産業の一として深甚の注意を拂ひ僅少の土地より多くの生産をあげるに腐心し溢れるばかりの研究心は日夜之に向つて續けられ斯界に裨益する處が少くない。而かも亦夫を以て園藝教育の基礎方針とし、その方針の第一着手とも云ふべく同校の制度に大改革を加え、從來三年制なる學制を五年制となし、實習と共に學理の討究に重きを置き生徒養成には自己を没却して努力を惜しまず斯界稀に見るの篤學の士であり、又性温厚にして篤實、名利に淡く邊幅を飾らず、讀書及び斯道の研究を以て生命とする定に得難き好箇の教育家である。家庭には夫人菊子との間に三男一女があり、長子は山形高等學校在學中で秀才の譽があるといふ。

齊田萬藏

明治十年七月十七日生
世田ヶ谷町代田五〇七

「吾姓出於中原橫正兼遠、兼遠齊和源氏之後胤。而木曾義仲之裔也。左馬守發落之後。於信州樽井郷。賜姓齊田。旭將軍誠而後。有故歸於吉良氏。吉良家爲北條一見。誠。却而諸士多左。於在原郷。同ト居於此地者。即吾高祖也」。此の家系で見ても齊田家が如何に名門であるか窺はれる。それで始めて此の地に流れ來つた氏の高祖は百姓となつたが、その子孫は代々名主を勤め、七世萬藏と九世とは醫者として仁術を施し、八世平吉の如きは東野と號し、東江源麟の門に學んで東都屈指の學者となり、九世萬藏は雲岱と號し繪畫を以つて世に知られた人であつた。かくて先代又一郎氏を経て、高祖から連綿として十二代を累ね、現世萬藏氏となつたのである。氏は祖先より受け繼いだ、二十餘町歩にも亘る廣大なる田畑住宅地の地主として、此の界限切つての豪農であると共に、實業界方面にも驥足を延べ、現に澁谷劇場の社長として専らこれが經營の衝に當り、氏は天稟の才能を發揮して斯界に重きをなしてゐる。氏は又一而公共の事に心を用ひ六年以前迄世田ヶ谷町會議員として長の年月町政の刷新に力めて貢獻する處極めて多く、現に學務委員として國民教育の向上に盡してゐる。なほ日露戰役の際には歩兵二聯隊の先發隊となり、明治三十七年の二月第一軍に屬して出征し、敵に最初の一彈を見舞つたと云ふ。後各地に轉戦し、戰功に依つて勳八等に敘せられた。植木盆栽を愛好し、剪裁にも長技を有してゐる。家族はふみ子との間に長男平太郎、次男隆、長女最譽子次女實枝子がある。最譽子は特に才色双美を以て知られてゐる。

高橋甚右衛門

安政三年六月生
小石川區宮下町三十九
電話 小石川 六八四

麻と亂れし戰國時代に、九州の地に七萬石の城主として、雷名を天下に轟かせてゐた高橋正と云ふ人があつた。其の後裔安右工門といふ人、戰利あらずして、天正十五年江戸に落ちのび、護國寺領(今の坂下町)に居を構へた。これが高橋甚右衛門氏の遠き祖先である。榮枯盛衰は世の習とかや。會て權勢を誇つた高橋家も、時代の變遷と共に宮下町の地に百姓として零丁の身を悲しまなければならなくなつた。氏が生れた當時、附近は荒茫たる原野で、言問ふ家は僅かに三軒しかなくかつたといふ。其後上野戰爭の際には強制的に土地を賣付けられ、已むなく茶を植えなどしてゐたが、その多くは殆んど持て餘して徒に雜草の茂るに任せてゐた。然るに東京の發展は遂に此の地に迄及び、住宅地として次第に家作を營むやうになつたので、遂には本職たる植木職を止め、地主として生活するやうになり、今では此の界限でも屈指の地主となつたのである。かくて氏は徐々に土地發展に盡力して公共的の活動を開始し、明治三十六年小石川區會議員に選ばれしを始めとして、大正七年に至る十五年間區の爲に獻身的奮闘を惜まらず、又大正三年には府會議員に選ばれ、府政の爲に盡瘁した。區の議員としての氏の爲に特筆すべきは、四十二年集鴨一丁目の横町通りの六尺道を、五ヶ年に渡る氏等の奔走に依つて三間中となし、住民を不便より救つた事である。不幸病を得て七年以後は隱退してゐるが、而も氏の自治的功勞から押されて宮下町會長となり、なほ重きを爲してゐる。盆栽を養ふを好み、夫人喜美子との間に一男三女と孫女とがある。



玉置文次郎

明治十年十一月生
日本橋區横山町三ノ五
電話浪花五〇・五〇六・五〇九

北日本アルプスの險を屏風の如く背後に周らし、雄大なる自然に抱かれ
た美濃は、未曾掛斐の長流を控えて愛知平野に向つて其の裾を延してあ
る。その邊一帶の地を可兒郡と云ひ、今は時めく賣藥界の權威玉置文次
郎氏出生の地である。氏は此の地に中學を卒へるや、雄心止み難くして遂
に故郷を辭し、上京して氏の因戚の經營にかゝる玉置合名會社に入り、代
理部に勤めて専ら代理賣藥に關する商業的智識を修め、營々として職に勵
みつゝ、手腕を磨き、以つて獨立の地歩を養つた。そこで氏は日本橋區横山
町に店舗を開き、玉置合名會社在勤當時に得た商業的手腕に對する自信を
以つて、甲斐々々しくも商業戰の第一線へと乗り出したのであつた。併し
如何に心は逸つても、世の中の事どもは凡て始めから順調に行くものでは
ない。氏は幾度か悲境の苦しみで沈淪したけれども氏の手は確く握られた
不撓不屈な心の鍵は、遂に氏をして成功の彼岸へ到達せしむるに至り、努
力の後今や斯界の權威として名を斯界に轟し、東京賣藥卸賣株式會社社長、
東京賣藥同業組合理事、東京賣藥卸賣同業會副會長として同業者の共同的
進展に盡してゐる。現下選ばれて日本橋區會議員として盡瘁してゐるが、
その非凡なる才能と崇高なる人格とを以つて區の發展に一身を忘れて奔走
し區民感謝の的となつてゐる。殊に震災後、先の道路補裝に關する受益金
分配の月賦分納を案出し、之を當局に實行せしめ、區民の利福を圖つた事
は誠に氏の至誠と事理に通ぜること、を見るべく、一面又氏の崇高なる公
共的精神を物語るものであらう。



杉山誓

明治七年四月十七日生
麻布區笄町一五五

震災當時を回顧すると幾多の美談がまさしくと思ひ出されるが、我が杉
山氏が當時の活動はその中でも世の鑑として、後世迄語り傳へられるであ
らう。當時氏は庶務掛長として本所區役所にあつて、此の大震災に遭遇した
のであつたが、區長缺勤の爲自ら部下を督して臨機の處置を執り、最善を
盡して防火に力め、猛火の中に一身を賭して立ち働いた。併し阿修羅の荒
れ狂ふが如き劫火の前には、人力はあまりに小さく、氏の苦心は遂に報ひ
られなかつたが、而も家族の安否をまかり見ずして職責に對して献身的
に努力したことは、見るもの皆感奮した程である。氏は茨城縣筑波郡吉沼
村に産れ、早く軍人を志して歩兵職隊に入隊し、二等軍曹に進んで陸軍教
導團に入り、日清の戰爭に従軍して大いに戦功を立て、金百圓を賜り一等
軍曹に進んだ。其後軍隊を去つて民間に花々しく生活してゐたが、日露の
戰の起るに及び再び従軍して滿州の野に奮戦し、戦功に依つて歩兵特務曹
長に進められ、勳八等に叙せられた。凱旋後明治三十九年日本橋區役所
勤務し、よく軍人精神を體して職務に忠勤し、次第に昇進して明治四十
一年には東京市庶務課に聘されて事務員となつた。後四十四年には火災共済
會貯金委員會の書記となり、大正元年には御大葬事務に掌り、其の功勞に
依つて金一封を賜つた。大正二年には市の財務課に轉じ、幾程もなく本所
區役所に聘せられて、庶務掛長となり、大正十二年七月には本所區役所の
主事に迄昇進したのである。趣味を旅行や盆栽に有し、殊に讀書は三度の
食にも代へて愛好してゐる。

赤羽利助

慶應二年六月五日生
芝區金杉町四ノ四
電話高輪四〇一六番

家業三代といふ言葉がある。即ち初代の創業、二代の守成、三代の飛躍
によつて其の家の事業は愈々興隆に向つて行くといふ意味である。目下芝
區金杉町に盛大な實業を営んでゐる我が赤羽利助氏は、先代の創業を繼いで
過去三十年の長日月を只管基礎の確立とその隆盛に精勵努力して來た人
である。氏は少時家業見習の側ら私塾に通つて漢學を修め、長ずるに及ん
で實業の實際的研究に没頭した結果、性來慧敏なる才は早くも今後益々經
濟的に複雑化し行く來るべき社會に於て、斯業の如何に有望にして有益義
なるかに思ひ及んだのであつた。果して現在東京府及び市に於てすらも、
市内公益質屋、東京府社會事業協會の名の下に市内及び郡部各所に質業の
經營を開始して居り、更に東京府最近の調査に依れば質屋業數八八三、口
數一、〇〇四、六〇六、金額七、二〇五、五二二圓に達してゐる。この統計に
見ても現代に於て如何に質業が最も簡易なる無産者必須の金融機關である
かといふ事が窺はれるであらう。かくて氏は徒らに私腹を肥すことをせず
衷心社會的事業の立場から鋭意努力し、而も其の懇切にして温情ある措置
は毎に信用を倍加し、益々家業を殷盛に導き、今や資産は數十萬に達して
ゐるといふ。氏將に齡六十路を越へ近く家業殷盛裡に悠々餘生を樂しまん
としてゐるが、嗣子こゝに業を繼げば則ち三代、今後同家の飛躍發展は當
に期して待つべきものがある。氏は又謡曲に堪能にして折々は行人の歩を
停める程の技を演じてゐる。夫人をこゝろ子と云つて内助の功多く、その間
に一男二女あり、數人の店員と共に一家團樂の樂みに浸つてゐる。

向山庄太郎

明治七年三月三日生
京橋區新富町七番地

劇界一方の權威者として藝術の王國に力を盡すと共に他面身を政界に投
じ、府政の參畫者として令名を馳せて居る人向山庄太郎氏は、長野縣上伊
那郡の出身、少時志を立て、東都に出で、興行家として困苦經營數年の後
事業緒に就き、更に一段の努力を盡いで遂に新富座主として知らるゝに至
つた。後之を松竹合名會社に譲るや、聘せられて其の顧問となり、劇界の
爲に盡瘁する所が尠くなかつたが、大正十三年京橋區選出府會議員酒井
泰氏の後を承け推されて府會議員となつた。當時氏が立候補を宣するに際
し全府會議員の連名を以て推薦されたが如き實に斯界に例の尠ない事だ
である。斯くて警務委員稅務委員となり又推されて市部會副議長に當選し、
十三年六月全府會議員の改選に當り、再び府會議員に擧げられ、更に府參
事會員に推薦され、本年又警務委員長となつて府警察界のために其大の努
力を献けて來て居る。氏は人と爲り明敏、事を計つて苟もせずと云ふ風格
で、愛國心の熾烈なる現時に得難き忠貞の士で、近時世道の廢頹を憂ひ武士
道精神の復活に力を注ぎ、或は浪花節により愛國思想の鼓吹に努め、或は昔
つて薩摩の義士平田靱負等の事績を脚色し、府下公私立學校の教職員を招
待して新富座に試演したるが如き、皆奉公の精神の發露に外ならない。眞
に功により藍綬褒賞を賜つて居る。今や帝都の復興に當り、物質的方面は
之を行ふに易く、亦其の人も多いが、精神的方面に至つては稍もすれば輕
視されんとする傾向がある、此の時に當つて氏を府會に有するは實に全府
民のために慶すべき事である。



弓削寅吉

明治十二年一月五日生
浅草區馬道二の一〇
電話 浅草 四七三番

未曾有の大震災に依つて三百年來培はれた帝都の文化は、一朝にして跡形もなく烏有に歸して了つた。それから三ヶ年の歳月が流れてゐる。今や市民は全力を擧げて一路復興へと邁進してゐるが、帝都の復興に當つて最も必要なのは建築材の供給である。現下木材業界に於て其自眉として同業者間に令名を馳せ、而かも熾烈なる自治的觀念の發露は、浅草區馬道二丁目町會長として、卓拔なる手腕を發揮しつゝある人に、弓削寅吉氏が在る。氏は埼玉縣北足立郡大和田村に生れ、夙に雄志を抱き横濱に出でて學業に學び、業終るや直に上京して將來を計畫し、自己の體験其他より推して、先づ父祖以來の木材商を選び、血に燃ゆる青年の身を以つて勇往邁進只管家運の賑興を計るに餘念がなかつた。商略に富み奇才縱横に走るの威ある氏は更に薪炭商を併業して大發展を期したが、その着實にして而かも顧客本位の營業振りは直ちに同業者間に頭角を顯はし兩來年を閉みするに從ひ逐次發展に發展を重ね遂に今日の如き盛業振りを招來するに至つた。而かも眞摯温容なる氏は徒らに奸策を弄してその發展するを望まず、只管社會的使命を奉じて、世に貢獻する處多く殊に震災直後の如き自己を没却して東奔西走一般に寄與する處儘少でなかつた。更に氏は業務の餘暇進んで公共的精神の發露は直接町政に參畫して旋斡奔走の勞を惜しまず馬道二丁目町會創立當初の如き實に寢食を忘れて之に盡瘁したものであつた。宜なる哉氏が町會に長としての要職にあること既に六ヶ年、此間の功績は擧て數ふるに遑なき程である。家庭には夫人かね子との間に五男一女がある。



柴田孫太郎

牛込區五軒町三八番地
電話 牛込 一二五九番

近時澎湃たる世相は徒らに洋傘和卑の幣に陥り、浮華輕佻の風に染み、稍もすれば我が國體の尊嚴を輕んぜんとするの風潮將に隱に急ならんとするの觀がある。寔に建國三千載、宇内無比の我が帝國にとつて如何ばかりか慨かはいし事實であらう。此秋に於て我が國粹たる神道中の一方の雄實行教は我が國體の基に則り深遠なる教理を奉じて國民思想の善導、民心の安定に意を用ひ、外侮める者の濟度に従事して世を益しつゝある。今同教の奉ずる大教理の根本を見るに、即ち天祖三神を主祭とし、賢所を遙拜して皇祖及び皇室の尊嚴を體し、又一方皇國の靈鎮たる富嶽を崇祀して無窮の國體を祈願し、併せ以つて惟神の大道を宣揚することを第一教義とし、更に惟神の義倫を章明すること及び皇國の禮典を修明することを以つて第二教義としてゐる。而して其の主旨としては固有の本教を擴充することに努め、幽顯に貫通し生死を申明して虚文の弊を矯正し、業務を獎勵して獨立の思念を鼓舞し以て相互の親睦、邦家の安寧を企圖してゐる。この純日本の大精神を教義とする實行教に現管長たる柴田孫太郎氏はその至聖なる高德と教理に大悟せる大精神と相俟つて同教々務一切を總理し、大教正以下の教師を統轄して今や同教の護神として多數信者渴仰の的となつてゐる更に氏は現在同教管長として身を以て國體の擁護に任じ、又教導授産の方法を設けて世の公益に資し、更に祈禱、禁厭、神占の諸法及び道義教法を施して幾多世の受難者を救濟しつゝある。是に於て最近教義漸次理解され信者も年と共に數を加へ、着々として發展の域に向ひつゝある。



戸塚九一郎

明治廿四年三月廿日生
本郷區彌生町三番地

東京府地方課長の要職を占め、教育方面に又は勞資協調に深甚な經驗と抱負を持ち幾多の光輝ある歴史を有し、府廳内に於ける中堅人物として名聲汎き人に戸塚九一郎氏がある。氏は坐臥蠶室富士を仰ぎ見る靜岡縣掛川町の出身で幼時より秀才の譽高く、土地の中學校を卒業するや、進んで第一高等學校に入り、更に東京帝國大學獨法科に學び、蠶雪の功成つて大正六年法學士の榮譽を荷ひ校門を去つた。夙に官界生活に志し、香川縣屬に任命されて同地に赴任し、幾何もなくして其の材幹を認められ、破格の拔擢を受けて福島縣安積郡長の要職を得た。如何に氏が有爲の材であるかを知るに足るであらう。かくて名郡長として令名を馳せ後幾何もなくして同縣學務課長に榮轉し、爾來教育の汎く普及されて居る福島縣の最高幹部として大いに敏腕を發揮したものだ。更に數年を閲して兵庫縣の工場課長として轉任することになつたが、才幹卓拔な氏の特異性は益々發揮され、再び同縣に於て絶大の賞讃を博するに至つた。當時は偶々歐洲大戰の後をうけて諸種の工場雨後の筍の如く設立され、監督官廳は爲に忙殺され、更に大正九年以後は再び財界不況に陥り、反動的現象を演出し、工場の閉鎖續々と起り、世相益々多端を告げ、勞資協調の圓滿は焦眉の念となり、氏の如き有爲の材幹は茲に於て特に光彩を放つたものである。後内務當局の認むる所となり、歐米の政情視察を命ぜられ、一ヶ年を閲して歸朝後は、選ばれて東京府に入り、現に地方課長の要職を占めて居る。趣味は各方面に亘つて居るが、殊に運動には素人の域を脱して居ると稱せられて居る。



田中貞

明治二十五年一月廿八日生
麻布區田島町三十七番地
電話 青山 六三二七番

氏の祖父は徳川直參の旗下として、大江戸の都大路を粟毛の馬に跨つてその權勢のほどを謳はれたものである。更に父君は寺島藩の家老として五千石の祿を食んでゐたと云ふ。この祖父を持ち父君を戴いた氏に、武邊者の抱く稜々たる氣魄のあるのは拒むことの出来ない事だ。そして祖父と父君とが武門の道に傑出したのに反し、氏は經濟界平和戦の強者として、いまだ三十五歳の青壯期でありながら、押しも押されぬ確固たる地盤を擁するに至つてゐる。明治二十五年かの日清戦争の前々年に生れた氏は、やがて商業學校に學び、若武者の氣鋭ぶりを以つて直ちに實業界に飛出し遠く滿洲や扱ては朝鮮の仁川に飛躍したのであつた。その内に日本醬油株式會社に招聘せられて歸京し、忙繁な事務の傍ら獨學で經濟、法律學の研究に没頭し、さなきだに明哲な頭腦の啓發を怠らなかつたから、ついに今日の成功の礎石を築くに至つた。一方會社は大に氏の力量を認めて、次第に重席を與へたので氏は何時とはなしに波瀾萬丈を極める財界の游泳術を味得し、目下では歌舞伎座株式會社取締役及びルナパーク株式會社監査役として、強固な地歩を占めることになり、興行界の新人として調歩するやうになつた次第だ。これこそその溢れるやうな才氣と相俟つて、他面茫洋として計り知ることの出来ぬ襟度があるからだと云へる。氏はこの多忙の餘暇には芝増上寺の名僧渡邊海旭師について禪道の修養につとめてゐるとは、この人にしてこれありと云ひたい。趣味としてはカメラを愛し、印畫藝術に親しんでゐる。家庭には夫人との間に一男四女がある。



山崎 文蔵
明治二十三年五月十九日生
東京市道路局下水課勤務

東京市道路局下水課工務係長の要職に在つて、至難な下水工事の完成に日も足らぬ繁忙さを示してゐるが田中寅男氏は、東京市外代々幡町幡ヶ谷の生れである。東京人としては不似合なほど唯辯な人であるが、その中になんとも云へぬチャーミングなところがある。あの三宅雪嶺も、あの大町桂月も唯辯の雄辯を以て對者を魅惑した人であると言ふが、氏はまさにその部類に屬する人物である。それが同地方での門閥家であつただけに、何處となく仲々した餘裕が見え。少しも官能的なところがなく、實にデモクラツトな驚りが高い。急性に喋りまくることを能としがちな東京人には珍らしい人だと云ひたい。沈黙の雄辯とはギリシヤ人の云つた格言ださて氏は府立第四中學校を明治四十一年の春に卒つて、第八高等學校を経て大正六年であつた。翌七月一月には日本電氣工業株式會社技師として入社、この若い工學士さんは總ての蘊蓄を傾けて、敏腕を鳴らしたものである。越えて大正八年には東京市技師に任ぜられて下水課勤務を拜命したのであつた。やがて十四年十二月には抜擢せられて同課工務係長に進み現在に至つてゐる。下水工事たるやその都市の靜脈であつて、最も緊要な施設である。歐米諸國では下水管の中を自動車が出走するほど完全なものにしてゐると聞くが、わが東都も新進氣鋭な氏等の努力によつて完全な下水道の整備する日の早からんことを市民と共に翹望する。

山崎 文蔵
明治八年五月生
本郷區金助町五二番地
電話小石川四三〇六番

時の帝へのお答へに、わが庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る、と聞え上げた風流多感の英雄太田道灌が、千代田城を築いた頃から現在に續いてゐるのはわが山崎文蔵氏の生家であつて、その間實に五百年餘の歲月が流れてゐる。この床しい舊家に生れた氏が、明治三十五年東京藥學校を卒業し藥劑士になつてからは、數代に亘つて續く家業の賣藥業に従事し、父君を扶けてより一層の隆盛を計つた。ところで氏の二十五歳の時に爵父が鬼籍の人になつたので、氏は家督を相続して今日に至つてゐる。町の店舗の販賣に係る賣藥中、蒼龍丸は小兒の蟲おさへとして非常に有効であり、更に活壽園は下痢止めの妙藥として、全國的にその効能をみとめられ、如何なる邊陲な片田舎の賣藥店にも見出すことが出来るだろう。其他販賣の十六種は廣い販路を有して大歡迎を受けてゐる。目下は二工場を有して製藥に大奮と云ふ有様であり、店員ばかりでも十七名餘も使用してゐること。その繁榮ぶりを想像し得られるだろう。この多忙な家業の持主であるにも拘らず、氏は常に公共團體のために大馬の勞を惜むことなく、居住地である金助町では町會副會長として、町民自治のために眞摯な指導の任に就き、さては五十二地區々對整理委員としては大東京建設のために不斷の寄與を拂つて倦むところがないので榮望は愈々加はるばかりである。かくて昨十四年本郷區々會議員改選に推されて立候補し、見事に當選して、今は區政のため穩健な正論を吐き、區民のために盡力してゐる。趣味としてハズ生流謠曲の隠し藝がある。

中島 守利
明治十年十月生
府下新宿町三四〇四番地
電話銀座八五〇番(政友本部内)

曾つて青年實業家として斯界に鬼才を譁はれ、轉じて政界に投ずれば、其の一舉手一投足は悉く中央政界に波紋を描き、雄黨政友會の中心勢力として威望益々高きを加へて居る人に我が中島守利氏がある。氏は南葛郡新宿町に素封家中島藤左衛門氏の嫡男として生れ、年齒僅か十九歳で北越木材株式會社を創立し、専務取締役に擧げられた一事は、其の家世々戸長或は町長として里卒の地位にあつた父祖の餘威が力を添へて居るとは云へ氏が弱年早くも傑出した天資を惠まれて居たことを物語るものである。明治二十五年家督を繼いだ氏は、久しく同地郵便局長として在職し、前記會社の重役たるの外、明治四十三年株式會社興國銀行及び都銀行の各取締役にも推され、後又相互火災保險會社を創設して本邦に於ける斯界の鼻祖として卓越せる企業的創意力を示して斯界を驚倒せしめたものである。斯くて其の事業企畫事々に意に副ひ、益々隆盛を來して行つたが、氏の勵志は到底事業界に満足し得べくもなかつた。そこで多年培つた地盤を基礎として逐鹿場裡に臨みて代議士となり、爾來中央政界に馳驅して、代表的選良の名を恣にするに至つた。之より先き三十四年新宿町長に擧げられ、郡會府會町會各議員、其の他あらゆる名譽職公職に推されて盡瘁し、警視廳防疫評議員として東京市の防疫に至大の貢獻をなして居る。現在新宿郵便局長、同町長、東京府會議員、參事會員、府教育會議員、農會議員等の公職に就いて居る。豪宕不羈、俠氣に富み、その謂々の雄辯と共に令名を馳せてゐる。夫人幸子との間に敏子、壽々子、利一等がある。



岩橋 元亮
明治二十六年七月二十日生
市外大井町二九二〇

近代文明は都市集中の文明であつて、その基調をなす集團生活の衛生は特に爲政當局の考慮を要する重大問題でなければならぬ。この際東京市保健局清掃課に在つて塵芥掃除並に汚水の處分に合理的な方法を講じ、市民の衛生に遺憾なからしめてゐる人にわが岩橋元亮氏がある。氏は山紫水明の舊都を故郷とし、幼時より俊敏の聞えあり、京都府立第一中學校、第三高等學校を経て京都帝國大學工學部工業化學科に學び日夜研鑽に身を委ね、大正七年登雪の功空しからず校門を辭し、登龍宿志の第一歩として、職を大阪市に奉じて技師となり、爾來數年同市化學工業界の進展に資するところあり、功績の大に見るべきものがあつた。後大正十二年十二月、震災直後の東京市に職を奉じ、保健局清掃課技師に任命された復興の帝都に緊急を要する衛生施設の完備に努め、焦土の中を東西に奔走して部下を督勵し、難關に直面しては時宜を得たる處置をとり、その解決に努め斯界に手腕力量の卓拔せるを認められ噴々たる令名があつた。今後東京市は益々人口増加し、塵芥汚水の排出量は日に日に激増し、現今の設備では到底之を完全に處理することが出来ないで、市當局は鋭意之が改善を試みんとしてゐる。此の時に當り該博なる學殖と經驗を有せる氏がこの施設の任に在る。成果の程は期して待つべきであらう。氏は尙特許辯理士の資格を有し、此方面にも豊富なる蘊蓄と造詣を見せてゐる。何時も變らぬ温顔と明るい態度とは、温厚にして着實なる氏の人格を表徴せるかの如き感がある。少壯有爲なる氏の前途は實に輝々たるものがあらう。

別役増吉

明治十三年四月生
麴町區平河町一〇番地
電話 四谷 二六六四番

東京市會議員中一方の重鎮として常に堂々の陣を張り獅子吼克敵を壓服せしめ識見手腕兼備の人に別役増吉氏がある。氏は渺茫たる太平洋に面する南海高知縣長岡郡長岡村をその郷土として居るが、夙に鋭才の譽高く巷間の兒童と其の類を異にし將來成すあるの人物と目されて居たが、土地の小學校を卒業するや先づ教育界に身を立てんとし郷里なる師範學校に入り數年の精勵空しからず學成りて校門を去るや、青年志を立つべきの地は中央なりとし茲に決する所あり直ちに上京して、府下大井町小學校に教鞭を執ることになった。而かも氏の圓滿なる人格と卓越せる手腕はよく兒童養成の任を果し各方面渴仰の的となつたが、後、偶々郡長町長等の越權極まる壓迫に際し、奮然立つて之に反對した爲、遂に用ひられず致に於て、氏は教育界の腐敗を歎き潔く身を退かんとし、爾來教育界より去るに至つたのである。教育界を棄てた氏は自己將來の進路を更に法曹界政治界となし、改めて明治大學法科に入り、専心法律の研究に没頭し之が蘊奥を究めて卒業するや直ちに判檢事辯護士試験に應じ見事に合格することを得て、大正四年平河町に居をとし辯護士を開業するに至つたのである。爾來氏は繁雜なる事務の餘暇公共方面に不斷の健闘を續け寄與する所極めて多く公民會理事として三期を勤めた程である。果して此の効は空しからず區民敬慕の的となり、推されて區會議員に當選し更に今又市會議員に立候補するや數ある候補者中嶄然頭角を表はし最高點で當選する等氏が如何に人格者で信望の厚きかを窺ふことが出来る。

森田信吉

明治二十二年三月五日生
府下日暮里谷中本一四五番地

氏は雪と米とで名高い新潟縣岩船郡村上本町の出生であつて舊村上藩士森田榮次郎氏の三男である。幼にして學を好み、後村上中學校に入つて切磋琢磨の功を積み、同校を優等の成績を以つて卒業するや、明治四十二年新潟地方裁判所書記に任命され、大正三年新潟縣稅務所に勤務したが、好學の念壓ゆるに由なく、遂に上京して明治大學法科專門部に入り生活の資を得つゝ通學して苦學力行を續け大正八年學費の功空しからず優秀なる成績を以つて同校を卒業するや翌年職を群馬縣中三條稅務署に奉じて間稅課長となり大にその才腕を發揮して名稅務官の名を擅にしてゐた。大正十一年品川稅務署庶務課長を経て、更に翌年既橋稅務署庶務課長に累進したが後稅務署を辭し、大正十三年五月書記として職を深川區役所に奉ずることになった。以來天稟の才能を發揮して大に努め遂に大正十五年六月拔擢せられて稅務掛長に榮進するに至つた。山來深川の地は、いろ／＼の事情で公共事業の施設には最も悩まされてゐるが中にも比較的第四階級の住宅多く動もすれば國民の三大義務の一たる、納稅の何たるかを解しない者がある爲氏は大に之を憂ひ、或は冊子或は言論によつて熱心に之が普及を計つたものであつた。最初は全然受けつけられず、殆ど策の施すなきに苦む程であつたが、氏は毫も之に屈する色なく銳意これが普及と實施をはかつたので遂に氏の意あるところ認められ漸次成績良好となるに至つたとは氏の美はしい努力の賜である。年齢而立に達せず前途に幾多の春秋を有する氏の將來の活躍こそ見るべきものがあらう。家庭には夫人と二男一女あり。

坪野房治

明治十四年四年生
日本橋區室町一ノ一
電話 大手 三三七七番



曾て白瀬中尉南極探險隊の門出を祝ふ盛大なる送別會が日比谷公園に催された時のことであつた。垢面蓬髮の一青年が突如壇上に立つて、この記念すべき送別會場に國務大臣、市長の臨席を見ないとは何事ぞと慷慨悲憤の演説を始めた。その一語は一語より熱し、聲涙共に下る慨があつて、並びある聴衆を感動をせしめ、幹事長佐々木安五郎氏も感激措く能はずして固い握手を交はした。この青年こそ誰あらう。市會壇上に起つて誇々の論を吐き、市政の刷新に努力してゐる坪野房治その人である。氏は生粹の江戸ツ子で、都文館中學を卒業して後魚河岸に鮮魚問屋を開業した。その卓越せる識見と仁俠的な氣質は衆望を得、次第に魚河岸に勢力を持つに至つた。魚河岸に纏はる同市場移轉の問題は、理に於て當然のことであつたが、組合員の多くは三百年來の土地を放るるを好まず、移轉説に猛烈な反對の氣勢を擧げたが、氏は時代の趨勢と百年の長計とを慮つて敢然として移轉斷行を圖り、高木益太郎、角田眞平の諸氏を向ふに廻はして堂々の論陣を張つた。かくて大正十二年の秋の大震災と共に、魚市場は氏等獻身的な奔走によつて遂に現在の地に移轉することになったのである。かくて本年初夏市會の改選行はるゝや、氏多年の宿志たる中央卸賣市場を實現すべく、態々日本橋區會議員を辭し、裸一貫で京橋區から立候補して敵の本壘に肉迫し、大多數を以て當選の榮を擔ひ満都の血を湧かしたものだ。先に歐米を漫遊し市政に對しても造詣深く、太つ腹で何處迄も意氣を以て押し通さうとする江戸ツ兒氣分を多分に恵まれた明るい性格の持主である。

長谷川幸之助

明治十四年八月八日生
府下代々幡町幡ヶ谷八五〇

氏は上州利根郡薄根村宇下沼田の出身である。上州長脇差と云つて昔から任侠な男伊達で聞えて居る丈に、此の地の人は血の氣の多い男性美を多分に備へて居る。氏が土木方面に向つて將來の發展を期したのも、其の間にかうした土地の氣風が働いて居る様に現はれる。郷費を終へて當時の群馬縣立尋常中學の三年級を明治三十一年三月に卒業して後、上京して攻玉舎高等工業の土木科に學んで三十四年二月優秀なる成績を以て卒業するや其の三月東京市の雇員として土木課に勤務した。かくてより以來、三十七年技手に進み、四十三年一時職を退いたが、其の五月再び採用されて市の水力事業地に在勤し、大正二年十二月轉じて水道擴張事務所工務課に勤務更には大正三年臨時水道擴張課に在つて工事の進捗に與る所が多かつた。かくて大正十年六月技師となり、翌十一年十一月工務掛長に擧げられたのである。後水道局擴張工事課第二工務掛長に擧げられ、轉じて道路局第二道路課に勤務して都市計畫に伴ふ新設道路の設計及び工事に力を注ぎ、同年五月同課の工務掛長となり、八月には轉じて第二出張所長となり、昨十四年十一月第三出張所長となつて現在に及んで居る。この第二道路課は主として新設道路の計畫を管掌してをり、新に生れ出づる大東京の將來の運命を決するものとも云ふべき重大な職務を有するのであるから、此の局の一方のかためとなつて居るの苦心も際するに餘りあると共に、又其手腕を發揮するに恰好の位置である。信義に於て、忠直に於て智識に於て愛情に於て、最も尊むべく親しむべき人である。

植村永之助

安政五年十月五日生
本郷區湯島三組町二〇

本郷湯島の高臺に在つて、温厚謹嚴なる人格と中庸を得たる温健なる識見とを以つてよく町會の指導に當り、隣保共榮の實と自治の進展とに不斷の努力を惜まない人に植村永之助氏がある。氏は千葉縣長生郡の人であつて植村多門氏の長男として生を享けてゐる。十四歳の折上京して本所緑町の叔父の許に寄寓し、立川塾に入つて漢學の素養に勉むるところがあつた、後淺草田原町の小林質店に入り、精勤精勵大に主家の爲に忠勤を抽んで、誠實の資性は主家よりその將來を囑望せられてゐた。二十二歳の折年期を終えて本郷湯島三組町に實業を營み、後明治十四年現在の地へ居を移したのであつた。その客に對する丁寧懇切なる態度は顧客の好感を受け、簡便なる金融機關として年と共に繁榮を來たし、家運隆盛に赴き今日の發展を見るに至つてゐる。かくて氏は業務の傍公共事業に寄與する處極めて多く、而かも東京市制施行と同時に區會議員に選出せられ、以來前後五期二十有餘年間其職にあつて本郷區政に參與し、教育の振興、財政の釐革、衛生施設の改善を圖る等其功績は擧げて數ふべからざるものがある。氏は又町會創立にも力を注ぎ、成立後之が幹事長として牛耳を執り、町民の共榮福祉に寄與する處が尠くない。此外學務委員、本郷小學校後援會幹事長、府社湯島天神氏子總代、所得税調査委員、國勢調査委員、本郷區實商正副組合長等の公職に歴任し、別に本郷小學校後援會顧問、三十地區々劃整理委員等の公職に精進し、鏗鏘として壯者を凌ぐものがある、氏の如きは眞に自治の長老として崇敬するに足る。家庭には二男三女がある。

酒井安治郎

明治五年五月五日生
千駄ヶ谷町北田八五三
電話 四谷 一八九

醫を仁術として最もよく生かしたチエホフは、只世界的大文豪としてのみ一般の人に知られてゐる。森鷗外氏もその一人であつた。これ等は醫師と云ふ職業が、その觀察眼をして直接人生の廣い面に觸れしめ、その底蘊も深く到達せしめ得る多くの機會を持つてゐるからである。だがこれは藝術にのみ必要の事ではなく、社會公共事業、殊に救濟事業には、醫師と云ふ職業が活動し得べき最も多くの必須條件を持つてゐる。現に千駄ヶ谷共和會長として、社會公共の爲に盡瘁してゐる酒井安治郎氏も亦其一人である。氏は長野縣上水内郡水内村に生れ、明治三十一年大志を抱いて上京し、先づ職を四谷區役所に得て書記收税係となつた。在職一年、この間専ら苦學をなし、後千駄ヶ谷藤原小學校の教員となるに及んで醫師たらん事を志し、餘暇を以て濟生學舎に通學し、當時の郡視學をして驚嘆せしむる程の勉學を積み、遂に開業醫前期試験に合格した。そこで十三年に渡る教員生活を止め、日本醫學校に入り専心醫學を研究し、大正二年五月開業免狀を下附さるゝや、直ちに現地に内科小兒科を専門とする醫業を開業し、「醫は仁術なり」の箴言を精神として醫療に當つた。かくて醫業の漸次隆盛に赴くや、氏は更に社會公共事業に志し、大正十一年六月代々木舊道維持期成同盟會幹事長となるに及んでその急先鋒としてこれが維持の運動を起し、遂にその目的を貫徹した。又大正八年よりは引續き共和會長として町の發展自治公共の爲に盡してゐるが、社會人生の奥底に通じてゐる氏の措置は、要を得たるものとしていつも衆人に畏敬されてゐる。

水野博徳

明治十二年生
芝區南佐久間町一丁目三番地
電話 青山 六九六三番

破邪顯正に憂き身を盡し、道に携つて茲に二十有五年の月日を數へて、東京辯護士界の重鎮を以つて目されて居る、水野博徳氏は、長い間に互つて芝の自治政を守り育てて來た乳人である。氏は早い東京法學院出で、出身地は東京である。夙に伶俐な資質を惠まれて、學窓時代は遠く先輩を凌ぐ好成绩を見せ、三十二年卒業して直ちに辯護士試験をパスし、門戸を張つたのは三十五年もあはたしい師走の頃だつたが、天成の法理的頭腦を以つて該博な學殖を傾くる所、理路亦整然として人を首肯せしむるものが多い、加へて熱心と仁侠の兩徳を併せ備へて懇切に事件を處理して行くあたり、日一日と運ぶ事件も繁く、遂に翕然たる信望を斯界に博するに至つた。爾來大小無數の法律事件を解決して來たが、如何なる難件も其の破邪の劍にふれては裁然として所理されて居る。而も裡に凜乎たる氣魄を擲んで居ながら、外には更に圭角なく、温顔懇々として圓滑洒脫な外交振りに、接する人をして胎蕩たる感と與へずには置かない。其愛市愛町の熱誠をあらはして芝區政のためには早くから礎石となつて奉仕し、長日月に互つて區會議員其の他の役員に推薦され、目下も區會議員として不偏不黨の公正な態度を以つて誠意職分を盡してゐる。皎潔至醇な而も義に生くる性格は、其の過去の公私生活が明かに語つて居る。氏はかうした一方に實業界にも相當地盤をもち、夙に驥足を展べて原町紡績會社に取締役たるの外、古川工業、大正鑛林、稻山銀行等に法律顧問となり、日、鋼鐵會社法定清算人に擧げられて居る。多年の功勞に依つて正八位勳六等に叙せられて居る。

赤堀寛英

明治十五年六月十五日生
赤坂區青山南町二ノ十六番地
電話 青山 一〇六六番



青山墓地の關門を扼して殷盛を極めてゐる一大葬儀屋がある。これぞ我が赤堀寛英氏の經營に掛るものであつて、實に斯界の巨頭と迄言はれてゐるのである。氏は岐阜縣の出身で、初め實業界に志して郷里を後に大阪に出で、某問屋に入つたが中途意を翻し一東上し、伯父なる大藏省官吏の許に寄寓し英語學校に通學し、傍ら漢學塾に學び大いに修學に力め、後大久保百人町に在つて同町の公共發展の爲に盡したと聞く。當時氏は葬禮の餘りに舊習に失し、文化的街路を舊套の禮式に則つて淡葬する事は文化の上から見ても又交通の上から云つても非文明極まるを慨し、自動車に依つて送葬するの便なるに留意し、現在地を以つて此處に葬儀屋を創始し、儀禮を失せざる裝飾を施したる靈柩自動車を以つて、簡易にして而も迅速、虚禮廢止冗費節減の實を擧げ、其の効用は忽ち認められ、日を追ふて隆盛を極め、又同業者もその有利なるを知つて此れに習ふもの多く、遂に今日の如く總て自動車の使用を見る様になつた。氏は實にこれが始祖であるばかりでなく、同業者の共同的伸展を計り、葬祭組合副會長として盡瘁してゐる又區内の有力者として自治公共にも貢獻する所多く、幾多の公職に擧げられ、殊に區會議員としての氏の働き振りは素晴らしいものであつた。氏は資性温厚にして敬神崇祖の念厚く、方今この思想年と共に地に落ちつゝあるを憂ひ、同業間には勿論其の他の者に對しても機會ある毎に此れが普及に力めてゐると聞く。誠に現世に氣骨ある人士として推稱すべきを思はしむるのである。

青木春一

明治二十年三月生
麻布區廣尾町七番地
電話 高輪 五七〇四番



櫻井久次郎

明治七年二月十一日生
芝區松本町九番地
電話 高輪 三六三九番

わが青木春好氏は長野縣松本市外綿部村に生をうけてゐる。由來松本の地は、南信の中樞をなし、後に峨々たる日本アルプスの秀峰を負ひ、前に肥沃なる松本平をひかえてゐて、風光明媚の地である。幼時より此地に育つた氏の希望の高遠にして性情の清麗なるはこの山水の秀氣に負ふ所が多い幼時より學を好み、郷土にあつて、同朋間に特に認められてゐた。中等教育を郷土に卒ひ、笈を負ふて東都に出で、日本大學法科に入學し、法律學を専攻した。郷土の秀才又東京にあつて益々その才をあらはし、常に優秀なる成績を収めてゐた。明治三十三年學雪の功空しからず、首尾よく同大學を卒業し、翌明治四十四年十一月東京府屬を拜命した。主として町村監督事務を擔當してあらゆる町村の行政に通曉するに至りて各町村長から推服されてゐた。惟ふに氏の公平無私なる執務と同轉滑脱なる應待とが與つて力あつたと思はれる。又府廳内にあつては、濃厚篤實なるため上下の信頼を受け、名事務官として令名噴々たるものがあつた。府廳にあること十有餘年、大正十二年八月時に拔擢されて、東京市南葛飾郡長に任命された。温厚にして才幹ある氏を迎へた郡は幸であつたと云はなければならぬ。爲に那政の成績頓に上つた。大正十五年五月郡制廢止とともに、野に下り今はその逸才を巷間に養つてゐるが、春秋なほ豊なる氏は必ずや近く飛躍の地に出づるであらうと期待されてゐる。家庭に美代子夫人あり、淑徳貞節、家門の譽いよいよ上り、氏の今日あるは又夫人の内助の功あつたためだといふ。氏又趣味の人で謠曲を愛好してゐる。

現今の社會状態を按ずるに、貧富の懸隔益々隔り、貧者は墮落に餓死するを待つより仕方がない。この時にあたつて、社會救濟事業は當面の急務である。東京市がその第一着手として、企圖した方面委員の制度は流石にその機宜に逸した措置として寔に賞讃に値するものがある。その委員を囑托されたる各方面の有志は何れも犠牲的精神に燃ゆる職務に忠實な人ばかりであるが、就中終始一貫よく社會に奉仕し、管内の福利民福の實績を擧げてゐる人に、芝區松本町の櫻井久次郎氏がある。氏の祖先是代々現在の地に居住し、氏はその四代目で、生粹の江戸つ子である。家の業は酒、食料品、薪炭商を商ひ町内屈指の老舗である。その營業方針は堅實と忠實を以つて終始し、附近有数の地位にある。氏は事に當つて、眞摯、實行力に富む。氏業を父祖より承け、刻苦勉勵爲に家運益々振興す。氏又町會の役員の一として、各要務の擔當司掌に任じ、嘗つては松本町有志會を組織し冠婚葬祭等の吉凶の際に相互の利便を思ひ相寄り相資け共存の實を擧げんことを劃て、その寄與貢獻は大なるものであつた。更らに近時市内の青少年團の趨勢を察し教導養育の意味に於て實實剛健の風を鼓舞し、去華就實を擧げんことを慮り、青年團組織の要を説き、自ら進んで指導督勵し、時に應じて私財を投じ之が基本の設立に盡力した。その苦心は云ふに餘りあり、後東京聯合青年團に加入の後も引續き盡力せり。實に氏の如きは方面委員として最適任者と近隣の推賞措く與はざるものである。夫人いと子との間に子女二人あり。家族和合して又近隣の羨むところである。

寺部耕助

明治二十二年九月二十六日生
東京市淺草區聖天町二五

永田信一

明治十七年三月一日生
府下西巢鴨九〇三
電話小石川一〇七五番

千葉縣長生郡白濁村中里は、氏の懐かしい播磨の地である。家は世々育英を業とし、母堂かの子刀自は、夙に女流教育家として知られてゐるが、その學校經營に對する奮闘と努力には、實に涙ぐましい程で、創立以來一萬有餘の人々を社會に送り出してゐるのに徴しても、苦心の程が窺はれる。現在淺草田中町なる私立寺部小學寺部商業實務學校は、即ちそれである。愆うした聰明な母堂の膝下に人となつた氏は、夙に學序を追ふて日本大學に入學して法律學の蘊奥を究め、更に進んで日本大學高等師範部に入り、大正二年拔群の成績を以て卒業するや、直に私立寺部小學校々長となり、名校長の名を擅にしたものだ。然るに大正九年幡然として悟る處あり、將來己が進路の官界に開けつゝあるを見て教育界を去り、東京市事務員として田地課に勤務したのであつた。而かも從横なる氏の才腕は、無限に蘊蓄せる學識と相俟つて次第に眞價を發揮し、大正十年五月には擧げられて河港課へ勤務することになつた。後大正十一年市吏員講習所事務所第二部に入學し、業終るや大正十三年四月地理課に榮轉したが、後幾何もなく擧げられて庶務掛長となるに至つた。かく進級に進級を重ねて來た氏は、翌十四年七月に現職たる地理課管理掛長の要職に就き、精勵今日に及んでゐる。尙ほ氏は曩に公用地理課管理掛長の要職に就き、精勵今日に及んでゐる。特別手當金を受けた事は、氏を語る上に見遇すべからざる功績の一つである。氏人となり謹嚴、人格高潔、而かも柔道擊劍を能くする處其實實剛健の風想ふべしである。

なべて人生の事業は乘るか反るかかの投機ではない。その成功は眞摯なる奮闘家のみ附與さるゝ榮ある桂冠である。過去半生の歴史を血と膏で滲ませ赤手空拳よく今日の大成を致した我が永田信一の如きは、當に現代青年に活教訓を垂るべき立志傳中の人である。氏は愛知縣西加茂郡舉母村をその懐かしき播磨の地となし幼にして既に吞牛の慨あり、僅か八歳にして單身上京し、各所に忍苦の勞を惜しまざること十有餘年、遂に三十七年十一月牛込區喜久井町に獨力メリヤス機械工場を經營、こゝに多年の宿志を實現すべくその第一歩を踏みしめたのであつた。當時氏の得意や將に想ふべしである。後幾何もなく本所區松井町に工場を移轉し、社業日々に隆昌を來して俄かに發展を遂げ、四十三年滿鮮地方視察の後、越へて四十五年遂に現在地に宏大な工場を新築するに至つた。爾來破竹の勢ひを以て進展し現在の繁盛を示してゐる。その間に於ける氏の隱忍苦闘は、到底筆舌に盡し難いものがあつた。されど小成に安んぜざる氏は、廣く智識を世界に求むべく大正三年四月遠く歐米各地の商工業視察に鹿島立つた。時恰かも世界大動亂の勃發するや、千載の好期逸すべからずとなし資本を倍加し工場を擴張して巨利を收め、同七年十一月には組織を變更して株式會社に改め、専務取締役に就任した。翌八年六月東京府の囑託を受けて工場視察の爲め米國に再遊し大いに眼界を廣めた。現在右の外東亞實業を始め各會社組合に關係を有し就中今日まで居町自治の爲めに貢獻せる所甚大にして天性高潔なる人格は居町民渴仰の的となつてゐる。

馬場 照 義

明治十六年九月二十六日生
府下駒澤上馬引澤七八六

加瀬 喜 衛

明治七年八月七日生
東京市赤坂區青山南町四の二十
電話 青山 一九二二番

秩父連山を背景に、縹緲として涯しない關東平野に臨んだ西武蔵野の五日市は東京府の小資本貸付掛として令名ある馬場照義氏の懐しい搖籃の地である。武士氣質の極めて嚴格な家庭に人となつた氏は、夙に漢學及數學を専攻して秀才の名を擅にしてゐたが、將來自己の進むべき途を官海に求め、職を東京府農商課の統計係に奉じたのは明治四十一年で、氏が公的生涯の第一頁は茲に開かれたのである。生來係數に明るいものと、責任觀念の強いのが幸ひし同四十四年には庶務課の議事係に進み、後更に地方係に轉じて町村の行政事務に執掌し、行く處として可ならざるなき其八面玲瓏たる才能を揮ひ、到る處に幾多の功績を残した。大正五年更に救済課に轉じ、爾來多年の蘊蓄を傾けて社會救済事業に精勵し、之が改善と發達に資する處が極めて多かつた。後職制改革と共に救済課が社會課と改められてからも、専ら精勤を抽でてゐたが大正十三年遂に拔擢せられて社會課小資本貸付係となり、精勵今日に及んでゐる。氏が東京府に職を奉じて以來年を開すること二十星霜、其間氏は些の取柄もなく常に終始一貫事務に精進して毫も倦む處を知らない。動々もすれば輕薄に流れ易い現社會に於て蓋し氏の如きは現代青年の範とするに足るものがある。趣味は性格の反映で、それによつて赤裸々なる性格の姿を見出すことが出来る。氏が園藝を好愛する外文藝や俳句に興味を有するに見ても、玉の如き人格と愛情の持主たるを知ることが出来るやう。夫人をあき子と云ひ、其間に二女あり。都座をはなれた郊外に團樂の家庭を營んでゐる。

卓越せる識見と高邁なる理想とを有する加瀬喜衛氏が、永の年月我が自治政の上に齎したる功績は、洵に推稱に値ひするものがある。蜿々として連る大利根の河口、太平洋の怒濤岩を嚙む犬吠岬の突端、銚子町在高町は氏の懐しい搖籃の地である。夙に郷費を終るや、前途に輝く希望を抱いて上京し、日本中學の前身たる英語學校に學び大に螢雪の功を積んだ。卒業後日本大學の商科に入学し、燃ゆるが如き學究心を以て日夜研鑽を續けたが、不幸にして突如嚴父の訃に接し、遂に中途にして退學するの餘儀なきに至つた。かくて氏は故山に悠游して只管英氣を養つてゐたが、其高潔なる人格と高邁なる識見とは、忽ち郷黨の認むる處となり、明治三十七年衆望の歸する處推されて高神村の助役となり、更に同四十年村長に擧げらるゝに至つた。當時氏が餘僅かに三十有四歳に過ぎなかつたのに見ても其の如何に傑出せるかを窺ひ知ることが出来る。而かも就任中日露戰役の功に依り、白色銅葉草を又地方農事改良の故を以て大日本農會々長、伏見宮殿下より賞状を授與せられ、名村長の榮譽を擅にしたものだ。氏は又郡制發布以來、引續き郡會議員に累選せられ更に大正四年には千葉縣々會議員に當選して縣政の樞機に參畫する等其功績は擧げて數ふべからざるものがある。此外氏は大正通信社の創立者でもあり、日本醫專の學生監でもあつた。現に區公選の學校委員たるの外町會の理事長を兼ね、旅館青山館の經營者として重きをなしてゐる。資性潤達、正義人道を愛する高德の士で、勞働問題及自治問題等に頗る造詣が深い。

江 森 猶 市

明治十年八月十五日生
牛込區市ヶ谷二ノ十二

横 溝 良 三

明治二十三年十二月五日生
荏原郡池上町市之倉三〇二

富貴に生れ榮華に過す人の棺を蓋へばたゞ夏草の夢のあとのみ渺なまれば。逆境に育ち貧しい恵みの中にあつて忠實に己が運命を開拓して行く人には常に榮ある生涯と眞に貴い價値とが拂はれてゐる。見よその過去に血と膏で綴られた歴史を有する我が東京府道路課主事江森猶市氏こそは當に現代青年にとつての活教訓である。氏は長野縣東筑摩郡日向村の一農家に生れたが、家計が不如意の爲め郷費を出ると家業に従事すべく餘儀なくせられた。されど天性聰悟にして燃ゆるが如き雄圖を抱く氏は業余讀書を怠らず獨學を以て法律學を研究し、遂に明治三十六年長野縣土木課に勤務することとなつた。同廳に止まること三年天稟の才能を縦横に發揮して偉大なる功績を樹て遂に三十九年拔擢せられて内務省土木事務刷新の榮轉するに至つた。爾來十有六年益々才腕を磨いて本省土木事務刷新の上に蔽ふべからざる貢獻をいたした。後東京府土木課に轉じ大正十年高等官に昇進して道路課主事に任ぜられ精勵今日に及んでゐる。目下道路係の外市郡連絡調査委員に擧げられ多年の蘊蓄と尊い經驗とを傾注し事務進行の上に鮮かな手腕を見せてゐる。官界に身を投じて二十有五年致々として今日の地位を築くに至つたのは固より氏の天稟によるとは云へ、現代稀に見る立志傳中の人と云ふべきであらう。天真流露いさゝかの輕薄なく人に接して圓轉滑脱、常に光風霽月の襟度を有し特に部下に對する愛撫の念強く爲めに氏の部下は感激を以て事務に精進してゐる。氏は園藝演藝に興味を有し家庭には才色兼備のかね子夫人があるが、未だ子寶のないのがうら淋しい。

大衆を指導し教化し之を説服せんとするに當つて一にも態度、二にも態度と叫んだギリシヤの雄辯家デモステネスの言葉は、實に千古不滅の至言である。此態度を以て子弟の教養と教員の善導に精進しつゝある人に我が東京府視學横溝良三氏がある。氏は府下荏原郡池上町惣兵衛氏の次男に生れ家は代々名主を勤め土地の名門として知られてゐた。幼にして穎悟、夙に教育家たらんと志し、明治四十五年優秀なる成績を以て青山師範學校を卒業し、直ちに府下の小學校に教鞭を執り専ら育英の任に當つたが、教育が一國の隆替に關する大なる者有るに想到するや、翻然として日本大學に螢雪の功を積み、大正六年拔擢の成績を齎して卒業した。かくて若き篤學の氏は再び教壇の人となり、大森第一、第二小學校に歴任して天賦の才能を發揮し名校長の名を擅にしたが、大正九年遂に拔擢せられて南足立郡の視學となり、更に豊多摩郡視學を経て、大正十五年東京府視學に榮進した。爾來豐富なる學殖と尊い經驗とを以て教育界の刷新を圖り、或は教育の指導に、或は校舎の復興に力める等其功績は寔に擧げて數ふべからざるものがある。氏資性潤達、光風霽月の襟度を有し、人を容るゝの寛大さは氏に接する者の齊しく稱讃して措かざる處である。氏前途尙ほ春秋に富む將來の發展は期して待つべきものがあるであらう。氏は性來智識慾が旺盛で讀書を唯一の娛樂となし、孤繁に對して夜を徹することも度々あると云ふ。夫人を千代子と云ひ貞淑の譽高く、二人の間に二男一女あり常に和氣を以て滿されてゐる。

下松桂馬

明治廿一年四月廿一日生
府下代々幡町笹塚一三三

府民と最も關係の深い社會課に、涙あり、情あり、而して理性を失せぬ人である處の我が下松桂馬氏を有することは、我等の大きな誇りである。氏は町人論吉を生んだ九州大分縣の産、生を下松定吉氏の三男として享けた。家は代々耕耘を業としてゐたが、明治四十三年の春、山口縣鴻城中學を卒業すると共に籍を大分縣立師範學校の二部に置き、他日育英界に飛躍すべく日夜研鑽を續けたのであつた。かくて明治四十五年、螢雪の功なるに及んで大分縣下の某小學校に教鞭をとり、全精力を傾注して専ら兒童の教育に最善の努力を拂つた。大正二年の六月大分縣第七十二聯隊に入り退營と共に又元の教壇に立ち歸つたが、若い胸に煮えたる青春の血潮と、燃える様な青雲の志は、斯かる邊境にくちることゝ意氣地なく思はしめた。蓬頭弊衣の身を忘れて育英に一生を捧げたベスタロッツも、射倅心に魅せられた氏にとつてはたゞ路傍の人の様には見えなかつた。遂に氏は義務年限の了るをまつて笈を負ひ、弦を離れた弓矢の様に一途上京して都の西北早稻田學園に學んだ。かくて大正九年、優秀なる成績を治めて早大社會學科を卒へ、直ちに東京府に招聘されて社會課調査係に勤務した。爾來蘊蓄を傾けて從横に才能を揮ひ、繁雜なる事務をも處理裁斷して寸毫も誤まる處なく、名聲噴々たるものがある。尙ほ、温厚仁慈の好紳士であつて、儕輩にも敬重されてゐる。氏は多趣味なうちに特に圍碁、文藝を愛好し、眞と水菓子氏の大好物であると、ミツ子夫人は大分高女出身で才色兼備の佳人、子實はないが贅々たる和氣に包まれた圓滿な家庭を營んでゐる。

清田政

慶應二年十月二十五日生
神田區鍛冶町二〇番地
電話 大手 四六一四番

恐怖すべき幾多の細菌と生活を終始して、常に人類の爲め社會の爲めに研究を續けた篤學者に前東京市衛生試驗所技師清田政氏がある。氏は中國廣島縣の人夙に刀圭界に志し、明治二十四年未だ吾が醫學界蒙昧の期に於て、早くも細菌學を専攻し、東京顯微學院を卒業すると共に尙細菌生活の狀態を研究し、二十九年警視廳細菌室に執務して都市の根本政策を樹て、三十三年検査委員次いで検査官となつた。而して三十四年突如帝大校内にベスト有菌鼠を發見するや、二百万市民の警愕その極に達し當局の狼狽突止の極であつたが、氏は獨り職に殉ずるの意を決し本郷區一帯の防疫に狂奔すると共に、無慮二十万頭の鼠を検査し、遂に防疫の使命を果した。續いて三十六年氏はベスト検査係となつた。三十八年深川區に於てベスト菌を發見した氏は、晝夜兼行の努力を以て鼠の検査を行ひ、その數實に二百万頭を算し斯界の人をして驚嘆せしめたといふ。以て氏が如何に精力絶倫謹勉實直の士であつたかを想到するに足るものがある。之れより先氏は三年招聘されて東京市衛生試驗所の技師となり、ベスト菌研究者として異彩を放つに至つた。昭和二年三月退職後は専ら強力營養品製造に努力し多年の蘊蓄を傾倒してゐる。尙、區劃整理委員の公職に推されて、尤も困難とせられる第八地區に於て熱誠を以て區民の爲め盡力して、其の人格と圓轉滑脫な社交振りは町民敬慕の的となつてゐる。夫人はな子は淑徳の譽れ高く家庭は常に和氣贅々としてゐる。

大沼忠廣

明治二十一年十一月十七日生
府下平塚町戸越七九三番地



水戸の地は古今幾多の學究的偉材を輩出して居るが、此の先覺人士の光輝ある歴史と、遺徳に恵れた地に生を享けた現東京市道路局地理課技師大沼忠廣氏は、幾多の先人を辱しめない學識と人腕を兼備して汎く令名を馳せつゝある。功にして好學の氏は夙に學に依つて身を立て名を成さんと欲し、日夜孜々營々刻苦螢雪の窓にいそしむ倦む所を知らなかつた、が不幸其の家庭は之を訴すにあまり餘裕を持たなかつた。茲に於て不撓不屈の精神に燃える氏は、徒らに父母の援助を乞ふて身を起すを屑しとせず、意を決して明治四十年上京し、職を市役所に奉じ、忠勤大に努むる所があつた。而かも尙押え難き學究的精神の迸りは、氏をして攻玉社中學に入らしめ、之を卒業するや、再び市役所に入りて精勵する事となつた。當時氏は社會に飛躍して成功の果を結ぶ一大要素は一に懸つて健康なるにありとなし、體育の試練を積むことに苦心した結果は見るに功を奏し、現在汲めども盡さざる氏の活動力は益々幸福へと導いて居る。氏の市役所に於ける勤務は地理課であつたが、後幾何もなくして道路課に轉じ、更に職制變更と共に再び地理課に復歸し、現在同課の技師となりて主として都市計畫事業に依る用地の實地測量に當り、日夜之に貢獻して倦む所を知らず、益々其の手腕を發揮せんと努めて居る。而かもまだ餘少壯、その前途には洋々たるものがあり、一般から多大の期待を以て注目的となつて居る。氏の敏腕たるや勿論此の期待に尙ふべく言を俟たないことであらう。趣味を讀書に持ち、家庭には夫人榮子と四女があり和氣堂尙ほに溢れて居る。

渡邊勝三郎

明治六年十月生
芝區西久保城山町
電話 高輪 七二三〇番

東都實業界の驍將、彼の渡邊治衛門氏の令弟で、夙に兄弟譽を並べて實業界に飛躍し、多數會社の重役として宛然一王國を形成して居る我が渡邊勝三郎氏は東京府の人、夙に學窓を出で、斯界に出づるや、父祖の富力に加ふるに稀に見る敏腕を以て各關係會社の經營に當り、爾來各一流會社の頭取にあげられ重役に推されて居る。彼の關東に於ける代表的大會社東京瓦斯株式會社社長としての氏の活躍等は廣く一般世人の知悉する所である。現時此の外に、あかち貯蓄銀行頭取、二十七銀行取締、渡邊商事、眞砂商會各株式會社社長、臺灣製糖、東京電燈、千代田リボン製織、旭日生命保險、東海製鋼、日本化學製油、東京絹毛紡織、三河鐵道、東洋製油、東京商船富士製紙、ボルネオ殖産、關東練乳、磐城炭坑、東洋耐火煉瓦、唐津窯業臺灣殖拓製茶、大正商船、日本製麻、石渡電機、東京市街自動車、日本電燈工業、上毛モスリン各株式會社取締役、日本鐵合金、製造日本化工、東鐵工所、滿蒙毛織、日出セメント、東洋モスリン、日本石膏各株式會社監査役、東京株式取引所監査役等に擧げられ、夙夜各方面の經營に馳驅して居る。卓犖な資に加ふるに鋭敏な才を配して關係方面の大事に當つては善處して常に名刀の如き牙を見せ居る。而もよくビヂネスライフを操守して大實業家の襟度を忘れない所は、氏が各方面から一倍の信任を得て居る所以であらう。令閨よし子は同じく東京府の人鈴木五吉郎氏の長女である。兩者の間には、初男君、次男君、靜尾、伊都尾等の子女がある。

飯島正

明治九年七月卅日生
小石川區荏荷谷町九十五番地

京橋區月島は東京市の工場地帯であつて、風俗、衛生方面から見ても幼少なる小學兒童の教育に適した地とは云はれない。この月島の地に在つて鋭意教育の任に當り良好なる成績を擧げてゐる人に飯島正氏がある。氏は富山縣富山市千石町の人であつて、夙くから好學の志あり、郷費を卒えて上京し、東京高等師範學校に學び、専心學藝の研究と徳育の涵養に砥勵するところが、優秀なる成績を以つて同校を卒業するや、直に千葉縣佐原中學校に赴任し、十三年間その職に在り、智育の傍ら運動部長とし體力の發達に盡力し、千葉縣下の模範と推稱されてゐた。後東京市に入り、教員講習所教師兼視學として市育英界に貢獻するところがあつたが、出で、荏原郡視學たること一ヶ年、後特に本所區柳島尋常小學校長に任ぜられその育英の任に當つた。同校は四十五學級、三千名の生徒を收容する東京一の小學校であり、第四階級の子弟の多い爲に教育上至難の學校である。氏は就任と同時に教授法を一變し、よく機を得たる施設を講じて徹底を謀り、成績日一日と擧つて行つた。かくて大正十一年月島小學校に轉じ、校長に就任して今に至つてゐる。氏は智育徳育、體育の完全なる發達を期すると共に、自學自習の念を涵養させ、教育勸語の主旨に本づく至誠忠良の良民を養成するに専心し、その實現に努力しつゝある。氏は又京橋第二青年訓練所主事、月島圖書館長等を兼任し、青年の訓練と、讀書力の一般普及を圖り見るべきものがある。殊に氏は前に柳島小學校にあつて第四階級の心理状態の機微に通じ、その方面の理解にあつては、第一人者の稱がある。

野口玉之助

明治二十四年三月二十一日生
府下荏原郡羽田町宇羽田九五一

羽田と云へば直ちにかの有名な穴守稻荷を聯想せしめるが、而かもこの地の草分とも云ふべき舊家に生を享け、家業に精勵する傍ら自治制に參與し、その刷新と進展を計りて隣保扶掖の實を擧げ、令名を馳する人に野口玉之助氏がある。氏の生家は代々この地に在りて漁業を營み、同地漁業界に在つて重きをなしてゐたが、先考七五郎氏は考ふるところありて現在の土木請負業を開始し、なほ羽田漁業組合長としてその手腕を揮つてゐた。氏は郷費を卒えるや直ちに父君の膝下に在りて家業を見習ひ、父君を補佐してその興隆に努めてゐたが、大正十一年五月父君の逝去と共に家業を繼承し、爾來縦横なる才幹を揮ひて舊に倍するの發展振りを示すやうになつた。氏の現在までに關係して完成せし工事は、大正八年玉川水道の完成、大正十三年羽田運河の開鑿、改修工事の完成、大正十四年八月羽田町々役場の建設等枚舉に遑のない程である。その事業は専ら土木請負業武田組の下請負であつて、その精密なる監督と周到なる施工は斯界に在つて常に賞讃の的となつてゐる。氏はかゝる繁盛の間にもなほ町政の進展に資し、從來寄與する處が尠くないので、その熱誠は忽ち町民の認むる處となり、遂に推されて町會議員に擧げらるること二回、其間教育の振興、財政の釐革、衛生施設の改善等幾多の刷新を斷行し町政自治の礎石を磐石の安きに置くに與つて力があつた。氏資性快活、氣宇湖大にして仁俠の氣に富み、溫言人をして懐かしむるものがある、今後の活躍は期して待つべきものがあらう。さく子夫人との間に一男一女あり、家庭は清福に満つてゐる。

小澤義平

明治七年九月二十一日生
下谷區上野櫻木町四五
電話下谷六三九番

天真流露秋毫の輕薄なく、慧敏聰悟能く時流に先驅し、目下東武砂利株式會社を双肩に脊負つて數多大會社を向ふに孤軍奮闘する我が小澤義平氏は名は夙に斯界の感星として評價されてゐる。氏は學序を経て明治三十五年東京帝國大學工科を卒業し直ちに技師として南滿洲鐵道株式會社に入社し同會社鐵道敷設の爲め貢獻するところ甚大であつた。後總武鐵道株式會社に轉じ更に東武鐵道株式會社、足尾鐵道株式會社に各技師として奉職し、大いに天分の才腕を發揮した。されど性來不羈獨立の鴻志を抱く氏にとつては永く勤め人たるはその本來の希ひではなかつた。そこには妥協と屈從とが満ち、他の一切は絶對不渡りとしてその通用の價値は直ちに餓死に相當しなければならなかつた。乃ち氏は隱忍自重徐ろに機を來るを待つうち遂に風雲に乗じ自ら創立委員長となつて各方面の有力者を説き現在の東武砂利株式會社を創立し之れが取締役社長となつた。本來その豊富なる經驗と學殖とは相俟つて自ら經營の妙諦を産み、社業日に月に發達して今日の繁榮振りを呈するに至つたのである。現在販路は全國各方面に亘り特に東京市役所の納入は多數の納入者中第一とされてゐる。齡將に圓熟の域に達してゐる。今後の氏の活躍は會社の前途の發展と共に實業界各方面に大いに期待されてゐる。園藝に興味を有し、その技は玄人の域に達してゐるといふ夫人は六男二女を遺してなきかすに入り、氏はひたすら愛兒の養育に一日の活動を忘れてゐる。目下長男は早稲田大學に、次男は府立七中に在學中であるがそれ、父君に似て秀才の譽れが高い。

宇都宮正登

明治九年拾月九日生
府下南品川三ツ木八〇八番地

古今東西の文明發達は皆軌を一にして河川の流域に勃興してゐる。これはその流出して形成せる肥沃なる三角洲と交通の便による必然的結果である。我東京府の發達も荒川、多摩川の兩河に負ふところ多く水との關係は密接なるべからざるものがあり、水の美觀や情緒は錦繡又はその他の多くの文獻に現はれたるものによつて想像するに難くない。然れども西洋文明の移入に伴ふ急激なる發展の爲に自然に惠まれたる此等の特色もその色調を失ひ、又等閑に付せられ勝ちであつた。然れどもかの大震災の示すところにより當局はその等閑に付すべきにあらざるを知り銳意これが積極的利用法を講ぜんとし、諸河川の改修に努めつつあるが、これが衝に當り獻身的な努力を捧げつつある人に我が宇都宮正登氏がある。生を伊豫國喜多郡南久米村の素封家に享け、學序を遂ふて縣立大洲中學から熊本高等工業學校土木科に進み斯學の研究に努めた。明治四拾四年七月同校を卒業と共に熊本縣土木部技手を拜命し、同地方の土木事業に貢獻するところ多く、少壯有爲の技手として噴々たる令名があつた。大正九年九月東京府土木課技師に榮轉し、河川改修附帯工事出張事務長の椅子につき、河川改修工事に獨特の手腕を發揮したものだ。殊に震災直後の水運利用の際には寢食を忘れて奮闘したと云ふ。かくて拾五年四月現職に轉じたが、河川事業は都市計畫の發達に甚大なる影響を及ぼすものなれば、氏の責任又重大である。然し氏の才腕を以てすれば府民の期待に副ふのは疑なき事である。氏はテニス撞球に興味を有し千代子夫人との間に一女がある。

南 孝 夫

明治十八年二月十九日生
府下目黒三田二〇五

今の世では金があつて體が達者で頭がよくて、それで最高學校を出てさへも、立身出世といふことは容易なわざではない。況んや學歴によつてその登用を差別してゐる組織の下にあつては、學校に行かない者や中途退學者にとつては余程の努力と才能がなければ、到底その成功は覺束ない。今東京府の道路主事として新しい時代の新しい事業たる都市計畫に鮮やかな才腕を發揮しつゝある我が南孝夫氏は實に中途退學の不遇な身から遂に今日の地位を贏ち得、多數の最高學府出身者に伍して名聲噴々たるものがある。氏は大阪府泉北郡伯太村に生れ、その生家は累代附近切つての豪農であつた。氏は幼にして聰慧、明治三十七年大阪府立岸和田中學校を卒業し直ちに京都法政大學豫科に入學したが不幸病魔に襲はれ僅か二年にして退學しなければならなかつた。かくして若人の胸を燃やす輝かしい希望も暫くは故山に病身を養ふ憂鬱と變つた。されど五年にして全く健康を回復した氏は「愚痴をこぼすな、すなほに勇往邁進せよ」とゴルキーの様な人生觀を抱くことが出来た。四十四年更生の意氣と希望を以て大阪府土木課に勤務することとなり久しく蟄伏されてゐた天稟の才能は、茲に至つていよいよ縦横に發揮され、加ふるに倦まざる努力は同所に止ること僅か五年にして大正五年五月道路主事として東京府に聘せられ、爾來精勵今日に及んでゐる。氏の如きは當に多數世の獨學者にとつての活教訓といふべきである。氏は温厚なる長者の風を備へ、讀書を唯一の趣味とし俳句に和歌に豊かな情操を養つてゐる。夫人との間に一男三女あり圓滿な家庭を營んでゐる。



松 村 明 教

明治二十三年四月二十日生
澁谷町下澁谷九〇〇番地

普通教育が一國の文化發達を助成する事は今更ら言ふまでもない。されば歐米の先進國は國を擧げてその發達に全力を注いでゐる。我國に在つても學制發布以來その普及と發達に當局が關心してゐるが、その衝に當るのを得ない場合は、たとへその設備に、制度に優るゝも、佛作つて魂を入れざるが如きものであつて何等の効果を擧げ得ないものである。現に育英の第一線に立ち、溢るゝばかりの學殖と圓滿なる人格とを以てそが弊を矯めて是の徹底的普及に全力を注いでゐる人に澁谷長谷部尋常小學校長の我が松村明教氏がある。氏は府下西多摩郡西秋留村を故郷とし、夙に好學の氏は郷費を卒ると後青山師範學校に學び日夜斯學の研鑽に勉めた。明治四十四年優秀なる成績を以つて同校を卒へるや特に選ばれて同校附屬小學校訓導に就任し、爾來最近學理に基づく合理的なる新教育を施して貢獻あり名訓導の令名を博した。十四年現校長に榮轉してよりは益々その理想の實現に精進して功を奏しつゝある。是は職員の一致協力による完全なる教育の實施と兒童に對しては規則的なる教育を施し、過不足なきを以つて教育の眞諦となし、傍ら兒童の個性を認めてこれが伸び行く力を良く指導しその短所を矯正する等現在行はるゝあらゆる教育法を用ひてこれが發達に努力しつゝある。爲に日一日とその實績は舉り父兄の氏を信頼すること頗る絶大なるものがある。氏なほ論不惑に達せず將來の教育改善にこそ、其の眞面目は發揮される事であらふと、深く期待されてゐる。

田 中 武 助

明治四年一月十五日生
芝區金杉町四の二〇番
電話 高輪 三六四六番

文明よ、汝は王國を死屍の上に立てる。と云つた黒人ルネマンと云ふ思索家がある。勿論この言葉は狂激ではあるが、親近都市文明が醸す諸々の弊害は日々に顯著となつた。眞の文明を建設せんとするならば、之等一齊の悲しき文明のバイプロダクションを防止せねばならぬ。かくした使命の下に生れたのがわが東京府社會事業協會である。さてその協會にあつて主に衛生方面の施設に參與してゐるのは田中武助氏である。氏の職業が醫者だからと云へる。抑も氏は醫學專門學校救済生學舎の出身で、卒業後直ちに開業醫試験に優秀な成績で合格し、明治二十七年芝區本芝に開業、同四十五年七月に現在の地に移轉したのであつた。その診療の確實と投藥の妙は、たちまちに人氣を呼び、業績は益々あがつたが氏は終始醫は仁術なりのモットウを忘れなかつたので、現に芝區會議員、借地借家調停委員等の公職に推され、更に芝區醫師會理事、東京市醫師會理事等を兼ねて刀圭界に重きをなしてゐる。なほ東京方面委員、東京市芝浦小學校々醫、芝私立衛生會幹事、區金杉四丁目町會幹事、東京産婆看護婦學校幹事兼講師等容易に書きつくせないほどの重要な椅子を占めて、公私各方面に寧日なきの大活動を續けてゐるのである。のみか前東京府會議員、同參事會員として府政壇上に獅子吼し、その公正な論旨を以つて同志に畏敬せられてゐる。それで趣味は謡曲と挿花であるとは、その幽しい情操味がなつかしい。三人の愛兒の内一人は畫家とし、一人は支那研究家として著名であるとは、この氏にしてこの令息ありと云はねばなるまい。

杉 山 喜 代 太 郎

文久元年二月十日生
小石川區雜司ヶ谷一〇七番地
電話 小石川 三二三七番

やれ慈善家だ、やれ篤志家だと、こうした言葉は餘りにもいひ古されてゐるが、そうした人はこの澆季の世には殆んどないといつていい。だからこゝに一人の篤志家が居つたとする。この人は決して、人のまねをしたり世にてらふために慈善家振るのでもなければ、殊更らに篤志家を氣取るのでもなく、腹の底からの篤行の人であつた。けれども、いつはりの世間では、彼をけなす人はあつてもほめる人はなかつた。そのみか色々々の迫害すら加へられる程であつた。間もなく、この人は林間學校を始めた。そして附近の子供達を集めて、本當に、自然に恵まれた温かい心の持ち主を澤山に作り出さうと考へたのである。そして彼は自分の思ふ通りにしたのであつた。けれ附近の人はそれを喜ばなかつた。自分で何の教育もないくせに、人の教育なんて片腹いたいと彼をのしつた。しかし彼の本當の氣持を天真爛漫な子供達だけはちゃんと知つてゐたのである。色々々の邪魔もあつた。迫害も加へられた。けれ共、こうした無邪氣な子供達と一緒に居るときこそ、彼にとつては唯一無二の境地であつた。そして彼は今や押しも押されぬ、文字通りの篤志家として立てられる様になつた。この篤志家こそわが杉山君であつたのである。今や君は附近青年子女の渴仰の的となつてゐる。そしてその固い信念によつてなされる一言一行こそ本當に意義多い子供への感化であつて、あらゆる反對を押しつけて築いた地歩なのだ。君また町會の創立に奔走する所多く、副會長の職にある、旅行を好み、よく古蹟の踏査に杖をひく所亦君の人格の一反映ともいへよう

高木熊太郎

文久元年七月五日生
在原郡品川町三七七番地
電話 高輪 一〇一六番

品川町の町制施行以来の町會議員として二十有餘年の久しい間に亘つて
献身的盡瘁を續け、町の恩人として並びに聲望を擡つて居るは高木熊太
郎氏である。同町の舊家で舊來知られて居たが、氏の代に至つて益々聲望
があがつたかの觀がある、氏は夙に自治政治に關係して町發展のために盡す
所があり、人望頗る布いて居た所から、明治二十五年多數から推されて始
めて町會議員の椅子を占めたが、爾來今日に至るまで拾數度の改選毎に累
進的に信望を揚げ實力を加へて行つた。そして其の都度累選されて一貫誠
意と手腕とを以つて輿望に酬いて來た。由來自治に參するの士は、概ね利
益や眼前の名聞などを動因として一時的人心收攬策を講じ、甚しいのにな
ると後は野となれ、山となれ議員の椅子を獲得すれば町政も民心も眼中に
ないと云ふのさへある。殊に自治政が黨争の浸潤に逢ふに當つて一層之が
甚だしい。隨つて長い間に亘つて眞の徳望をつなぎとめて累選される率は
ある。かくては自治體は個人の欲望充足の具に供さるゝにとゞまり、其の
發達を希ふ事は夢想に近い事である。此間にあつて、氏が一貫至誠率公の
念を持して公正町事に加つて來た所は、寔に景仰すべきものがある、健全
なる町政の發達と廓清とに健闘を續けて來た氏の公的行動は、正に衆多の
思慕崇敬を受くるは當然であらう。又明治四十二年來の郡會議員としての
活動も花々しく、品川白米商同業組合長に推舉されて同業の共榮に盡し、
憲政會幹事としても老練な材幹を揮つて居る。

山口増次郎

明治八年十二月二日生
芝區三田三丁目二十八番地
電話 高輪 二五〇番

東京人で寄席情調を知らぬ者は風流韻事を解せぬ朴然人だと云はねばな
らぬ。彼の輕妙洒脫な語調の間に世俗の機敏を捕へ、ユウモレスクな表現
を以つて觀客を笑殺するのは落語である。錆びた哀調の中に纏綿としてつ
ぎぬ男女の相慕ふ心を唄つたのは常盤津である。さては長唄に端唄に、い
づれもクラシクな情緒を含むのは寄席情調である。面やつれした旅藝人
の哀調に充ちた舞踊もある。まこと寄席情調を知らずして、東京人を誇り
給ふなど云ひたい。大平無事三百年の間にちかはれた江戸の情緒は、寄
席の零團氣になつかくしく醸されてゆく。その江戸特有の寄席を經營して幾
代も續いたのは、山口氏の家であつた。が氏の代になつてから偶々知人内
山吉五郎氏が經營してゐた蒲燒料亭八百吉を繼承することになつて、兩者
を兼營するやうになつた。かく二つとも江戸趣味に投じた家業を營んで
繁忙でありながら、氏は町内有志と計つて三丁目睦會を組織するや、推
されて會長となり隣保共榮の衝に當つてゐる。なほ曩には芝區會議員に
も當選して、穩健な意見を吐露して、區政刷新につとめたこともあつた。
氏はこれより先に白金臺町二丁目に支店を開いて、家業の隆盛に心を砕い
てゐる時、不幸にもあの大震災に遭遇して、多少の損害は受けたが、今で
は着々として立流な業績をあげてゐる。氏はまた東京蒲燒業組合の常務理
事とし、かつ芝浦漁業組合相談役として、兩組合のため利福を計つてゐる
家庭は夫人との間に子女四人あつて、和氣霽々として春風常に満つるの趣
がある。

田村與吉

明治十三年十一月十五日生
麻布區廣尾七九番地
電話 高輪 五二二一番



秋田縣秋田市檜山愛宕下町を祖傳の地とし、田村金太郎氏の長男に生れ
明治三十八年三月秋田市高等小學校を優秀な成績で修了した氏は、嫡男と
して當然父親の業を嗣ぐべき管ながら、生來の向上心はをさゆるに由なく、
爾來數年土木工學に對する技を獨學で養ひつゞけた。そして明治三十三年
六月秋田縣工手補に採用せられ、職を内務部第二課土木掛に奉じて官界に
最初の一步を踏出し、三十三年末工手に進み、更に翌年農商務技手に轉じ、
地質調査所に勤務するに至りては、かくして官公土木界の生活は次第に進
展した。併し好學の氏は、三十五年斷然職を辭し、當時神田中學五學年の
編入試験に應じて見事に合格し、再び學生生活に歸つて學びの窓にいそし
んだのであつた。翌三十六年卒業し、更に其の年の九月札幌農學校土木工
學科に入學して専門學の智識を組織的に磨き上げて行つた。其の學に對す
る敬虔な態度に至つては詢に敬仰にたへない。三ヶ年の研究を卒つて再び
東京市の臨時雇として入つたのが三十九年で、次いで技手となり、更に四
十四年には技師に進み、大正十年六月には拔擢せられて河港課工務掛長兼
庶務掛長に擧げらるるに至つた。かくて十四年七月東京市から選ばれて、
河港施設視察の爲歐米各國へ派遣せられ、具さに西歐の施設並に制度を視
察して本年の初夏歸朝し、新に齎らせる新智識と實際の手腕とを以て新施
設を試みんとしてゐる。而も從來橋梁課、調度課、下水課經理課等に在つ
て樞機に參與し、市政に貢獻する處が尠くない。智識に於て愛情に於て忠
直に於て氏は最も尊むべく親しむべき人である。

松方乙彦

明治十三年一月生
麴町區平河町

維新の元勳として英名赫々たる松方正義氏の七男として生れ、而かも
實業界の重鎮として令名ある松方乙彦氏は、父君の血を享けた高邁なる資
質を以て夙に學習院に學び、卒業後、前途に輝く希望を載せて、遠く海の
彼方の米國に文化の跡を尋ね、ハーバート大學に入學して登壇の功を積ん
だ。かくて優秀なる成績を以て同校を卒業するや、新智識を齎して實業界
の人となつたが、氏の八面玲瓏たる才幹は、父君の根強い潛勢力と相俟つ
て、前途は坦々として寔に華かな、そして光輝に充ちたものであつた。先づ
大阪合資工業株式會社の取締役を始めとし、日本絹布、日本石油株式會社
等の取締役として、大に天賦の才能を發揮し、少壯有爲の實業家として盛
んに持て囃されたものだ。後日本水電株式會社、朝日興業株式會社等の各
會社の常務取締役となり、之が姉妹會社たる東京ガスコークス株式會社々
長を兼ね、多年の蘊蓄と實際的手腕とを以て斯界に令名を馳せてゐたが、
本年初夏之を辭し、なほ氏は、火災保險會社其他二三會社の重役として不
斷の努力を續けてゐる。氏は名門の出としては珍しい程捌けた平民的人
で、而かも謙讓の美德を有し、氏に接する者は齊しく其偉大なる友愛の至
誠に動かされざるを得ない。加ふるに氏は圖抜けた人情美の所有者で、而
かも平靜にして深刻、平明にして愉快なる魅力を有し、勇氣に於て、愛情に
於て智識に於て、最も親しむべく最も尊むべき人である、令室登美子は山
本権兵衛伯の第五女で、その間に二男二女がある。



大草 又 藏

明治二十年八月二十一日生
府下野方町上沼袋 一三六

今や人情の澆季紙より薄く、節義廉耻靡然として地を拂はんとするの時卓然立俗流の間に超越して、常に二百萬市民の生活の爲に第一線に立ちて善戦し、曾て均量不足の故を以て三越を始め、森永、明治屋等堂々たる一流の大商店を摘發して東京市の爲に萬丈の氣を吐き、鬼掛長の偉名を天下に馳せたことは、當時都下の各新聞が報導した處で、今尙ほ吾人の印象に新なる處である。此硬骨漢こそ誰あらう。我東京市商工課に燃ゆるが如き熱と意氣を以て一脈の生氣を漂はしてゐる度量衡掛長大草又藏氏其人である。長野縣北佐久郡望月は氏の夢寐にだも忘れることの出来ない懐しい搖籃の地である。夙に青雲の志を抱いて上京し、順天堂中學校を卒業するや直に日本大學に學び、研鑽すること三年、螢雪の功空しからず優秀なる成績を以て卒業した。かくて同年十二月一年志願兵として、歩兵第三十聯隊に入營して、軍隊生活を嘗み、能く軍務に精勵し隊中の範を以て稱せられてゐた。明治四十二年陽春三月櫻花に迎へられて除隊となり、直ちに技手として職を東京府に奉じたのであつた。之れ實に氏が公的生活に入つた最初の一步で、明治四十五年二月更に轉じて東京市役所に入り、技手として度量衡掛として勤務することになつた。以來多年の蘊蓄と實際の手腕を發揮して職務に精勵したが、氏の非凡の才能は忽ち認められて、年と共に果進して大正十二年五月遂に現職たる度量衡掛長に進み、更に翌年技師となつたのであつて、其高潔至純なる人格と、卓越せる手腕とを以て令名を擡にしてゐる。氏人となり測達、稀に見る勇氣と果斷の持主だ。

菅 原 稠

明治九年四月一日生
東京橋區出雲町一六
電話 九〇五、九〇六、九〇七
銀座 九一四、九一五、九一六

「廿世紀は電氣の世界なり。」と米國の發明王エヂソンは云つてゐる。實に然うだ。併し我が日本は從來歐米諸國のその如く文化の普及あまねからず、従つて諸種の化學工業勃興せざる爲、止むを得ずその材料機械等を諸外國にあはぐべく餘儀なくせられてゐた。殊に電氣工業に應用する絶縁體材料の如きは年々莫大なる資を輸入に費さなければならなかつた。ここに於て我國化學工業者は競つて完全なる絶縁體材料の製作に腐心したのである。我が菅原稠氏も實に之等化學工業者の間に介在して之が製作に従事した一人であつた。當時我國には之れに關する何等の研究資料がないので、氏は態々歐米より技師を招聘すると共に、書籍を購入し、更に大正五年多額の資を投じて品川に研究所まで設け、着々之が研究の歩を進めたのであつた。そして其結果、遂に外國品を凌駕する優秀なる絶縁體材料を製作することに成功したが、其間に血の滲むやうな幾多の苦心と努力が秘められてゐることは云ふ迄もない。此處に於て氏は直に我財界の霸王たる三菱を説き、遂に之と共同經營の下にこの國家的の大事業に着手するに至り、其製品は三菱は勿論、逕信省、鐵道省、陸海軍省、芝浦製作所等一流の官公衛會社等に及び、而かも大正八年大阪に支店を設け、製品の優秀と相俟つて斯界に聲望を擡にしてゐる。因に氏が絶縁體に興味を持つに至つたのは明治四十一年絶縁體材料の輸入を開始したのに因をなすと云ふ。氏は又教育方面殊に體育に力を注ぎ趣味としては柔道、銃獵、詠曲、義太夫等がある。尙長男浩君は柔道四段の証者である。

阪 川 登

明治八年五月三日生
府下代々幡町幡ヶ谷九二四
電話 四谷 一八三 一番



其實に於て、其量に於て都下隨一の信用を博してゐる阪川登氏が、從來本邦の畜産並に牛乳改良の上に齎した偉大なる功績は、今尙ほ燦として輝いてゐる。氏は生粹の江戸ついで、夙に東京英語學校を卒業後斯業を繼承し、専ら之が經營に非凡の才能を見せてゐたが、後畜産改良の極めて急務なるを想ひ、明治四十一年獸醫學博士淺野慶太郎氏等と共に、日本帝國ジエルシー種牛協會を創立して理事となり、初めて種牛血統登錄の範を垂れて我が畜産界に一大刺戟を與へた事は普ねく人の知る處である。超へて四十五年内務省の勸めにより、獨逸ドレスデン萬國衛生博覽會に、搾乳室を出品して我が乳業者の爲に萬丈の氣を吐き、授賞せられた外、大正三年五月には時の農商務大臣山本達雄氏より獎勵金を、更に同十年五月には中央畜産會々頭禪山資紀伯より乳業、畜牛改良、種牛登錄法に關する功績顯著なる爲特に功勞賞を授與せらるゝ等幾多の榮譽を擔つた。之より先氏は大正八年阪川牛乳店を株式組織に變更して其取締役となり、傍ら東京牛乳畜産組合副組合長及東京城西牛乳搾取相互會々長等の要職に推されて令名を擡にした。此外氏は衆望の歸する處、代々幡町々會議員に推されて町政の樞機に參畫し、或は東京地方裁判所商事調停委員に任命される等其功績は寔に擧げて數ふべからざるものがある。資性温厚にして仁慈、趣味を家畜盆裁等に有する處、一面氏が愛情の縮圖とも見るべく、そで子夫人との間に長男茂次、次男守政、次女啓子、三女直子あり、長女は日本橋の八木氏に嫁してゐる。

田 沼 實

明治二十八年八月二十五日生
府下西大久保 一二九

出ては帝都復興の劇務に従ひ、入つては露々たる家庭に繪畫の趣味を味ふ我が田沼實氏の如きは、亦恵れたる一人と謂ふ可きか。氏は生粹の江戸ついで、淺草山の宿に生れ、大正二年三月府立第三中學校を卒業するや、第五高等學校に入學して螢雪の功を積み、大正六年七月卒業して、更に東京帝國大學工學部土木科に入り、只管斯學の研鑽に力を注いだ。かくて大正十年五月優秀なる成績を以て卒業するや、直に内務省仙臺土木出張所に聘せられ、從來學び得たる學理を、實地に阿賀川改修工事に試みることに、茲に氏が官海生活の一頁は開かれたのである。爾來多年の蘊蓄と非凡の才能を揮つて事務に精進し、大に其前途を嚆望せられたものだ。大正十三年六月遂に拔擢せられて復興局に入り、土木部工務課理設係の技師として帝都の復興に直面し、縦横に其快腕を揮つてゐる。氏人となり温良、頭腦明哲にして襟度廣く、技術者には珍しい明るい性格の持主である。氏年齒漸く而立に達し、前途尙ほ春秋に富む、將來の活躍は期して待つべきものがあるであらう。夫人を惠美子と云ひ貞淑の譽高く、二人の間に一男あり、家庭は極めて圓滿である。因に夫人は山梨縣山梨郡八幡村の人、祖先は遠く武田信玄から出てゐる爲、刀劍、繪畫甲冑類等武門に關する珍什佳器尠からずと云ふ。氏は亦洋畫及日本音曲等に頗る造詣深く、餘暇あれば時に繪畫の鑑賞に親んで自ら娛しみ、或は融々たる音曲に情操を培ふことを怠らない。動々もすれば偏狹に流れ易い技術者中、蓋し氏の如きは稀であらう。



中山貫一

明治十五年八月一日生
神田區三河町二丁目四番地
電話 神田二〇八五番

三重縣鳥羽港に近く風光明媚を天下に誇る志摩郡磯部村は、我が三河町々會幹事として令名を斯界に轟はれてゐる中山貫一氏の夢寐にも忘る可からざる懐しい搖籃の地である。氏の亡父を龜太郎氏と云ひ、我が國師範學校最初の卒業生で、多年小學校長として國民教育に盡瘁し、爲に現世では頌徳碑迄建てられてゐる。併し氏は未だ年少十一歳の時不幸にして両親に長逝され、早くから世界の困苦をなめねばならなかつた。かくて明治三十八年前途に輝く希望を抱いて上京し、先づ業務見習の爲め某機械船具店に務めて技を磨き、遂に明治四十三年神田鍋町に獨立して店舗を開くに至つた。爾來寢食を忘れて専ら業務の擴張に努力した結果業運頗る榮え、大正元年遂に店舗の狹隘から錦町一丁目、更に大正十三年には現在地に移轉すべく餘儀なくせられた。販路は東京市役所を始めとし、其の他全國各府縣に及び家運は一路幸運を辿つてゐる。氏は又現在東京市出入商組合に幹事長として組合員の福祉と進展に寄與する處が極めて多い。其の他現に三河町々會幹事として町の進展自治公共の爲に盡瘁し、爲に町民敬慕の的となつてゐる。氏は又公共的の觀念頗る篤く、區劃整理連行の熱心なる主唱者で、曩に同町會内に於て一部猛烈なる反對ありしにも拘らず、勇敢にもこれが運動の第一線に立つて奮闘したことは普ねく人の知る處である。資性温厚篤實にして、實に君子然たる人である。趣味を讀書に持ち寸暇をも惜んで讀書に親しんでゐる。夫人を葉子と云ひ貞淑の譽高く、其の間に三男二女を擁し、圓滿なる家庭は人も羨む程である。

多賀谷岩次郎

明治二十年十二月八日生

由來山紫水明の地は、高潔な人格の所有者をつくり由緒ある歴史の地は血と涙豊かな熱の人力の人を生む。燃ゆるが如き熱情と溢るゝが如き温情とをもつて名譽長と謳はれた元築地警察署長の我が多賀谷岩次郎氏は福島縣の人、かの白虎隊によつて有名なる會津の若松城下は其の懐しい搖籃の地である。警視廳警部を拜命して警務課に勤務したのは明治三十九年の十一月であつたが、氏が不斷の努力と熱心とは遂に氏をして次第に重からしめ、四十二年四月には刑事部庶務課長に技擧されるに至つた。爾來其の繁雜なる事務に執掌して毫も倦む處なく遂に大正二年六月には昇進して警視となり、麻布六本木署長に榮轉した。かくて日比谷を振出しに、四谷、神樂坂、日本橋、久松、神田錦町等の各署長に歴任し、到る所に其の卓越せる手腕と、玉の如き人格とを以つて光彩を放ち、築地署長に榮轉したのは大正十三年八月であつた。明哲なる頭腦、深遠なる學殖、超人間的努力、さうしたものは氏の所謂温情主義を相俟つて益々信望を博し、管内の住民や部下の人々から恰も慈父の如く崇められたものだ。昭和二年自ら鑑みる處ありて官を辭し、東京毎日新聞社に理事として招聘せられ、刻苦精勵殆んど寧日なき有様である。資性温良、稀に見る高潔な人格者である。趣味を讀書に有し、暇あれば和漢の書を獵渉して知識慾を満足せしむと云ふ。夫人を房子と云ひ貞淑の譽高く長男三郎君は京都帝國大學を卒業して現に湖南鐵道株式會社に勤務し、次男寛治君は目下開成中學校に在學中だが、何れも氏に似て明晰なる頭腦の持主である。



横山政方

安政二年二月生
赤坂區新町四丁目一
電話 芝六〇二九番

氏は相州小田原の支藩に當る山中藩主大久保儀尚氏の家臣であつて、赤坂米川下町の藩邸で呱呱の聲をあげたのである。幼名を徳太郎と稱し、明治四年の内外多事な際に殿父が逝去したので、幼少の頃から家督を相続し鷹藩置縣と同時に弓矢を捨て、現在の場所で煙草販賣業を開始したのである。が長い階級的差別觀念の下に風習づけられ、算盤珠の勘定の出来ることを賤視した武家出のことなれば、ともすると武家の商法としての失敗をのみ招致しがちなのが、その頃の狀態であつた。かくて幾頃までは刀を佩びて街頭を闊歩した武人も、今日は悲しやその日の糧におはれると云ふ哀話が、續出したものである。この四面楚歌の間にあつて、性來聰明であり平民的であつた氏は、巧みに商法の機微を洞察し、經營宜しきを得たがために月を積み歳を重ねると共に、家業の隆興を望するに至つた。その内に煙草專賣法實施と共に、組織を改めて株式會社となし、その取締役に就任して職務を掌握し、専心社業の進展に努めたのであつた。後また元賣捌所六ヶ所を合して合名會社に變更し、その代表社員となつたが、大正二年に再び分立して個人經營となし以て今日に至つてゐるのだ。そして元賣捌の第三區を擔當して、芝、麻布、赤坂を主に管轄區域内とし、その外品川、大崎澁谷千駄ヶ谷等の郡部をも取扱ひ販賣の年額三百五十萬圓に達してゐることである。氏は明治二十七年以來赤坂區會議員に推され、區政に寄與する實に三十年の長きに亘り、東京府は曩に氏の功勞を録して花瓶一個を贈つた。まこと忍苦の人、努力の人である。



古川己之助

明治元年十二月二十二日生
芝區松本町四十四番地
電話 高輪 四〇八〇番

氏は靜岡縣岡市北川町の出身で、七歳の時に家族うち揃つて上京したので、何分にも生家は倒産した揚句の上京のことであり、常に生活の嵐が一家を襲つてやまなかつた。丁度その頃親戚に當る古川家から懇望されて氏は同家に養子となり、京橋北槇町に居住して附近の學校に學んだ。抑も古川家は相當の由緒正しい家譜を備へた士族であつたし、その子女は徳川家に仕へ御殿女中として才媛を誦はれたこともあると云ふ。が間もなくこの舊家にも窮迫の日が訪れて來た。で氏は詮術なく學窓から去つて自らパンを求めなければならなかつた。まづ氏は日本橋の守隨齋製菓所に徒弟として入り、苦澁な勞役に服したものである。居ること三ヶ年にして同所を出で、それから若い胸に傷める心を抱いて、各所の工場から陸海軍の工場をまで萍のやうに流れて歩いた。が人生の増城を通つた者は強い。氏にも遂に獨立の日が訪れ、明治二十八年に機械商を開業した。僅に二十八の春であつたのだ。かくて汗と膏に彩られた創業の難と戦つて日に日に家産を成すに至つた。然るに不幸にも三十五歳の頃病魔の襲ふところとなつて數年間を病褥に苦吟したが、大正二年に目出度く全治したので更始一新の猛勇心をふるひ起して、現在の地に諸機械製造業を創始し、たゆむことなく邁進した。特にその製作にかゝる電氣器具の方面には、獨特の創意があるとかで、需要者側からは非常な歓迎を受けてやまない一方有志會理事として町事に獻替を惜まず、徳望の涵養につとめてゐる。家庭には糟糠の夫人との間に男子三人を子三人がある。



前田 尚夫

明治二十三年生
神田區仲猿樂町一七一
電話 四谷 四二〇三番

體格がその人の性癖なり趣味なりを決定づけ、更にその人の運命を左右するの、相當に有力なこと、云へる。健全な肉體に健全な靈が宿るとはこの間の機微を物語つた言葉だと思ふ。わが帝國修養會長前田尚夫氏は、實に堂々たる魁偉な體格の所有者だ。この氏に於いては、靈肉合致のエクスタシーに、人生の存在價值を見出さうと、日夜精進を續けてゐることの合理化を思はせしめられる。氏は青森縣北津輕郡飯詰村の出身、青森中學校在學當時から既に體育保健上一見解を有し、唯神的な自覺が齎す結果の大であること信じ、その傍ら柔道の鍛練に全力を傾倒してゐたこととである。やがて上京して柔道の奧技を修得中、偶々日露戦争が勃發して來て、國を擧げて戰勝を祈つてやまなかつたが、この際に氏は、戰ひの勝利は常に剛健な體格と剛毅な精神に宿るものであることを痛感し、遂に柔道場を開設すると同時に、氏獨得の身心練磨術を創造して、濟生の一步を踏出したのであつた。ところが氏の鍛練が進境を示すと共に、醫師が匙を投げて不治の病氣であると嘆じた患者の病根をまでも根治することが出来るやうになり、感謝狀は山をなすと云ふ有様であり、更に六十餘名の講習者が氏に師事すると云ふ盛況を示してゐる。がこれは決して不可解な魔術なのでなく、眞に修養を積むことによつて得られる靈肉合致の境で、ともすると等閑視する唯神觀の世界を開拓すれば出來得るところで、この大旨を説く氏の言葉は、救世主的な祝福だと云はねばならぬ。一方氏は仲猿樂町々會創立委員として奔走し、現にその會長として聲名を得てゐる。



鈴木 正平

明治九年二月生
芝區高輪北町四十八番地
電話 高輪 八二八番

洋式帳簿を始め本邦に廣めた斯界の元勳であり、東都印刷業界の覇者として鳴る鈴木正平氏は、靜岡縣中泉町の人で、父君が事業で失敗するや當時十五歳の時、氏は深く決する所あり、上京して洋式帳簿製造業中屋商店に入つたが、根が精緻な氏の覺悟の健氣さは、日常の從業に精勵する傍ら餘暇を偷んで書學に親んだ。十九歳の年支配人經營、當を失して危ふく廢業の悲境に陥らうとしたが、若輩の氏は深く期する所あり、大膽にも起つて資本主金原明善翁に意見書を提出して繼續を乞ひ、頼勢を挽回するを得て依然として從業し、其の傍ら我が國商業道德の廢頽を慨き、自ら編輯して雜誌實業の光を發行し時弊匡救に資したが、故で才幹を知られ東京印刷同業組合評議員に推されて機關雜誌の編輯を委囑され痛烈な筆鋒を揮つた。好學の氏は哲學、労働問題、社會問題等に對しても相當の造詣を持ち、雜誌新聞等に寄稿して意見を發表してゐた。かくて四十一歳の年店舖の一切は信任ある氏に委ねられたが、禍福は定めなく、四階建の堂々たる工場は一夜にして海濱のためにあとかたもなく潰滅されて仕舞つた。併しこれにて氣力を失ふ氏ではなく、新たな覺悟を以て復興に向ひ、たま／＼世界大戰の好況に乗じて舊勢を挽回し、尙組織を改めて株式會社とし社長に推された。所が彼の大震火災に際して又も灰燼となつたが、氏の精力は旺盛にして奇策に富み、只管復興に勵んで居るから其達成も近い事と豫期されて居る。尙氏は東京印刷同業組合長東京洋式帳簿協會會長として雄視して居る。

山野井龜五郎

明治十一年十二月二十五日生
京橋區松川町三番地
電話 京橋 五〇六九番

暖い南風を背に受けて南國的な明るい奔放さを有する四國からは維新以來幾多の傑人を輩出してゐる。目下法曹界に實業界に政界に適くとして可ならざるなき麒麟兒として名聲を馳せてゐる我が京橋區辯護士山野井龜五郎氏は、四國松山に呱呱の聲を擧げた。郷里の中學を優秀の成績を以て卒業するや、暫くは雄圖空しく郷里に足を停むるの余儀なきに至つたが、俊略は徒らに僻陬の地に埋るべくもあらず、遂に明治四十年前途に輝く希望を抱いて上京し、直に日本大學高等師範部に入り、在學三年間常に首席を以て押通し特待生として月謝を全免せられ級中に異彩を放つてゐた。同校卒業後小學校長となり、更に師範學校、高等女學校等の教諭を経て大正三年判檢事辯護士試験に合格すると共に辯護士を開業して専ら法律事務を執掌するに至つた。明晰なる頭腦、豊富なる學殖、火をも踏む俠氣とはその崇高なる人格と相俟つて忽ち斯界に頭角を抽んずるに至つた。かくて衆望の歸するところ推されて京橋區會議員となり、更に松川町々會長となり自治制の樞機に參畫して獻身的努力を注ぎ、區政並に町政發展の爲め寄與した所が多かつた。氏は尙實業界にも其夙志を伸べ、現に京成電氣株式會社、株式會社フレール館の監査役に就任してゐる。性温厚にして篤實、居民尊敬の的となり、熱誠の二字を以て居常の誠となし總ての事業に當つてゐる。氏の如きは當に人格手腕を具備した方今に得難き人物である。齡漸く圓熟の域に達せんとし、今後の活躍は蓋し注目して見るべきものがあらう。書刀劍を好み家庭には夫人秋子との間に一男三女がある。

野村禮之

明治二十七年十一月十一日生
府下中高井戸大宮前三九九

保健衛生は國民生活の根本的的重大問題である。されば歐米先進國では財政を論ずる前に先づ衛生問題を説き國民保健を最も重要視してゐる。國家がかく國民保健を重大視するは固より當然の理だが、就中都市と衛生施設は絶対に切り離されぬ主要な關係を有してゐる。従つて東京市は大にこの點に留意し、現在では各區毎に責任の衛生技師を配置して万遺漏なきを期しつゝある。我が野村禮之氏は帝都の中樞神田區に衛生技師として幾多の理想的衛生設備を施して、十五萬區民の保健を雙肩に荷負つてゐる。氏は千葉縣市原郡鶴舞町野村介純氏の長男として生れ、先祖は代々醫を勤めた由緒正しい家柄である。氏は大正二年木更津中學を卒業するや、千葉醫學專門學校に學び、七年優秀の成績を擧げて卒業した。翌八年群馬縣下の津久井病院勤務を振出しに實生活に入り、翌九年關東廳防疫所防疫醫に轉じ、十一年千葉醫科大學細菌學教室に於て細菌學の研究に没頭したのである。かくて後幾何もなくして東京市の招聘に應じて衛生技師となり、次いで十二年四月神田區衛生技師に轉じ、爾來區民の保健に衛生施設に幾多の貢獻をなして精勵今日に及んでゐる。殊に大正十二年大震災當時には商科大學構内に神田區診療所を設け、寢食を忘れて避難者の救護に獻身的努力を注いだのであつた。爲めに今日に至るも同區民の氏に對する敬愛の情は慈父に對する如きものがあるといふ。性温厚篤實にして長者の風を備へ、趣味を乗馬撞球に有し何れにも秀れた技を持つてゐる。家庭には夫人お子との間に二男あり、頗る圓滿である。

木本兼次郎

明治三十三年十一月二十八日生
京橋區八丁堀三丁目一
電話京橋二六九・三六一八番

今や東都金物商界の雄として同業者間に壓倒的勢力を有してゐる我が合資社木本商店は、目を逐ふて社運隆昌を重ね其前途は眞に順風満帆の多幸を示してゐる。當主木本兼次郎氏は本年二十八歳の若盛り八面玲瓏の應待振りと挫強扶弱の俠氣を以て嘖々たる名聲を馳せてゐる。氏は江戸つ兒として現住地に生れ學序を経て中央大學商學部に學んだが家計の都合に依つて大正十年中途退學し、直ちに一年志願兵となり近衛歩兵二聯隊に入營して兵役に服し、十三年六月豫備陸軍歩兵少尉に任ぜられ、正八位に叙せられた。除隊後嚴父勝藏氏の後を繼いで専心家業の發展に努力し遂に今日の繁盛の域に到達するに至らしめた。同年九月本八丁堀三丁目青年團を組織して大いに居町青年の志氣を鼓舞し、以て他日堅實なる國民の養成に資するところ甚大であつた。十五年同青年團をして京橋區青年團に加盟せしめて之れが理事となり、同時に區内青年の指導に任じてゐたが、更に、同年東京市聯合青年團の組織せらるゝや推されて聯合青年團の評議員となつた。爾來兼次郎氏は青年團發達の爲め奔走し治績大いに見るべきもつた。斯て青年訓練所の創設せらるゝや選ばれて京橋第一訓練所教練指導員となり此外現に帝國在郷軍人京橋分會第七班長として公共の爲に殆んど寧日なき多忙である。性快活にして青年の氣受けるよく、且つ前途尙春秋に富める氏が將來の大成は各方面に期待されてゐる。氏は資性温厚にして音樂美術に豊かな天分を見せてゐる。家庭には夫人衛子との間に喜久江嬢がある。

竹内達

明治廿五年九月九日生
淺草區千束町二ノ一三九

過去六十年に亘る日本文明の異常な發達は凡ゆる世界人の驚嘆となり、黃禍をまでも叫ばしめたが、そのうちでも先進諸國を凌駕するの實力を示したものは實に近世の華として謳はれた吾が醫術であつた。その醫學界に身を投じた竹内達氏が、現在の社會的地位と、刀圭家としての名譽を得る迄には涙ぐましい程の超人間的な苦難がひそんでゐる。氏は埼玉縣兒玉郡本庄町竹内周作氏の長男として生れ、少年時代を父と共に長崎市に送つたが、長崎中學校を卒業すると共に、進取の氣象と青春の霸氣横溢せる氏は、將來醫學界に雄飛すべく、笈を負つて遠く浪花の地に至り、當時吾が醫界の泰斗佐多博士の卒ゆる大阪醫科大學に籍を置き、専ら眼科を研究し汝々として螢雪の功を積むに余念がなかつた。斯くて大正六年優秀な成績を修めて同大學を卒業するや、白面一介の青年醫學士は、大なる抱負と意氣を以て、大正七年東京市淺草區なる現住地眼科醫を開設して、活社會に第一歩を踏み出したのであつた。最新の科學的智識とされた臨床的施術とを以て、早くも世人より敬慕信頼されることとなつた。大正九年には市囑託專任學校醫となり、次いで區技師に拔擢、十三年の職制變更と共に淺草區學校醫に轉じたが、氏はかの大震災當時富士小學校に假事務所を設け多くの傷病者を收容して社會に貢獻する處が多かつた。又は現學校衛生婦の創始發案者で土地の千束町會の幹事、及び衛生顧問としても知られてゐる。清廉潔白の士で接する者をして心服させる不思議な力をもつてゐる。現在千束町會幹事及衛生顧問に在り家庭はこと子夫人との間に四男がある。

上木竹太

明治三十三年三月五日生
府下代々幡代々不初臺五九一

先年米國に開かれた萬國博覽會に於て、東京府出品の乳牛は、一日四斗二升と云ふ驚くべき搾乳量を以て世界の最高レコードを作り、萬國各關係者の耳目を聳動して、我が國畜産界の爲に萬丈の氣を吐いたものだ。東京府が此驚異に値ひすべき偉大なる成績を乳牛の上に齎したに就いては、其裏面に我が農林課の畜産主任たる上木竹太氏の血の滲むやうな苦心と努力が秘められてゐることを忘れてはならぬ。氏は夙に青雲の志を抱いて東京帝國大學農科大學に學び、専ら斯學の堂奥を究め、明治四十一年七月優秀なる成績を以て同校を卒業するや、同年九月馬政局に入り、多年の蘊蘊と天稟の才能を發揮して専ら馬匹の改良に任じ、我國の畜産界に貢獻する事が尠くなかつた。在職二ヶ年明治四十三年十一月聘せられて鹿兒島縣立鹿屋農業學校教頭となり、専ら力を育英の業に注ぎ、其圓滿なる人格と溢るるばかりの學殖とを以て、學徒の間に大なる尊敬を以て迎へられてゐた。かくて大正七年再び東都に歸り、職を東京府農林課に奉じて畜産主任となり、心血を濺いで乳牛の改良其他に任じ令名を馳せてゐる。氏は職務に對して頗る熱心で、常に食する程の執着を以て諸種の研究に没頭し、氏の考案にかゝる立毛式能力検査法は到る處推稱せられてゐる。此外氏は其著「牛乳の新智識」及「東京府畜産概要」等に大なる研究と造詣の深きを見せ、其他品評會の組織を變更して之が改善に資する等、其功績は寔に擧げて數ふべからざるものがある。其職務に忠實にして學に篤き、近來稀に見る處である。夫人をみさ子と云ひ、三男四女があり、家庭至極圓滿である。

笠原慶藏

明治十九年十月十四日生
芝區三田君塚町一四番地
電話高輪一三二六番

御田小學校、東京府立一中、慶應義塾理財科に學び、後轉じて早稻田大學に移り、建築科を専攻す、これが君の學歴である。御田小學校に學ぶ以上は幼少の頃から東京に居つたことは想像に難くなく、君が生ツ粹の江戸ツ子として當時區内に名望のあつた嚴父慶藏氏の長男として生れたことも首肯出来ることであらう。幼名を慶太郎と呼んだ。そして修學の中途慶應の理財科から早稻田の建築科に轉じた所は、如何にも君が時代の趨勢を知るの明を有するものなるを立證して餘りあるものといへやう。宜なり、ここに君獨特の境地は次第に開けて今日の大をなすに至つたことや、かくて區内の細川力藏氏と提携して芝浦商事株式會社を組織し、建築請負事業に携はつた君は、今や獨立してその業を始め、手腕家を以て聞へてゐる。而も君亦嚴父の志をついで公事につくす所多く、その温雅な性格は衆の推す所となり、大正十一年遂に芝區會議員に當選し、續いて大正十三年東京府會議員の選舉に際しては、更に衆望を擔つて當選の榮をになひ、府會學務委員、多摩川改修委員、目黒川改修委員として特に改修工事等に關しては、獨自の境を行くが如く、その調査の周密なる何れも衆の敬畏する所となり、ついで大正十四年、衆望の赴くところ遂に府參事會員の重責に任ぜられるに至つた。君又近隣の爲めに圖るところ多く、町會を組織し、自らはその顧問として指導の任にあたり、又うめ子夫人との間に一男二女をあげ、慈愛の父として一家和樂し、近隣美望の的となつてゐる。

小諸 九兵衛

明治六年十二月八日生
日本橋區元柳町二九
電話浪花 四九九一 二番

氏の家は先代より木炭商を營んで東都の同業者間で重きをなしてゐる。氏が郷里長野縣上高井郡綿内村字大柳を後に上京したのは明治二十三年のこと。直ちに叔父の家に養嗣子として入つて木炭商に従事し、同二十九年に先代の九兵衛を襲名して一本立ちになつた。ところで先代は相當巨額な負債を残して逝去したので、氏の苦心は實に慘憺を極め、陽出づるに先立つて起き、夜は深更まで家業に没頭すると共に、二十二年間は秋のある着物を着用せぬこと、酒は一滴も吞まざることを二箇條を心に誓つて奮闘した。この不退轉の勇猛心があつてこそ今日の大成功をかち得たもので、後進の人達は充分氏の態度に學ぶべきものがある。かくて現在では多くの地所と家作を持ち、造つた養父の靈を慰さめてゐる。嘗ては東京木炭同業組合評議員及び同日本橋支部長にも推され、同業者のために寄與するところが尠少でなかつた。更に大正十三年に元柳町々會が組織されるや、直に町會長の要職に推され、同十四年再選されて今日に至つてゐる。如何に町民が氏を信頼してゐるかが想像される。これはみな氏の謹嚴であつて明瞭な頭腦の然らしめるところである。曩に衛生組合長に數回推されたが回却して受けなかつたと云ふ事實もある。町會の經費や其他自治に對する寄附金は惜氣もなく出金し、後援を惜まないもので、區役所、警察、學校等から十數回に亘つて感謝状や金銀牌を贈與されてゐる。特に氏の美談とすべきは、數十年來一度として納税期日におくれたことなく國民の義務を完ふしてゐること、税務署の如きも推稱して措かないことである。



高峰 博

明治二十四年四月生
府下澁谷目白第三文化村一號

現に東京市の電氣局及社會局の囑託として、常に欣求と思慕を以て醫學的及心理學的兩方面より従業員の能率増進並に青少年の性能診査等特殊の研究に従ひ、之を實際事業に應用して我が學界の爲に氣を吐きつゝある人に高峰博氏がある。氏は大阪府の人、中學校卒業後金澤第四高等學校を経て東京帝國大學醫學部に精神科を専攻し、大正七年優秀なる成績を以て卒業したが、學究心の熾烈なる氏は更に進んで大學院に學び、大正九年十一月遂に市の囑託となるに至つたのである。以來多年の蘊蓄を傾けて實際的研究に努力し、電氣局の爲に特殊能率調査に用する幾多の實驗機械を發明して従業員の適性検査を行ひ、適材を適所に配置し、或は其素質を改善して運輸交通事業の能率の増進に資すると共に、社會局の爲に大塚少年職業紹介所に出張して青少年の性能を調査し、低能兒及不良兒の救養法若くは普通兒の職業選擇及學級編成等に關し、親しく都下の各家庭及各學校等の間に介在して善良なる嚮導者となり、或は幼兒より成人に至る迄各年代の完全なる性能診査標準を作成し、若くは電氣局従業員に於ける四ヶ年間の精密なる疾病調査を完了して保健衛生に資する等の其功績を擧げ又、同潤啓成社の不具者再教育に關する性能診査の囑託をも兼ね斯界の第一人者として稱せられてゐる。氏は又頗る學に篤く學生時代已に夢の心理研究家として知られ、「夢學」と稱する浩瀚なる著書があり、中國四年生當時、一ヶ年間に佛、漢洋書取混ぜ二百冊を讀破したのにも其片鱗を窺ふことが出来る。夫人をひろ子と云ひ、長男秀博長女けい子三女れい子がある。



尾川 藤十郎

明治二十年四月十七日生
府下杉並町阿佐ヶ谷八四五

氏は關東隨一の彫鐫の名所館林に程遠からぬ、群馬縣邑樂郡佐貫村を搖籃の地とし、其の多幸な少年時代を此處に送つたのであつた。當時父は村の助役として村民敬崇の的となり、母は賢夫人として知られた麗しい家庭で、氏は其内に愛育せられて人となつた。夙に志を育英界に立て群馬縣立師範學校に入學したのは明治三十七年の春であつたが、卒業と共に職を館林小學校に奉じて、専ら兒童の教育に精進した。かくて四十四年上京して東京美術學校の師範科に學び大正三年首席を以つて同校を卒業すると共に直ちに大阪市の久寶小學校に奉じ、翌四年再び郷里なる群馬縣に歸り桐生高等女學校の教諭に任ぜられた。併し滿身向上の意氣を以て滿されたる氏は、毫も小成に安んずることなく、更に進んで其蘊奥を極めんと欲し、翌年廣島高等師範校に入り、七年三月目出度同校を卒業するや直に東京府北多摩郡調布小學校の校長に就任した。次いで八年、拔擢されて豊多摩郡視學となり、更に十三年東京府視學に進み恪勤今日に及んでゐる。氏は又大正十年四月東京府美術館主事を囑託せられ、其の豊かなる美術的天分を以つて事務に精進してゐる。氏は明るい性格の所有者で、其圓熟せる思慮と高潔たる人格と相俟つて令名を馳せてゐる。運動と書畫に興味を有してゐるが、就中書は堂に入つたものだ云ふ。夫人を美津子と呼び、東京實踐高女出身の才媛で、文學の造詣深く、二人の間に二男あり、本年六十八歳の高齡なる母堂につかへて、都座を遠くはなれた郊外阿佐ヶ谷に圓滿なる家庭を營んでゐる。



上倉 三之助

明治十四年六月十三日生
府下西果鴨町宮仲一九九四

その昔法然や日蓮の到る處で迫害された如く、明治以後の我が心靈界に在つて、多大の壓迫を蒙つたものは大本教である。上倉三之助氏が世評紛々たる中に立つて、敢然大本教の教理を研究し、實に篤實なる信仰を固持するのみならず、綾部の本山に入つて理事の職に就き、八方迫害の猛火と闘ひながら、済民教導の本旨を完ふした努力と熱心と信仰とは實に氏をして今日あらしめた原動力で、其の勤勉と正直を公平無私とは一に信仰そのもの、發露と謂なねばならぬ。氏は明治三十四年三月米澤中學校を卒業し早稻田大學に入つて螢雪の功を積み、三十八年三月大學部法學科を卒業するや、暫く故山にあつて鋭氣を養ひ更に明治四十年五月、上京し鐵道院の職員を拜命した。かくて職務に従事する傍ら法律其他を研鑽して四十二年首尾よく高等文官試験に合格し、爾來鐵道の事務に従事する事十有餘年、偶々病魔の冒す處となり、閑地に靜養したが、剛氣にして明徹なる氏は、心懸の鍛鍊と信仰を以て病魔と闘ふの利あるを悟り、翻然として心魂を大本教に寄せ、遂に心身共に健全なるを得るに及び鋭意研鑽愈々其の深奥を究むるも共に進んで之を他に施すべく、本山に入つて理事となるに至つた。後事務官として職を復興局に奉じ、現に經理部購買課長として令名がある家庭には夫人たけ子との間に、四人の女兒を做けて和氣霽々酒も煙草も嗜好の中に數へられるが、趣味として圍碁、謡曲に親しみ、繁忙なる職務を平和なる家庭に慰して精勤を抽んでゐる。



倉内豊太郎

明治三十一年十二月二十五日生
市外阿佐ヶ谷八番地

藍をこぼした様な静かな宮津灣に天の橋立が白砂青松の影を美しく落してゐる。此繪にも見まほしい情趣豊かな宮津町は、我が復興局技師倉内豊太郎氏の懐かしい挿藍の地で、氏の八面玲瓏たる人格は、實にこうした自然の裡に玉成せられたのである。大正五年の三月京都府立第四中學校を卒業するや、更に第三高等學校を経て東京帝國大學の工學部に學び、日夜孜々として斯學の研鑽に耽り、大正十一年優秀なる成績を以て卒業した。然し性來學究心の熾烈なる氏は、自ら之に満足することなく、更に進んで法學部に入り、食る程の執着と思慕を以て新なる研究に不斷の努力を續けて行つた。大正十三年三月遂に登雪の功成り工學士の外別に法學士の稱號を得るに至つたが、近來動もすれば徒に功を急ぎ、自ら小成に安ずる風あるに鑑み、蓋し氏の如きは稀に見る處であらう。かくて學園を巢立つた氏は同年四月愈々實社會に乘出し、技師として職を復興局土木部道路課に奉じた。以來天稟の才能を以て、多年學び得た學問を實地に應用し、燃ゆるが如き熱と力を以て事務に精進したが、曩中の雖は忽ち認められ、翌十四年には更に復興局試験所兼務を仰付けらるゝに至り、有爲の技術家として大に其前途を囑望せられてゐる。人格高潔にして思慮周密、人に接するに城府を設けず云ひ知れぬ親しみと尊敬の念を懐かしむる明るき性格の持主である。趣味とせる圍碁、テニス、撞球等に其情操の豊かなるを見せ、才色兼備の君子夫人と團圓の家庭を營んでゐる。

宮崎三之助

明治五年九月生
東京市本所區小泉町三四
電話本所四〇四三番

其八面玲瓏たる才幹を以て、政界に法曹界に、將た亦實業界に行く處として可ならざるなき我が宮崎三之助氏の如きは、蓋し棟梁の材たるを失はぬ。氏は富山縣の人、夙に青雲の志を抱いて明治法律學校に學び日夜法學の専攻に身を委ね、明治二十五年優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に法曹界の登龍門たる判檢事及辯護士試験に應じて見事に合格した。後七尾地方裁判所の判事を振出しに木更津地方裁判所の判事を経て、千葉區裁判所監督判事となり、至公至平、能く善惡の是非を裁決して人望あり、名法官の榮譽を恣にしたものた。後官を辭して辯護士となり、千葉縣木更津等に出張所を設けて一般訴訟事務に執筆し、明哲なる頭腦、深遠なる學殖、卓犖風發の辯、火をも踏む俠氣等を以て法曹界に頭角を抽ぶるに至つた。氏は又激務の傍ら公共に心を用ひ、衆望の歸する處推されて本所區會議長に擧げられ、更に東京市會議員にも選ばれ、大に其特異性を發揮して市政の刷新と向上に専念し、大に其英才を讃へられてゐた。之より先き氏は大正九年以來衆議院議員に當選して議政壇上の花と謳はれ、政友會の重鎮として政治的生活に輝かしい光彩を放つてゐる。此外氏は實業界にも其驥足を延べて會社銀行等へ關係し、現に相生無盡會社の社長として重きをなしてゐる。人となり豪放磊落、一片稜々の氣骨を有し、正義の爲には何物をも恐れざる氣魂の持主である。夫人ヨシ子は貞淑の譽れ高く二人の間長男鐵三氏、二男龜之助氏、長女佳代二女喜美子の二男二女がある。

梅原寅之助

明治十三年二月一日生
府下岩淵町稻村

産業組合の發達は國家經濟の上から見ても、亦産業それ自體の發展の上から見ても、誠に必須の機關である。此處に着眼して多年各地産業組合の發達に意を注ぎ、卓越せる學識と無限の蘊蓄とを披瀝して、絶大なる貢獻を残して來た人に、現東京府地方農林主事たる梅原寅之助氏がある。氏は舊都を去る程遠からぬ京都府阿蘇郡志賀郷村に産れ、山紫水明の裡に人となつた。かうした自然への接觸は遂に氏をして將來農林界に身を立つべく決心せしめ、早くも京都農林學校に入つて其蘊奥を究め好成績を以て、卒業した。併し飽く事なき氏の學究心は、尙も氏を驅つて京都法政學校に入らしめ、經濟學を専攻し優秀なる成績を以つて卒業するや、直ちに愛知縣に聘されて技師となり主事を兼ねて、同縣農林界に大いに盡す處があつた。後山口縣技師兼主事を經て新潟縣に赴任し、此處にも亦技師兼主事を拜命し農林事業に貢獻せしは勿論又産業組合の發達に獻身的努力を致し引いては同縣産業發展の誘引をなしたと聞く。かくて大正十四年六月地方勤務には餘りに惜き逸材なるを認められ、東京府に聘せられて地方農林主事となり、産業組合の監督指導の任を兼ねるに至つた。氏は單なる一官更でなく、寧ろ經濟學者として産業政策に無限の蘊蓄を見せてゐる。氏の執筆に成る著書の中に、産業組合手引、農家出納簿、都市産業組合談、良吏等あり、其の他新聞雜誌等に氏の研究發表に成るものが非常に多い。以上の事から見ても氏が如何に學識に秀で、ゐるかを窺ふに足る。氏は諧曲に興味を有し、夫人友子との間に二男一女がある。

金田仁三郎

明治十年十一月二十一日生
淺草區聖天橋町五

人の心に正義を宿した時は神を宿したと等しく、神に守護されして安全である。人若し過まつて不義不正を宿した時は直ちに神罰を受けるであらう。神には手がなくとも、よく人間を罰し得る力があつた。即ちそれらの現象に通じて——人は愛を宿す者は慰みを得、正義を宿すものは神を得、神を宿したものは不安がなかつた。神は愛であり正義である我金田仁三郎氏はこの正義感の横溢した稀に見る奮闘兒である。氏は埼玉縣幡ヶ谷町の産、齡五十にして尙青年をしのぐ澁潤たる氣象の持主である。氏の全身には愛國の血潮が充滿してゐた。世界列強の興亡盛衰の歴史を緝けば、そこには偉大な青年の力が潜んでゐる。社會の健全な發展も國家久遠の理想も、一に青年の一致團結と、その各自の修養とに俟つことが頗る多い。茲に着眼した氏は、自から率先して町内青年の奮起を促し、當時有志會と稱した町内社交團體を青年團に改め、その基礎を固めて東京市聯合青年團に加盟遂に現在の如き青年團の發展を導くに至つた殊勳者である。そして「健全なる精神は健全なる身體に宿る」と氏は専心青年の體育に力を注いだ。即ち青年團の創立と共に同團に運動部を設立して町内青年の運動熱を鼓吹し自からその主任となり現在に至るまで體育の獎勵を圖つてゐるが、この眞面目な氏の活動は町内一般の感謝愛慕の的となり、遂に聖天橋町青年團分團長の要職に推され、亦同町會の理事にも選ばれ、専ら社會の公共事業に奉仕してゐる。家庭にはきく子夫人との間に一女あり、和氣霽々として漚つてゐる。

眞下鶴次

明治二十八年二月二十五日生
府下千駄谷町原宿三一五

高等師範出の秀才、少壯有爲な國民教育者として令名を斯界に馳せてゐる我が千駄ヶ谷尋常高等小學校長たる眞下鶴次氏は、群馬縣勢多郡粕川村の産んだ逸材である。氏は早く身を教育界に立てんと志し、大正四年群馬縣師範學校を卒業するや、直ちに同郡新里小學校に教鞭を執り、次いで筑井小學校に轉じたが、此の間氏は體育の兒童にとつて必要な痛感し遂に筑井小學校をして體育に於て縣下右に出づるものなき迄に至らしめたと云ふ。氏は又職の余暇を以て營雪の功を積み、體操檢定試験に合格し、母校たる群馬縣師範學校の教諭となつた。併し氏の向上心は氏を驅つて廣島師範學校に學ばしめ、卒業したのは大正十一年の事であつた。かくて氏は神戸市に聘されて暫く視學として手腕を振つてゐたが、進んで高等師範學校の研究科に入り、此處にて教育學の最高學理を究め、學成るや東京府南葛飾郡の聘に應じて視學となり在職二ヶ年、此の間氏は大いに郡内の體育の向上をはかり、又小學校を公開し、或は學科に優秀なるものを一校に就いて一二學科づつ郡民の前に公開して其の批判をあほぎ、異數の成果を修め、其の他理科研究會を組織して、時代に順應すべき科學智識の普及に力むる等其功績は牧學に遠かない。かくて十五年七月高等師範出の深奥なる學識を以つて再び國民教育の衝に當り兒童の個性を尊重し、或は自發的に學習を奨励兒童の克己心を養成する等大に成績の見るべきものがある。氏は近い内に府より洋行を命ぜられる様になつてゐると聞く。趣味は運動と讀書であつて、稀に見る圓滿な人格の所有者である。

田村慶雄

明治二十一年三月十九日生
府下入新井町新井宿二八八

降雨一度び至るや目黒川流域は忽ち氾濫して附近居民の蒙る被害と慘狀とはまことに言語に絶するものがあつた。今や東京府では之等の慘害を除くべく莫大な費用と日子を要して目黒川改修工事を進行しつゝあり而かもこの緊要重大なる事業の施行に當つて學識技能共に應内隨一の稱ある我が田村慶雄氏を特に選拔擔任せしめたことは當に適材適所といふべきである。氏は栃木縣足利郡御厨町を其の懐かしき搖籃の地となし、幼にして才智は業に勝れてゐた。明治三十八年拔少の成績を以て開城中學を卒へ、更に熊本高工の土木課に營雪の功を積んだ。同四十三年同校卒業後一年志願兵として中野電信隊に入營し、陸軍工兵小尉に任ぜられたが除隊と共に淺野總一郎氏の經營に係る水力電氣埋立業に従事して、同社に止まること實に十三年間、天稟の才能を發揮して幾多の功績をのこした。特に埋立工事完成の功績に就ては今尙斯界の一話柄として稱讃の的となつてゐる。大正十四年東京府の招きに應じて同社を退き東京府技師を拜命して土木課に勤務することとなつた。かくて官吏生活に入つた氏は當初都市計畫係として多年の蘊蓄を傾け新人としての名聲を擡にした。就任後僅かに三箇月にして囊中の蘊蓄は忽ち認められ、十五年一月現在の目黒川改修工事事務所勤務となり精勵今日に及んでゐる。性温厚にして篤實人に接して城府を設けず而かも流石に世路風霜を経た苦勞人丈けあつて至つて民衆的な明るい感じの所有者である。盆栽カメラに深い趣味を有する處又一面情の人たるを見るべく家庭には夫人嘉久子との間に一女あり至つて圓滿である。



岩村寶作

明治十一年五月四日生
府下駒澤町上馬引澤一〇五六

キリスト教は愛を以つて生命としてゐるが、實際これ程人生にとつて尊いものはあるまい。如何に才能に秀で學識天下に冠たるも、愛なき人生は只一個の土塊にも等しいものである。眞の愛はよく猛虎をも制し、如何に卑劣非道なる人間でも、純眞な愛の前には柔順なる僕となるものである。眞の教化は先づ愛より發せなければならぬ。我が岩村寶作氏の如きは誠にその人であらうか。氏は福岡縣遠賀郡香月村の出生であるが早く東京に出て青山師範學校に學び、明治三十五年優秀なる成績を以つて卒業し、直ちに職を郡部の小學校に奉じたが、教育者としての非凡なる才能と高潔なる人格とは忽ち世人の認むる所となり、半込區長の懇望に依り、一年餘にして同校を退き、早稻田尋常高等小學校に聘された。在職三年、其の間拔群の成績を上げ得た事は勿論、兒童研究會の囑託となり、山ノ手兒童の生活と心理状態とを具さに研究し、同會の爲に大いに裨益する處があつた。後淺草區松葉尋常小學校に轉ずるや、更に下町兒童の心理状態を攻究し、兩者の比較研究を發表して大いに斯界に貢獻する處があつた。かくて明治四十二年三月澁谷高等小學校長となり、以來十有八年間精勵一日の如くして今日に及んでゐる。氏は教育界稀に見る謙讓有徳の君子人で、而かも兒童を愛撫すること恰も慈父の如く、偶々兒童の病める時は自ら親しくその病床を訪れて之を慰め、日露戰役當時晝夜を忘れて出征家族の慰問に奔走せるが如き、氏の愛の輝きと其崇高なる人格の片鱗とを窺ふことが出来る。

内田勇太郎

慶應元年七月三日生
神田區仲町一五九番
電話下谷一四五一番

機會を掴むと云ふ事は成功の秘訣である。只徒に膏汗を搾つた所で機會を掴むの明に缺けてゐたら、徒勞に終る事は當然である。併しこれはいひ易くして爲し難く、たゞ其の人の機智先見の閃きに依つて得らるゝものがあり、加ふるに勇往邁進不撓不屈の精神に依つて始めて成功の榮冠は得らるゝのである。今は時めく鐘詰製造業界の重鎮内田勇太郎氏の成功の如きは其の好例である。氏は慶應元年七月東京府下南多摩郡元八王子村と云ふ、八王子在なる一寒村に呱呱の聲をあげ、青年期迄を郷里に過し機業家として其の地方に相當重きをなしてゐたが、鑑みる所あつて明治二十五年郷土を後に上京し、旅籠町に鐘詰製造業を始め、小規模ながら工場を設けて雄々しくも獨力を以つて斯界へと乗り出たのであつた。併し機を捉へるに敏にして、需用者の心を心とする氏の營業政策は、忽ちにして滿都の歡迎を受け、次第に發展に向つてその速度を早めて行つた。加ふるに氏の勇往邁進不撓不屈の精神は、あらゆる荊棘を拓きて遂に今日の盛業を示すに至らしめたのである。今や氏は鐘詰製造の外に福神漬、海苔、佃煮製造及び飲料水製造、洋酒一般の問屋業をも兼ね、年産額は實に百萬圓を突破してゐる。これより以前旅籠町に於ける店舗の狹隘を感じ、明治三十九年現在地に移り、店舗工場の大擴張を斷行した。現在同店の使用する職工五十餘名、店員三十餘名で、その販路は東洋全般に渡つてゐる。氏は又東京信川銀行監査役、東京酒類食糧同業組合評議員東京鐘詰同業組合評議員、大日本鐘詰聯合會幹事として、同業の共同的進展に盡してゐる。



龜山幸次郎
明治十七年十月二十四日生
芝區白金志田町一
電話高輪一八七六

バルブ、コック、水栓類製造業者として、其の製産額に於て、其の製品の優良にして而かも精巧堅牢なることに於て、斯界に覇を以て稱せられつゝある我が龜山幸次郎氏は、明治十七年十月二十四日を以て栃木縣安蘇郡野上村字白岩に生をうけた。氏は明治四十一年の二月迄この地の父母の膝下にあつて家業に勵んでゐたが、燃ゆるが如き進取向上の精神は、遂に氏を驅つて雄々しくも單身上京せしめた。氏は先づ警視廳巡査となつた。併しそのまゝ始終するのは氏の志ではなかつた。即ち氏はこの職にある間にありてよく事業の性質を研究し、將來進むべき有利の地を得やうと苦心してゐた。そして工業界の前途多望なるを洞察し、遂に意を決して其職を辭し、先づ工業界に乗りだす準備智識を得る爲に芝區本芝三丁目なる高島工場に入つた。かくて此處にて完全なる工業的智識と伎倆とを得るや、大正九年二月遂に獨立して工業界に乗り出した。當時氏がこの爲に下し得た資本は僅に三千圓餘に過ぎなかつたが、不撓不屈の精神と高島工場時代に得た伎倆と智識とは、氏をしてバルブ、コック、水栓類製造に優秀なる成績をあげしめ、市内は勿論地方府縣に迄も販路を廣めしめた。現在東京市水道局、澁谷水道、其他目黒江川水道等に於て使用せるものは皆氏の製造に成るものであると。大正十五年には事業の大擴張を計り、現在では職工八十人を有し、製産額八萬圓に及ぶ程の大會社となつた。氏は日露の役に従事し、功績に依り勳八等にも叙せられてゐる。夫人をよね子と云ひ、三男一女がある。



今井兼矩
明治二十年六月十三日生
府下淀橋町角管二六八番地

氏は岡山縣士族で、御津郡馬屋下村を播磨の地とし、柔かな、そして明るい氣分を以て充されてゐる風光明媚な瀬戸内海の邊に人となつた。夙に學序を経て中年の頃まで郷里に燻つてゐたが、一生を草深い田舎に終止することは人一倍血の氣の多い氏の到底忍び得る處ではなかつた。かくて前途に輝く希望を抱いて上京したのは明治四十五年で、實に氏が二十六歳の時であつた。最初臨時雇として職を東京市役所に奉じ、超へて大正二年六月には雇として市區改正課に、更に同三年十二月には轉じて用地課に勤務することになつた。爾來同課にあつて陸軍省委託道路架設事業に従事し、専ら市區改正第二期速成事務を擔任して功勞があり、同八年六月には事務員となり、格動其物のやうな奮闘を續けて行つた。そして彼の江戸川筋の改修工事や、相生橋改築工事等に關しては主として其整理に任じて貢獻する處極めて多く、次で第三期市區改正が行はるるや、自ら現場に出張して之が調査に任じてゐたが、大正十年轉じて地理課に入り、大に天賦の才能を發揮して職務に精勵した結果、其頭才は忽ち認められ、遂に翌年には抜擢せられて第二用地掛長に進み、大正十二年には第一期上水道擴張工事に盡瘁し、更に本年三月には公用地境界調査事業を完成する等、過去十有五年に亘る其功績は炳乎として定に没すべからざるものがある。氏は意志の人であり又熱の人で、殊に世路風霜を嘗めた苦勞人丈けあつて、何處となく優しい、そして美はしい愛情の閃めきが宿つてゐる。家庭には長女幾重次女喜代子があり、常に和氣藹々として清福に充たされてゐる。



菅野茂
明治二十年十月三十日生
京橋警察署官舎

曾つて獨逸の廢帝カイゼルは、完備せる吾が國の警察制度を批評して「過去數百年間に培れた傳統的武士道精神が、斯く世界に範たるの制度を生んだ根本的主因である」と讚嘆した。げに複雑なる社會生活の渦中にあつて、治安維持の爲めに日夜寢食を忘れて、國家社會に奉仕する吾が警察官の態度は、武士道的精神の發露でなくてはならぬであらう。吾が菅野茂氏は、それ等の人々の中にあつて、典型的人物としての聲望噴々たる人である。氏は福島縣、伊達郡大田村の産、明治三十一年長野縣巡査を拜命して、警察官としての第一階梯を踏み出したのであつた。同地に留ること四星霜にして、岩手縣に轉じ、更に明治三十六年には愛知縣への出仕を命ぜられ、官界常なき浮草の地方廻を續けたのであつた。併し斯く多忙な官界生活に於ても、朝心鬱勃たる氏は日夜勉學に努力して、毫も倦む所なく、英語練習生となつて、新時代の警察制度研究に没頭し、非凡な才能と、透徹した理智とを以て、警察界の新人と謳はるゝに至りそのゆくところ可ならざるはなきの手腕を現した。かくして明治四十四年五月には異狀なる拔擢に依り、警視廳へ招聘されて、警部補となり、後年檢非違使の好典型として謳はるゝに至つた。かくて、警視廳に於て英才を認められた氏は、早稻田、大平、高輪各署を経て、十年七月には府下五日市署長に榮轉し、次いで世田ヶ谷、寺島の各署長に歴任、その功に依つて十四年五月警視に昇進、帝都の最繁地たる北紺屋に次で向島署長の椅子を占め、爾來民衆と警察官との接觸に腐心して偉功をたてた。夫人朝子との間に二男あり圓滿な家庭である。

佐藤茂助
明治十七年十二月十日生
府下日暮里字渡邊一〇四〇
電話下谷六〇一八番

悠然と水に浮ぶ水鳥の脚には、寸刻も休息のない不斷の努力がある。我が佐藤茂助氏は此尊い努力によつて今日の地位を築き上げた所謂力行の人である。氏は新潟縣柏崎を其の懐しい播磨の地とし、夙に笈を負ふて東都に出で日本中學に學び、卒業後直に第七高等學校に入學した。明治四十一年同校を首尾よく卒業して更に東京帝國大學工科大学に入學し、建築科を専攻すること三星霜、明後四十四年七月優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に技師として職を陸軍省に奉じた。之れ實に氏が實社會に乗り出した最初の一步である。以來職に止まること十ヶ年大正十一年轉じて警視廳技師となり、多年の尊い経験と、蘊奥なる學識とを以て其職に勵み、名技師の名を恣にしたものだ。偶々大正十二年九月一日未曾有の大震災災に遭遇し、帝都を始め横濱其他の都市が一朝にして見る影もなき焦土と化し終るや、茲に帝都復興の議起り、優秀なる人材技術家の多くは悉く復興局に蒐集せらるゝに至つた。當時氏も其卓越せる技能を認められ、翌十三年六月復興局に招聘せられて技師となり、大に天稟の才能を揮つて建築事務に執掌したが、囊中の金は忽ち認められ、後幾何もなく拔擢せられて、建築部技術課長となり精勵今日に及んでゐる。資性潤達にして明晰なる頭腦と宏量なる襟度を有し、而かも篤學にして勤勉、忠實にして熱心なる模範的技術家である。家庭には夫人との間に一男三女がある。極めて圓滿で氏の精勵と格闘とは、此麗しい家庭から萌え出づるのである。



大河内 治郎

明治四年八月十四日生
本郷區眞砂町七番地
電話小石川 五二一八番
三〇三〇番

本邦婦人洋服業界の權威として重きをなしてゐる大河内治郎氏は、舊豊橋藩主大河内子爵の縁戚に當る大河内久成氏の二男として生れた。幼にして頭悟、夙に小學を終るや、明治二十年藝眼早くも將來婦人洋服の有望なるに着目し、親しくフランス人に師事して之が製法を學び、遂に其種與を極めて斯業を開始するに至つた。然るに當時日本婦人は徒に舊習に捉れ殆んど洋服を着用する者はなかつたが、氏の美術的創造力と卓越せる技能とは忽ち好評を博し、伊藤博文公を始め内外知名の人々の間に盛に持て囃されたものだ。かくて時勢の進運は婦人洋服の需要を來すに至つたので遂に明治二十九年現住地に廣大なる店舗を開き、別に子供洋服地並に附屬品一切の卸小賣を兼ねるに至つた。而かも其製品たるや極めて優秀にして、其販路は三越、白木、松坂屋等を始めとし、全國各府縣に及んでゐるが、就中多年氏の苦心研究になる特許品ナイトルソスの如きは、家庭必需品として頗る好評を博してゐる。之より先き氏は大正七年本郷區會議員に選ばれ、區政の樞機に參劃して寄與する處極めて多く、大正十一年同志と共に東京婦人子供洋服組合なるものを組織して之が組合長に推され、同業の發展と福祉に貢獻したことが尠くない。此外氏は震災の生きたる教訓に刺戟せられて眞砂町々會を組織し、大正十五年以來之が會長に選れ、別に本郷區兵事會議議委員をも兼ね、令名を馳せてゐる。資性潤達、稀に見る仁侠の所有者で、義の爲には敢えて水火をも辭せないと云ふ。夫人を幸子と云ひ貞淑の譽が高い。

竹 中 喜 義

明治二十七年十一月二十三日生
府下荏原郡平塚戸越九八

橋梁は近代都市の美觀上重大なる役割を演じてゐる。殊に今回空前の大事業たる帝都の復興に際しては、最も重要なものゝ一つに數えられてゐる。我が竹中喜義氏は此橋梁の設計に天才的の閃めきを見せてゐる前途有爲の技術家である。氏は日本橋に産聲を擧げた生粹の江戸つ子、父を熊次郎氏と云ひ、我國に於ける室内裝飾の權威者、多年宮内省の御用を承り、畏れ多くも明治神宮に保存せる明治大帝御使用の書棚は實に嚴父の設計製作によるものだと云ふ。又令兄保泰氏は建築士工學士として知られビルヂングの設計には獨特の技能を有せる人、此父の血を享け民家に育まれた氏が、技術者の天分を多分に氏は夙に聖學院中學を卒業後第三高等學校を経て東京帝國大學の土木工學科に入學し、専ら雪の功を積んだ。大正十年の四月氏は遂に工學士の肩書を得て東京市道路局に入り、設計課に勤務した。次いで十三年一月、復興院技師となり、翌十四年復興局技師拜命し、現職たる土木部橋梁課に勤務するに至つたのである。爾來致々として事に當り、隅田川橋梁及び永代橋の設計等に主任として並ならぬ業績を残したのであつた。苦しみを苦しみとせず自ら求めて事に當る男性的な氣質、明晰な頭腦、該博な管識、春秋に富む將來、それを思ひこれを思ふ時氏の前途は期して待つべきものがある、趣味は狩獵、投網、水泳、ボート、圍碁等だがいづれをみても男性的な氏の氣質が躍如としてゐるではないか。夫人を峰子と云ひ錢高組の相談役、錢高善造氏の令嬢であり、琴瑟相和してゐる。

中 田 直 平

明治十一年一月二十一日生
日本橋區馬喰町三ノ一〇
電話 浪花 六二〇〇番

文房具店のショウインドルにイーグル印ノートブックが飾られて居るのは誰も何處にでも見受ける所だが、同品の製造者は本編の人中田直平氏である。氏は其の出身地を中部地方は岐阜縣那賀郡今津とし、明治三十八年日露の戦雲も將に收まらうとする十月末に世直し況氣を見計つて東京に出たのが二十八歳の時であつた。それから直に紙製品の製造業を開始し、堅實巧妙な經營のもとに順調な發展を遂げ、紙製品問屋としては同業中にも頭角顯著な人となつた。そして近時例のイーグルノートを出してノートブック界に獨歩の地位を作つて居る。先年の震災の渦中に投じて工場設備は悉皆烏有に歸して仕舞つたが、直ちに復興の先鞭を附けた爲め、注文殺到の盛況を告げて増築亦増築、今日に於ては殆んど震災の盛大を凌ぐに至つて居る。氏は曩に同業組合設立の必要を説きて其の發起人となり、設立後は副組長として盡力されて居る。又思想混沌として幾多社會問題簇出の現下の狀勢に鑑み、國民思想の充實改造を計るを目下の急であるとして、氏の夢寐に忘れない故郷今津に一圖書館を寄贈して、故郷人士の修養に供した善行は、郷里の人々の感激を呼んで居る計りでなく、故郷へ錦を飾る有意義な事業として一般に賞讃されて居る。これ實に憫々故郷を忘れないうるはしない人情と、社會改造に資せやうとする奉公心の現れに外ならない。其他氏は従前に於ても幾多の公職を奉じて貢獻して居る。菅だ子なきが爲養子喜八郎氏を迎へたが、同氏亦敏慧の才を有し、目下米材輸入貿易商として盛業を示して居る。



八 木 堅 次 郎

明治十四年三月十一日生
芝區白金志田町一二番地
電話 高輪 五九二四番

新潟縣三島郡出雲崎は氏の故郷である。始め郷里にあつて建築請負業を營んでゐたが、雪の片田舎で躊躇することは、この赤い功名に燃える青年のよくするところでなかつた。都へ都へ、氏がかく熾烈な希望をつないで上京したのは明治三十三年のことである。赤い椿の花が氏の門出を祝するかのやうに二月の庭に咲いてゐた。さすがに多感な青年期の氏にとつては離別の憂愁が舞々と身にこたへたであらう。その時、氏は二十歳であつたのだ。まづ氏はさる有力な同業者の配下に屬して、技術の鍛練に致々と倦むところがなく、充分に内容の充實に力めたのである。やがて獨立すると共に、委託者の間に段々と信望を博するやうになり、力量は日を送るに認められることになつた。で次第に一方の旗頭として代表的仕事を請負つたが、その仕事の正確さと敏速さは、廣く江湖に熟知されるやうになり、長くも今上陛下近江御駐蹕所の建築をまで拜命するの光榮に浴するやうにまでなつた。氏は齋戒沐浴してひたすらに工事の萬全を期し、部下を督勵して遺漏なからしめたので、愈々その手腕を認められたものだ。更に濱離宮渡御所の工事、それから彦根御駐蹕所工事等の御下命を受け、一門の名譽をより一層深うする事となつた。なほ氏の代表的工事としては鴻池住宅、龍上寺等があり數へ来れば枚擧に遑がない。この多忙な餘閑には志田町々會幹事として町民の共存共榮に専念し、常に一身の利害を度外視して社會人としての責任を完ふすることにのみ腐心してゐる。當代に稀れな人物だ。夫人みち子との間に一男がある。

高橋 勝藏氏

安政元年三月七日生
荏原郡平塚町中延九〇六

氏は明治二十二年に町村制發布以來、この自治體の理事者として、實に三十有餘年の久しい間を只管に平塚村の向上を圖り、當時人口僅かに數百にも足らなかつた一寒村からして、今日では人口十萬餘に達するグレート平塚の建設に寄與したのであつた。氏は今は老齡ではあるが、而もなほ屈するところがなく、平塚町長として町政の至上至善に日夜腐心して倦むを知らない。おそらく夜半夢靜かなる時に、歸往を回想したならば、その辿り來た幾多の難礁が想ひやられて、しかもその難關を見事に突破してきたつたことに、限りない愉悅を感じずには居られないだらう。百萬の軍兵に號令する大將軍の位置も成功美談の一つではあるが、それは萬人の願ふべきでない出世である。眞に人世味に徹した成功とは氏の歩き來たつた現位置ではあるまいか。氏の生家は、祖先以來三百年間引續いて此地に住し、代々庄屋名主等の公職を帯びてゐたと云ふ。氏がこの祖先の尊い遺業を繼いで、十年一日の如く苦心して來たのだとは、泪ぐましい崇敬の念を抱かされる。老齡古稀を過ぐるになほ鏗鏘として自治體のリーダーとして、一線に奮闘せられるこの氣概を、後進者はまたとなき現實のお手本とせねばなるまい。なほ氏は後進の誘導に意を注ぎ、平塚町青年團を組織する等、至らざるない精進ぶりに、地方長官から表彰を受けたことは一再でない。これこそ資性濃厚篤實な氏にして、始めて成し遂げ得る業だと云へる。嗣子庄作氏は家業である農を勵み、傍ら花類の栽培を營んで、家運の隆盛をまねいてゐる。麗は人格者の集ひとして讚稱に値ひする。

大口 章次

明治十六年五月二十三日生
府下調布町下沼部沙見臺七九

氏は後樂園を以て知られた岡山市の出身で、同市七軒町に孤々の聲をあげたのであつた。岡山縣立中學卒業後は、同地の第六高等學校に入り、それより東京帝國大學工學科機械科を卒業したのは、明治四十年七月のことである。同年九月にまづ東京市技手として就任、同十二年四月に技師に進んで土木課勤務を命ぜられ、爾來致々として業務に精勵し、最も至難とせられてゐる土木關係の事業を監督して、常に遺漏なきを期してゐたのである。かくて現職たる下水設計係長として敏腕を鳴らしてゐる。抑も都市に於ける下水は、その都市の腫物である。この下水處分法の巧拙の如何は、直ちに都市の病疫は勿論美觀上にも影響するものだ。で此下水道の完成は大都市の常に念願してやまぬところである。現にわが東京市は毎年五百萬圓の豫算を計上して、その完成に力を注いでゐるが、之を歐米の先進國に比べると、その餘りに貧弱なのに驚かされる。この最小限度の費用で、最大限度の成果を得やうとするのだから、設計係員の苦心のほどは想像に難くない。其上市民の生活上に最も密接な關係を有してゐるだけに、苦情はまた續出すると云ふ有様なので、之に善處する努力は並大抵な事ではない。今設計係の内部を一瞥するならば、他所のお役人とは事變つて、勞働的な事務に没頭してゐる人々の一團を見出すだらうし、今更に氏の使命の重かつ大なるを考へさせられる。趣味は専門方面の讀書、家庭には夫人との間に一男三女があり、長女と次女は女學校、長男は明年から中學校へ入る豫定だと云ふ。

山口 和助

明治元年七月六日生
小石川區大塚仲町二六

三拾有餘年普通教育に携はり、その間更らに榮達を願はず、營々致々として自らの天職を守り、その向上發達に意を盡いで着々その實を擧げつゝあるの人に山口和助氏がある。氏は年内に梅の花咲く伊豆國賀茂郡三坂村の人であつて、幼時から俊秀儔輩を凌駕し、郷費を卒えて後、國民教育の緊要なるを知りて、靜岡縣師範學校に入學し、教育學の學理と實際に就いて大に研究するところあり、その造詣の深かつたことは、クラスメイトは勿論のこと教師に驚嘆されてゐた。明治二十六年螢雪の功を積み、同校を優秀なる成績を以つて卒業し、直ちに加茂郡下田尋常小學校主席訓導を拜命した。その後下河津三坂等の校長を歴任し、遂に下田尋常高等小學校長に榮轉し、同地方の教育について改善改革を行ひ、爲に教育法一新して同地方父兄より絶大なる信望を勝ち得るに至つた。後考ふるところありて上京し、小石川黒田小學校、柳町小學校長、麻布東町小學校長を経て、大正拾二年十二月現校長となつた。氏は兒童に對して放縱に流れない程度の自由研究を課し、實驗觀察に依つて生きたる材料を教材となし、これに加ふるに最も合理的なる最新式の教授法を以つて具體的知識を兒童の腦裡に印せしめ、兒童各自に責任を分擔せしめて自治の精神の涵養に努め、兒童の個性と相適したる中庸を得んことに重きをおいてゐる。爲に日一日と生徒の實績上り、模範校として推奨されるに至つた。資性濃厚、齡知命を越えて識見益々圓熟し、而もなほ研究を怠らない。眞に氏の如きは優秀なる國民教育者といふべきであらう。



篠澤市 太郎

明治九年十月十日生
池上町久ヶ原九六三

法華宗の本山本門寺に毎年行はれる賑々しきお會式で知れ渡つて居るのは池上であらう。其地は閑雅な野趣に満ちた田園都市が今開けて居り、目下耕地整理の眞最中で素晴らしい發展振りをを見せて居る。同町久ヶ原の篠澤市太郎氏は、池上町の自治の有力者である。由來土着の人に依つてめ回られて居る地方には、比較的家柄の古い家が多いが、就中篠澤家は此の地でも舊家で、天保時代篠澤太兵衛氏から分家した太右衛門氏を祖先とし、其後五代を経て氏に至つて居るといふ。大正六年父君長進の後を受けて家督を繼ぎ、爾來町民の輿望を得、大正九年町會の改選に際し、推されて候補者となり、見事大多數を以つて當選し、引き続き二期に互つて推選されて現在に至つて居るのを見ても、氏の人格抱負が如何に町民の信任をつないで居るかを察するに難くない。大正十三年學務委員に推された當時、池上小學校改築の議を提唱し、各方面の有力者の間を馳驅して目的の貫徹に力のたるが如き、不言實行主義な氏の面目が躍如たるものがある。發展の途上にある此の地には、かうした人材が最も渴望されて居るのは贅するまでもないが、公共福利のために奔走して厭はない氏の態度こそは自治體に於ける柱石である。氏は又崇祖の念厚く、數年前から本門寺世話人として働き、或は本堂建築に庫裡の修理に骨身を惜しまず盡力し、菩提寺の參禮を忘れないなども氏の人格の一端を示すものである。其他消防組員耕地整理委員としての寄與等も没する事の出来ない功勞であらう。家庭には母堂やい、妻女かつ長男喜一等がある。

五月女角次郎

明治十三年十一月二十日生
麻布區廣尾町六四

軍人出身の人には往々にして社會の機微に通ぜぬ憾があるが、又却つて性情透徹して事に敏き能材も多い。現芝區収入役として事務に熟練してゐる五月女角次郎氏の如きは後者として適例であらうか。氏は栃木縣河内郡古里村の人であつて、普通教育終了後、今の下野中學の前身宇都宮作新館に入學し大に努むるところあり、同校卒業後家庭にあつて父君を助け、遂に聯隊の模範と推獎されるに至つた。後日露の國交斷絶と共に、君國の爲に出征して遼東の野に轉戦し、死生の間に入出して幾多の戦功を樹てた。凱旋後も繼續して同聯隊に勤務し、明治四十年滿期除隊となつて後四十二年芝區役所に入りて水道掛となり、同年十二月書記に榮進した。後衛生掛を経て庶務掛りに進み、大正十四年には遂に収入役會計掛長に昇進した。この間大正二年には御大罪に關する事務取扱をなし、功に依りて内閣より金一封を下賜され、第一回國勢調査の際には芝區調査委員となりて内閣より金一封下賜された、なほ大正十三年労働統計實施調査に關しては労働調査委員となり、大正十四年國勢調査の際には同調査委員として大活躍し、その實績を擧げるに與つて力があつた。又關東震災當時は罹災民の配給事務に携り、不眠不休その任に當り、敏速なる配給と時宜を得た處置とは區民の皆稱讃するところとなつた。趣味として又書畫を好むと。その剛快なる性格の半面の優にやさしい心根の顯はれといふべきであらう。家庭によし子夫人があり、琴瑟相和してゐる。



柴田正光

明治九年七月三十日生
府下大井町一二七八

正七位柴田正光氏は、福島縣相馬郡鹿島町の出身である。父君も正光氏と云ひ、農を業として八十八の長壽を得たが、温良玉の如き君子人として、村民より非常な尊敬を受けてゐた程の人格者で短歌俳句等に非凡の才を見せてゐたと云ふ。氏は明治三十二年明治法律學校を卒業するや、郷里なる福島縣廳に職を奉じ、警部として衛生課に勤務し、明治三十三年には福島縣保原町の警察署長を兼任し、在職四年にして明治三十五年北海道廳に聘せらるゝ所となり、此處の衛生課長に就任した。次いで明治三十八年香川縣警部として衛生課に入り、保安課に兼任し、四十年には福岡縣警察部衛生課長を拜命し、大正元年轉じて同縣大牟田警察署長となつた。かくて大正三年三月上京して警視廳に入り衛生部に就任し、よく職責を全ふし其の功勞に依つて賞勳局より金二百圓を賜り、又御大典の折は警察事務を執つて大禮紀念章を賜つた。大正五年職を貴族院に奉じて大正十年八月再び警視廳に戻り、十二年東京市に入りて保健掛長となり、十三年には現職たる防疫掛長に進み、掃除監督を兼任するに至つたのである。其の他大正八年貴族院法發布に際し、功勞に依り銀杯を賜はりし事、第一國勢調査の調査委員を勤めて紀念章を賜はりし事、震災の功勞に依つて表彰されて事等も、氏の經歷を語る上に没すべからざる事である。氏は又社會公共自治に貢献する處極めて多く、今日迄に各種團體會合の委員を囑せらるゝ事五十有餘回の多きを以つてしても、その全班を窺ふ事が出来る。益裁と大行を好み、夫人菊子との間に一男がある。

笠原傳二

明治二十一年六月二十一日生
芝區三田松坂町三六
電話高輪二三二五番



徒手空拳を以て今日の成力を贏えた笠原傳二氏は、創始の才と統御の徳を備へた稀に見る奮闘兒である。氏は横濱の生れで、郷費を出づるや、將來自己の進路を工業に求め、同市四國町能勢工場に入り、専ら技術を修得すると共に、粉骨碎身の努力を敢えてし、主家の爲に大に忠勤を抽んでたものだ。即ち同工場今日の盛業は一に氏の力に負ふ處が極めて多しと云ふ後兵に召されて甲府聯隊に入營したが、能く軍紀を守り而かも成績が極めて優秀であつた爲、忽ち抜擢せられて上等兵に累進した。除隊後大正三年獨立して現在地に工場を設け、瓦斯應用諸金屬銻接の新しき事業を開始するに至つた。是れ實に我國に於ける嚆矢で、而かも此新しき試みは氏の卓越せる技能と相俟つて逐日隆盛に赴き、遂に今日の大をなすに至つたのである。其間氏は同業者を糾合して酸素組合を起し、組合の發達と組合員の福社を増進した爲、特に組合賞を贈られた程だと云ふ。氏は又公共の念極めて篤く、現に松坂町々會幹事として、常に中正穩健なる態度を持し、同町會の中堅人物として衆望を一身に集めてゐる。此外大正八年創立以來松坂町青年團長に、更に大正十三年より芝區在郷軍人會評議員等に推され、青年及在郷軍人の指導に任じて毫も倦む處を知らない。氏人と爲り清廉斗酒敢えて辭せざる強の者で、而かも正義の念極めて強く、義の爲人の爲には水火をも尙ほ且怖れざる大なる氣魂の持主である。家庭には夫人さよ子との間に五男あり、常に和氣霽々として團樂の樂に浸つてゐる。

山本榮男

府下大崎町居木橋七
電話高輪一九五三番

東京横濱間に初めて汽車が開通したのは明治五年であつた。然るにそれから僅々五十有餘年の間に全國に鐵道網が張られ、如何なる寒村僻地と雖も汽笛の聲を聞くやうになり、之を往時に比較すると殆んど隔世の觀がある。かくも鐵道が長足の進歩發達を遂ぐるに至つたのは、鐵道に關する諸機械が、殆んど自給自足の域に到達した事が大なる原因をなしてゐる。その製作工場の優秀なるものとして、是非共我が合名會社山本工場を擧げなくてはならない。同工場は現在工學士山本榮男氏の經營で、大正二年の創業に係り、同十三年三月組織を變更して合名會社としたものである。現在は鐵道省の指定工場で職工百餘名を役し、信號機を始め、聯動機、轉轍機、轍又轉轍機各種彈簧等の専門製作に従事し現在年産額五十萬圓を越ゆると云ふ。氏は剛毅果斷機を見ること頗る敏にして又内に豊かな情操を著へてゐる。信號機及び轉轍機は汽車の眼であり脚である。一朝これを誤るときは未曾有の大椿事を惹起するに至る。氏は夙に此方面の緊要一日も忽にすべからざるに着目し、之が改善に全力を傾倒し多年の蘊蓄と經驗とは氏の發明的天稟の才と相俟つて遂に今日の優良なる諸機械を製作するに至り、事業日々に殷盛を極むるに至つたのである。現工場長山森廣次郎氏は元鐵道省技師にして大正六年技術長として入社、同十二年工場長に就任現在に及んでゐる。その豊富なる經驗と該博なる智識とは統御の才と相俟つて工場主山本氏を補佐し一段の光彩を添へてゐる。



安 東 功

明治二十年二月十七日生
府下馬込村東九八五番地

帝都復興——これこそ全市民の齊しく渴望する熱烈なる叫びである。この一大難事業の完成に向つて、多年の蘊奥を傾注して日夜努力を重ねてゐる人に吾が安東功氏がある。氏は詩歌に幽遠を蘊はれしみちのく蔵玉山のほとり山形縣天童町に生を享けた。嚴父武氏は天童藩の槍術指南役として夙に謹厳實直を以つて知られてゐた。氏は親しく其膝下にあつて薰陶せられ幼時より秀才の譽れが高かつた。小學校を卒へるや仙臺に至り第一中學校を明治三十八年卒業し更に明治四十三年熊本第五高等學校を優秀なる成績にて卒業した。斯くて氏は、他日雄飛すべき天地を土木界に求め、造々笈を負ふて上京し、帝大工學科土木部に入り、孜々として眞摯なる學究を續け、大正二年目出度同校を卒業するや直ちに迎へられて東京市電氣局に入り、翌三年六月市水道局擴張課に轉じ、大正七年内務省第二技術課に榮轉した。此間氏は新進の學識と卓越せる技能を隨所に發揮し、名技師として盛に持て囃されたものだ。斯くて同省大阪土木出張所を振出しに秋田土木出張所を経て大正十三年三月遂に復興局第三出張所工事課長の重職を贏ち得るに至つたのである。而かも氏の鮮かなる手腕は茲に於て益々光彩を放ち、その偉大なる抱擁力と相俟つて上下の信望を一身に集めてゐた。越えて十五年土木部道路課技師となり、鋭意路面の改良と技術的考察に最善の努力を拂つてゐる。氏は資性温順にして明晰なる頭腦と謙讓の美德を有し而かも一面諷曲に趣味を有する處氏が愛情の縮圖とも見るべく、兼ねて園藝を愛し撞球に長じてゐる。夫人トヨ子との間に一男二女がある。

柴 山 政 愛

安政五年二月生
東京府下大久保町

土に無限の愛を求め、一木一草に大自然の姿をなつかしむ園藝家の生活は、又となく清いものである。我が養菊界の權威として知られてゐる柴山政愛氏が、宛然傲霜の菊花にも比すべき崇高な人格の持主たることは、寧ろ當然の事である。氏は高知縣香美郡岩村を其懐しい搖籃の地とし、明治三年柴山家の養嗣子となつて上京したのは、年少十三歳の折りで、爾來各所の私塾に孜々として螢雪の功を積んだ。後丸龜歩兵聯隊に入營し、特に拔擢せられて憲兵上等兵に進んだが、時偶々養父の逝去に遭ひ、遂に退役して家督を相続すべく餘儀なくせられた。以來閑地に游悠して土に親しみ草花を友として清境に浸つてゐたが、曾て父君が扶桑の峰と云ふ名花を新宿御苑に献上した事に、少からず興味を感じ、養菊に對する特種の研究を始めた。そして氏の手栽培せられた苦心の菊花が各地の展覽會に出品せられるやうになつたのは、それから間もない後の事であつた。爾來賞を受くること數知れず、而かも秋香會創立以來の有功會員で、現に審査員の要職を占め、斯界の第一人者として令名を恣にしてゐる。之より先きは明治二十六年大久保村會議員に選ばれ、次で豊多摩郡會議員となつたが、更に三十二年衆望の歸する處推されて大久保村長となり、町制施行に至る十有三年間を在職し、自治の礎を磐石の安きに置くに與つて大に力があつた。今も尙ほ養菊の傍ら町會議員として町政の樞機に參して倦む處を知らない。息留七郎氏は氏に似て聰明、現に三井物産大坂支店に勤務してゐる。



西 谷 常 太 郎

文久三年四月生
本郷區富士前町四十九
電話 小石川 三三三三

氏は肥前國長崎市の出身に係り、明治七年十二月長崎市の勝山小學校を卒業した。當時西歐文化の最も早く移植された同地には、文部省直轄で經營されて居た長崎英語學校なるものがあつて、將來の飛躍榮進を夢見る青年の子弟や、名家權門の英才駿童は競つて同校に學んだのであつた。氏も同様直ちに之に學んで嶄新語學術を討究して居たが、不幸明治十年同校の慶校の運命に陥つたので、轉じて長崎中學校に學び、引き続き琢磨研鑽して三ヶ年に及んだが中途上級學校に轉校する目的を以て上京して、明治十四年も櫻庭の四月の頃、當時の最高學府であり現帝大の前身である工部大學に入り、化學の研究に没頭し、在る事二ヶ年、家事上に支障を生じて十六年六月涙を吞んで退校したのであつた。爾來社會の第一線上に闘ふべき人となつて直に石川島造船所に入社し、實務に従ふこと數年、同社が株式組織となりて益々社運興ると共に登用を受けて果進し、遂に理事の重席に置かれるに至つた。大正十二年停年に達したが、十四年六月には造船所幹部の推舉に逢ふて監査役の職に復する事となつた。老けいよゝゝ意氣昂り、昔日の様な熱と圓熟した技とを以て専心社務に執掌して居るが、之に先じて大正七年には月島鐵工株式會社設立と共に、監査役に就任して居る。斯様に事務多端の中にも自治には可成り奔走し、十五年には富士前町々會長の椅子に據つて町内和衷協同の實を圖つて居り、勤儉獎勵委員等の公職をも佩びて居る。温良事理に徹し、謙讓有徳の士として衆の信任も篤い。妻をしづ子と云ひ、子女何れも將來を囑されて居る。



根 本 欣 信

明治十年四月三日生
本郷區春木町二の四九
電話 小石川 六六六一

時代は何時も青年のものでなければならぬ。もしこの事實に逆行してゐるとすれば、それは憂慮すべき現象として心せねばならぬ事柄だろう。あの明治維新のレポリューションに活躍した志士は、何れも春秋に富む青年ばかりであつた。また國難を告げた日清日露の兩戰役も、なるほど指揮者の功は顯著なものがあろうけれど、數十萬のわが兵卒の祖國に殉ずる熱情が國家の危機を救つたのである。その兵卒こそ皆二十五歳前後の若い青年ではなかつたか。それを思ひ之を思ふと、日本文化の建設者は實にわが青年諸君であつたのだ。茲に目覚めて今や青年團の組織せられない町とは少く、若人の熱と純心のたぎるところに共榮共存の美風が興り、救世の實が擧がらうとしてゐる。畏くも聖上國母兩陛下は、昨十四年度に銀婚の御盛典を擧げさせ給ふに當り、全國青年團に對し御内帑金を御下賜あそばして、今後層一層の活躍を希望あらせられた。此意義深い青年の集ひ春木町青年團の成立に盡力して、久しくその團長として指導の任に當つたのはわが根本欣信氏である。氏は千葉縣市原郡菊間村の出身で、故郷の中學校を卒業後は志を立て、上京し、勉學を續け、數年後に日本國際株式會社支部の重役として手腕を揮ひ、その後は東京島屋業組合長として同業者並に愛護家の間に好評を受けてゐる。なほ外に震災後町會設立に奔走して爾來副會長に推舉せられ、また市勢國勢調査委員等の數多い公職に就いて、公人生活の完璧を期した。本年五十歳、今後の飛躍は囑目すべきである。夫人八重子との間に二男一女があつて、靜謐な家庭愛に和樂を告げてゐる。

二階堂西吉

明治十八年八月三日生
芝區新堀町三十一番地

よく家を齊へ産を治むる人であつて、始めて隣保共睦、自治進展の礎石を築く事を居るものである。芝區新堀町青年團理事の二階堂西吉氏は常に實踐躬行致々として家業に努め、一身一家を齊ふると共に隣保親睦の事に當つて衆の信任を受けて居る。氏は埼玉縣入間郡宮寺村の人で、夙に郷里の小學校を修めて家に在つたが、青雲の志を抱く人の山間僻地に老るべくもなく、遂に明治三十二年の頃上京して芝區新堀町の薪炭商近藤商店に入り、ひたすら業務に努め主家の爲めに働いた。そして茲に五ヶ年の星霜を閲し、同店を辭して獨立營業に着手し、爾來専心家運の隆興を念ふて霜を踏み星を載いて飛び廻り、其の活動と努力とに依つて足らざるを補つて節素勤儉し、着々進運に向ふや、自家一身の繁榮に満足せず、町内各戸の共同的發展と社會融和親善の必要を感じ、常に心を公共の事に馳せ、先づ同業者間の有志と謀り、薪炭業者の集合より成る甲子會を組織して、之が副會長たると同時に城南支部の代議員として同業者のために大に盡す所があつた。又幸橋稅務署管内同業者營業稅共同申告交渉委員として、官民の間に立ちて圓滿に事を處理する等奔走至らざるなく、此を以て曩に農商務省から囑託せられ、全國薪炭生産販賣の狀況視察員として大いに力を添へた事あり、同業間の有力者として多大の尊敬と信望を聚めてゐる。其の居住地の新堀に青年團理事として同團の成立發達に對して甚大な努力を拂ひ、常に青年子弟の善導に努めて倦む所がない。氏資性温良にして謙讓功を語らず黙々公事に力を致す所、亦稀に見るの人と云ふべきである。

倉地鈴吉

慶應三年十二月九日生
本郷區曙町十四番地
電話 小石川 三八二九

君は府下南多摩郡成瀬の寒村に生れた、幼時小學校を終えて、漢學塾に孔孟の教へを修め、誠意爲仁の一語句よく若かつた君の心を涙ぐましい迄に動かしたものがあつた。時に或は流涕滂沱、講義の師をして思はず感激の聲を發せしめたと云ふ。かく君は熱情の少年であつた。赤い血潮は、その脈搏に波うち、十五の少年の言よく人の肺腑を抉る程のものがあつた。かくて、師の寵を一身に蒐め、將來を囑せられるとともに、その名四隣にひろまり、遂に東京府の士族倉地氏にのぞまれて養子となり、その姓を冒すこととなつた。こゝに君は明治二十四年七月銃砲器の製造を見習ひ、更に火藥賣買業の免許を得て、本郷新花町に店舗を開いたが、當時、隣邦支那に革命が起り、日本の輿論は又上下をあげて紛々たるものがあつたので、君亦、宮崎滔天氏等と共に難を冒して銃器の輸出をなすなど、その任侠的精神の一發露といへやう。君今や本郷區會議員として區政に參畫する外、大正七年以來本郷區湯島小學校保護者會幹事となり、又同八年には本郷區衛生會商議員、本郷區兵事會議評議員、水道橋稅務署營業調查委員たる外、國勢調査の時には自ら印刷物を撒布して、その調査に遺漏なきを期した事があり、又大正十四年七月には、徳富蘇峯氏の國民小訓三千部を全國の小學校青年團に寄贈したる等、美談とすべきもの枚擧にいとまがない。何れも君の人となり物語るに充分なものであらう。今や社會の風教地に隨ちて利の爲には何事も取ぜんとするの状ある時、氏の如き人士が自治指導の任に當らるゝは、實に國家の福社であると思ふ。



大賀永次郎

明治十六年一月十六日生
戸塚町字源兵衛二二五

東都の畫壇に正耕の號を以て丹青の靈筆を誦はれて居る我が大賀永次郎氏は、情緒の街長崎市館内町の出身である。環境のいろいろな事情は早く氏の藝術的天分を陶成して行き、十一歳の折り界限の漢學者笹小黙翁に師事して漢籍の素養に努めたが、當時既に繪心付いた氏は、讀書の傍ら心の赴くまゝに畫筆を揮つたものだ。後彼の露國皇太子來訪の際献上繪畫の執筆者たる光榮を擔つた松尾耕雲翁の門に遊んで愈々精進を累ね、天賦の技は年と共に益々磨かれて行つた。偶々明治三十六年海軍兵に合格して海兵團に入り、越えて三十七八年には旅順望樓に勤務して、信號助手として史上名高い海戦に武功を樹て、功を以て勳八等を授けられて居る。かくて四年の軍人生活を了へ、爾來畫道の修練に幾春秋を累ねた。大正六年上京し、一時居を閑靜なる郊外根岸の地に下し、更に大正八年現在の地に移つて只管丹青の道に精進し、目下高取稚成畫伯の高弟として出藍の譽高く、土佐派の重鎮として令名を恣にしてゐる。其の得意とする人物及び花蝶等に至つては、筆致の妙真に迫るものがある。氏はかうして純然たる藝術家でありながら、此の道の陥り易い没世間的な所がなく、常にいで、隣保の共榮共存に心を砕いて居る。亦以つて熱誠の進る所と云へやう。彼の震災直後の不安に際しては、率先して相互の警衛に任じ、之等の人々を以て成る甲子會を組織して副會長に擧げられ、爾來不斷の盡瘁をつけてゐる。家庭には妻女くま子との間に三男一女があり、長男一次君は中大に、三男長君は都文館に在り、共に秀才である。



花澤徳藏

明治十三年十二月十九日生
小石川區指ヶ谷町一四一番地
電話 小石川 三一七一

氏は千葉縣山武郡松尾町の人であつて、代々農事を家業とし、傍ら質商を營んでゐた。郷費を卒えて後、漢學を松崎塾に、數學を磯部塾に學びて大に得るところがあつたが、後八日市場の質商泉屋に見習ひとして入つた。氏の叔父が舊太田藩古屋善長氏を嗣いでゐたが、氏は懇請されて又その養嗣子となつた。然し新時代の空氣に觸れた青年の氏は、薄暗い土藏に入つて微臭い古着を出入するには餘りに熱いものであつた。そこで遂に意を決して單身東都に出で、當時都下有数の日本橋小網町堀山時計店に入つたが、後同家失敗と共に同區横山町高木時計店に入り、少時にして、之を去り、服部時計店の紹介を持つて北海道小樽岩永時計店に入つた。後徴兵適齡に達したため歸京し、府下瀧の川三軒屋に獨立開業し、爾來大に努むるところありて日を逐ふて發展し、店舗の狹隘と地の理を得てゐなかつた爲現在地に轉居し、五人の店員を使用し、同業者間に嶄然頭角を抜んでゐる。氏は大正九年同業の共存共榮を圖らんとして同業組合の創立を思ひ立ち、各方面に奔走してゐてその設立を見るに至り、推されて之が組合長となり、大正十三年に辭任したが、其功勞によりて金盃を贈呈された。氏又居町の發展と自治制の確立を志し、實業界、同志會等昔より町會に參與して力あり、目下幹事長を勤めてゐる。なほ大正拾年推されて區會議員となり、指ヶ谷町青年團支部長、區教育會評議員、市勢調査委員等各方面の公職を兼任してゐる。以つて氏の信望を察するに足りやう。とよ子夫人との間二男あり、長男は目下東京外國語學校在學中である。



戸部新吾

明治二十三年一月拾二日生
赤坂區檢町一〇番地

氏は秋田縣雄勝郡小野村の人、戸部新左衛門氏の長男である。幼時から好學の志篤く、郷費を卒して後中學校に入學し、大に研鑽に努め、將來外交官たらんことを期してゐた。然し不幸にして病を得、その學業を捨てなければならなくなつたが、明治四拾一年上京して赤坂區役所に職を奉じ、書記を拜命した。氏は事務に當つては恪勤精勵、一意専心その進歩をはかり、その熱心なる執務振りは上司の認むるところとなり、大正拾一年には擧げられて戸籍掛長なつた。かくて氏は一層の事務の刷新と進歩を圖り大に見るべきものがあつたが、大正拾參年赤坂區を辭して東京市社會局に勤務し、又ここに於てもその忠實なる勤務振りは局内に於いて聞えてゐた。大正拾五年再び赤坂區役所に復歸し、戸籍掛長に就任して今に至つてゐる。曩に大正拾二年九日關東大震災の起るや、氏は避難民の配給事務と集團バラック救護事務に當り、配給の完備普及と明治神宮外苑内に於けるバラック生活者の救護に全力をそそぎ、日夜東西に奔走して寢食を忘れた程で、赤坂區避難民は擧げて氏を徳としてゐた。氏は又輩下を指導するに丁寧懇切を極め、爲に衆の信望を得てゐる。常に深遠なる學理と教育の研究に身を委ね、教育に關しては一家の言を持ち、傾聴すべきものが多し。又和樂を好み、琴古流の尺八には殊に堪能であつて素人の域を脱してをりこの外圍葎草花を愛すといふ。皆氏の温雅なる性格の現れである。きよ子夫人との間に一女あり、掌中の玉といつて圓滿なる家庭を營んでゐる。

酒井恭次郎

明治十六年三月十四日生
牛込區矢來町八番地
電話 牛込 二三三八番

久しい間警視廳警視として管下各署の署長に歴任し、帝都の治安維持に努め、中央政府の施政の透徹に加ふる所があり、曩には又、淺草南元町警察署長として才腕を示す所あつた氏は、北陸の雄藩酒井家の支派の出で、錚々たる華胄の御曹子として生れたのであるが、よく力行琢磨する所あつて東京帝國大學法科を了へ、直ちに職を多望な警察行政に奉じたのであつた。爾來次第に才腕を認められ、警察課長より赤坂、青山、芝、高輪、四谷、赤坂表町等の各警察署長に歴任し、後淺草南元町署長に補された。此の間よく重職を完うして更に遺漏がなかつたのは、其の如何に機宜の才に長けたるかを推知するに難くない。由來都市の生活は甚だしく複雑多岐に互るを以つて、警察當局は事に當つて動もすれば民意と疎隔し、ために治安の本旨を發揮し難くして延いては警官の專横越權の非難さへ蒙るを屢々見る所であるが、世才圓滿な氏は常に官民の融和を期し、よく民意を聚めて居た。此の程長い官界生活から去つて閑地に就き、只管英氣を養つてゐる。鷹揚な調子と活潑寡慾な性格とは、奈如にも名門の出し大いささを思はせるものがあり、其在職中も部下の督勵愛撫敷きを得て、信任も厚かつたと聞く。趣味に乘馬があり、嘗つて劇務の間寸暇を偷んで遠く郊外に浩然の氣を養ふ氏を屢々見受けたものである。尙射撃を好み、是亦玄人の壘を摩する程だといふ。現下自適靜養の間、必ずやこれを充たして満悦するものがあらう。夫人奈美子、亦貞徳の節を持ち、兩者の間には守、俊子の兒女があり、家庭は常に春の如くである。

岡田道一

明治二十二年拾月三日生
麹町區上六番町五番地
電話 四谷 二六八五番

靜かに民衆の心を心となつた文豪チエホフも醫師であつた。春草會同人として知られた歌人、我が岡田道一氏も亦麹町上六番町に小兒科を開業し傍ら區内の學校衛生に非凡な腕前をみせてゐる醫師である。されば氏は枯淡無味な科學者でもなければ、寂しい病理學者のそれでもない。醫は仁術なりと云つた人の様に、大衆の心を心とした温い人間味を通して人生の脈膊に觸れ様とする敬すべく親しむべき刀圭家である。氏は京橋に小兒科専門の醫院を經營して有名な岡田延吉氏の長男であるが、生れは紀州で、多情多恨の歌人に謳はれた和歌山市が其の懐しい搖籃の地である。夙に上京して數寄屋橋々畔の泰明小學校に學んだが、獨逸協會中學から第一高等學校へと到る處に優秀な成績を収めて、京都醫科大學を卒業したのは大正六年の春まだ浅い三月の事であつた。先づ現住所たる麹町の五番町に小兒科専門の病院を開業し、天稟の才能と、該博なる智識を以て名醫師の名を擅にしてゐるが、大正八年招聘されて麹町區醫技師となり、爾來區内の學校衛生に就いて貢獻する處極めて多く精勵今日に及んでゐる。性温良にして、光風霽月の襟度を有し、稀に見る麗しい愛情の持主である。氏は激務の傍ら好きな短歌をつゞつて豊かな情懷を養つてゐるが、文藝に對しての秀れた鑑識や日本音楽に就いての深い趣味は、高潔な氏の人格に一段の潤ひと親しみをみせてゐる。夫人こと子は山形縣立高女出身の才媛で貞淑の譽が高く、其の間に一男二女あり、何れも父に似て秀才であると。

飯塚惣一

明治十三年六月一日生
府下目黒町中目黒一千番地

趣味は性格の反映である。氏が質實剛健なる半面に於て、融々たる音楽に興味を有し、自然を好愛する處に、氏としての偉大さがあり、人格的の閃めきがある。福島縣大沼郡中ノ川村は、氏の夢寐だにも忘るべからざる懐しい搖籃の地で、飯塚惣吉氏の長男として生れた。夙に少年時代より自然に憧憬れ、自然の懷ろに抱かれて育つて来たが、長ずるに及んで、將來自己の歩むべき途を農業界に求め、農科大學に入學して螢雪の功を積み、明治三十九年優秀なる成績を以て校門を辭するや、直に技手として職を福島縣に奉じた。之れ實に氏が活社會に踏出した最初の一步で、以來職に止まること三ヶ年、同四十一年大分縣技手に轉じ、多年の蘊蓄と經驗とを以て事務に精進し、功績の大に見るべきものがあつた。かくて大正七年拔擢せられて和歌山縣技師となり、更に北海道廳技師を経て、大正十三年一月復興局に轉じ、現に第二出張所整理課技師として令名を馳せてゐる。氏が官界に投じてより故に春風秋雨二十有餘星霜、其間氏は専ら、耕地整理を始め開墾、水利事業等に携り、常に食する程の執着と思慕を以て事務に精進し、其の事業上に齎したる功績は定に没すべからざるものがある。氏資性潤達、該博なる智識と、理智的才能を有し、而かも其一面に於て溢るゝばかりの温情を有してゐる。氏は大正十四年夫人を亡つて以來、獨身にて六名の子女を教養し、長男俊雄氏が現に水戸高等學校に在學せるに徴しても、氏が如何に意志の強固にして、而かも涙の人なるかを知る事が出来やう、趣味を論曲園藝等に有してゐる。



増山金次郎

明治二十一年二月十五日生
芝區新堀町三一番地
電話 高輪五九三〇番

自動車は文化の先驅として近代都市交通に於て適はぬ代表的文化機關である。まこと自動車の疾驅するところ草深き僻地にも文明の風を齎來する。その製造の精巧と修理の迅速によつて多數の顧客に喜ばれてゐる我が増山自動車工場主増山金次郎氏は生粋の江戸つ兒だ。學業を卒するや氏は直ちに自力を以て工場を設け、人力車及馬車等の製造に従事してゐたが、生來機を見るに敏なる氏は、當時自動車の需要日に増し盛んなるに着目し將來我が自動車界に風志を伸べんとし、遂に四十三年前工場を根本的に改造して自動車工場を新設し、専ら自動車の車輪製造及修繕に従事することとなつた。爾來銳意業務に精勵した結果遂に今日の盛業を見るに至つたのである。現在では職工數十名を使用し更に日本ゴム東京ゴムの一手販賣を引受け、その得意先は日本全土に及ぶ股盛振りを示してゐる。震災前まで東京諸車製造組合幹事として同業者の親睦と組合の發展に寄與する處極めて多く、又一方居町自治の爲に献身的の努力を惜まなかつた。即ち氏は大正八年時勢に鑑み、新堀町々會設置の必要を痛感し、同志を糾合して之が設立に狂奔し、遂にその實現を見るに至り擡來一身を忘れて居町の爲めに盡し、目下同町會幹事として重きをなしてゐる。負けず嫌ひにして俠氣に富みその氣質の如く精悍なる風顏の持主である。家業に専念すること及び居町自治の爲めに盡力するを以て慰安に代へ時に興到れば淺酌の低唱の趣きを有す。家庭には父君傳次氏の外夫人くに子との間に五男四女がある。

橋本駒次郎

明治十九年九月十五日生
麻布區新廣尾町三丁目
電話 高輪四八二七番

名もない一徒弟より身を起して大工場の主となつた橋本駒次郎氏の過去の道程は、正に血の歴史であり、涙の記録である。氏は明治十九年九月十五日を以て神奈川縣浦賀町に生れたが、家計不如意の爲、幼少の頃より自ら労働に従事すべく運命付けられた。そして健氣にも將來自己の歩むべき途を工業に求め、白米工場の一徒弟となつたのは、未だ頭はない十四歳の時であつた。かくて幾春秋を此處に機械職工として送つたが、熾烈な向上心に燃ゆる氏は、其間自ら一職工として終るを屑とせず、他日擡頭の爲に自ら求めて勞務に服し、艱難と闘ひつゝ、忍苦の修業を續けて行つたのであつた。後身一つを以て芝區白金志田町に砲金鑄物工場を設け、不退轉の勇猛心と鐵石の意志を以て涙ぐましい奮闘を續けたが、卓越せる技能と天稟の商才とは忽ち盛況を招き、大正十三年の夏には遂に現任所に移轉して工場を擴張し、現に二十有餘名の職工を役使して、石油發動機附屬品及プロペラーの製作等に従事し、一路幸運を辿つてゐる。氏は又繁務の傍ら鐵工機械同業組合評議員、及び新廣尾町三丁目町會理事長の要職に推され同業者の親睦、町内の共存共榮の爲に身を忘れて奔走し、殆んど席の温る暇もないと云ふ。氏は追に世路風霜を経た苦勞人丈けに人一倍思ひ遣りが深く、火をも踏む俠氣、明哲なる頭腦、そして烈々たる正義觀念とは相俟つて氏をして益々衆望を重からしめてゐる。夫人をスイ子と云ひ貞淑の譽高く、令息賀志雄君は工手學校を卒業後家事に従事し、一家團樂の樂に浸つてゐる。

杉浦徳次郎

明治三年九月三十日生
荏原郡品川町南品川宿四七八
電話 高輪 一一二四四番

品川町の町會議員であるばかりか、安全組合聯合會長である杉浦徳次郎氏の先祖は三州高取の舊い郷土であつた。華かな戦國時代の昔、高取の郷士に杉浦藤右衛門政重と云ふ人があつて、時の英傑武田信玄を向ふに廻し常に善戰してゐたと史實にあるが、その政重こそ徳次郎氏の先祖なのである。政重七代の子孫を作左衛門政信と云つて氏はその次男に生れ、分家して一家を興したのである。氏が現在の場所居を構へて和洋酒商を營んだ頃は、その附近は所謂武蔵野の一部に屬する蒼茫とした荒野原であつたために數回盜賊に襲はれた程であると云ふ。が不屈の氏はこれしきに屈せず業績の發展に努めてゐると、同地方が加速度な發展をして來て人家櫛比の股盛を呈するやうになり、ついに氏の家運も隆盛に赴いたのだと云ふ。今では屋號角杉の名は近隣に喧傳せられ、絶大な信用をおさめてゐる。氏はその他に居住地である品川町のためには身を挺して自治の發展を圖り、特にあの十二年度の關東大震災の際の如きは、死地の巷を奔走して町内の罹災救護、配給品分與のために奔走した等は、今もなほ町民間に傳へられてゐる美譚だ。その外品川警察署管内には以前から安全組合と云ふ團體があつて、警察當局と協力し隣保共榮の楔となつてゐたが、氏は長らくこの會の會長に推されて、自治の礎石を磐石の重きに置いて偉大な功勞がある。趣味としては旅行を好み、常に山岳をたづねて大自然の心に耳を傾け性來多少蒲柳の體質なるがためその健康の増進に意を盡いでゐる。夫人をい子は糟糠の妻として内助の功につとめてゐる。

山本 太右衛門

明治二年六月二十二日生
小石川區表町一一



小石川區政の進展に努め、町民の和睦、共同福祉の増進等區民の爲に日夜刻苦研鑽寢食を忘れて狂奔する人に山本太右衛門氏がある。氏は風光明媚を以て全國に冠たる滋賀縣琵琶湖畔に程遠からぬ神崎郡能登川村に呱呱の聲を擧げ、齡四十に至る迄郷里にあつて或ひは村會議員となり、或ひは學務委員となつて村自治に盡す所が多かつたが、夙に霸氣に富み活社會に眼覺さきしくも無擧げせんとする宿望を抱いた氏は僻陬な郷里に永住するを潔しとせず、躍動する胸志と輝く光明を認めて遂に故山を棄て、上京したのであつた。上京するや先づ居を小石川に選び當初小兒用品を販賣すること一週年、更に轉じて呉服業を創始して爾來盛業を續け茲に十有六年の年儲を閑した。由來自治的精神に厚い氏は自己の業務發展を期すると同時に一方區民の福利増進に留意し、町内有志と相謀つて大正十一年四月遂に正陸會を組織し、吉凶慶吊に於ける虚禮廢止の實を擧げ、又救護衛生防火等の公共事業一切を町會の事業とし、更に多年紛糾を重ねて居た年賀廻禮を廢止し以て共存共榮の實蹟を圖つたものである。尙氏の努力は之のみに止らず近くの慈眼院庫裡建築に率先盡力し、又は十三年六月の同町青年團組織には狂奔的の盡力を續ける等全く氏の功績は擧げて數ふに遑なき程である。今回區民の衆望を荷ふて區會議員に當選し、區民期待の焦點となつてゐる。氏熱實にして而も温良、本年五十八の識見豊かな年を迎え、目下正陸會々長、青年團長等に推戴されて指導の任にあり一般から尊敬の的となつて居る。家庭には夫人との間に六人の子女があり極めて圓滿である。

土橋友吉

明治十四年十月廿三日生
府下坂橋町字金井窪一四七

各家庭の必需品として殆んど全国的に其の販路を廣め、便利と衛生の點に於て多大の好評を博しつゝある衛生消毒束子は、我國東子界の權威として汎く推稱されて居る。此の束子の製造元土橋友吉氏は財界に政界に各方面に傑出せる幾多の人物を送り出して居る新潟縣に生れ、夙に商業に志して身を立てんとし、粒々辛苦涙ぐましい奮闘の歴史を續けて來たのである。元來、各家庭の必需品たる束子の發明されたのは可成り久しい以前であるが、各食器の洗濯用に供せらるゝものとしてその衛生的に完備したものは皆無の状態にあつた。慧眼にして且つ衛生的觀念の強い氏が此點に着目して衛生消毒束子と銘行つて賣り出すや其の反響は意外に大きく、從來の束子に比較し實質に於て、價格に於て他を凌駕し需要者日に増す状態にあるので、最近現在地板橋金井窪に一大工場を設立し多數職工を使用して大量生産をなすつゝある。過去に於て幾多の難關を突破した氏が現在當然の歸結として成し得た本事業は同業者間屈指の盛業を見益々發展しつゝあるも尙氏は驕らず事業的な氣質に終始し、常に經營に没頭して工場監督の任に當つてゐる。殊に其の濃厚寡黙圓満な人格は全職工四十數名より慈父の如く慕はれて居り、今や正に同業界の勢力を獨占せんとする状態である。柳々氏が此の製品に着目したのは嘗て小石川區内に於て荒物商を經營して居る際偶々自家の商品中束子の不完全なるを知り、之が製造を創始したので以て如何に氏が事業家的の人物であり、且つ識見高き士なるかを窺知するに足る。氏の如き全く立志傳中稀に見る模範的人物と云ふべきである。



山田豊藏

慶應三年八月廿一日生
四谷區荒木町十四番地

山田家は徳川幕府の藩士として直參を誇つた旗本であつた。氏の父君喜之助氏はあの幕臣隨一の武邊者として、かつは智叢として一世に驅はれた山岡鐵州の盟友であり、劍をお玉ヶ池の千葉周作の門に學び、また柔術をよくして文武兩道に互る達人であつた。王政復古に伴つて政府に出仕し、太政官の要職にまで進められたと云ふから、その敏英を知ることが出来るであらう。その後を承けた氏は、早くも新興日本の機運を察知して實業界に志し、日清戦役直後神戸に出て貿易商を營んだが、再び歸京して四谷に居を構へ依然として實業界に驥足を伸ばす外に、自治の發達に意を注いだのであつた。想ふに憲政有終の美を購はんとすれば、かならず自治の伸張に俟たなければならぬ。特に民衆の輿論を憲政の發達こそ、國家の急務でなければならぬ。この點に留意した氏が自己の使命を自治團體の中に見出さうと念願したのは、先驅者的な氣概だとせねばならぬ。まつ氏はその居住地である四谷荒木町の町會である親和會の顧問から、轉じてその町會長に推され、常に町内有志と相協力して、あるは衛生施設の完備に、あるは町民相互の共榮のため甚大の努力を惜まなかつた。かくてその徳望は日に加はり、遂に推舉せられて四谷區會議員に當選し更に輿望を負つて區會議議長の要職に選ばれ押しも押されぬ勢力をおさめてゐる。その外區内の學務委員として初等教育の完備を期し、また所得税調査委員として課税の公正に盡瘁してゐる。また得がたい國土と云ふべきだ



志知勇次

明治二十五年四月十四日生
麻布區竿町八〇番地

中京名古屋は氏の搖籃の地で、其の東區清水町に生れ、運動の盛んなのと秀才の輩出した事を以て聞えてゐる愛知一中に中等教育を受け、あの金鏡に映ゆる明け暮れの陽に高朗な氣節を練り、雲に連なる濃尾の平原に雄大な志操を鍛へたのであつた。かくて進んで高等學校を八高に上へ、大正二年前途に輝く希望を抱いて上京し、直ちに東京帝國大學工科に入学して建築學の堂奥を究め、大正五年七月工學士の肩書を得て校門を辭するや、直に技手として職を海軍に奉ずることになつた。次で大正五年十二月兵役に召され、第三師團管下歩兵第六聯隊に入營して工務課に勤務することになつた。以來多年の蘊蓄と天稟の才能を發揮して勤めた結果、翌年には拔擢せられて技師となり、更に御造營誌編纂委員に擧げられ、功績の頗る顯著なるものがあつたので、十一年末銀盃一組を授與せらるゝの光榮に浴した。其後都市計劃地方委員を始め、臨時震災救護事務官等を経て帝都復興院技師に任じ、十三年三月更に農商務省技師を兼任して、商務局市場課に勤務することになつたが、其間よく恪勤の一語を以て押し通して來た。かくて同年六月、東京市に招聘せられて建築局に勤務し、其年の十一月には拔擢せられて營繕課第三掛長となり、更に本年七月營繕課第一掛長を兼務するに至つたのである。復興途上にある東京市は、今後手腕の人、努力の人に俟つものが多きが故に、年壯にして氣鋭なる氏の今後の活躍こそ、最も望ましいものであるとされてゐる。

奥野清太郎

明治十七年八月六日生
四谷區仲町三ノ五〇

事に當つてはその大小を問はず研究的態度を以つてし、事務を處理するにはその敏腕を揮ひ、常に條理整然たる態度によつて區民に推服されてゐる人に赤坂區庶務掛長奥野清太郎氏がある。氏は大坂府泉南郡北中通村中庄の人、夙に東都に遊學し、東京府學院を卒業して明治四十一年赤坂區役所學事掛に勤務し、同年書記となり、庶務掛を兼務した。後氏は公務の傍ら日本大學法律科に學び、専心法律學の研究に努力し、大正二年その勞は報われ優秀なる成績を以つて卒業した。この間の氏の苦心は並々ならぬものであり、涙ぐましいほどの苦學をつゞけたものであつた。後その研鑽する所の學理を實際に應用してよく能率を増進し、大正十一年には稅務掛長に榮進し、大正十二年庶務掛長に累進し、區主事に任務され、爾來その職にある。曩に明治天皇御大葬事務に關して大に盡瘁するところあり、内閣より金一封を下賜され、大正十二年關東大震災當時にあつては、内務に在つて部下を督勵し、各種の事務を執掌し、その進展を計りて遺憾なからしめたる功により、震災同情會より表彰された。大正十三年皇太子殿下御成婚に際し、奉祝事務に携はりたるを以つて又金一封を下賜された。又氏は英語、獨逸語、支那語に通じ、特に英語は國民英學會文科に入り三年間研鑽を積んだものである。この熱心なる語學の研究は、氏の趣味と云ふに餘りに氏の謹嚴なる性格に即したものである。家庭に夫人朝子と男一人女一人あり、夫人は三輪田高等女學校の出身であつて、才色双備、貞淑なる家庭の主婦として、又賢母としての譽が高く、和氣が滲つてゐる。



馬場 密藏

明治十六年十一月四日生
四谷區傳馬町新町一ノ九番地

牛も千里馬も千里と云ふ東洋の諺と好一對をなして居る英國の語に、ピラミットの塔を極むるものは鶴と蛞蝓だけであると云ふ事があるが、共に警拔な譬論として人生に強い暗示を與へて居る。世人事を志しては概ね牛や蛞蝓をすて馬や鶴に倣ふ。而も最後の桂冠は一步一步を固めて行く者に占められて居るのが多い。遠い人生行路を眺まぬ歩みを續けて来た馬場密藏氏が、現在地理課長として樞要な椅子に座るに至るまでの過去の道程は、かうした箴言と共に吾人に何事かを語つて居るではないか。南多摩郡七生村宇平山を産土の地とする氏は、明治三十一年三月を以て平山尋常高等小學校を了つたが、家庭はそれ以上氏の學究を扶ける餘裕がなかつた。其所で八王子耕餘義塾に入學して寸陰を修養のために費して居たが、明治三十四年春之を退いて上京し、翌三十五年餘暇を利用して下谷區竹町の日本簿記學會に入つて兀々と向上の資を養つた。其の後明治四十二年二月始めて東京市臨時雇に採用されて市區改正經理課に勤務し、雇となり事務員となつて絶えず職にいそしんでゐる内、次第に登用されて大正二年財務課に轉じ、翌三年用地課に移つて十一年には地所掛長となり、十三年には庶務掛長を兼ね、同年秋主事に任ぜられ、十五年二月地理課長事務取扱、六月地理課長に進められて現在に至つたのであつて、其間の努力精勵は、たゞ氏が不撓不屈の進取的精神の現れに外ならないのである。而も氏はまだ本年四十四歳、前途は洋々として開けて働くべき幾多の事業が残されて居るのである。

近 新三郎

明治十年十二月二十九日生
麻布區本村町五十六番地
電話 高輪 六〇〇三番

羅馬帝國の強大はその道路の完備に表徴されてゐた。道路の完備はその國の文化の程度を示し、古來爲政治家の政策の一つとして道路政策は必ず加へられてゐた。今や我東京市當局も「市の復興は道路から」の標語を掲げ現に道路の完備に全力を傾注して一路復興へと邁進してゐる。この秋現東京市道路局技術長として道路の改造に非凡の才能を發揮しつゝある人に近新三郎氏のあることは、大に意を強ふするに足るものがある。山形縣米澤は氏の懐しい搖籃の地である。幼にして才智業に優れ、學序を経て京都帝國大學土木科に學び、斯學の堂奥を究めて明治三十五年優秀なる成績を以て卒業するや、直に山形縣の技師を振出しに岩手縣を経て四十一年千葉縣土木課長となり、更に秋田縣を経て京都府の土木課長に任じ、大に天賦の才能を發揮して令名を馳せてゐたが、後轉じて内務省技師に進み、更に大正十三年十二月東京市に聘せられて技師となり、道路局技術長兼土木課長に補せらるるに至つた。爾來深遠なる學殖と、多年の試練によつて得たる尊い經驗とを以て道路の改造に心血を盡き、東奔西走殆んど磨礱の暇がない程である。かくて其の熱誠なる努力と、眞摯なる態度とは、氏の偉大な愛情の閃めきと相俟つて、部下の感激の的となり、平和の裡に着々と仕事が進められて行きつゝあるのである。かうした人に限つて知識慾が旺盛で、業務の餘暇は讀書に耽り勝ちなものであるが氏も亦さうである。人となり温良玉の如く稀に見る明晰な頭腦の持主である。氏は本年五十歳の分別盛、將來東京市の交通は益々氏の力に俟つものが尠くないであらう。

高 原 匠



明治十二年九月二十日生
市内芝公園鐵道官舎
電話 青山 七五九二番

三重縣の桑名町は、我が新橋運輸事務所長として令名ある高原匠氏の懐しい搖籃の地である。氏は吉成洲太郎氏の三男に生れ、後高原家の養嗣子となつた。幼にして俊秀、夙に府立第四中學に入り、更に開成中學校に轉じて同校を卒業するや、最も難關とせられてゐる第一高等學校の入學試験に應じて見事に合格し、大に秀才振りを發揮したものだ。卒業後東京帝國大學工學部に入學して、斯學の研鑽に不斷の努力を重ね、明治四十年優秀なる成績を以て校門を辭するや、直に鐵道廳新橋工場に勤務する事となり、まことに官界生活の一頁は開かるゝに至つた。爾來多年の蘊蓄を傾けて事務に精勵し、次で長野工場運輸課に轉じ、更に濱松機關庫主任を振出しに新津、仙臺、水戸等の各運輸事務所主任に歴任して宇都宮運輸事務所長となり、行く處として可ならざるなき八面玲瓏たる其才能を發揮し、到る處に令名を轟はれたものだ。後幾何もなく上野運輸事務所長から拔擢せられて新橋運輸事務所長に榮轉し、益々其特異性を發揮して、事務に精進してゐる。斯の如く氏が多年鐵道管内にあつて我が交通運輸の上に齎した功績は洵に大なるものであつて、其間忠實に自己の職責を完うして、遂に今日の地位を贏ち得た事は、一面に於て氏が如何に人格の高潔にして責任觀念の熾烈なるかを最も雄辯に物語るものである。資性謹嚴、統御の徳と、事務的才能とを有し、稀に見る精力家である。趣味を登山に有する處、志操の剛健なるを見るべく、夫人を靜子と云ひ、四男四女の子嗣者である。

小 室 親 一

明治十六年十月十一日生
市内牛込區小川町二の一八

復興は橋梁からと唄はれた如く、橋梁は交通上美觀上近代都市構成の大きな役割を演じてゐる。我が小室親一氏は此橋梁の設計製作に天才的技能を有する技術家である。氏は彼の英傑鷹山翁を輩出した米澤市を其懐しい搖籃の地とし、幼時より算數に長じ大に其前途を嚆望せられてゐた。長ずるに及び將來鐵道界に其職足を延べんとし、前途に輝く希望を抱いて上京し岩倉鐵道學校に入學して、斯學の研鑽に幾春秋を重ねた。かくて明治三十七年の秋首尾よく同校高等建設科を卒業するや、愈々技術界の人たるべく其第一步を踏出し、技手として職を逓信省帝國鐵道廳に任じたりは、明治四十年の十月であつた。以來全力を傾注して事務に精進し、次で鐵道省官房及工務局土木部等に歴任して、到る處に光彩を發揮し大に其才能を盡へられたものだ。後幾何もなく拔擢せられて鐵道省教習所の講師に擧げられ、専ら技術者の養成に力を注いでゐたが、大正十五年二月復興局土木部橋梁課技師となり、最も氏の得意とする市街公道事務を擔當して、令名を馳せてゐる。此外氏は現に母校たる岩倉鐵道學校を始めとし、東京鐵道學校及鐵道省教習所の土木科講師を兼ね、橋梁學、應用力學、設計並に製圖等を擔任し、該博なる智識と、尊い經驗とを以て良講師の名を恣にしてゐる。資性温良、高潔なる人格の所有者で、珍しい明哲な頭腦を持つてゐる。諳曲に興味を有する處、一面亦情の人たるを見るべく、撞球には特に秀れた技能を有すと云ふ。酒食等を嗜好の中に數へ、家庭には琴柱夫人との間に四男一女あり、常に團樂の樂に浸つてゐる。



新井堯爾

明治十九年五月十五日生

本郷區東片町一八番地

氏は關東平野の一端、埼玉縣南埼玉郡に呱呱の聲を揚げ、朝夕變る秩父連山の翠巒を眺めて、其多幸な少年時代を送つて來た。嚴父啓一郎氏は數回衆議院議員に當選し、縣下の名望家として知られ、氏は其の三男で、幼にして既に群童を抜くの概があつた。長じて北陸の金澤に學び、第四高等學校を首席よく卒業したのは明治四十一年で、後東京帝國大學英法科に入り、孜孜として斯學の研鑽に没頭した。かくて明治四十五年優秀なる成績を以て同校を卒業するや、若き法學士の前には進むべき幾多の途が展開した。然し飽迄深慮なるべき氏は眞に自己の個性に適應する職を見出すべく徐ろに機會を待つてゐたが、遂に進路を鐵道事業に選び、沼津驛の助役を拜命したのは大正二年十二月の事であつた。爾來獨特の手腕を發揮して職務に精勵した結果、翌三年には程ヶ谷の驛長に榮轉し、更に東部鐵道管理局購買兼保健係長、上野運輸事務所營業主任等の要職に歴任して東京鐵道局運輸課庶務係長兼貨物係長となり、大正十年七月遂に歐米留學を命ぜらるゝに至つた。かくて大正十二年の秋新智識を齎して歸朝するや、間もなく鐵道省監督局業務課長に擧げられ、該博なる智識と、明晰なる頭腦とを以て令名を志してゐた。後幾何もなく東京鐵道局運輸課長に榮轉し、精勵今日に及んでゐる。氏人となり潤達、稀に見る明い性格の持主である。殊に部下を愛すること極めて厚く、趣味を狩獵、乘馬等に有する處、其實實剛健なる氣風を見るべく、大に其前途を囑望せられてゐる。貞淑な鶴子夫人との間に一男二女がある。

背に魏峨として聳ゆる中國山脈を背負ひ、前に白帆が紫縮緬に銀絲を縫ひ付ける、即ち風光明媚なる瀬戸内海を控えた岡山縣都窪郡山手村は氏の懐しい搖籃の地である。嚴父鹿太郎氏は農を業とし、傍ら縣會、郡會議員等に推されて公共事業に精進し、就中郡會議員には初期より郡制廢止に至る迄累選せられ、自治の礎を磐石の安きに置くに與つて大に力があつた。氏は其の長男とし生れ夙に穎敏を以て郷黨の間に知られてゐた。長ずるに及び將來教育界に身を捧げんと欲し、縣立岡山師範學校に入學して螢雪の功を積み、大正三年同校を卒業するや、一時小學校に教鞭を執つてゐたが胸中に燃ゆるが如き向上心は、氏を驅つて更に東京高等師範學校文科第一部に學ばしめ、大正十年遂に優秀なる成績を以て同校を卒業した。かくて翌十一年教諭として職を廣島縣立師範學校に奉じ、該博なる智識と、眞摯なる態度を以て中等教育に精進したが、後文部省囑託となり、教育界に貢獻する處が極めて多かつた。次で大正十五年四月東京府學務課に入つて視學となり精勵今日に及んでゐる。資性温厚にして篤實、明哲なる頭腦と、該博なる智識を有してゐる。又趣味を音樂、劇等に有する處、一面氏が愛情の縮圖とも見るべく、忠直に於て、友愛に於て、公正に於て親しむべく敬すべき人だ。夫人道子は廣島縣高女出身の才媛で、文學及音樂等に趣味を有し、而かも能く高齡の母堂につかえて孝養を勵み、夫婦の間に當年三歳の女子をもうけ、家庭は常に和氣藹々として極めて圓滿である。

國府慎一郎

明治二十七年一月十七日生

本郷區東片町一八番地



内海和吉

明治二十年九月二十七日生
麻布區今井町二十二番地
電話 青山 三七五六番

牢固不拔の決意のもとに一意家門の再興を期し、波瀾の道程を辿りつゝ、苦闘よく遂に平素の所期を達成するに至つた立志成功傳中の人、麻布區今井町々會幹事内海和吉氏は、三重縣一志郡舘村の出生に係り、父を爲次郎と云ひ、家は近郊唯一の玄米商で、舊い信用と家財とを以て相當に盛大にやつて居つたが、隆替は人世の習はして一朝米穀界の恐慌に襲はれて見るゝ家財は盡盡し、さしも手堅い店も閉店するの悲境に陥つて仕舞つたのが丁度氏の物心づいた十三歳の年であつた。昨日に變る今日の零落に、父君が快々として日夜憂愁にとらはれるを見た氏は、少年ながら如何にもして一家の再興を計らんものと、悲壯の決意で其年東京に出て來たのである。かくて芝區舞手町の某酒店を訪ふて其の丁稚小僧に雇はれ、前垂袴天で朝早くから夜遅くまで飛び歩く身となつたが、心中期する處のある氏は更にひるむ氣色もなく、數年一日の如くにして主家を扶けて職を完了したのであつた。其内適齡となり、徴兵に合格し日露の役に從つて歸り、平素勤儉蓄へた資を以て祖業の白米商を創め、兄弟相扶けて之に從つたのであつた之に先んずる數年、父君は澁谷町に出て精搗業を創めて居たが、かくて父子共同して事業に勵んだため、幾何もなくして再興の素志は遂げられ、大正二年現在の地に開業以來、三田白金臺町、下遊谷、柏木等に支店を設ける程の長足の發展を告げた。超凡な意志を持つた氏は、又町事に對しても人一倍の功があり、現在では前記の町會幹事として何くれとなく斡旋に力めて居る夫人はる子と三男一女の家庭は和氣藹々たるものがある。



加藤信一

明治十一年三月十七日生
豊多摩郡澁谷町下澁谷一五五六番地
電話 高輪 五六七五番

東京石材業組合創立委員として同業者中の先覺者であり、夙に業界の革新を希望して専心努力を果ねつゝある人加藤信一氏は、其燃ゆるが如き熱誠と溢るゝが如き眞摯の情とを以て、業界の一異彩たるを失はないと傳へられて居る。山梨縣北都留郡巖村の出身で、山間の孤村とは云ふものゝ家は累代の舊家であり、名主戸長の役を勤めて來て居たが、此所に人となつた氏は、明治三十九年志を立て、上京し、現在の地に店舗を設けて石材商を營んだのであつた。そして當時土木界建築界が變遷して歐風模倣となり、石材使用の機運が促進されて行くのを見て、敏捷にもこゝに着眼し、石材の撰擇及供給に周到な努力をなげうつて廣く斯界の信望と聲價とを博すること心に掛けた結果、數年の努力着々功見えて、一般需用家及上流方面にも認められ、幾多の大工事用石材を提供するまでに漕ぎつけたのであつた。氏は同業者の共同利害に深く意を用ひ、相互に協戮と扶助の道を講ずべく同業組合の設立を率先提唱して奔走遂に目的を達するに至り、引き續き貢獻されて居る外、町内自治の伸展に盡瘁し、同志を糾合して道路橋梁其の他の施設の實行方面に多大の功を寄せて居る。氣骨ある有志として常に町政の善導に當り、當路者の非違を糾弾してよく過誤ならしめ、稀に見る實行家として、町民一般の信望を一層大ならしめて居る。同町今後の自治に氏を俟つ事必ずや多いであらう。本年五十歳、道勁な性格を持つた紳士である。長男通氏は慶應義塾理財科の出身で、他にも子女があり。夫人をよし子と云ふ。



關谷 勝一

明治二十二年二月十三日生
深川區石原町七番地
電話 隅田 五三二番

英俊諸葛孔明もその鬼才を認められた蜀主劉備がなかつたらば、生涯を襄陽の草廬で朽ち果てなければならなかつた。まこと蚊龍も雲を得なければ地中の物である。が如何に非運な宿命であつても、何時かは恵まれる時の到来するのが世相である。特にその當人に屈せぬ意氣と熱がある以上は運命の打開も不可能ではない筈だ。この意味からして、わが關谷勝一氏の前半生は、恵まれぬ宿命に對する忍従と、その鐵鎖を切斷した努力の記録であつた。氏は新潟縣中蒲原郡の出身であるが、大いに志を抱いて遠く北海道に渡つたのは明治三十五年の事であつた。そして小樽市今井吳服店に店主として備はれ、大正二年に亘る十有二年間を一意主家のために精勵したが、再び志を翻して上京し一時は貿易商店員になろうと奔走したが、機會を得ないので東洋モスリン工場の職工となつて苦闘したものである。氏の過去に於て最も逆境だつたのは此頃であらう。が間もなく横濱の豪商増田増藏氏に請はれてその店員となり、更に大正五年に材木町山中清兵衛株式店に入つて、大いにその手腕を振つたので、段々と主人山中氏の信望を得ることになり、遂に主家の轉讓で關谷氏へ入婿となつた譯である。關谷家は神田界隈で著名な西陣織物の豪商で、その富裕な家から氏を所望したと云ふのは、偏に氏の資性の凡庸でないのに惚れ込んだ次第である。かくて不遇を啣つた土中の玉もついに見出され、順風に帆上げたやうに現在の地步を築き上げたのであつた。氏若し夜半寂として聲なきとき、辿り來たつた交難の行路を回想したならば、さぞかし感慨無量なものがあらう。



飯塚 重義

明治九年十月三日生
淺草區須賀町二番地
電話 淺草 四六五六番

多年公共自治に奔走してその刷新改善を圖り、常に隣保共睦の實をあげて町民より慈父の如く敬慕されてゐる人飯塚重義氏は、舊上田藩士族として生れ、幼にして父に従ひ上京し、土地の小學校を卒業するや更に進んで府立五中に入り、明治二十七年業成りて校門を去り、翌々二十九年職を大倉組土木鐵工所に奉じ、茲に實社會への第一歩を印したのである。而も氏の社會に入りて實務に携はるや、電軌其物のやうな奮闘を續けたので、遂に認められて三十二年には主任代理として北海道旭川師團の工事を命ぜられ、職工數十名を引率して出張し、約三ヶ年に亘る大工事を完成した。當時氏の齡僅かに二十四歳、以て氏の手腕の如何に卓越せるかを窺ふことが出来る。かくてその鬼才は汎く認められる所となり、明治四十四年には三越呉服店に聘せられて調査課に勤務し、後更に仕入調査掛に轉じ、幾多の功績を顯はしつゝ、今日に及んでゐる。氏は性來事務的才能を有するばかりでなく、公共自治の觀念に燃え、現町會の前身たる共和會創立以來の幹部として町勢の發展に寄與する處が尠くない。殊に彼の大正十二年の大震災災當時の如き、自家の烏有に歸せるをも顧みず、あらゆる危険を冒して町内の防火に力め、其後町内災害死者の靈を慰める爲、私費を投じて芝青松寺に之が追悼會を催せるが如き、其善行美事は殆んど擧げて數ふべからざるものがある。かくて衆望の歸する處、推されて町會長となり、其他國勢調査委員を命ぜらるる等、その圓滿なる人格は熾烈なる犠牲的精神と相俟つて益々信望を高めてゐる、夫人きよ子との間に二女がある。



安井 新次郎

明治十一年三月一日生
豊多摩郡戸塚町下戸塚四三
電話 牛込 一四〇四番

早稻田大學の書生さん達から、安井の叔父さんとなつてかしがられてゐるわが安井氏の家業は洋服商である。叔父さんと云はれる所以は、氏が非常に學生好きであるばかりか、常に自分の家を學生の集會所の如きものに提供し、少しもいやがらずに世話してやるからだ。で學生達は、講義の餘閑には學校から程近い氏の家に遊びに行つて、雑談をするもの、勉強するもの、さては國家社會を論じて談論風發すると云ふ調子。かくて二萬に近い早大學生を相手に、その家業は益々殷盛を示し、現在では職工十六名を使用してもなほ需要に應じきれないと云ふ繁昌ぶりである。勿論學生服のみではなく、同地方一帯の普通人の求めにも應じてゐる。氏は京都市出水通り千本東の生れである。出水小學校を卒業後は京都上京區裏門通り田淵質店の小僧に入つて五箇年間勤めたが、これでは駄目だと見切りをつけ上京したのが十八歳の時であつた。まづ四谷區傳馬町河原洋服店に入つて洋服裁縫の術を修業し、明治三十六年現在の地に獨立開業のスタートを切つた次第である。丁度その頃早稻田大學が創立されたばかりだつたものだから、氏は巧みにそのチャンスをとらへて、多くの外交員を使用して注文の殺到を計り、發展の素地を築き上げたのである。大正十二年には東京洋服商工組合早稻田支部長に推されたが翌年之を辭した。同十二年の町會議員改選に際して當選し、更に再選されて現在に至つてゐる。震災當時夜警團の組織や其後の東友會成立にも盡力し、現在はその會長である。長女茂子嬢は日本女學校卒業の才媛で、手工藝術に巧で小兒洋服の研究に餘念がない。



矢板 豊一

明治二十八年一月四日生
赤坂區青山南町三ノ二二

義公徳川光圀以來、水戸人は勤王の念教く、又幕末に烈公徳川齊昭あつて尊王攘夷の論を唱へ、明治維新の先驅をなした。然れども維新以後に於ては、薩長土肥その勢を競ひ、その間外にあるものは要路に當ることが出来なかつた。然し水府城下の健兒には義公以來傳統的に熱血が燃えてゐた。従つてかうした雰圍氣の中に育まれた現東京市電氣局工場技師矢板豊一氏の胸に、一脈の熱血が迸つてゐるのは當然である。氏は幼時から衆に勝れ、郷里にあつて已にその才名を謳はれてゐたが、中學を卒業後高等學校を経て帝國大學工學部機械科に入り、専ら専門學の研鑽に力め、大正八年雪の功空しからず、優秀なる成績を以て校門を辭するや、直に横濱船渠會社に勤務し、多年學窓にあつて研究せる學理を實地に應用して技能を磨き、燃ゆるが如き熱と、清新の意氣とを以て同社の爲に大に努めたものであつた。在職四星霜、大正十二年十月聘せられて東京市に入り、技師として職を電氣局に奉ずることになつた。當時電氣局では新に乗合自動車を経営することになつたので、氏は選まれて之が製作に従事し、大に其技能を發揮したものだ。後自動車課が獨立するに及び、電車の木工組立に獨創的の鮮かな技能を見せてゐる。氏は濃厚な内に燃ゆるが如き熱情を備へた稀に見る明哲な頭腦の持主で、暇さへあれば好きな讀書に耽つて知識慾を満足させてゐる。本年三十有二歳。前途尙ほ春秋に富み、將來の發展は期して俟つべきものがあるとされてゐる。夫人を菊子と云ひ、賢夫人として知られ、其間に一男一女がある。

小野 耕一

明治十五年六月 日生
連町區飯田町三ノ二
電話 四谷 三九九二番

實業界の恩人として斯界に名を馳せた小野金六氏の嗣子として生れた氏は、今や實業界に樞要の地位を占め、嚴父にも劣らぬ手腕家として名譽噴々たるものがある。幼にして才氣喚發、而も豪放なる性質は早くも他日なすあるの士として其前途を囑望せられてゐた。氏の錦城中學在學中の如きは、硬派一流の快男子として蕃風を以て知られ、而かもその内面に燃ゆるが如き義侠心はよく江戸兒氣質を發揮して盛んに學友の間に持てはやされたものだ。氏は中學卒業後、その明晰なる頭腦を認められ、農商務省の委託生として外國語學校佛語科に學び、更に日本橋内山舜方氏の經營する英語塾に通學し、他日飛躍の基礎を作るに餘念がなかつたが、後嚴父に従つて實業界に足跡を入れ、奮闘以て名を成すに至つたのである。父君金六氏は既に人も知る如く斯界稀に見る手腕家で、第十國立銀行東京支店長を提出しに割引銀行頭取となり、更に東京市街、兩毛、臺灣縱貫、京釜、富士身延、小倉等の各鐵道會社を創立し、又東京電燈、桂川水電、日本電燈、富士水電各株式會社の重役、日本煉炭、富士製糸、輸出食品等各會社の社長を兼任し、實業界に残した功績は擧げて數ふるに遑なく斯界に於ける稀にみる功勞者である。此の光輝燦然たる歴史を有する父君の後を享けた氏も亦現在數々の樞要なる地位にあり、即ち割引銀行頭取を始め、日本煉炭東洋製鐵等各會社々長たるの外向數社の重役を兼ね、よく父君の名を辱めぬのみならず、更に獨特天稟の怪腕を發揮してをり、その前途は殆んど端視すべからざるものありとされてゐる。

伊藤 徳三

明治十八年 八月 生
府下野方町上沼袋一〇一番地

數年前迄は廣茫たる原野に依つて天地を劃されて居つた郊外野方町も、今や溢ふるばかりの住民を抱擁し、雄大なる自然の景物の中に整然たる街路は劃せられ、其處此處に點々と文化住宅が見えるやうになつた。現野方町名譽町長伊藤徳三氏は此地に豪農の後繼者として生れたが、夙に中野町の桃園小學校を卒業するや、直ちに農業に従事し、孜孜として家運の進展を計る一方、公共の事に力を注ぎ寄與する處が多かつた。偶々日露の戦端開始さるゝに及び、氏も亦榮譽ある出征兵士の一員として滿洲の野に轉戦し、屢々生死の巷を往來して赫々たる武勳を樹て、平和克復と共に凱旋して再び家業に従事することになつた。而も氏は徒らに從來の農業方法に甘んずる事なく、自ら農界其他の改良に任じて只管收穫を増大することに心を砕いた結果、見事成功して之を村内一般に使用せしむるに至つた。次で大正十二年嚴父伊助氏の病歿するに及んで家産を繼承したが、當時東京市に於ける住宅難の聲は遠く市外に迄及ぶと共に同年九月一日未曾有の大震災に帝都の大半を焦土と歸せしむるに及んで一層その念を告げた。茲に於て氏は自ら率先して家作を建て、村民に範を示した結果、見る影もなき寂寥たる農村も日を追ふて漸次發展し、最近には町制迄も布かれるやうになつたのである。従つて氏の同村に於ける信望は益々高く遂に推されて名譽町長の要職を占むるに至つたが、之實に氏が多年町會議員として自治に貢献し、又青年團長として指導宜しきを得た偉大なる功勞が芽ばえて美しく實を結んだのである。家庭には夫人なかと子との間に五人の子女がある。

春藤 直三

明治二十五年九月十三日生
府下下濵谷常盤松六一九

山崎 伊三郎

明治五年五月十四日生
東京市神田區豊島町二〇
電話 浪花 六三五五番
六三五六番

九州の東北將に盡きんとする瀬戸内海の水が深く瀕入して、湖水の様に靜かな美しい入江を形造つてゐる。別府灣が即ちそれである。由布、鶴見の靈嶽がゆるやかなスロープの裾を海に落した波打際には、世界無二の樂園と稱せらるゝ別府温泉があり、それから程遠からぬ處に大分市がある。この大分市は即ち我が春藤直三氏の懐しい故郷である。斯した風光明媚なる地に生を享けた氏が、八面玲瓏たる人格の所有者たることは、環境が人を造ると云ふ言の葉を如實に物語つてゐる。氏は幼にして上京し、府立第一中學を卒業したのは、實に明治四十四年の春であつた。次いで一高の難關を突破して、更に帝國大學土木工學科に進み、大正七年七月有望なる工學士として活社會に最初の一步を印したのであつた。先づ東洋コンプレツソル會社に入社して、實際的の手腕を磨き、大正十年獨立して新に工務所を設け、繁雜なる設計施工事務に執筆するに至つた。かくて同十二年十一月新に復興院設立せらるゝや招かれて技師となり、翌年三月職制變更と共に復興局技師に任じ、帝都復興のために献身的の努力を続け、毫も倦む處を知らない。而かも學究心の熾烈なる氏は、工學の外更に政治經濟學の忽にすべからざるを痛感し、激務の傍ら帝國大學法學部政治學科を専攻したが、動もすれば放逸に流れ易き現社會に於て、蓋し氏の如きは稀に見る篤學の士と云ふべきであらう。氏人となり高邁、趣味を圍碁旅行に有してゐる。夫人を富恵子と云ひ貞淑の譽れ高く、名も床しき常盤松に圓滿な家庭を營んでゐる。

由來魚河岸の誇りとする所謂傳統的意氣と熱を以て、都下二千の組合員の爲に萬丈の氣を吐きつゝある山崎伊三郎氏は、栃木縣の産んだ逸材である。下都賀郡小野寺村を其懐しい搖籃の地とし、岳父針谷萬吉氏は夙に勤王家として知られてゐた。こうした嚴父の血を享けて人となつた氏は、幼にして群童と其趣を異にし、商業見習の爲栃木町の荒物問屋に丁稚奉公をしたのは實に年少十一歳の時であつた。後藤岡町から佐野町と轉々して辛苦を重ねたが、胸中に鬱勃たる向上心は氏をして永く僻陋の地に止まらしめなかつた。遂に十有六歳の折、前途に輝く希望を抱いて上京し、先代伊三郎氏の店に身を寄せて主家の爲に忠勤を抽んでたものだ。併し實直な氏の勤め方が永く主人を感動せしめずには惜かなかつた。居ること六年、遂に懲懲せられて之が養子となり、涙ぐましい奮闘と努力を重ねた結果、家業は次第に幸運に恵まれて行つた。明治三十年衆望の歸する處推されて神田區魚商組合幹事となつたが、その天稟の才能と高邁なる識見とは、氏をして次第に重からしめ、同三十三年には副頭取に、更に同三十九年には頭取に、而して大正五年には遂に東京市魚商組合長に擧げられ、同業の發展と組合員の福祉に精進して倦む處がない。此外氏は映畫常設館を經營せる傍ら、區劃整理研究會々長、豊島町々會理事等に推され献身的の努力を續けてゐる。資性剛毅温かい人間味と、大なる氣魂の持主で、殊に敬神崇祖の念極めて厚く、最近私財を抛ち氏の出生地岩船山に七百五十段から成る石段を寄附した程である。



柳澤 彰

明治二十三年九月二十九日生
本郷區駒込西片町十ノ十一

「復興に勝る供養なし」とは東京市民が寄せた熱烈なる復興標語であるが、定に震災地の復興こそは全市民、否全國民が熱望して己まざる未嘗有の大事業なのである。然り、我が柳澤彰氏は此の大事業の第一線に立つて鋭意復興の完成に邁進しつゝある當面の人なのである。氏は東京の人、淺草小島町に生る、原に小學校を卒業するや全國中等學校中最も難關と稱せらるゝ府立第一中學に入學して天才的閃めきを見せ、更に進んで第一高等學校に入學して大に學友を羨ませたものだ。大正二年同校を卒業後直に東京帝國大學工科大学建築工學科に入學し、大正五年優秀なる成績を以て卒業するや直に實社會に投じ東京丸の内會館中條建築事務所勤務する事となつた。然し燃ゆるが如き學究的精神は更に氏を驅つて最高權威たる大學院に學ばしめ、その蘊奥を究めしめた。大正九年二月都市計劃地方委員會技師兼都市計劃中央委員會技師に任ぜられたが、囊中の餘は忽ち認められ、遂に拔擢せられて大正十年濠州及ニュージランドへ視察の爲出張を命ぜらるゝに至つた。かくて翌年新智識を齎して歸朝し直に内務省技師を拜命したが、偶々大正十二年大震災勃發するや即ち臨時震災救護事務局事務官を拜命し、専ら救護事務に執掌して功績の見る可きものがあつたが、同年十月帝都復興院技師兼内務技師に榮轉し精勵今日に至つた。氏は頭腦明哲加ふるに烈々たる學究的精神は氏の豊富なる經驗と相俟つて今や復興局中有數なる技術家として知られてゐる。資性謹嚴、其の趣味とする寫眞旅行に情操の豊かなるを見せ家庭には夫人利江子との間に一男一女がある。

寺田 悌

明治二十三年一月二十七日生
府下巢鴨町上駒込一七一
電話小石川六四五〇番

帝都の復興！それは我が二百萬市民の常に熱望して己まない處のものであると同時に、世界各國の齊しく注目して措かざる處である。而かも其事業たるや廣汎なる地域に亘り、根本的に都市を改造することに於て、未だ曾て見ざる處で、我國の文化史上將に一新時代を劃するものと云つてよい。隨つて當局者も此歴史的に意義ある大事業を完成するに當りて、普ねく優秀なる技術家を全國に求め一路復興に向つて邁進しつゝある。然かも之等の幾多俊髦の間に介在して、若き青年技師として一異彩を放つてゐる人に我が寺田悌氏がある。氏は生粹の江戸ッ兒で、明治三十三年一月麹町區富士見町に生れたが、幽邃なる靖國神社の境内は氏の少年時代を樂しませてくれた。夙に英志を抱き大正六年三月私立芝中學校を卒業後、第五高等學校を経て東京帝國大學工學部土木工學科に入り、専門學の研鑽に幾春秋を重ね、大正十二年三月優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に内務工手として職を内務省横濱土木出張所に奉じた。之れ實に氏が活社會に乘出した最初の一步で、次で翌年六月復興局の技手となり、大に天稟の才能を發揮して事務に精進した爲、遂に同年九月拔擢せられて技師に進み、現に東京第二出張所工事課に勤務し、其前途を囑望せられてゐる。氏は明るい性格と、明哲なる頭腦の持主で、而かも徒歩旅行を好み、時に深山幽谷を跋渉して質實剛健なる氣を養ふと云ふ。氏は又大の讀書家で常に内外和漢の書を獵涉し智識の糧を求めて己まない。夫人をまさ子と云ひ貞淑の譽高く家庭は極めて圓滿である。



上坂角太郎

明治七年八月生
本郷區駒込香町十一番地
電話小石川一九九三番

小石川戸崎町の閑寂な僧院に呱々の聲をあげた氏は、本來ならば、本佛の使徒として身に墨染を纏ひ供養三昧に生涯を送るべき運命に置かれるべきであつた。而し人の子の行く道は、一様に簡單な筋書き通りに展開しては行かない。そうかうするうちに其の家庭の事情からして幼い氏をして早く他の方面に自己の生涯を開拓しなければならぬ事にした。氏は、此の頃から深く實業に希望を持つやうになり、早く其の實際に身を投じたのであつた。そして幾年かの後足袋商を開業し、資を投じて之が製造販賣を兼ねたのであつた。細かい注意と不斷の努力とは顧客の心を惹かずには置かなかつた。かくて業緒につき相當な蓄財を得て事業擴張を目論むに至り新に洋品雜貨一切の販賣を兼營するに至つたのが今より約二十五年前の事であつた。氏は洋品物の流行の機先を洞察して、開店後は常に新流行や都人の趣味に眼を注ぎ品質及顧客本位の商法を信條として信用集中に努めた。其の結果は年と共に繁榮を遂ひ、現在に至つては行人の目を惹く追分交叉點の目抜きの一角に賑やかな店頭裝飾を以つて股賑振りを愚ぼせて居る。氏は足袋商開業前は七ヶ年にも亘つて神田の鈴木足袋店に奉公して普く辛酸をなめた酸いも辛らも噛み分けて居る苦勞人丈あつて、世情に通じ其抱負多き意見は常に用ひられて町會組織以前から重きをなして居り、隣保の信任は非常に厚く、本郷金庫幹事に推薦されて重役を遂行して居り、先般米追分町會の副會長の席に就いて盡瘁して居る。夫人との間に五男一女があり、長男徳次之助氏は同じく神明町に洋品店を開いて繁昌して居る。

戸田利兵衛

明治十九年一月五日生
本郷區駒込神明町五番地
電話小石川五三九七番
電話小石川一四六番

氏は茨城縣の生れ、富田寅吉氏の令弟にして先代利兵衛氏の養子となり大正九年家督相続とともに、前名繁秋を改めて利兵衛を襲名した。早くから帝國大學工學科に學び、卒業後は實際の業に携はつて絶倫の手腕をふるひ、諸會社の重役として、今や土木建築界に令名噴々たるものあるに至つた。戸田家は代々土木請負業を事とし、先代利兵衛氏の代に至つて家運次第に隆昌に赴き、氏のこれに養嗣子たりし當時は既に土木事業界一方に覇をとなへてゐた、こうした關係で、氏の家督を継ぐや直ちに戸田組主として、實際のことに携はり、誠心誠意、重責を一身に擔ふて、幾多模範的大工事を完成したから、幾許ならずして、衆にぬきんで、大請負業者たるの名を辱しめず、天下の戸田組としていよく令名を馳するに至つた。由來震災以後復興途上にある帝都に、劈頭緊切の必要に迫られしものは土木建築の施設である。この時にあたり日本の首都として、はた又東亞の代表的都市として、世界にその美を誇ることは、一に懸つて土木建築業者の雙肩にかかれるものであるが、それには新都市建築の様式や技術に於いて充分なる理解を有し、學力手腕兼ね備はるの人士が事に當らねばならぬ。幸に氏の如き何れの方面より見ても有力なる人士が活躍するあり、新都市の前途や恵まれたりといふべく、こゝに氏の貢獻亦大なるものありといひ得るであらふ。而も氏は一方居町の自治に盡瘁するところ多く、區内屈指の有力者として、益々重きをなしてゐる。

五十嵐 芳之助

安政五年五月生
日本橋區蠟燭町一丁目二番地
電話 浪花 三九四一番

七轉八起の好個の例を君に依つて見る。成敗は天にあり、只不撓不屈にして人事を盡さば必ず、一陽來復の春を得やうぞと、淡々として済ましてゐた君が今日の地位を勝ち得るまでには、波瀾萬疊の行路を辿つて來て居る。君は九州福岡市の出身で、明治十八年上京して數年の間或事業に手を染めたところ、事志と違ひ思ひがけなく失敗し、明治二十三年不本意ながら一度旗を捲いて郷里に落ち延びたが、今度は長崎に移つて同地特産の博多織の製造に付いて研究を果ね、先づ改良及び販路方法等について得る所があり、併せて之が全國的な普及方法についても期する所があつたので、當時の知事黒田長成公に建議して其の實施を計り、同時に自身は再び上京して神田區籠町を下して博多織製造業を興した。そして、漸く曙光を見るに至つた矢先が例の大隈内閣の財界不況に遭遇し、まともに恐慌に襲はれたので一とたまりもなく廢業するの已むなきに至つたが、剛建不撓の君は未だ挫折しなかつた。三十二年には米穀仲買商として立ち、巧に財界變動の波に乗りて業績に就かうとする時、給も大正元年之亦障礙を來して閉店の悲境に墮つた。此の頃知友の増井氏が君の人と爲りを見て取つて業務の一切を委ねた、士は己を知る人のために死す。氏は茲に肝胆相照して其の事業を經營し、遂に米穀仲買商中錚々たる増井氏を築き上げると共に、其の分身の君の名も斯界にあらはれるに至つた。君は現在各方面財界政界の大立物と親交があり、漸く順境に入らうとして居る。増井商店支配人、筑前實業會常任幹事の職を持つて居り、前記町會長としては盡瘁する所が多い。



桑原 義忠

明治二十五年五月十六日生
芝區車町

芝區車町同志會幹事として將た、亦高輪健兒團長として令名を馳する桑原義忠氏は、大分縣宇佐郡の人で、九州男兒の持つ豪俠よく公に殉ずる性格は、氏の今日町民の信任を一身にあつめる所以となつて居る。夙に郷里で中等教育を修了して上京し、東京齒科醫學校に學び、具さに力行苦學して大正六年遂に卒業し依つて郷里に歸り業を開いた。かくて事業漸く緒についたが、高邁の資にめぐまれた氏は尙之を以て足れりとしなかつた。須らく中央の地に出づべしと、大正八年再び上京して芝區車町に開業して患者の診察にあたつた。氏は人となり個體の氣性あり、任侠の情厚く、身を挺して社會公共のために盡瘁して來た。さきには車町有志を糾合して車町會を組織し、隣保協賛の任にあたつたが、たまたま大正十二年の震災には殆んど一家を顧るの遑なく、東奔西走して各罹災者を附近の高輪中學校に收容し、更に附近堀越氏邸の開放を求めて避難者に便を供した等、其の應急の活動と適宜の處置とは、町民一般の激賞する所となつたが家業の外に奔走公共に裨益する篤行は、時の警視廳の表彰を受けたのであつた。氏は又高輪健兒團を組織し、之が團長となりて指導監督の任に當り、會員の心身鍛練を期して將來有能の士たらしめ國家將來を擔ふの健兒養成に資しつゝあり。近時各方面に少年ジャンボリーの組織を見つゝあるが、之等ひとしく如上の目的に出づるもので、其の指導者の意氣亦壯とするに足るものがある。氏は自ら使命を感じて立てる熱心家であつて、何くれとなく懸命につとめ、同團の向上に多大の功を獻けて居る。家庭に夫人貞子がある。



江間 簡吉

明治十六年六月十五日生
府下 荏原郡多摩川村等々力
電話 四谷 五二八七番

徒手空拳、而も明晰なる頭腦を以つてよく時勢を達觀し、遂に自己の運命を開拓して今日の榮譽を勝ち得たる立志傳中の江間簡吉氏は、幼にして既に堅忍不拔の精神を把持し、徒に一寒村に朽つるを屑とせず、雄志を抱いて帝都に出で、日夜匪懈して他日名を成すの基礎を築くに餘念がなかつた。當時年齢二十有四歳、社會の潮流に直面するにはあまりに白面の青年であつたが、而かも精勵刻苦只管新天地の開拓に奮闘を續けて行つた。然し社會は必ずしも苦難の連鎖ではなく、其至誠は總て酬ひられて氏にも麗かな幸運の日が訪れて來た。即ち麻布區龍土町に二百數十年來の由緒正しき家譜を有し、名門の聞え高い江間氏に其人と爲りを認められ、遂に懇望もだし難く同家に嗣子として入ることになつたからである而も氏は更に家運の隆盛ならんことを希ひ、自ら進んで近隣の池原洗濯店に入り、斯業の練磨を積みて後、麻布區材木町に獨立洗濯業を開始するに至つた。以來粉骨碎身日夜奮闘努力の甲斐あつて事業は逐次發展し、大規模の設備を必要とするに至り先づ現在地に一大營業所を設け、帝都屈指の繁榮を招致するに至つたのである。現に鐵道省の用命にて寢臺用布の洗濯を一手に引受くるの外、官公衛會社等にも及び、その營業の廣汎にして信用の確固なる到底他の追従を許さざるものがある。「艱難汝を玉にす」の古語は實に良く氏の半生を物語るものと云ふを得べく、靜かに氏が過去の道程を見るに及んで今更努力の尊さを覺ゆるのである。趣味を讀書に持ち、目下神道研究古事記の研究等に耽つてゐると。又その人格を知るべきである。

篠田 平三

明治元年四月十日生
麴町區下二番町二九番地

將に實現せられんとする中央卸賣市場の先覺者として令名ある我が篠田平三氏は長野縣下伊那郡上飯田村に生れた。氏は夙に雄志を抱いて上京し、三田英學塾に入學して研鑽すること多年、優秀なる成績を以て卒業するや、直に職を臺灣總督府殖産局に奉じ、同島の漁業製鹽の改良に貢獻すること三年、後農商務省水産局に轉じ、冷蔵法の必要を説き、模範會社を設立して我國産業界に驚異を興へた。又水産物の内外販路調査に當つて魚市場法案重要事項を作り、農商務省生産調査會に付議して可決せられたが、事項中内務省と意見の一致せぬ所があつて果さず、偶々内務省社會事業調査會より中央卸賣市場法制定の必要を建議され、その所管の農商務省に移さるるに及び、氏は該法案會議に参加し前記魚市場法重要事項を加味した原案を作り、第四十六議會を通過して成令公布を見るに至つた。後市の招聘に應じて商工課兼建築課に入り、理事者を扶けて奔走し、築地海軍省用地の一部を借用してバラツクの市場及冷蔵庫を建設し、大正十二年十二月一日日本橋魚市場全部を之に收容して茲に中央卸賣市場の礎石を造つた。かく翌年魚市場視察の爲め歐米に派遣され、英米獨佛白伊蘭瑞の八ヶ國五十四市場を視察して十四年歸朝し、益々斯界に敏腕を揮つてゐる。氏は資性剛直、事に當つて熱誠、曩に農商務省に於て地方官に榮轉の内命に接したが東京市魚市場の改善を心に期してゐた氏は之を固辭し、爲めに遠命の廉を以て一時は休職を命ぜられたことあるを見てもその一端が窺はれる。功を以つて正七位勳六等を授けられてゐる。

長島直吉

本所 區徳右衛門町三八番地

金庫店の徒弟からたゞき上げて、今日金庫製造界に名をなすに至つた成功者長島直吉氏は、自家獨特の寶金庫の製造に従事して金庫の様に健實な經營振りをを見せて居る。氏は本所練町に生れ、知り合ひの竹内金庫店の徒弟となり、入りて勤続二十年の辛抱に、すつかり金庫製造上の技術を修得し、大正七年獨立して小工場を經營した。かくてその後の努力奮闘に依つて若干の資を獲、十年二月には後藤金庫株式會社より現在の工場を譲り受け、更に設備を整へて大規模製造に着手した。然るに多年の苦闘によつて築き上げた尊い血と膏の結晶も、一朝大震災の爲に全部烏有に歸して仕舞つた。而しもとゞ一臂を以てきつ上げた程の努力家である、捲土重來の意氣を以て再興を圖る一方、關係各方面からも聲援を得て難なく工場の復興を實現し、従前通り重量及輕量金庫鐵扉、海軍用金櫃、御影奉安庫、金屬製籠筒等の製造に従ひ、忽ち復興を遂げて今では一日と隆盛に赴いて居る。氏は従業員に對して終始温情を以て接するので、永年心服して勤続する者多く、従つて従業員も悉く厚き責任觀念のもとに作業しおるから、成績が頗るよい。寶金庫の特色は、扉に隙を生ぜぬ事、嶄新な符號の自由變換文字合せ等の重要點を數へる事が出来るが、目下はその特許出願中で、此の不況時代にあつても、毎月相當の製品を捌いて居る。而して製品は氏自ら工場にあつて細密なる注意を拂ひ、一々指導に任じて居るから使用者方面からも絶對の信用を博して居るといふ。木造建築多き東京市にありては、氏の金庫の如きは絶大なる貢獻を爲すものといへやう。



村田五郎

明治三十二年四月十一日生 府下巢鴨町二ノ五〇番地

郡制廢止の結果は地方行政上幾多の連絡を斷たれ、従つて町村制府縣制の權限は擴張されるに至つたが、此の連絡機構としての地方事務官は其職責重く、從來の郡制並に町村制に精通せる人ならでは到底遂行の實を擧げることとは不可能と云ふべきである。少壯有爲の士として其前途を嚆望せられ、現に東京府地方事務官として令名を馳せてゐる人に我が村田五郎氏がある。氏は金鏡城下の人で北鷹匠町に呱呱の聲を揚げた。夙に才智業に秀れ、小學に中學に稀に見る成績を現はし、高等學校を卒業後、大正十二年最高學府たる東京帝國大學法學部の政治科に學んで専ら斯學の堂奥を探り良好なる成績を以て卒業するや、直に富山縣警部となり、職務に精勵する處があつたが、曩中の難は忽ち認められ、翌十三年には遂に拔擢せられて同縣水見郡長の要職を占むるに至つた。當時氏齡二十有六歳、而かも大學卒業後僅々一ヶ年餘にして此極要なる地位に擧げられたことは實に異數と云ふを得べく、畢竟氏の明智なる頭腦、深遠なる學殖、事務的才能と、人心收攬術、さうしたものが氏を此處に至らしめたのであらう。以來多年の蘊蓄と卓越せる手腕とを以て郡政に力を注ぎ、功績の大に見るべきものがあつたが、後郡制の廢止せらるるに及んで、東京府に入り、地方事務官の要職を占め、精勵今日に及んでゐる。氏は稀に見る明るい性格の所有者で、暇あれば常に讀書に親しみ、旺盛なる智識慾を満足せしめてゐると云ふ。氏は未だ獨身で、趣味を劇に有する處は亦情操の豊かなるを見るべく、將來の發展は期して俟つべきものがあるとされてゐる。

村奈喜與吉

明治十年九月三日生 麻布區田島町十九番地 電話高輪六五八九番



軒滴も久しければ石を穿つとか、成功は要するに勤勉と努力の結晶である。現に田島町々會副會長として令名ある我が村奈喜與吉氏の成功も、實に氏の尊い血と汗によつて贏ち得た苦心の賜である。氏は石川縣鳳至郡大寶村に呱呱の聲を揚げた。年少十六歳の折、前途に輝く希望を抱いて上京し、京橋竹川町の長壽庵に身を寄せ、骨身惜まらず主家の爲に忠勤を抽んでたものだ。氏の此粉骨碎身の努力が、何時迄も主人の眼に映らぬ筈はなかつた。涙ぐましい奮闘と努力に刻まれた六星霜は夢の裡に過ぎて、氏は二十二歳の壯年となつた。遂に主家の後援を得て現住地に華々しく支店を開業するに至つたのは、それから間もない後の事であつた。而して氏の眞面目なる其營業振りと、烈々たる奮闘努力とは忽ち盛況を招き、家運は一途幸運を辿つてゐる。かくて業望の歸する處が極めて多い。氏は又繁忙の餘暇を割いて公共の事に奔走し、現に麻布區田島町々會副會長として、町政の發展に寄與する外、麻布區實業陸會の副會長として令名を擡にしてゐる。資性活潑、思慮圓滿、殊に世路風霜を経た所謂苦勞人丈けに、人一倍思ひ遣りが深く、稀に見る人間味の所有者である。夫人りきよは貞淑の譽高く、二人の間に長男政雄君、次男與三君、三男榮吉君の三男があり、家庭は極めて圓滿である。



秋山喜一

明治十二年一月十二日生 京橋區東港町一丁目二六 電話京橋一九五三番

時勢と共に新しい建築が日々に建設されて行く。就中復興途上にある我が帝都には新建築は最も重要な要素となつてゐる。而して之等建築の工事材料として優良なる石材及び砂利の緊要なるは今更言を俟たざる處である。從來我國の砂利商は建築に理想的な砂利を供給することが少なかつたこと、に帝都石材界の明星として目下股益なる營業振りを示してゐる我が秋山喜一氏は多年苦心の結果遂に今日の如く優秀なる石材及砂利を供給することを得るに至り我が建築界に寄與する所頗る甚大である。氏は靜岡縣田方郡多賀村に呱呱の聲を擧げ郷費を出づるや直ちに單身上京し各所に尊き經驗を積み明治四十年獨力を以て現在地に石材商を開業し、後大正八年建築界の多事なるを洞察して砂利問屋を併營するに至り、その得意先は諸官省、清水組、大林組、大倉組、鴻池等を始め其他各會社銀行等頗る手廣く取引を有し今や帝都一流の石材商として噴々の聲を馳せてゐる。かくて業望の歸するところ關東砂利組合常任理事を始め東京砂利商組合幹事、東部砂利組合、栃木砂利組合、日本石材聯合會の各理事に推されてゐる。圓碁を唯一の慰安とし餘暇ある毎に鳥鸞を開はし研究に餘念なく爲めに技女人の域に達せりと云ふ。家庭には夫人昌子との間に一男健之助氏あり、京華中學出身の秀才にして目下三菱銀行本店に勤務し將來を矚目されてゐる。



稻見徳太郎

明治四年十一月二十二日生
浅草區馬道町七丁目
電話 浅草六九二番

虚榮を排し、驕を憎み、只仁侠の二字と犠牲的精神に燃ゆる人に、浅草區馬道七丁目町會長稻見徳太郎氏がある。氏は浅草生え抜きの江戸ッ兒で、多血多感な勇み肌氣象である。生家は花川戸町に於ける地主或は家作持ちとして知られ、家には巨萬の富を積んでゐた。その幸福な家庭に育ぐまされたにも拘らず氏には更に虚榮や奢侈に流るゝ事なく質實剛健なる氣風を養つて行つた。長ずるに及び將來實業を以て身を立てんと欲し明治二十四年馬道町に新炭商を營んだ。以來日夜營々致々として奮闘の結果、家業日月に隆盛に赴き、浅草第一流の新炭商と謳はるゝに至つたが、不幸震災の爲めに潰滅し、多年粒々辛苦の結果築き上げた家産も一朝にして見る影もなく悉く灰燼に歸して仕舞つた。併し飽く迄も不撓不屈の精神と不退轉の勇氣とを有する氏は震災後更に酒商並に薪炭商を營み、日に夜を繼いで家業に精進した爲家運大に上り、今や昔日の如く殷盛を極むるに至つた。而して何處までも仁侠に厚いこの奮闘兒は、自家の復興を圖ると共に町内の復興と發展に力を注ぎ、隣保親善と共存共榮との爲めに、懸命の努力を惜まず、大正十三年遂に衆望の歸する處馬道七八丁目の町會長に推薦されたが、偶々大正十四年同町會が二町會に分裂した際、氏は再び現七丁目の町會長に推薦されたが此の事實に徴してもその徳望の一端が窺はれる。目下東京市第三方面委員、區劃整理委員等重要の公職に在り、只管その犠牲的精神を發揮して社會の改善に努力してゐる。氏となり温厚篤實にして謙讓の美德を有し夫人はせい子と云ひ貞淑の譽が高い。

中島時雄

明治三十年四月二十一日生
府下戸塚町諏訪二二三

幾多の人材を網羅せる復興局にあつて、若き青年技術家として大に其前途を囑望せられつゝある中島時雄氏は、明治三十年四月半込山伏町に生れた生粹の江戸ッ兒である。持つて生れた聰明な資質は、早くも早稲田中學在學時代から頭角を現はし、大正四年同校を卒業するや、天下の青年が渴仰の的たる一高の入學試験に應じて見事に合格し、大に學友を羨ませたものだ。大正八年七月同校を卒業後、將來土木界の益々有望なるに着目し、直に東京帝國大學工學部土木科に入學して斯學の蘊奥を極め、同十一年三月優秀なる成績を以て卒業するや、後幾何もなくして職を東京市電氣局に奉じ工務課に勤務する事となつた。之れ實に氏が活社會に乘出した最初の一步で、爾來此若き青年工學士は食る程の執着と思慕を以て事務に精勵し大に其才能を讃へられたものだ。然るに大正十二年九月一日未曾有の大震災は、帝都を擧げて悉く焦土と化するに至つたので、之が復舊の爲新に復興院が創設せらるゝや、直に土木部道路課の囑託となり、更に大正十三年三月復興局土木部道路課技師に任せられ、多年の蘊蓄と、燃ゆるが如き意氣を以て帝都の復興に邁進しつゝある。資性快活、光風霽月の襟度と、熾烈なる責任觀念を有する活動家である。氏は又頗る多藝多趣味で、撞球、テニス、野球等々運動一切何んでも御座れのスポーツマン、定にスポーツ隆昌の國に相應しい活動的な趣味を持つてゐる。其處に氏の澄潤たる元氣と負けじ現が芽はえるのである。夫人を美代子といひ貞淑の譽高く二人の間に二男がある。

大田庄太郎

明治三年十月生
豊多摩郡大久保町二二七

さざ波や滋賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻花——とはその昔大宮人が詠じた多恨の歌詞であるが、その滋賀の都なる大津市追分町は氏の幼なき日を物語る故郷なのだ。琵琶の湖水が靜かに岸を洗ふ大津は想ふだに山紫水明の繪の街でなくしてなんであらうぞ。こゝに人となつた氏は、明治二十三年に大津市の第九聯隊第七中隊に入營し、再役して第四師團を経て第一師團第一聯隊勤務となつた。その間に日清戰役、北清事變、日露戰役と三度の激戰に参加し、拔群の戰功をたてたものだ。特に日露戰役の際、あの難攻不落と云はれた旅順攻撃に加はり、幾度か死生の巷に出入して乃木將軍から特に感謝状をおくられてゐる程だ。氏は銃術や剣道の達人であつて、其後は戸山學校、砲兵學校等の劍銃の教官に拔擢せられ、徴々たる一兵卒から少尉にまで果進したのである。軍政改革以前にかくの如き上進は稀れに見るところで、氏の如何に精勵至直な人物であるかと察せられやう。大正七年に退營後は現在の久保の地に居住し、電氣器具、雜貨、玩具販賣店を開いて、着々として業績を擧げるに至つた。と同時に在郷軍人大久保分會理事に推され、今日まで七箇年に及ぶも、倦むことなく公職に力め、一方町會議員たること三期に亘り、朝倉虎治郎氏等と參畫して、町民自治の刷新に資してゐる。大久保町には氏に抵抗して憲政會系の方が正交會を組織してゐるが、氏の堅壘を摩するに足らず、今では同町では筆頭の有力者と云はれてゐる。家庭には夫人との間に一粒種の愛嬢數江さんがあり、渡邊裁縫女學出身の才媛である。

田島甲子次郎

慶應元年十一月二十八日生
芝區田町三丁目十番地

人世は宛然流離轉沛の縮圖である、禍福は紛へる繩の數奇な運命にもてあそばれて波瀾曲折の生涯を送る人は決して少なくない。わが田島甲子次郎氏もまさに此の人であるに相違ない。今六十の坂を超えやうとして信望頗る篤く、町内有數の人として公共に寄與し我人も許す人として諸多の公職を奉じて自治に對する功勞は甚だ多いものがあるが、こゝに至る間の運命は實に數奇を極めてゐる。元神田に居を構へ、身分卑しくない武門の出として相當の家柄を持つて居たが、次第に窮乏に墮ちて維新の改革に逢ひ、一家は浮沈の瀬戸際に瀕した。そして氏が五歳の時、一家をあげて江戸表を引き拂ひ遠州の地に遷り濱松町に寓居した、そして十七年間此の地に住んで二十二歳の折獨立して横濱に出で、最初に掘物業について世渡りのかてを得て居たが二十五年には長驅一番遠く北海道に渡り、札幌南區一條に再び掘物業を始めたが之も思はしい成績は得られなかつた。で、二十八年には更に小樽に出て掘物業兼家具製作請負業を始め鋭意經營漸く精に就く事を得た。丁度日清の役が始まり、軍用橋梁や鐵道架設工事に要する用材一切を取あつかつて遽に巨利を贏ち得るに至つたが、好事魔多し、氏は間もなく病褥に伏す身となつたので、己むを得ず三十一年には函館に移り、療養に努めて數年を閑した。不屈な氏は此の間も漁業鑛山業に手を出し、種々と飛躍の道を講じたのであつた。現在では材木賣買業を營業し、震後北海道から木材を移入して素晴らしい發展を見せ業礎は漸く確實なるを得た譯で、氏も莞爾として徐に苦難の過去を見返へるであらう。

末田憲義

明治元年七月生
日本橋區久松町三四
電話 浪花四一九〇番

風光明媚な妻九州大分縣江氏の故郷である。天下の奇勝を誇る耶馬溪も別府の靈泉境も同縣内に在る。明治元年にこの縣下東郡に出生した氏は、郷里の中學校を卒業後上京して上野に在る東京藥學專門學校に入學し、藥學の高等學理を修得し、卒業後なほ依然として研究を続けるために、當時わが國藥學界の泰斗として宮内省侍醫頭の榮位にあつた池田博士の下に師事して、十年の久しい間を研鑽に研鑽の度を重ねて行つた。かくて明治三十年にその門を辭して現在の場所にかつた店舖を構へて、藥種商になつたのである。何分にも普通一片の藥劑師とは事變つてゐることと、期せずして信用は日に日に巷間に加はつて行き、家業の基礎は愈々鞏固さを加へて現在に至つたのである。特にまだ當時に在つては氏の如く正式の學究者が市井に出て開業してゐる者は殆んど稀であつたから、學問の民衆化と云ふ點で氏は又その先驅者だと云はざるを得ない。で、東京藥種商組合日本橋支部長に推されて、同業者の親睦並に共榮に奔走してゐる。なほ氏は十數年の久しい間を衛生組合のために盡瘁し、町内の衛生施設や防疫方面に多大な貢獻を拂つてゐる。曩に日本橋區民より區會議員候補者に擬せられ、種々勸誘されたが固く辭して受けなかつたとは、氏の名利に恬淡な性格を物語るものと云へよう。久松町々會長に推舉せられては、町民の隣保共睦に力を盡き、區警第十地區の區劃整理委員に推されては、只管復興途上にある帝都のために寄與して倦まない。識見學殖相兼ねた人物として、氏の如き人の活躍こそ、望ましいことの限りである。

玉木源太郎

明治八年七月一日生
本所區柳原町三の三二
電話 本所 一八六番

東都に於ける硝子製造工業界の重鎮として畏敬されてゐる氏は、岡山縣糸郡三保村の出身である。津山中學校を卒業後は歩兵第三聯隊に入營して軍務に精勵したが退營後は上京して日本硝子株式會社の創立事務に従事してゐたところ、不幸にも途中で解散の餘儀ない破目に陥つたので、當時同會社の社長であつた齋藤熊三郎氏の商店に入つて、硝子商を見習つた。それから古河鑛業會社本所鑛業所に入ると、間もなく日露戰役に出征し、不幸手に貫通傷を受けて歸還し、同三十九年に除隊となつたので再び古河鑛業に入つて執務したが、翌四十年四月に同所を辭して硝子製造を獨立で開始し、終始一貫今日に至つてゐる。現在のバラツク工場はあの震災後他同業者にぬきんじて第一番に建設したもので、却つて焼けた四千貫の硝子を以つて直ちに製造を開始し、震災で烏有に期した莫大な富の回收に奇功を奏したものである。現在では職工四十六名店員三名を使用し、晝夜をおかち製造に忙殺されてゐる。取引先は大坂島田商店、鐵道省、橋ガラス店等の一流の需要先ばかりで、平和博では金牌、京都衛生博では金牌、高等工業學校内の業協會には二度出品して有功賞、金牌等を贈與されてゐる。一方氏は本所區の硝子商二十三人の合併よりなる大工場を羽田に建設せんとし、既に政府よりは低利資金五十萬圓の融通を内諾されてゐる外に、東京硝子信用購買組合常任理事、東京硝子信用組合信用評定員、東京硝子工業所常任理事、東京硝子組合評議員、東京硝子聯合組合評議員、大正生命保險本所代理店等を兼ね健闘してゐる。

松方巖

元久二年四月生
芝區三田一丁目
電話 高輪一八九番

明治維新の大業に參與して絶大の功績を青史に刻み、元勳として後人に仰がれた侯爵松方正義氏の嫡男として生れ、叔父君の傳を徳ばせる資質を恵まれた氏は、弱冠早くも海外に遊び、泰西文化の學理討究に没頭し、時めく權臣の御曹子にも似げなく刻苦精勵の日を重ねたものであつた、即ち最初獨逸に渡つて伯林、ライプツヒ、ハイデルベルヒ等の各大學を了へ、歸朝後は外交官試補に任ぜられて青年外交官の手腕を顯はれたが、權門の家に生れても父君の後を襲つて政界に出る事は氏の性格とは相容れざるものあり、早くも自己の天職を察知した氏は、斷然官界を去りて身を實業界に投じた。當時父君の餘力が實業界方面にも可成扶植されて居たので、此方面に於ける氏の前途は其手腕と相俟つて極めて坦々たるものがあつた。果して幾何もなく十五銀行監査役に推され、續いて其取締役に擧げられ、更に丁曾銀行頭取を兼ねて、十五銀行の副頭取に進み、後其の頭取になつた。斯くして銀行方面に少壯有爲の實業界として令名を馳せた氏は更に横濱正金銀行取締役の要職を占め、尙帝國倉庫運輸株式會社社長として特異の才能を發揮し、斯界を風靡するの觀があつた。後銀行界革新のため十五、丁曾、浪速、神奈川、神戸川崎等の諸銀行を合併して此處に一大十五銀行を建設し、斯くて功成り名遂げて現頭取成瀬氏に職を譲るに至つたのである。又曾ては東京商業會議所議員、東京銀行集會所會頭に擧げられて敏腕を振つたもので、功に依つて正四位勳四等に叙せられた。夫人との間に二女をあげ、長女竹子は黒木伯爵の長男三次氏に嫁して居る。

前田長久

明治二十二年五月十六日生
本郷湯島三組町九四
電話 下谷 六四一四番



震災後の帝都は今や全市を擧げて復興に邁進してゐるが、就中區劃整理局にあつては晝夜兼行其業に當つてゐる。其間にあつて多年の蘊蓄と卓越せる技能とを以て、銳意其任に當りつゝある人に、我が東京市區劃整理局工務課技師前田長久氏がある。氏は明るい情操を多分に恵まれてゐる牛粹の江戸兒である。夙に學を好み、長ずるに及んで將來建築界に驍足を伸べんと欲し、高等學校を卒業後、東京帝國大學工學部建築科に入學して斯學の堂奥を究め、大正八年優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に文部省技師兼東京帝國大學技師として同大學營繕課に勤務し、大に非凡の才能を發揮して力むる處があつた。在六年、其間主として校舍其他の建築に當り、獨創的の技能を見せてゐたが、就中鐵筋コンクリート建築に對する造詣深く、殆んど他の追従を許さざるものがあり、斯界に於ける權威はこれ稱されてゐた。大正十二年偶々未曾有の關東大震災は、三百年來増はれた帝都の文化を一朝にして潰滅に歸せしむるに至つたが、當時我が東京帝國大學も之が被害を受くるもの實に甚しいものがあつた。之が爲氏は日夜寢食を忘れて其復興に努力し、其功績は定に没すべからざるものがある。かくて帝都の復興と共に迎へられて東京市に入り區劃整理局工務掛技師として、益々天賦の才能を發揮し、以て令名を馳せてゐる。此人となり高潔至純にして温良玉の如く、至言能く人を懐かしむるものがある。殊に職務に忠實にして而かも責任觀念の熾烈なるを以て範とすべく、趣味としては美術を好み、閑暇をその鑑賞に充つると云ふ。



宮川丑之助

明治十六年六月十五日生
淺草區材木町三三番地

其の温雅なる風手人格の高きを示し、其の熱實なる資性はよく成功の果を結び、教えて世を驚倒するの舉に出でずと雖も、孜孜として絶間なき努力を以つて公共自治の事に奉仕し、淺草材木町々會副會長の要職を占めて令名を馳せて居る人に宮川丑之助氏がある。氏は千葉縣海上郡船木村の人、夙に雄志を抱き社會に活躍せんとする希望を持つて居たが、家庭の事情は之を許さず、郷里に於て農業に従事すること實に三十有歲、而もその志は徒らに邊陲の地に止まるを欲せず、斷然意を決して上京し、先づ芝區新堀町小林商店に入りて事業開始に對する豫備智識を得んとし日夜孜々として精勵を怠らなかつた。然るに慧眼の士は現下都市の難問題たる糞尿問題解決に思を致し、爾來之が研究を重ねること數年、大正五年に至るや先づ現住所に居を卜し、獨特の方法に依る糞尿液取卸業を開始し、簡便と至廉とを以て市民の便宜を計りて早くも好評を博し、その創意の卓拔なることは同業者の追隨を許さぬ迄になつた。かくて經營は益々好調に向ひ十數年の星霜を閲した今日、斯界に於ける第一人者を以て任ずるに至つたのである。而も氏は業餘公共方面に不斷の努力を傾注し、町内諸問題に携はりて一々之を解決し、今や同町内にあつて有力者中の有力者として目せらるゝに至り、目下は材木町々會副會長に選出され、會長と相謀つてその要務を一身に引受けて執掌し、益々功績を擧げて居る。尙大正十五年三月には同業組合調停委員に推され、斯界に利する處多く、同業者一般から敬慕されて居る。而かも齡未だ四十八歳、前途に期する所幾多のものがある。



鈴木善之助

府下戸塚町稻荷前九五三番地

多年實業界にあつて令名を馳せ、今や東京府第一道路改修事務所長として卓越せる手腕を揮ひ、八面玲瓏行く處として可ならざるなき、其才能を讃へられてゐる人に我が鈴木善之助氏がある。氏は明治四十二年最高學府たる東京帝國大學の土木科卒業の秀才で、校門を辭するや直に職を東京市河津課に奉じたのであつた。之實に氏が公共的生活に入つた最初の一步で、其頃氏は新進の工學士として貪る程の執着と思慕を以て、隅田川改良工事に従ひ、第一部第二班の工事を完了し、其敏腕は早くも認めらるるに至つた。當時我國の經濟界は偶々歐洲大戰の影響を受けて黄金時代を現出し、各種の會社工場等が到る處に新設せられ、それと同時に新進の技術者を要するもの定に切あるものがあつたので、氏は大正四年十月迎へられて東京製鐵株式會社に入り、多年の蘊蓄を傾けて大に活躍したものだ。其後日本電力株式會社及宇治川電氣株式會社等の創立に力を注ぎ、實業界に令名を馳せてゐたが、大正十一年六月再び帝都の人となつて、東京府第一道路改修事務所長となり、銳意其職務に精勵し、以て今日に及んでゐる。由來東京府下に於ける道路は氏と赴きを異にし、之が改修等の如きも暫く豫算其他の關係上放擲せられたるかの觀があつたが、今や氏等の手によつて一新紀元を劃せんとしてゐることは寔に喜ぶべきである。氏資性淵達、稀に見る明哲なる頭腦の所有者で、趣味を謡曲に選び、興至れば時に朗吟して聲を散ると云ふ。以て其情操の豊かなるを見るべく、夫人を貞子と云ひ、其間に六男二女がある。

今井彦太郎

明治五年十二月五日生
日本橋三代町十二番地
電話茅場町一五九四番

文化は印刷によつて普及せられ、印刷は文化の發達によつてその技術の進歩を助長せられる。兩者は全く不即不離の關係を有して共に人類生活の向上に絶大の貢獻を致しつゝある。就中印刷は高尚幽遠なる文化を一般に普及せしむる點に於て、當に文化の先驅者であり雄々しくも氣高き闘士である。この最高貴なる使命を帯びてゐる世の印刷業者は、眞に多幸なる人と云はなければならぬ。目下東都印刷界の重鎮として斯界に令名ある我が今井印刷所主今井彦太郎氏は、過去二十年の間専心印刷業に従事し自ら文化普及の機關を以て任じ、斯界に不滅の足跡を印した。氏は全國最高の讀書率を有せる信州長野市をその懐かしき搖籃の地とし、幼にして俊才の譽れ高く郷譽を出でて五年間長野小學校に教鞭を執つた。後青雲の志を抱いて上京し、東洋大學の前身たる哲學館に學び、時の館長井上圓了博士に師事して斯學を研鑽した。學成つて三十年北海道廳事業手となり越へて三十二年通信省屬官を拜命、三十八年本郷區森川町郵便局長に任命された。されど内に鬱勃たる雄圖を抑へ難く、遂に四十年現在地に印刷業を開業するに至つたのである。爾來今日に至るまで二十年孜々として業務に精勵し、現在では東京及横濱市内電話帳の一手印刷を手始めに東京、名古屋、仙臺各通信局及び横須賀海軍鎮守府其他一府六縣に亘つて手廣く印刷を引受てゐる。目下營業部を現住所に、印刷部を神田佐久間町三ノ一九に製本部を日本橋龜島町二ノ三八に置き、益々その繁盛振りを示してゐる。温和にして書畫骨董を好み、家庭には夫人さわ子との間に四男一女がある。

松井庄三郎

明治八年一月十一日生
京橋區因幡町十六番地
電話京橋一六八三番

感激—それは生活多忙に疲勞した近代人にとつて、欲求してやまぬ新鮮な生命の活素である。感激のない處に人生の深い意義と光明は認められなかつた。徒に生ける屍の生活を營むに過ぎない。十九世紀末フランスに生じたデカタン、雪の露西亞を風靡したトスカの厭世思想は、癡痺した生活から遂に酒と死に誘惑された思想的末路であつた。店員十數名が一致協同して、雄々しく活動し、店は日に隆盛を極めてゐる吾が松井庄三郎氏の一生こそ、誠にこれ感激の連続せる生活といはねばならぬ。氏は明治八年生を東京に享けたが大正元年獨立現住所に印刷所を創立するや、銳意事業の擴張と技術の優秀を圖り、遂に現今の如き牢固たる基礎を築くに至つた力行の人である。世の風潮は日に廢頹し、昔三世と稱された主従の縁も、資本と勞働との對立を生じた現代に於ては次第に稀薄となつて來た。然し氏はゆかしい温情の美德を以て、常に店員を吾子の如く愛撫し、その將來を慮つては、自から月下氷人となつて永久にその生活を保證した。従つて氏の美德氏の温情に感激の涙を流した店員達は、氏の爲めに死命を惜まずその恩に報ひんと努めてゐる。その主従が渾然として融合された結果は氏の店をして今日の榮ある基礎を造らしめた。この主従の世に稀れな行爲こそは實に誇り得る社會美談である。その他氏は大正十三年因幡町青年團を創立し町内の發展と、共存共榮の實を圖り、尙二十三ヶ町よりなる京橋區一部會設立に奔走し、因幡兒童遊園地設立の主唱者となり、今や町會長に推されて町會の刷新に腐心してゐる。家庭には若子夫人との間に二男二女がある。



中澤彦七

明治十七年八月十八日生
京橋區松川町九番地
電話京橋九四・九五番

京橋區松川町目貫の場所に、宏壯なる店舗と多數の店員を擁して手廣く取引して中澤酒類問屋は、その基礎の堅實と信用の博大なるを以て巋然斯界に頭角を現してゐる。同店は今を去る二百數十年前即ち享保年間創業に係り以來數代連綿として酒類販賣業を營み代を重ね年を追ふて漸次繁榮を加へ遂に今日の殷盛を見るに至つたもので、斯界に信用の厚き當に宜なりと云ふべきである。當主中澤彦七氏は學業を卒るや直ちに家にあつて將來店主としての實際的研究に努め傍ら余暇ある毎に全國酒類業界の實地視察に各地を遍歴してその實狀を詳かにした。大正十一年先代彦七氏の隠居により家督を相続し、同十五年嚴父の卒去と同時に襲名し現在に及んでゐる。氏はかく家業の隆盛に努力する傍ら、一方公共自治の爲に力を注ぎ居町の發展と隣保親睦の爲に精進し其功績は寔に没すべからざるものがある。氏は資性温厚篤實にして識見高く同業者間の衆望を一身に集めてゐる。氏は又一面情の人で店員を受すること極めて深く、自ら店頭に立つて店員を指揮し苦樂を共にするといふ風なので、店員の氏を見ること恰も慈父の如く、上下渾然融和し見るものをして自ら快感を覺えしむものがある。氏は本年四十四才の働き盛り、今後の活躍は蓋し眩目して見るべきものがあるであらう。夫人をろく子と云ひ貞淑の譽高く、二人の間に一男一女あり、長男は開城中學校を卒業後家にあつて専ら家業に従事し、一家の和樂定に抑すべきものがある。

小島直太郎

明治二十三年十月十日生
府下府中町五六一五

我が東京府視學小島直太郎氏は學務課切つての才人である。氏は本年三十八歳の少壯にして而かも青山師範を出たのみで今や都下教育界に噴々の名を轟はれてゐる。これ氏の天稟の才能を物語るものでなくて何であらう。氏は一代の漢學者大沼枕山氏の高弟、小島榮山氏を父として北多摩郡清瀬村下宿に呱呱の聲を擧げた。氏の先祖は累代儒學の家にして十八代の長きに亘つて私塾を開講した附近切つての名望高き舊家である。この名家に血を享けた氏は云ふまでもなく凡骨ではなかつた。幼にして穎悟明治四十五年拔群の成績を以て青山師範學校を卒業し直ちに北多摩郡化成小學校に訓導となり止まること六年、天才的教育家の名を擅にした。大正六年同郡昇進尋常高等小學校長に轉じ後幾何もなく同郡清瀬村立補習實業學校に招聘せられて校長となり、同九年同郡田無町實業補習學校長に再轉した。かくて各地に歴任するうち囊中の錐は忽ち認められて同十三年北多摩郡視學となり益々鮮やかな才腕を發揮した。十五年郡制廢止と共に東京府視學に榮轉して、才氣煥發適く所として可ならざるはなく精勵今日に及んでゐる。謹嚴にして實行力に富み、家庭に於て勤儉靜の三文字を家訓とし一家學つて之を實踐してゐる。家系を享けて流石に漢學には天才的閃めきを示しその作詩は専門家の領域を冒してゐる。又文學にも造詣深く業務の余暇常に讀書に親んでゐる。氏の如きは將に天才的教育家としてその將來の大成は窺知すべからざるものがある。家庭には淑徳の譽れ高い夫人とし子との間に二男一女あり、何れも氏に似て學績は拔群である。

望月清三郎

明治七年一月一日生
小石川區音羽二丁目八

小石川區内有志で本編に紹介するに足る人物を求めたならば、今同區中光彩の陸離たる人で望月清三郎氏がある。氏は北豊島郡大森村の産で嚴父は久しく村長を勤め、土地でも名望家として廣く知られてゐる。従つて幼少の折から嚴格な家庭に育ぐまれた丈けあつて、人一倍正義の觀念が強く而かも一片稜々の氣骨を有する、稀に見る硬骨漢である。所で現在在瀧の湯の名の下に浴場を營業して随分客足の繁昌振りを示して居るが、味噌醬油醸造家である加藤家の次男で氏は二十二歳にして其の級成にあたる望月家の養子に請はれた處から入つて望月姓を冒す事になり、養父多吉氏を扶け日夜奮勵努力して家運の隆昌に力めた結果、遂に今日の賑盛を見るに至つたのである。一方町内公共方面にかけても從來乗り出して謀議に關與し、深思で事理に透徹した材幹を以て貢獻する所が多かつた。町會には卒先して肝膽を砕き隣保の提携を計つたが、謙讓な氏は常に名聞をさけ、周囲の推薦を固辭して區會等の名譽職には就かなかつたが、先回改選の際、有志の懇請いなみ難く、はじめて區政壇上に花を咲かせる事になつたのである。恬淡で公正な氏は、自家の所信は何處までも主張をまげないが、創意的な頭腦の働きは區議中に令名を馳せて居る。本年取つて五十三歳、意氣も中々壯んであるが、區會刷新には今後も奮闘される事と期待されて居る、弓術に興味を持ち中々堂に入ったものだといふ。妻女は同じ醸造屋、淺見新八氏の女であつて氏との間には長男重一次男義郎氏があり、將來を囑目されてゐる。

坪谷善四郎

文久二年二月生
牛込區北山吹町二九
電話牛込一五五九番

一管の筆よく一世を導き、縦横の筆鋒は鮮麗達意、讀む人をして心服せしめ、我が國著作界の先驅として、學界には又文藝界に裨益するところ極めて多く、文化の進歩また氏に負ふ所甚大なるものとして余等坪谷善四郎氏を推す。氏はもと新潟縣南蒲原郡坪谷善三氏の四男に生れ明治九年分家して別に一戸を興し、十八年上京して當時の東京專門學校に入つた。そして明治二十一年政治經濟科を卒業するや、秀才を以つて聞えた氏は同郷人大橋佐平氏の創立になる博文館に編輯長として聘せられ弱冠の一書生より大筆を以て一世を震駭せしめるの大芝居を打つたものである。而もその内に溢る、壯なる意氣は遂に明治二十七年日清の役起ると共に内外通信社長として渡清し、親しく戰爭當時の支那の實狀を視察し、その通信は又當時の通信界に白眉を以つて稱せられた。後三十三年北清事變の實況視察の目的を以つて再度渡支し、續いて明治四十年には土耳其・希臘・西班牙等を巡歴して大いに見聞を廣め、又日本民族のためにこの異境にあつて萬丈の氣を吐いた。その氣魄の壯なるは到底他の追従をゆるさぬものがある。而して氏のこの意氣と熱情とはよく近隣の敬慕するところなり、明治三十四年牛込區會議員に推され、爾來三十餘年、常に自治政の爲に盡し、四十四年には東京市會議員として市政壇上縦横の瞻策を示した。氏號して水哉と呼び、著書多く、日本漫遊案内、世界漫遊案内、山水行脚、各國都市制度一斑等あり。現に博文館取締役、秀英舎監査役、大橋圖書館長等として盡瘁し、日本の文化發達に裨益するところ甚だ多い。



埋田 勘助

明治二十三年二月十日生
芝區白金三光町二十九番地
電話 高輪 七一四五番

氏は千葉縣夷隅郡波花村の生れである。夙に郷里にあつて紙製造業に従つてゐたが、明治四十一年即ち年輪十八歳の時に意を決して上京し、機械製作の技術を習得したのである。かくて遂に獨立し、芝區琴平町に鐵工業を開き、後大正五年現在の場所に轉じ、益々業務を擴張して諸機械の製作に従事し、特にその特技とする水道用コックの製作の如きは、他の追従を許さない優秀品であると云ふ。そして之が一ヶ年の生産高は十萬圓を超えてゐる。吾人は氏の現在を想ふ時に、あの獨逸の花と唄はれたクルツプ工場主を想見せずには居られない。一挺のハンマーを以つて身を興し、獨逸工業界を今日の高きにまで置いたのはクルツプであつた。それを想ひ之を想ふと、由來科學的工業品に疎いとの評ある日本人の中にあつて、氏の如き努力の人を見出すのは實に痛快だといへやう。まこと第三の新興日本は、鐵道とエンジンの交錯した響音の中から生れなければならぬ筈である。氏はその多忙な家事の一面にあつて、又よく町政自治のため奔走し、有志と計つて自治會を成立せしめて其理事となり、ある日は夜警規則を改正して各地に散在せる夜警所を數ヶ所に集中せしめ、又は下水の清掃を行ひ、或は街燈を點して町内の美觀を圖り、又は種痘の勵行を叫ぶ等功勞甚大なものがあつた。氏は趣味として體育練磨の柔術を附近の永井道場に學び、その奥儀に達してゐると云ふ。そしてその健全な體軀を以つて、あの大地震に際しては罹災者の救済に、晝夜の別を忘れたとの美談がある。夫々の子との間に子女一人あり、家庭は常に春の如く圓滿であると。



大神田 軍次

明治十六年七月三十日生
芝區白金三光町
電話 高輪 六八九二番

芝區に於ける政界の鬪將たる大神田軍治氏は、可成り苦礎の閱歷を持つて居る人で。今日の位置を築く途には刻苦勵志の汗と膏の代價が擲たれて居る。氏は山梨縣北都那郡巖村の人で、弱冠の頃青雲の志やみ難く僅がれの東京に上京し、二十一歳で四谷の籍文學會に學び、轉じて日本大學に遊び研鑽に努めたのであつた。郷家の豊かでなかつた氏は、其爲には寸暇を惜しむ力行苦學をつゞけ、以て螢雪の苦を積まねばならなかつた。併し剛毅の氏はよくその艱難に耐え、遂に明治四十一年代書事務所を芝區役所前に設け、依頼者の需めに應じ懇切丁寧を極めて業に従つたため、爾來引き續いて世人の信頼を博して益々勢力を扶殖して行く有様であるが、多年の冀望の實現を期して大正十年十一月芝區會議員の改選に際して白金三光町から立候補を宣し、衆望の歸する所易々として當選の榮を擔ひ、十三年東京府會議員の改選に更に十五年市會議員改選に際し、選挙場裡に塵を逐ひ、何れも周囲の應援に依つて之亦易々として當選し、今や府區會の樞機に加はりて劃策討議に一異彩を放つて居り、併せて府參事會員としては克く大任を負ふて府民福祉の上に寄與多からんことを願つて居る。氏の眞技倆發揮の機會は當に逼つて居るが、これまで實力を發揮されるかは區民の括目する所である。尙芝區内の區劃整理委員に擧げられて居る。其の容貌茫乎たるうちに機を捕捉するの敏捷さと、事を企畫する明徹の資とを抱いて居り、自治政の要諦と現下の民狀に通曉して居る氏の幾多の抱負は、奈邊まで實現し、幾許の奏功をなすかは頗る興味ある問題であらう。

梅津 直次郎

明治元年十二月八日生
下谷區仲徒士町四ノ八

氏の故郷靜岡縣の由井村は、背に芙蓉の靈峯と薩埵の翠巒を負ふて駿河灣に面し、其の漣瀾たる碧波の間に三保の松原を望む風光明媚の地である。氏がこの地を後に上京したのは明治九年で、未だ十才の頑是ない頃であつた。先づ業務見習の爲め直に某刷子刷毛業商に入り、朝は未明より夜は深更に至るまで年長者に伍して骨身惜まらず涙ぐましい程の奮闘を續けて行つた。爾來十五年の星霜を實直に勤め上げ、明治二十五年には現在の地に獨立開業するに至つたが氏の天稟とも云ふべき非凡な商才と溢るゝばかりの愛嬌、それに眞面目な態度とは忽ち信用を購ひ家運は一路幸運を遂つて隆盛に赴いた。而して氏は自家の發展に努力する傍ら同業者の福祉を希ひ有志と共に同業組合を創設したのは實に大正十年の事であつた。而かも性來義俠に富める氏は、更に組合員中の同志二十名と語り、別に博善會なるものを組織して一定の積立金をなし、公共事業は勿論、世の哀れなる人々を救済することを唯一の樂とし、かの大地震當時の如きも積立金を以て罹災者を救助したことは今も尙ほ美談として巷間に傳へられてゐる。氏は現在同組合の理事長を勤め兼ねて東京府産業組合員となり、産業振興と斯業の發展に精進して殆んど寧日ない有様である。又町會設立の主唱者で町内になくはならぬ有志である。氏は齡耳順を超ゆるも尙鏗鏘として壯者を凌ぎ専ら町政の刷新と斯業の發展に邁進して倦む處を知らず信望を一身に集めてゐる。而も別に道樂とてはなく趣味を公共事業に有する處に氏としての偉大さがあり人間的の閃めきがある。民子夫人との間に五女がある。

吉住 藤次郎

明治十二年三月五日生
淺草區馬道町三ノ一

超人の福音を説いたニイチエーの哲學は意志であつた。昔、因州の山中鹿之助といふ智將は、蒼天に懸る三日月を仰いで尙この上に苦難の來たらんことを祈つた。苦難に遭遇して初めて人格は練磨され輝くのである。その苦難を冀ふ程の者はもとより意志の人であつた。吾が吉住藤次郎氏も亦極めて意志の強い人である。氏は神奈川縣厚木町和田直吉氏の次男に生れ郷里に於て普通教育を修めてからは、専ら實業方面に志を立て、早くもその人と爲りを知られたが、伯父吉住安兵衛氏の懇請に依つてその養嗣子に入り、二十二才より養家の業務を繼續することになつた。養家吉住家は、名門として知られた由緒正しい家で夙に淺草名物金龍山淺草餅の發賣元として普ねく世に知られてゐた。爾來氏は専ら力を業務の擴張に注ぐと共に新に化粧品店を開業し日夜營々致々として涙ぐましい程の奮闘を續けて行つた。併し人生は奇しき運命に支配された有爲天變のそれである。多大の努力と莫大な資本を注いだ化粧品店も一朝關東大地震の爲め烏有に歸した。この苦難に當面した氏の猛勇心は烈々たる焔となつて燃え出で而かも震災後僅かに一ヶ年を出でずして家業を盛り返し、遂に現今の如き牢固たる地盤を築くに至つたのである。氏は一面公共の念極めて篤く大正十三年以來三丁目町會長に就任して町内發展に盡瘁するの外區劃整理委員を始め化粧品同業組合淺草支部評議員等其他の公職に推薦され、噴々たる名聲と絶大な信望とを博してゐる。氏資性温厚篤實光風霽月の襟度を有し義太夫を能くす。夫人をさだ子と云ひ二人の間に一男三女がある。

山本章

明治十九年十月廿六日生
府下日暮里町一〇八八番地

曩に東京市の衛生試験所にあつて令名を馳せ、現在東京府廳に於て、其の明哲なる頭腦と天稟の才能とを以て事務に精勵しつゝある人に、我が山本章氏がある。氏は行住氏の三男として神田に生れた生粋の江戸つ子である。嚴父は前に警察署長として知られ、後神田區役所衛生掛長となつて區内の衛生設備に少なからぬ貢獻をなした人であつた。氏は先づ明治三十八年東京明治義會を卒業するとすぐ法政大學法科に籍を置いたが、其英志の未だ伸びざるうち中途退學するの已むなきに至つた。次いで明治四十一年通信省通信技手を振出し社會生活の戦線に乗り出し、同所に居ること二年有餘、明治四十三年辭職すると共に淺草區役所會計掛に勤務することになった。之れ實に氏が市政に携はるに至つた最初の一步で大正十五年五月遂に東京市の庶務課に榮轉した。以來天稟の才能を發揮して際目向なく事務に精進したが氏の赤誠を罩めたその奮闘が上司の瞞に頼母しく映らぬ筈はなかつた。かくて大正十四年特に拔擢せられて主事に進み東京市衛生試験所に勤務する事になった。爾來帝都の繁雜なる衛生事務に理智の手腕を發揮してゐるが昭和二年東京府の庶務課に轉じ、精勵今日に及んでゐる氏資性調達、その剛健なる半面に於て溢るゝばかりの温情を湛へ、人をして自ら欣慕の情あらしむ。氏は又趣味をカメラに有し、時に閑暇を得れば郊外を逍遙し、美的情操を培つてゐると云ふ。夫人をみよと云ひ、埼玉縣浦和寓女出身の才媛で貞淑の譽れ高く、二人の間に子實はないが、和氣霽々として美しい融和を見せてゐる。

大瀧徳三郎

明治十九年一月廿五日生
淺草區今戸町六番地
電話淺草一〇〇五番

淺草の花屋敷か、花屋敷の淺草かと云はれるまで普ねく人口に膾炙してゐる花屋敷は、最新の設備と最大の規模を有し、民衆的に而かも教育的價値ある點に於て遙かに一頭地を抜き、名實共に淺草の誇りとするに足る理想的の娯樂場である。而して其處には之が經營者たる我が大瀧徳三郎氏の超人間的な苦心と努力とが秘められてゐるのを見逃してはならない。氏は生粋の江戸ッ兒で大勝館の創立者として知られた大瀧勝三郎氏の三男として生れ豊次郎氏の養嗣子となつて、其後を襲ふたのは明治二十九年の實に氏が十歳の時であつた。由來民衆的一大歡樂境たる淺草、其處には何の屈托もない平和な夢のやうな世界が現出され、血で血を洗ふ活社會の生存競争に疲れ果てた人達のこよなき安憩の地である。而かも日に幾万の人々を吞吐する淺草は、輕薄なる現代の風潮に感染して、最近卑俗な而かも挑發的な娯樂機關の設立を促し、動もすれば安憩の地たる淺草公園が却つて犯罪の濃源地たるかの如き觀を呈するに至つた。氏は夙に之を憂ひ種々苦心の結果、從來の花屋敷を改良して普ねく教育の參考品を蒐集し、娯樂に教育を加味した所謂高尚なる歡喜境を實現するに至つたのである。又一片樓々の氣骨を有する氏は傍ら町政の刷新に精進して大正十五年の九月、今戸町々會長に推され傍ら青年團の副團長にも就任し、町の爲め、人の爲めに涙ぐましい程の獻身的な努力を付けてゐる。家庭には貞淑の譽れの高いヨネ子夫人との間に、一夫、幸雄の二君及び綾子、馨、玲子の三嬢あり、誠々たる和氣が漲つてゐる。

芹澤新平

明治九年八月八日生
世田ヶ谷一六四五
電話世田ヶ谷一六六番



世田ヶ谷切つての豪農として、此の界限に住む三歳の童兒にもその名を知られてゐる芹澤新平氏は、先代新平氏の二男として世田ヶ谷の地に産れた。氏の家は代々世田ヶ谷に住し、家號を煙草屋と稱してゐた處から見るに、祖先が何か煙草に關する商賣をしてゐた事は疑ひない。そして今も尙その煙草屋の家號を持つてゐる所から推して、先祖が煙草の商賣に依つて、相當の資産を残したであらうと云ふ事は誰人にも想像が出来る。實際芹澤家の今日あるは、煙草に名を得た先祖の遺産を種に、時世の幸運にうまく乗り當てたと見るべきが至當であらう。先代の世に出た頃は専ら質業を営み、傍ら農業にも手を出してゐた。其の後質業を止めて醤油の醸造を始め、資力に無限の富を有する富家は、開業當時から野田銚子の本場をも壓倒せんばかりの勢を見せた。今の芹澤新平氏は前名を稻吉と云つてゐたが明治四十二年家督を相続すると共に、父君の名新平をも繼いだのである。祖業をうけた氏は、益々業務に精勵し、醤油醸造の擴張を計りて倍舊の生産額を揚げしむるに至らした。欧州の大戦に依る財界の好況は、氏の家にもよりよき幸福を齎した。即ち、東京市の發展は遠き市外に迄及び、地價の如きは幾何級數的に騰貴し、現今に於ては實に十倍以上に達した。氏の廣大なる所有地も此の恩澤に浴した事は勿論である。今では醤油醸造業も止め、大地主として聲望を擡にしてゐる。氏は又學務委員として、又所得税調査委員として公共の爲に貢獻する多が極めて多い。夫人をちさ子と云ひ、その間に六男五女があり、賑かに團樂してゐる。

十時尊

明治十二年九月月生
府下中澁谷道玄坂二九一
電話青山二三九一



氏は福岡縣山門郡城内村の人、舊柳河藩士附從五位十時惟恭氏の四男である。明治三十六年三月職を東京市に奉じ、大正九年四月主事に昇り、同年八月拔擢せられて内記課長となつたが、十三年永田市長の辭任と共に職を退き、更に十四年十月本所區長に任ぜられ、現に其の職にある。氏は諸務に通曉し、その人に接するの態度は懇切、其の事に當り嚴正忠實を以つて知られ、曩に氏が市に職を奉ずるや、市規定集の改刷を企畫し、考査研究遂に千數百頁に渉る大冊子の編纂を完成せしめ、大正三年市長坂谷芳郎氏の命を受け東京概観の刊行を企て、之が編纂に従ひ、和歐兩様の冊子を刷成して東京市を内外に紹介し更に内記課長就任後は専ら職員進退、教養、儀式、交際、機密其の他非常災害等の重要事務を管掌して大に功績を見るべきものがあつた。大正九年市疑獄事件發生に際し、市長、助役、主事、技師に至るまで退職した時、氏は大海原事務管掌を輔けてよく機宜の處置を講じ、更に大正十二年關東大震災に際しては、寢食を忘れて罹災民の救助に任じ、顯著なる功績によつて十三年四月府知事から地方功勞者として表彰された。本所區長就任後は、災害の最ひどかつた同區の復興に全力を傾注し、漸次その實績をあげてゐる。實に氏の經歷は氏自身の性格を物語つてゐるもので、信ずる所必ず行ふの概に至つては以て衆人の範とするに足りる。そして氏が斯かる性情を養ひ得たるものは、帝國海軍の母とも云はれる令姉十時菊子女史の力も與つて力あるといふ。家庭に靜江子夫人との間に二男一女あり、圓滿を極めてゐる。



前田 清風

明治三十年五月十五日生
牛込區納戸町二三番地

少壯有爲の建築家として名ある、東京府警備課第三掛長たる前田清風氏は、熊本縣玉名郡小天村の名門に人となつた。明治維新以來幾多の人材を輩出せしめた熊本縣人の血管には、傳統的に不屈の勇猛心と敗けず嫌ひの精神な赤い血潮が流れてゐる。氏もかうした性格を人一倍多く郷土から恵まれて人となつた丈に、熊本高等學校在學當時は、名うての運動選手であつて、而も學業も優秀であつたから、同級生からヤンヤと騒がれたものだと云ふ。同校卒業後、若やいだ血潮と前途に輝く希望は、遂に氏を驅つて東都へと旅立た。時代が已に高層建築を要求してゐるのに着目し、自己の正しい生活を光輝ある建築界に見出さんとして東京帝國大學の建科を選び、研鑽すること多年、只管斯學の堂奥を探り、大正十三年優秀の成績を以て卒業したのであつた。大正十三年と云へば、彼の恐るべき大震災の後のを受けた年で、帝都は官民共に一路復興へ向つて邁進してゐる時であつたから、新進の建築家は實に大旱雲霓視せられる千載一遇の好機であつたのだ。此時に當り而かも帝大出身の俊髦たる氏が一人見出されぬ筈はなかつた。氏は卒業すると直に迎へられて職を鐵道院に奉じ、新銳の意氣と多年の蘊蓄とを傾けて職務に精勵してゐたが、遂に其年の十月東京府に轉じ、現に警備課第三掛長として益々天稟の才能を發揮し、聲望を恣にしてゐる。氏年齢僅かに三十歳、其若くして進境の速なる、亦以て氏の才器の凡ならざるを遺憾なく物語るものである。夫人を基子と云ひ貞淑の譽が高い。



荒井 清吉

明治十九年六月二十三日生
府下中野町宇打越區一九五五

人生は不斷の闘争であつて、その第一線に立つて猛進し得る者こそ眞の人物である。わが荒井清吉氏がこの第一線に立ち得る闘士たることは、氏が徒手空拳を以て今日の大をなしたのを見ても知ることが出来る。明治三十九年東都に出で、幾多の刻苦艱難を経て、エービー電氣商會と葬儀店を淺草玉姫町に開き、傍ら日本大學法科に學びて大に辯論の研究に従ひ、大正十一年卒業の後、現今の葬祭社を始め、震災の爲鳥有に歸すると共に大正十三年二月現在の地に轉居したのであるが、區の自治に盡力して多年に亘る難件を處理し、推されて區の代表者となつた。氏は先に修練したるだけあつて稀なる雄辯家である。會て郷里茨城縣境町の町政刷新に當り、土浦裁判所檢事を向ふに廻はして滔々懸河の辯を伸べ、檢事をして驚歎せしめたこともあつたといふ。氏は又數十年來食料問題について鑿るところあり、二食主義を取り、而も外國米を用ひてゐるが、猶よく強備にして精氣は溢れてゐる。眞に意志の人にして意力によりて身體を鍛練してゐるものといへや。家庭に夫人松乃子及一男がある。夫人松乃氏は才色兼備を以て稱せられ、貞淑夫人に奉ずると共に外に、進んで婦人參政聯盟講習會に入會し、知識の向上と共に婦人の社會的地位の昂進に努め、夫人亦洋裝の活動に便利なるを推奨し、一家皆洋裝するは勿論、自宅の裏に婦人子供洋服研究所を設立し、自ら講師となりて洋服宣傳に盡してゐる。現今新時代の婦人多しと雖も、識見實質にして身を以てこれに任ずること松乃夫人の如きは其比がない。氏の家の如きはよく松柏並び聳ゆるものといふべきである。

廣 瀨 政 次

明治十七年十月十七日生
北豐島郡瀧野川町上中里一八一

479
昔ギリシヤの文明を支配したものは文教の力であつた。文教—それは一國の國民思潮の源泉であり、國家興亡の根幹をなす國家的原動力である。従つて文教に對する指導如何は、直ちに全社會に及ぶところとなり、民心廢頹社會の秩序紊亂も亦之によつて生ずるものである。氏はこの文教指導の任にある人、従つて氏の職責や重且つ大と云はねばならぬ。氏は帝都に近き埼玉縣大里郡武川村野澤惣三郎の三男に生れ、長じて廣瀨家の養嗣子となつた。夙に教育家たらんと志し、明治三十八年埼玉縣師範學校を優秀なる成績で卒業したが、燃ゆるが如き氏の學究心は遂に氏を驅つて更に東京高等師範學校に學ばしめ、四十四年物理化學科を優秀なる成績で卒業し、直に東京府青山師範學校教諭に任ぜられた。是れ氏が活社會に乗り出した最初の一步で、爾來多年の蘊蓄を傾けて天稟の才能を發揮し、教育界に貢獻する處極めて多く名教育家の名を擡にしたものだ。斯くて大正十三年五月東京府より拔擢せられて視學官に任ぜられ、専ら小學校理科教育指導の任に當り、理科學教室設備の改善並に内容の充實を圖る等其功績は定に没すべからざるものがある。氏は又音楽の造詣極めて深く高師生時代已に大塚音楽會員たりし程で、質實剛健の半面に於て融々たる音楽の趣味を解する處に氏としての偉大さがあり、人格的閃めきがある。夫人ゆい子は現に瀧野川尋常小學校の訓導を勤めて貞淑の譽高く、二人の間に長男正夫次男文夫長女信子次女綾子がある。

横 溝 治 郎

明治四年十一月一日生
四谷區新宿二ノ七二
電話四谷六〇六八番

人の一生は或る支配力に依つて運命づけられたと、宿命論者は言ふ。併し人の一生がたゞ宿命に托せられたとすれば、それは權棒を持たぬ葉舟に乗つて大海を渡るに等しく、其處に進歩もなければ向上もない。活社會に現代人が自ら自己の運命を開拓せんとするも畢竟之が爲に外ならない。我が關東砂利業者聯合會幹事として、今や斯界の重鎮として名ある横溝治郎氏は、實に此の運命を自ら進んで開拓し、遂に今日の榮達を築いた生活戦線の闘士である。氏は甲府盆地北都留郡島田村の産、常に靈峰富士を仰いで育つて來た。明治二十八年早くも土木界に投じ、神奈川縣下の土木建築事業に従事し、後ち太田組員となつて中央鐵道工事の監督を勤め、明治四十三年東京電燈工事に當つて、氏は茲に獨立の旗色鮮明に、工事材料の砂利供給を營んだ。運命を開拓せんと努力する人に對しては、やがて麗しい榮冠が頭上に輝かすには措かない。氏にも其後間もなく幸運が訪れ家業日に月に隆盛に赴き遂に土木界の信望を博するに至つた。斯くて大正九年には名古屋鐵道局の指名請負人になると共に、郷里島田村の砂玉石の採取販賣を始め、横溝組を合資社に組織して代表社員となつた。其後に於ける氏の活動は殊に目覺しく、會社の業務は旭日昇天の勢を示した。大正十二年氏は中央線與瀨窪道の震災復舊工事の功に依り、名古屋鐵道局長の感謝状を受け、また東京鐵道局指名請負人の認可となり、横溝組の發展は近時土木建築界の驚異とされてゐる。氏資性剛毅、熾烈なる責任觀念と稀に見る人間味の所有者でト、子夫人との間に二男三女の子福者である。

河合徳三郎

明治八年五月十三日生
下谷區上根岸七二
電話 下谷四六四一番

人情紙よりも薄き現社會に於て、卓然發立流俗の間に超越し、溢る、如き人間味を以て貧困者の救助に従事しつゝある帝都土木建築請負界の覇王河合徳三郎氏は眞に今の世に得難き高德の士である。而して氏の今日の地位と共にその過去を知る者には涙なくしては氏の前に跪かれぬであらう。氏の原籍は岐阜縣であるが生ひ立ちの地は名古屋である。少年の頃一家の零落に遭ひ僅か十三歳にして苦學上京の途についた。されど不幸道中に於て病魔に冒され、止むを得ずその地方の土方部屋を頼り働くこととなつた。爾來諸所を遍歴して野宿すること二十余回、天涯孤獨の哀愁と目前の空腹とは全く氏の前途の光明を奪ひ、幾度か絶望のどん底に呻吟懊惱せしめた。嚴冬の或る日空腹に堪へ兼ねる利根川邊りて一農夫に薩摩芋を恵まれた時心中密かに期する所があつた。かくて明治四十年土木界に身を投じ千辛万苦遂に今日の地位を獲ち得るに至つたのである。氏は斯界に稀に見る篤學の士で、常に欣求と思慕を以て土木建築に關する専門的の書籍を涉獵し、同時に土木政治經濟法律及び思想問題等有ゆる方面に智識を求むることを怠らない。現に東京土木建築業組合第四支部の主腦者として重きをなしてゐる。昨年十二月莫大な私費を投じて上野寛永寺坂下に宏大なる私設困窮者救濟所を設立し、且つ更に年々二萬五千圓の私費をその維持費に充て、一般困窮者に食事現金其他を無償提供してゐる。氏が現在生ける救世主として衆人渴仰的となつてゐるのも宜なりと云ふべきであらう。家庭にはとり子夫人との間に一男二女がある。

虎岩清四郎

明治十年二月十日生
京橋船松町十四番地
電話 京橋二四〇六番

人類が暇かに自然界を征したのには電氣の發明による夜間の照明であつた。そして近代に於ける電氣の使用範圍は、恰も鐵と石炭の時代が過ぎて石油時代が出現した如く、將來の世界は總て電氣化されてゆく感がある。虎岩清四郎氏は、此の電氣業界の闘士として將に來らんとする時代の建設に懸命の人である。由來虎岩家は數百年來連綿として續いた舊家であつたが、中途没落の悲運に襲はれたかな考證書類は失はれた。『家傳』云フ、唐岩ハ源姓知久氏諏訪茂ノ分流也。世々信州伊奈郡ヲ領シ虎岩城ニ住ス。故ニ子孫今以テ爲氏。天文年中武田信玄ノ爲メ没落。幼童流浪ノ間ニ代々ノ傳記悉ク之ヲ失フ。系圖證文不傳領地ノ高未知、或ハ二萬石余ト云フ。(中略)諏訪明神ヲ以テ武將守護神ト云フ頼茂ハ源三位頼政ヨリ出デ小笠原氏木曾氏、村上氏等各一族ヲ、依テ信州ヲ分類スト」斯の如く虎岩家は由緒正しい家筋である。氏は此の舊家長野縣伊奈郡虎岩村に生れ、郷里の中學校を卒業すると直ちに外人經營の商館に勤務したが明治卅年電氣界の將來益々有望なるを洞察して翻然電氣業界に投じ、刻苦精勵する傍ら業務の余暇を割いて電氣學を獨習し、他日の飛躍に備ふる處があつた。斯て苦學力行の間に幾春秋を重ね、遂に三十八年虎岩電氣合資會社を起し次で大正七八年の好況時代に乘じて一大飛躍を試み、搖ぎなき富の礎を築き遂に事業界に盛名を馳するに至つた。之より先氏は大正元年船松町郵便局長となり、更に同十四年には同町會の會長に推薦された有徳の士である。目下家庭にはミスズ夫人との間に五男二女の幸福者である。

高木敏雄

明治二十三年九月二十八日生
豊多摩郡杉並町高圓寺六三七七

愛知縣名古屋市東區新出來町の出身であるだけに、すゞしくみやびた名古屋訛で話かける、といへば女性的な豫感を與へられがちだが、何うしてそれであるに於て太つ腹な度量の持主で、話が政治方面にでもそれやうものなら、眞に談論風發と云ふ概を見せ、慷慨悲歌して國是を論じ、さては濁流に泳ぐ政治家に痛烈な罵言をおくるあたり、腹の底からの眞面目を露骨に現して面白い。假りに記者が、何うです今の内に議政壇上に堂々の陣を張られるやうにしてはとでも出やうものなら、にたりと北叟笑んで膝の邊に視線を落す風情は、氏の單に一技術家に非ざるの心事を思はさせられるに充分だ。抑も氏は明治四十一年に岐阜中學校を卒へ、同四十四年には第八高等學校第二部を修了して、それより九州帝國大學工科大学土木科を目度卒業したのが大正四年のことであつた。在學時代から成績優秀を以て他日を矚目されてゐたと云ふ。まづ大正六年に福岡縣技師を振り出しに官界の人となつた氏は、翌七年には早くも同縣水道技師に進んで、若し工學士の高等官ぶりを遺憾なく發揮したものである。ところが母校である九州帝國大學から再三再四懇請せられ、同大學の講師をも兼ねて教授に立ち、魅力のある講義ぶりで學生達をやんやと云はせたと聞く。大正十二年には福岡市水道事務所工業課長に榮進したが、同年三月に職を辭して上京、翌月には直に東京市技師に聘せられ下水道課勤務となり、文字の如く格勤精勵、翌十三年同月には早くも同課工務係長に任命、十四年三月には第一工務所長として、現場の一端に才腕を鳴らして現在に至つてゐる。



安田三次

明治二十六年六月二十六日生
府下岩淵町大字稻付五二六

明治二十六年生れと云へば、いまだ三十四歳にしか過ぎぬ少壯である。この年配で早くも東京市建築局内の係長に任ぜられてゐる氏の手腕のほどは想像に難くないものがある。ともすると老年閥のはびこりがちな官公吏界に在つて、氏の如きは異數とすべく、青年のために氣を吐いてゐるものと云へる。それに氏は私學である中央大學法科の卒業生なのだ。兎角赤門出の優遇せられる官界で、私學のためにも健闘してゐるものでなくてなんである。抑も氏は福岡縣小倉市田町の生れである。小倉市と云へば九州には珍らしい靜謐な城下の街である。此處で明るい幼年期を過した氏は、少年期を縣立豊津中學校に學び非常な好成绩を占めて秀才をめであつた。それから上京して中央大學に入つたのだ。同大學をも之亦秀拔な成績で卒業したので、直ちに三井物産株式會社に聘せられ東京機械部勤務として、大正八年十一月まで勤続したが、獨立して運送業を開くために同社を辭した。が運の悪いことには翌九年四月より財界は急激に悪化して來て經營の難に陥つたので、大正九年八月に市役所水道部に奉職し、傍ら吏員講習所に學び第一回卒業生として最高首席で卒業したのであつた。でやがて經理課に轉じ孜孜として業務に服し、大正十三年十月には建築局庶務課管理掛長に榮進したのである。氏がその才腕を最も認められたのは經理課勤務時代であつて、あの繁雜な東京市會計規定並に同施行細目、經理諸契約諸事項改正の制定の衝に當つて完成せしめたものである。今後の飛躍はさこそであらう。夫人貞子は淑徳の譽れ高い良妻である。



平山五郎

明治十九年十月十日生
四谷區南伊賀町三七
電話 四谷二九〇六番

平山家は一の谷嶽軍記によつて廣く人口に膾炙してゐる武者所平山季重の後胤であつて、氏はこの由緒深い舊家を繼いで、養嗣子になつたのだ。抑も氏は千葉縣海上郡鶴巻の出身で、その生家服部家も亦名門であつて、先祖には著名な茶道の大家服部道圓を出してゐる。氏はその嚴父利平氏の五子に生れ、篤學の士として知られてゐる利平氏の薫陶を受けて人となつたのであつた。當時嚴父利平氏は漢學塾と共に劍道場を設け、地方青年の身心兩途に亘る指導に専念してゐたと云ふから、氏の傑出した教養は實に父君の賜物だと云はねばならぬ。しかも嚴父は小學令施行と同時に、經營の武道場を寄附して小學校舎に當てたのであつた。亦長く記憶すべき徳行だと云へる。しかも父君は久しい間を千葉縣々會議員に公選せられ、縣自治政上特筆すべき功勞者だつたのである。この傑出した父君を持つた氏は明治三十九年に銚子中學校を卒業後に上京し、私學の權威明治大學の法科に學んで、同四十一年に目出度く卒業した。が直ぐ一年志願兵として近衛第四聯隊に入營し、四十二年九月に陸軍少尉に進められて除隊した。更に氏は齒科醫にならうと志を立て、四十五年日本齒科醫學專門學校に入り大正三年に卒業し、直ちに故郷に歸つて開業したが、平山家を繼ぐと共に再び上京して、現在の場所に開業したのである。それは大正七年のことだ。今では東京齒科醫師四谷支部長、日本齒科醫學會理事に擧げられ、帝都の斯界に重きをなしてゐる。現に區會議員、町會幹事、東京軍人評議員、神社氏子總代等の公職に在つて奮闘してゐる。

森松之助

明治十七年生
四谷區左門町七七番地
電話 四谷 三三〇九番

君は府下豊多摩郡の出身で、その先祖は代々柗木に住し醸造家として近隣にきこえてゐたが、君の代となるに及んで決然感ずるところあり、醸造業を廢して、他の方面に活躍し、多年の縁故をたどつて、今や大いに實業界に雄飛するの機運に向つたが、端なくもかの關東大震災の襲ふところとなり、君の事業全般は擧げて烏有に歸した故を以て、君は心氣一轉し、只管精神生活の必要を痛感すると同時に、こうした匆々の際における自治團體の不斷の訓練が偉効多きを自撃し、こゝに業界の君は公事につくすことを以て、後半生の最大責務であるとするに至つた。從來業界の麒麟兒森松之助君をかうして自治運用の第一人者として選み得た四谷區會こそまた多幸といふべきである。今や君は區内における徳望を一身に背負つて立てるの觀があり、區會副議長として區政に參畫すること既に三期に及び、又學務委員を兼任して快腕を揮ふ。その他町内多數の推薦によつて左門町々會長の椅子につく等、自治政の理想的運用を期して全く寧日ない有様である。家庭には鉦子夫人との間に一男四女をもうけ、夫人亦内助の聞えが高く、思へば朝に紅顏の美少年夕に白骨となるの憂き世をはかんで世を捨てる人の多い世に、大震災を目撃して心機一轉し、多年培つた業界の地盤を廢履のごとくかなぐりすて、一身を投じて自治發展のために努力せられ君こそ、亦以て尊き奉仕であるといはねばならぬ。震災後の帝都は今やその復興に多事多難である。この時氏の如き敬虔な指導者が出でたことは、帝都の爲に欣快に堪えない。

大刀川平四郎

明治七年一月二十三日生
本所區綠町二の二十三
電話 特長 墨田二五九六番

僅か十五と云ふ少年の身を以つて上京した氏は、初め日本橋瀬戸町町に柴田と言ふ染料商の職工となつたのだ。少年徒弟の嘗める苦痛をくまなく味ひつつ、年期七ヶ年を主家に盡して廿四歳の時、主家を去つたが、氏は習ひ覺えた事業を措いて海外に活動を目論み、同年シベリヤに渡つて彼の地に雜貨商を營み、粒々辛苦途に拾有六萬の資財を得る迄に成功し、業務は益盛況を極めてゐた。すると偶々日露戰役勃發と共に同地は忽ち擧げて修羅の巷と化し、事業經營不能となつた許りか無慘にも資財を悉く軍用に徴發若くは掠奪せられ、横年辛苦の甲斐もなく一朝にして放浪の身となつたのである。やむなく一旦歸國して政府當局に陳情し、金二千圓也の下附を得て之を資金に御用商人の指定を受け、軍用糧秣の供給に従事し、國軍のために大に盡す處があつた。斯くして戰爭の終結する及び、模造皮製造販賣に手を染め、從來輸入品を以て其用便して居た防禦具界に一新生面を開いたのであつた。然し事業欲の旺盛なる氏は更に長く將米鐵業印刷の有望なるに想到して業務を開始し、嶄新なる技工を以つて斯界に異彩を放ち、次いで更に製罐業を興して各食品會社等の間に提出し、現在では年産額實に三十萬圓以上に達する程の盛業を續け、今年新に第二工場を増設して益その生産能力を發揮せしめんとする有様で、七十餘名の職工が汝々として従業にいそんでゐるのである。蓋し氏の如きは稀に見る意志傳申の人とするに足る。氏の郷里は新潟縣長岡市で、本年五十三歳、夫人とき子との間に一男二女がある。



鎗田重

明治十七年五月十二日生
府下和田堀之内町松之本一五八

身を持つること謹嚴、外にあつては不言の中に自己の天職に邁進し、内にあつては専ら子女の教育に任じて清幅を惠まれつゝある人に現東京市區劃整理局庶務課計理掛長鎗田重氏がある。氏は千葉縣市原郡東村の人、幼にして穎悟、夙に小學校を終了後千葉縣立農學校に入學し、研鑽數年優秀なる成績を以つて同校を卒業するや、直ちに職を千葉縣東葛飾郡に奉じて、技手となり、後海上郡に轉任し、同郡にあつて地方の農事開發に努めつゝ、名技手として聲望を負つてゐたが、日露の國交斷絶して國を擧げて國難に當るや、氏も身に戎衣を纏うて滿韓の野に轉戦し、屢々生死の間を往來して武功を樹て、三十八年平和克復と共に目出度凱旋して同職に復し、戦後の疲弊せる地方産業に大に貢獻するところがあつた。後大正元年茨城縣に技手として轉じ居ること四年、更に新潟縣に轉じた。かくて同縣にあると數年、その篤實なる性行とその敏腕とは縣當局の認めらるる所となり、大正九年拔擢せられて同縣中魚沼郡長に任じた。爾來多年の努力を續けて専ら理想の實現に力め、同郡の爲に盡すところが多かつたが、大正拾參年その職を退き、後聘されて東京市區劃整理局庶務課に入り、計理課掛長となり今日に至つてゐる。帝都復興は獨り東京市のみならず、全日本の面目に關する重大事業である。此時に當り氏の如き眞面目なる實行家を計理掛長に有することは、大に意を強ふるに足るものがある。氏は人格高く、温厚の君子人として局内に頗る信望が篤い。夫人を愛子と云ひ、貞淑の譽高く、二人の間に四男二女がある。



内田健次郎

慶應三年一月十五日生
麻布區新網町の七二番地
電話青山 七七一六二番

府會議員として識見人格手腕共に衆に秀で、而も徒手空拳よく今日の成功をかち得たわが内田健次郎氏は、生粹の江戸つ子として麻布區木村上の町に生れた。同家は氏の先代まで連綿として八代を數へ、代々各諸侯の出入商頭を勤め、一時全盛を誇つてゐたが氏が幼少の折、偶々維新の變革に遭ひて、家業は全く廢滅した爲、遂に一家を擧げて苦境に沈淪するの已むなきに至つた。此時氏の胸底に深く秘められてゐた勇猛心は、逆境に直面して反撥し、遂に氏を驅つて家運の再興に當らしむるに至つたのである。それから血と膏を以つて美しく彩られた氏の奮闘史は或は商店の店員として、或は露店商人として涙の裡に新に頁を加へて行く内、早くも煉瓦製造の有算なるに着目し、僅かな資本を元に斯業を開始し、晝夜を忘れて奮闘した結果、遂に今日の盛大をなすに至つたのである。氏は又公共の事に志篤く、曩に町會長を始め學務委員及營業稅調查委員等に擧げられて貢獻する處極めて多く、後區會議員たること三期、區民崇敬の的となり、遂に衆望の歸する處推されて府會議員となり、府政の樞機に參畫して聲望を志にしてゐる。氏は流石に世路風霜を嘗めた苦勞人丈けに人一倍情深く、會て震災當時の如きは、區民が極度の不安と飢餓に苦しめられつゝあるを見るに忍びず、烏居坂の赤星家と協力して炊出しをなし、十三ヶ町の町民を飢より救つたと云ふ。聞くに麗しい話である。氏は又是迄富士山に五十三回、信州御嶽に廿六回登山したとの事だ、それは一面信仰によることは勿論だが、氏の豪壯な性格の半面が窺はれて嬉しいではないか。



櫻井時太郎

府下目黒町上目黒日向四番地

現に東京市視學として令名を馳せ、其著「歴史とその教材」を始めとし「東洋史集成」及「趣味の國史」等に深遠なる學殖と文操の豊かなるを見せてゐる櫻井時太郎氏は、名古屋の金鯉城下に人となつた。夙に學序を経て、明治三十五年優秀なる成績を以て東京高等師範學校文科地歴科を卒業するや、直に青森縣立師範學校に教鞭を執り、教育課に最初の一步を踏み出したのであつた。一ヶ年の後大阪天王寺師範學校に轉じ、職に止まること實に十一ヶ年、其間教務主任として日夜寢食を忘れて育英の任に當り、功績の大に見るべきものがあつた。氏は又別に教授上の參考に資する爲、學校教材の研究に關する雜誌を發行して之が主幹となり、多年の造詣と天稟の才能を發揮して關西教育界に一新紀元を畫したものだ。神奈川縣立師範學校に轉じ、職務に精勵すること三ヶ年、後東京高等師範學校の囑託となり、史學の教授に其限りなき學殖を見せてゐたが、後東京府青山師範學校に轉じ、傍ら附屬主事として理科及體操機關の充實に力を注ぎ、其八而玲瓏たる才幹を盡へられてゐた。かくて大正八年遂に拔擢せられて東京市視學となり、熱實至誠只管都下小學教員の指導に任じ、名視學として令名を志にしてゐる。人となり清廉潔白、頭腦の明哲な明るい性格の所有者で、暇さへあれば書籍に目をさらしてゐると。趣味としては書畫を好み、就中江戸末期文明の燦然を語る浮世繪を蒐集愛惜する處、又情操の豊かなるをみる。夫人をキミ子と云ひ、長男は武藏野高等學校在學中で、語學と數學に其天才的閃めきを見せており、別に一女がある。

高木友吉

明治九年二月拾五日生
芝區田町九丁目十三番地
電話高輪 一四二九番

趣味は性格の反映である。従つて性格の赤裸々なる姿を趣味によつて見出す事が出来る。盆栽花卉に趣味を有する我が高木友吉氏が、温良至誠白百合の如き高潔なる人格者たることは寧ろ當然の事である。氏は神奈川縣高座郡綾瀬村の産、明治十九年齒僅かに十才の頃單身故郷を出で、適者生活の激烈な帝都の活社會に挿し、奮闘努力只管運命の開拓に専心した。斯てその克己勉勵と修養とは、大いに處世の要を收めて、明治三十六年砂糖乾物雜穀商を開業し、致々業務の發展と販賣地域の擴張に粉骨碎身の努力を續け榮ある現今の社會的地位を築くに至つた立志傳中の人である。氏は此の經濟的開拓の間にあつても、常に町内發展に志厚く、現田町々會の創設に盡瘁するの外、隣保親善と町の發展の爲に精進し、殆んど席の暖まる暇もない程である。かの關東大震災には自己の一身を顧みず避難傷病者の救済に狂奔した其尊い奉仕は今も尚ほ美談として巷間に傳へられてゐる。従つて氏の現在に於ける對社會的信望頗る厚く、田町々會の幹事たるの外、會で國勢失業調査委員、都市制統計調査委員等に推され、熾烈なる犠牲的精神の所有者として常に一異彩をはなつてゐた。氏資性、清廉潔白、思慮圓熟、常に中正穩健なる態度を以て事に臨み、町内にはなくてはならぬ中堅人物として衆望を一身に集めてゐる。夫人との間に二男五女ある子福長者平素草花を愛して造詣深く、秋期に於ける日比谷菊花大會には、名譽ある審査委員として廣く社會に知られてゐる。

岡村忠藏

明治十九年五月十日生
麻布區今井町廿三
電話青山 一九八番

『男子志を立て、郷關を出つ學若し成らずんば死すとも歸らず』と云つた一大決心を胸に畫いて埼玉縣北足立郡草加町を後に上京したのは明治卅五年、實に氏が十六歳の時であつた。直ちに深川にある山田藥局に入り、勤務の傍ら東京上野藥學校に學んで研鑽の勞を積むこと暫し、遂に氏の鞏固な意志と燃えるやうな學究心は見事藥劑士試験に合格して、此處に氏が榮ある第一歩は踏出された。次で同四十二年現在の地に獨立藥局を開業したが、その懇切可寧なる營業振りは、忽ち顧客の信用を購ひ家運遂日隆盛に赴き大正十三年には現在の土地を購求して洋館三階建の宏壯なる店舗を新築するの盛況を迎ふるに至つた。かくて眞面目な營業方法と多年忍苦の奮闘とは漸次日を追ふて酬ひられ信用次第に加はり遂に今日の如き盛況を見るに至つた。氏は一面公共心頗る厚く會で大正十年十月東京を見舞つた彼の大暴風雨の際區内山本町に崖崩れの慘事を演じ多數の死傷者を出したが當時仁俠の血の持主たる氏は凡ゆる危険を冒して四名の人々を救助すると共に二千五百圓の義捐金を集めて被害者に贈り幾多の感謝狀を得た。次で同十二年の大震災には折柄同店は新築中にも拘らず避難民の救済物資の配給、自警團の組織等文字通り寢食を忘れて奮闘し、各方面から感謝狀を得た程で、今も尚ほ美談として巷間に傳へられてゐる。氏は人格高潔にして仁俠の氣に富み溢るゝばかりの人間味を持つてゐる。又頗る多趣味で、論曲を能くして撞球に秀で、閑あれば讀書に眼をさらして旺盛なる智識慾を満足せしむると云ふ。家庭にはちか子夫人との間に三男一女がある。

野口鐵太郎

元治元年十一月廿九日生
京橋區南八丁堀一ノ二
電話 京橋 一九三〇番

文明は人類の凡ゆる仕事を簡明に、人力に代はるに機械力を以て分業的
勞作となした、しかし最も通俗でまた至難な吾等の着物の裁縫のみは、依
然良妻賢母の楷梯として、婦女の繊細な指先に成り、生産的な家庭内の仕
事、並に婦女必須の資格とされてゐる。此の婦人の嗜に深く留意して、裁
縫女學校を設立した野口鐵太郎氏は、我が教育界の恩人である。氏は生粋
の江戸兒で帝都の中樞京橋南八丁堀に生れたが、氏の先代も亦裁縫を業と
してゐた。性來明敏な觀察と美術的創造力を多分に恵まれた氏は、先代の
粹と美を嗣いで斯界の權威者となつたが時代の要求に基いて野口速成裁縫
教授所を設立したのは明治二十二年の昔であつた。かくて三十五年時代の
趨勢に鑑み組織を變更して野口裁縫實修女學校と改め、東京府の認可を得
て晝夜二回の二部教授となし、日夜寢食を忘れて子女の教養に精進してゐ
る。尙同校の特色とする處は、校費生を置いて三年乃至五年衣食住を支
給し、多數の裁縫教師資格者を輩出してゐることである。氏とその長男孝
義氏が専心其の經營に全力を傾注してゐる。此の外所謂江戸兒氣性の横
溢した鐵太郎氏は、常に町内の和親と商家發展の爲に奔走し、附近一帯の
信望を擔ひ、大正七年には南八丁堀一丁目町會長に推選せられ、次で滿期
改選の十年にも更に其榮職を襲ひ、爾來同町々會長として町の爲人の爲に
獻身的の努力を捧けてゐる。氏人格高潔温厚の長者でいそ子夫人との間に
四男二女があり、書畫に對して素人ばなれのした鑑識を有してゐる。

河合清

明治廿四年八月八日生
本郷區千駄木町十八

該博なる智識と尊い經驗とを以て東京府の土木界に君臨してゐる河合清
氏は吾が土木建築界の新人である。氏は長良川の鶴飼で有名な本州の中部
岐阜縣羽島郡を其懐しい搖籃の地とし、已に幼年時代より學に對して天
才的閃めきを見せてゐた。明治四十三年郷里近くの大垣中學を優秀なる成
績で卒業し、將來自己の進むべき路を土木建築界に求め、當時學生受驗の
最も難關と言はれてゐた名古屋第八高等學校に見事に合格して最高學府の
準備時代を送り、大正三年同校を卒業するや遙々西の九州帝大土木科に入
學して土木學の蘊奥を極め、大正六年工學士の稱號を得て校門を辭するや
此若き青年技術家は幾何もなくして我が財界の雄たる神戸の鈴木商店に迎
へられて工務部に入り發瀾たる意氣と新智識を傾けて業務に精進した。時
恰も歐州大戰に會し吾國の事業は世界的飛躍を試んとする時であつた。氏
は鈴木商店に於て幾多の功績を残したが、大正十年東京府土木課の事務囑
託を受け、次いで大正十三年土木課技師に果進し、爾來府下目黒川改修事務
所に於て、震災後の東京府土木界に該博なる知識と獨創的の技能を發揮し
精勵今日に至つてゐる。氏資性恬淡人に接するに温顔を以てし、高潔なる
人格と明晰なる頭腦の所有者である。殊に部下を愛すること極めて厚く、
稀に見る熾烈なる責任觀念を持つてゐる。氏齡三十有七歳前途尙は春秋に
富み將來大なる期待を以て迎へられてゐる。撞球園藝に趣味を有し夫人春
枝子は貞淑の譽高く家庭の和樂掬すべきものがある。

金子東一

明治十六年八月生
下谷區谷中坂町十八番地
電話 下谷 五五六七番

その豊頬肥滿な體軀が象徴するが如く、氏は精力絶倫で而かも光風霽月
の襟度を有し、一方には熱烈なる辯論があり、他方には融々たる音楽の嗜
みがある。此精神の兩極端を有する處に、氏としての偉大さがあり、人格
的の閃めきがある。氏は岐阜縣八百津町に生れ、郷里の中學を卒業後、直
に明治大學豫科に學び、更に大學部法科に轉じ、益々其の研究を深からし
むると共に、嶄然頭角を現して級中の牛耳を執り頭腦の明晰を以て知られ
たのであつた。かくて優秀なる成績を以て、同校を卒業するや、大正二年
法曹界の登龍門たる辯護士試験に合格して、直に現在の地に開業し、少壯
有爲の辯護士として、法曹界に第一步を踏み出したのであつた。大正十四
年十一月區會議員の改選に際し、氏は推されて之が候補者となり、大多數
を以て當選して以來、銳意區政の刷新を行ひ、自治の礎石を磐石の安きに
置くに偉大な力があつた。更に又十五年六月市會議員に當選してよりは、
一段の繁忙にも拘はらず益々精力を發揮し、平生の蘊蓄と修練とを以つて
して市政壇場に侃々論を吐き、市民の爲に不斷の奮闘をつゞけてゐる。
而もその所論の明快なると意氣の熱烈なる所は、人をしておのづと賛意を
表せしむるものがある。かくて氏は市學務委員に擧げられて其の活躍見る
べきものがあり震災の後を受けて、都市計畫東京地方委員となつては専心
建設に盡力し、踏査して足跡をならざるなき程である。又都市計畫の第一人
者といへやう。當年四十二歳、今尙無妻にして、謠を良くし、虫秋月に啼
く夜、などその朗々の美聲を聞くことがある。

田邊十太郎

明治六年一月八日生
代々幡町代々木五一六番地

代々幡町と云へば東京接續町の中でも大きい方で、殊に震災後の發展振
りは目醒ましいものである。それだけに町役場の事務も非常な繁雜を極め
當事者をしてその多端に悩ましてゐる。わが田邊十太郎氏はこの町長で、
かうした繁雜なる事務に當つて一糸亂れず凡てを處理し、その統轄的手腕
に町民をして極度の信頼を抱かしめ、模範町長として尊敬されてゐる。氏
は明治六年一月八日を以つて、大分縣西國東郡田原村に生れた。郷里に中
學を卒へ、上京して日本大學校に入りて専ら法律を修め、優秀の成績を以
て卒業したのは明治三十九年の事であつた。かくて氏は卒業後直に職を警
視廳に奉じ、よく職務に精勵して次第に昇進し、遂に麹町署長に任じ、生
新の意氣を以て大に手腕を揮つたものだ。其後警察官練習所の教官となり
専ら之が教習の任に當るや、氏は民衆の警官に對して和親を缺くは一に人
格によるもの大なりとし、只管人格の陶冶に心を注ぎて功績の見るべきも
のがあつた。その後再び警察署に入りて相生署長となり、轉じて神田署長
に任じたが、其才能は忽ち認められて監察官となつた。かくて大正十年板
橋署長となり同十二年轉じて代々幡署長となつたが、此時既に氏が代々幡
町長となるべく運命づけられたのである。後青梅署長に任じたが、之を辭
するや、署長時代に町民の福祉に寄與した隱徳から美しい信望の花が咲い
て、代々幡町長として迎へられたのである。氏は軍人にも見まほしい快活
なる性格の所有者で、對者をして平和な寛ろぎを覺えしめ、町政の統率に
も能く功を收めてゐる。愛嬢富子は牛込成女高女在學の才媛である。



岸田久雄

明治十九年六月二十一日生
府下南品川小路一五〇八番地

伯耆富士の秀峰、夜見半島の翠松、日野川の清流、かうした自然の景趣に恵まれた米子町は又風光明媚な處である。わが帝都教育界に令名を馳せてゐる岸田久雄氏は此處を搖籃の地とし、朝夕變る伯耆富士の雄姿を仰ぎ、潺湲たる日野川の嘯ぎを聞いて育つて來た。氏の高潔なる人格は之を名山の秀麗にも比すべく、日本海の怒濤にも擬すべきその剛健なる氣質は環境が人を造るの言葉をも切實に裏書するものである。幼にして才智業に優れ、夙に學素質は既に郷土に於て培はれたのである。幼にして才智業に優れ、夙に學序を追ふて鳥取縣立米子中學校に學び、次で高等學校で秀才の名を志し英文學に深い興味を持つてゐる處から、東京帝國大學の英文科に進んだ。そして欣求と思慕を以て之が研究に没頭したが、彼の教育の必要を論じたスペンサーや、スマイルスの熱あり力ある言論に魅せられ、次第に育英の使命を痛感すると共に、自分の個性が其處に適應してゐることを見出して行つた。そこで明治四十四年、螢雪の功空しからず優秀なる成績を以て卒業するや、直に教育界の人となり、先づ歸郷して母校たる米子中學校に教鞭を執ることになつたのである。以來心血を盡いで子弟の教養に任じ、功績の大に見るべきものがあつた。其後埼玉縣立浦和中學校に轉じ、更に同縣立川越中學校を経て、大正九年東京市第五實業補習學校に聘せられ、校長として現在に及んでゐる。氏の溢るるばかりの學殖と卓越せる手腕とは、其高邁なる人格と相俟つて年と共に益々光を放つてゐる。今や實業教育を焦眉の念とするの秋に當つて氏の努力は裨益する所多いものがあらう。

小川勇平

明治十六年十二月十二日生
芝區三田松坂町十八番地
電話 高輪 四五三九番

麻布區役所技師として、而かも眼科醫として刀圭界に令名を馳せてゐる我が小川勇平氏は、風光明媚なる瀬戸内海の邊、岡山縣小田郡金村町を産土の地とし、而かも早くより南國情緒の豊かな伊豫の松山に小中學時代を了へ其高潔至純な資質を培つた。卒業後刀圭界に名をなさんと欲し、岡山醫學專門學校に學び只管螢雪の功を積み、明治四十一年優秀なる成績を以て卒業するや、直に職を香川縣赤十字病院に奉じ、最も得意とする眼科を擔任したのであつた。之れ實に氏が實社會に踏出した最初の一步で、後幾何もなくして秋田縣能代町なる能代病院に聘せられて眼科主任となり、多年の蘊蓄と卓越せる技能とを以て聲望を馳てゐたが、四十三年上京し東大助教授中泉博士に就いて専心眼科の研究に没頭し、四年の後築地一丁目に眼科醫院を開設するに至つた。かくて大正六年深川區の専任學校醫となるに及んで、兒童の視力に就いて特殊の研究を始め、更に大正十一年東京市の技師として教育課に勤務すると同時に、全市に亘り益々其研究の歩を進めて貢獻する處多く、年と共に其才能を發揮してゐたが、大正十三年聯制變更に伴ひ、麻布區役所に轉じ、精勵今日に至つてゐる。氏は又業務の傍ら町事に力を注ぎ、松坂町々會の幹部に推薦せらるること數回、其心胸醇厚と仁俠の義氣とは相俟つて町内に無くてはならぬ有志の一人として信望を高めてゐる。氏は趣味を旅行及寫眞に有し、内にあつては好きな讀書に目をさまして旺盛なる智識慾を満足せしめてゐる。家庭には夫人芳子との間に一女があり、至つて平和である。

尾崎義一

明治二十八年二月二十日生
府下高田雜司ヶ谷上屋敷二一〇九

復興途上にある帝都の橋梁施設は都市の交通及美觀の上から最も考慮を拂はるべき大切な事柄である。我が東京府が土木技師として橋梁施設に卓抜なる技能を持ち斯界の新人として令名ある尾崎義一氏を有することは誇りの一つであらねばならぬ。氏は福井縣大野郡上穴馬村の名望家尾崎福松氏の長男として生れ、寒風荒ぶる北國の大自然の中に凌々たる氣骨を育んで行つた。幼にして敏俊、大正元年優秀なる成績を以て名古屋第五中學を卒業し、更に第八高等學校の難關を突破して大正十年九州帝國大學工學部土木課を卒業するや先づ職を東京市に奉じ土木局橋梁課に勤務して才腕を揮ひ十二年東京府土木課橋梁係に轉じ、爾來益々天稟の技能と多年の蘊蓄とを傾倒して幾多の功績をのこし精勵今日に及んでゐる。其の間日野、二子兩橋の設計主任として之れが完成を遂げ更に千住大橋、岩淵橋、葛西橋等の架設に従事し其功績は定に没すべからざるものがある。氏は學生時代より不羈剛膽の天性を至る處に發揮し、當時演ぜられた英雄的行爲は今尙同窓間の噂の種となつてゐる。氏は又一片稜々の氣骨を有し友愛に於て節義に於て最も親しむべく尊ぶべき多くの美點を持つてゐるが、就中部下を愛すること極めて厚く部下も慈父の如くなつき爲めに事業の進捗振りは應内隨一と稱されてゐる。氏は本年三十三歳の血氣盛り其前途は將に洋々として期待すべき幾多のものかのこされてゐる。夫人敏子は下關高女出身の才媛にして淑徳の譽れが高い。

柳澤千吉

明治十八年四月十五日生
下谷區御徒町三ノ四十七
電話 下谷 二四五八番

成功の歴史は一面に於て又奮闘の歴史なりと云ふ。苦難と闘ひ寸進尺退一退十進遂に今日の成功を贏ち得た我が柳澤千吉氏の歴史も亦、涙ぐましい奮闘の二字に盡す事が出来る。氏は江戸の地に相當の染業商を營んでゐた竹次郎氏の三男として産聲を挙げたが、頑是ない十二三歳の頃、吳服見習の爲め茨城縣土浦町に奉公に出で、他日據頭の地歩を築くべく所謂他人の飯を食ふ事になつた。筑波の山が曉霧に包まれた頃から起き出で、霞ヶ浦に夕闇が流れる頃まで離籠として働いた。筑波風が土浦の町を吹きまくる冬にも暖衣を避け、水郷に遊客の詫れる夏にも汗みどろになつて働いたのであつた。斯くて明治三十八年には、磨きのかゝつた商才と鍛へ上げられた幹とを資として靴業を開業するの運びに至り、大正十年現業組合の設立と共に推されて組合の理事に就任した。かの大震災には多額の損害を蒙つたが毫も意に介せず、かへつて之れに刺撃されて益々刻苦し精勵して家運を挽回するに至り、現在では下谷入谷町と府下三河島に工場を有し、百五十名の職工を役使して年産額五六十万圓を擧げてゐるといふ不景氣知らずの有様である。この斃れて後己むの氣慨ある硬骨の氏が、また主人の恩義を忘却せず、其の零落し切つた家族を扶養してゐると聞く、實に、水火も辭せぬ血ある一面には肉身にもまた涙ある江戸ッ子の面目が躍如としてゐるではないか。家庭には夫人よし子との間に四男二女あり、長男は京華商業卒業後家事に執掌して父をたすけ長女は京華高女に在學中の才媛であると云ふ。

大谷保藏

明治二十四年五月三十一日生
府下大井町倉田三三〇八

多年の懸案であつた東海道五十三次の道路改修は我國道路界の劃時代的大事業であらねばならなかつた。而かも今その起點部分たる京濱間二里二十五町余の大幹道は近代的美装を凝らして目出度く竣工を告ぐるに至つた。これまことに帝都の誇りとして、將又國家的歡びとして當に祝福せらるべきことである。と同時にこの國家的大事業の重任を果した得た我が東京府道路技師大谷保藏氏の榮譽はその名と共に永久に記念せらるべきであらう。氏は當時特に拔擢せられて東京横濱國道改修事務所長となり、爾來五箇年間心血を費してこれが遂行に當り遂に今日の完成を告ぐるに至つたのである。氏は宮城縣玉造郡岩出山田町の名望家大谷與次郎氏の四男に生れ幼にして才智衆に勝れ明治四十二年仙臺第二中學を出でて、仙臺高等工業學校土木科に學び大正二年拔群の成績を以て同校を卒業するや、直に職を秋田縣土木課に奉じ、翌三年仙臺市役所水道課に轉じ止まること三年にして同六年更に埼玉縣に轉じ翌七年東京府土木課に榮轉して十一年道路技師に任せられ今日に及んでゐる。氏は本年三十七歳その國道改修當時は僅かに三十を越ゆる一二に過ぎなかつた。而かもかの大任に拔擢せられてよくこれを完うし得たことは當に氏の人格と天稟の才能とを最も雄辯に物語るものにあらずして何であらう。氏は少壯にして既に我國交通界に一大動功を樹て正七位に敘せられ知事賞を授與された。性頗る潤達にして進取の氣象に富み男性的活動家で撞球に優れた技能を有し、家庭には生花に堪能な夫人靜子があり琴瑟相和してゐる。

入部波留

明治廿三年七月拾五日生
淺草區北富坂町二十番地
電話 淺草 二六四七番

氏は埼玉縣の産、當時郡會、村會議員の名譽職にあつた善六氏の四男に生れた。優秀なる成績をもつて土地の中學を卒へるや、直ちに上京して籍を高等工業に置き、燃える様な學究心をもつて日夜研鑽を續けていつた。處が間もなく適齡に達したので學校を退き一年志願兵として入營した。明治四十四年退營と同時に獨立して現業たる電氣工業を開業し、血を以つて血を洗ふ争鬪の社會に一步を踏み入れた。未だ二十有餘の青年で而も孤立無援の氏にとつては社會の激浪は痛ましい程であつた。凡ゆる迫害は容赦なく此白面の青年を見舞つて苦心慘澹した事も甚しかつたが業務の爲めに斃るゝを男子の本領として氏はよく不退轉の努力を續け今日の盛大を招致するに至つたのである。氏は又淺草で最古の歴史を有する參正青年團の創立に就いて、或ひは土地の有志に青年團の必要を力説し、或ひは土地の青年を鞭撻して其の自覺をうながす等、身を忘れて奔走し貢獻した處が少なくなかつた。この勇ましい參正青年團の産聲によつて、他の青年團が一齊に起り、淺草が今日の堅實なる青年團を有する様になつたのであつて、實に氏こそ青年團の先驅者であり、恩人であると云はねばならない。又在郷軍人會にも極めて信任厚く、其の他の公共事業にも有志の一人として常に陣頭に立つてゐる。氏は性温良にして信仰心あり、而も他人の爲めには粉骨碎心を辭せないと云ふ耿々一片の義氣を有する典型的人物である。家庭には夫人との間に四男一女あり、一日として春風の絶えた事のない至極圓滿な團樂が續けられてゐる。

鈴木英次

明治二十四年四月二十四日生
大崎町桐ヶ谷五十七番地
電話 高輪 一九二番



千葉縣及隅郡西煙の一小村から、笈を負ふて遙々と上京し、福澤翁の經營なる慶應義塾商工科に籍を置いて、日夜讀書に親しみ螢雪の辛苦を積む、美目秀麗な一青年があつた。そして同校卒業後に更に中央大學に入つて、經濟學を専攻して倦むところがなかつたのだか、この謹嚴な若者こそ誰あらう彼の大崎プレス工場主鈴木英次氏の若き日であつた。勿論氏は家事の都合上からして、中央大學を中途で廢し、帝國聯合電球株式會社に入社して實務を執つたが、その實直なこと、その精彩ある頭腦の閃めきに變りはなかつた。かくて一意専心職業に努めてゐた氏は、その間に經營方法や電球製作の過程を、全く修得し他日の用に供することを忘れなかつた。大正四年の頃氏の親戚に當る大類宇一郎氏がその所有の電球製作工場を他に譲りたいとの希望を持つてゐたので、氏は直ちにこれを繼承して獨立のワン・ステップを踏み出したのである。多年夢裡にだも等閑にしてゐなかつた電球關係の事業の事として、その經營は着々として奏功し、日を逐ふて今日の成功をかち得た譯、爾今十二年の月日が流れ、職工四十餘名を役する殷盛を示し、その電燈附屬の口金製造の如きは關東隨一のものとして聲價を値ひ、年額三十萬圓を超えてゐる。さて私人としての氏は禁酒禁煙の實行家で、雇傭する職工に對してもその實行を促し、人格の向上と、貯蓄心の涵養を鼓吹してゐるとは、稀れに見る君子人の面影がある。なほ本年四月には、石鹼箱其他金屬容器製造工場を増設し、同方面にも一大飛躍を試みつゝある。家庭には夫人はつ子との間に二女がある。

田村健二郎

明治十五年十二月十五日生
豊多摩郡西大久保町四三二
電話 四谷 一一一四番

氏は西大久保の出身である。父君房之助氏は一廉の事業家として、生前中は随分と各方面に活躍したものだつた。即ち關東の大平原那須野ヶ原の開墾事業を創案して、全力をつくしてその實行に着手したが、當時まだ世間の理解が乏しかつたがために成就しなかつたものゝ、かうした大事業に手を染めた偉業は、長く開墾史上に特筆すべきものだらう。それより嚴父は遠く米國に渡つて飛躍し、歸國後三極の栽培に従つて製紙事業を開始した。玉川屋の屋號はその頃に始まつたのだ。明治三十七年にこの父君が逝去した後を繼ぎ、方面を代へて村木業を開始した。所が氏が經營の才腕は着々として業績を挙げ、早くも大正二年氏の三十一歳の時に村會議員に推舉せられ、爾後四期間に亘つて町村會議員に當選し、町民のために寢食を忘れて貢獻につとめた。日露戰爭の際には第一軍第一師團第一聯隊に所屬して祖國のために出征したが、途中病魔に襲はれて歸還し、再度出兵して伍長に進み勳八等に叙せられた。歸郷後大久保在郷軍人分會を中堅となつて創立し、又週つては二十八歳の頃から魁王神社氏子總代に推されて今日に至つてゐる。なほ防火設備の急なるを同志と共に力説し、大正十三年十二月に消防組合を實現せしめ、同時に第一部長に推された。一方青年團夜學部長として後進の誘導に努め、小學校保護者會副會長に擧げられて後育英事業に精進し、又山の手村木株式會社専務取締役として實業界に雄飛し、山の手村木商組合幹事の要職に就いてゐる。かくて今や玉源材木店の聲名と共に氏の名の日に高まりつゝあるものは、みな氏の努力の賜である。

山上曹源

明治十一年十月十一日生
市外駒澤村

氏が文學を好むと云ふことは、凡俗に超脱したレファインメントの持主であることを物語つてゐる。幼い時から書籍を唯一の同伴として親しんで来た氏は、英明強記な天才兒として、その將來のほどを故郷の人々に囁みせられてゐた。かくて氏はなつかしい佐賀縣藤津郡能古見の自然を後に、東都に學び、哲學専攻のために曹洞宗大學に入り、釋迦の唯心論に於てはソクラテースの思想に、またはカントの不可知論にと、あくことなき琢磨研鑽の日を重ね、五年間の學窓中常にクラスでの俊才を以て畏敬されてゐた。明治三十九年優等で卒業後は、母校教授の人々や曹洞宗門の長上の勧めによつて、同年十月曹洞宗海外留學生に推薦され、佛道の祖國である印度に赴き、聖佛陀の古蹟を遍歴しては、遙かなる心靈の囁きに耳を傾け、更に梵語の研究に没頭しつゝ、廣くその資料の蒐集につとめ、印度哲學及び印度文學の權威としての今日の素地を築きあげた。明治四十三年九月印度總督は、氏の篤學碩儒であることを聞き、同地大學の講師として招聘し、ために氏は約五箇年間にカルカッタ大學に在つて、『佛教思想系統』の高邁な教義を講述、同四十五年同大學からその講義集を出版して、斯界に裨益するところが多かつたとす。大正二年多年のヨーロッパに別れて歸朝するや、忽ち一宗の有力者に推されて、同三年九月に母校の曹洞宗大學教授となり、やがて學監の重職をも兼ね、朝に夕に、その哲人的な端麗な容姿と、その流暢な句調と、明るい詩的情懷を以て、やんちや盛りの學生に、啓蒙の福音を説いてゐる。



大谷萬次郎

明治二四年三月二十九日生
豊多摩郡千駄ヶ谷町五六二

利根川の上流が静かに豊穰な田野を貫く群馬縣利根郡沼田は、氏の思ひ出多い故郷である。この地の高等小學校を卒業した氏は、直に青雲の志を抱いて横濱市に出で、南太田町の武藏屋呉服店に入つて五ヶ年の間を洋服裁縫術の修得に餘念がなかつたが、不幸主家が破産したので上京し、その間を儉素にして蓄積した三百圓を以て、前途有望の地だと見込んだ澁谷道玄坂に一小店舗を構へて、呉服屋を営んだのである。かくて二ヶ年の間を苦心して經營したところ他人の懸望によつて譲り渡し、その賣却金を以て世田ヶ谷砲兵旅團前に書店を開いた。やがて砲兵旅團御用商人に指定せられて、圖書の納入をする傍ら一般圖書の販賣に従ひ、大いに資本の集積を圖り、漸く充分な資本を擁したため、氏は大正六年に現在の所に移轉して和洋食料品及び菓子販賣業を開いた。大正六年と云へばあの歐洲大戰の最中で、わが國は一躍債務國から債權國に轉換せんとする過渡期で、ために財界は非常に好潮を告げ、前古未曾有の景氣よさを招来せんとするの頃であつた。だから氏の營業も何等滞りなく順調に發展し、六七八より九年の中頃までに動かすことの出来ぬ根強い地盤を築き上げるに至つた。そして今ではその屋號明治堂は同地方一流の商舖として重きをなしてゐる。併し氏が赤手空拳を以て今日迄辿り來たつた過去には、裏面にさだめし血の滲むやうな苦闘を續けたことであらう。なほ澁谷町中澁谷町役場前にも支店を設け、益々發展振りを示してゐる。一方氏は町内の商家によつて組織せる公盛會の會長として、不斷の貢獻を營業者同志のために拂つてゐる。



大井彦藏

明治十一年十一月三日生
日本橋區濱町二丁目十二番地
電話浪花五〇七〇、五五二二番

獨力自己の運命を開拓することは男子の誇りであると同時に、亦大なる愉快であるに相違ない。我が大井彦藏氏は實に徒手空拳を以て成功の金字塔を築いた人である。氏は府下北豊島郡岩淵村に生れ、幼時から才智業に優れてゐたが、長ずるに及んで、業務見習の爲我清酒界の白眉たる京橋區五兵衛町銀釜本店へ、店員として住み込んだのであつた。當時儕輩は遊蕩安逸を貪るものが多かつたが、氏は給される僅かに三圓の月給を大事に貯蓄し、夙夜精勵主家の爲に忠勤を抽んでたので、大に其前途を囁みせられてゐた。居ること七年、三十歳の時退きて、神田に酒店を開業し、後現在住所に引移つて業績の稍々見るべきものがあつたが、生來の任侠が禍ひして友人の負債を背負ひ込み、再び立つことの出来ぬ程に大なる傷手を被つた。偶々當時勤勉其のものやうな氏の性格を認めてゐた菊正宗の本舖は特に禮を厚ふして氏を招聘せんと試みたけれど、心中獨立の念に燃えてゐた氏は斷然之を退け、不退轉の勇を鼓して幾多の苦難と闘ひつゝ、只管再興を計つたものだ。時恰も神田の關口氏が氏の至誠に感動して之が後援をしたので、爾來業績大に擧り遂に今日では雇人十數名を使用するの盛況を見せるに至つた。氏の營業方針として特筆すべきことは、獨り從來の舊習から超越して現金拂ひを實行してゐる事だ。特に灘方面に信用の厚いものが爲であらう。氏は常に友誼に厚いばかりでなく、町の發展に心を込め現に濱町々會長として牛耳を執り、氏の共榮福祉に寄與する處が尠くない趣味としては旅行を好み、自然に親しむことを唯一の樂としてゐる。

横井武次郎

明治十五年九月五日生
本郷區眞砂町三七番地
電話小石川三一〇四番

自治は國民の政治的自覺であり、公共は道德的自覺である。此二つが相俟つて國民的自覺となつて現はれる時、其處に初めて健全なる國家が築き上げられるのである。然しそれは云ふべくして行ひ難き事だ、之を實現せしむるには少くとも異常の緊張と犠牲的精神を要するのである。現在自己の全生命を自治公共の爲に投げ出し、自ら第一線に立つて涙ぐましい程の奮闘を續けてゐる人に我が横井武次郎氏がある。氏は生粹の江戸つ兒として本郷區眞砂町に生れ、土地の小學校を卒業して都文館中學校に學び、更に進んで日本大學に入り、致々として日夜研鑽すること數年、業成りて同校を出づるに及び、實社會に第一步を印し、先づ財界に雄飛せんとして會員組織による米穀仲買業を開始し、異數の發展を購つてゐる。その間氏は公共の爲に力を盡し、曾て村上熊八氏等と共に本郷區民會を創し、政界に雄飛せんとしたこともあり、近時は戸善嘉市氏等と協力して自治研究會を起し、この方面の思想の研究と普及向上を期せんが爲に打合會を開催し、近く發會式をあげる迄に進行してゐると聞く。氏は又眞砂町會創立以來これが會長となり、町の進展自治公共の爲に日夜寢食を忘れて献身的努力を捧げてゐる。かの毎年新春に際し、慰勞の意味を以つて自費にて町會の幹部を招待し、自治公共に勵む同志の勞を稿ふと共にその親睦を計つてゐるが如きは、氏の美しい奉仕の現れである。此外氏は現在所得稅調査委員としてこの方面にも非常なる貢獻をしてゐる。趣味を歌澤清元を持ち、幽艶なる情懷を養つてゐるとは一面の性格を窺ひ得やう。



奈良原輝雄

明治二十年三月二十八日生
府下代々幡北澤八一六

東京市道路局技師として盛名ある奈良原輝雄氏は、大西郷を産んだ鹿兒島出身だけに、氏の全身には傳統的に同郷人特有の豪快にして而かも何物か動かさずんば已まざる程の覇氣が満ちてゐた。學序を経て郷里の中學を卒業したが、將來土木界に身を委ねんとし、名古屋高等工業學校土木科に入學して學理を研討すること三年、螢雪の功空しからず明治四十四年優秀なる成績を以て卒業するや、直に朝鮮鐵道に勤務し、多年の蘊蓄と卓越せる手腕とを以て大に力めたものだ。在職一ヶ年、後職を鹿兒島縣土木課に奉じて精勵し、功績の大に見るべきものがあつたが、そこは氏の雄飛を伸ぶべく餘りに小さかつた。居ること一ヶ年有半にして職を辭し、前途に輝く希望を載せて遠く海の彼方亞米利加に渡航し、カリフォルニア州ワシントン大學に入學して、専ら土木學を修め、就中道路學に關する蘊奥を見事に修得し、大正十一年新智識を得て歸朝するや、直に東京市に招かれて道路局に入り、第一道路課技師として勤務し、その遠詣と卓拔なる技能とを以て道路の改修事に任じて令名を擡にしてゐるが、アゾラド補裝道路に付ては殆ど斯界の第一人者を以て稱せられてゐる。氏は流石に多年米國にあつただけに、英語に熟達してゐるので、大正十一年東京市が應々外國より技師を招聘して道路の補裝工事を開始するや、氏は特に選ばれて之れが通譯の任に當つたと云ふ。氏は當年四十歳、將來の大成は期して俟つべきものがあるであらうといはれてゐる。



前田捨松

明治三年七月三十日生
小石川區久堅町七四

三重縣志摩郡鴨方村はわが前田捨松氏の出生地である。氏は明治二十六年三重縣立師範學校を卒業するや、直ちに附屬小學校の訓導となつたが、好學の氏は進んで東京高等師範學校の文科に入り、明治三十二年卒業して郷里三重縣立第三中學校の教頭となり、在職一年餘にして再び東京に來り明治三十三年十一月東京府立女子師範學校新設と共に、選ばれて同校附屬の主事となり、本校教諭と共に府立第二高等女學校の教諭も兼任した。明治四十四年氏は東京市よりの懸望に依りて日本橋東華尋常小學校長、日本橋高等小學校長、日本橋區第一幼稚園長等を兼任し、此處に教鞭を執る事捧給規定を改正した事實に依つても明である。大正四年六月氏は同區内常盤小學校長に轉じた。この前校長水野浩氏は、二十三年間同校にあつて人望を得てゐたので、その後任たる氏は充分なる人選の結果であつた事は云ふ迄もないが、然も氏はより以上の信望を修めて當路の人に報ひた。かくて同年十月府知事より選ばれて朝鮮滿州北支那の學事視察を遂げ、大正十二年一月には有名な誠之小學校長となり、大正十三年には東京市より再び海外に學事視察を命ぜられ、歐米に渡りて教育視察研究をして歸朝した。氏は實業教育を主とし、實業を通じて其上に人心を陶冶し、並に職業教育を通じて公民教育を爲す等に重きを置き、以て教育精神に當てゝゐる。從來誠之小學校は市内最優秀を以て知られてゐたが、氏を得て更に校風を發揮するものがあらう。夫人を多摩子と云ひ、三男一女がある。



杉浦文一

明治十六年三月十四日生
芝三田四國町一五
電話高輪三七八六

本邦電球製造界に雄飛し、斯界の權威者としてその經營に非凡の敏腕を振つてゐる大同電氣專務杉浦文一氏は、現代實業界稀に見る奮闘の士である。同社が今日の如き噴々たる名聲を博する迄には、その裏面に氏の知れぬ大なる苦心と血の滲むやうな、奮闘と而して涙ぐましい努力が横はつてゐる。その奮闘努力こそは實に世の薄志弱行の徒にとり正に一服の刺戟劑たるを失はぬ。氏資性測達内に溢る、ばかりの温情を湛え而かも一度事に當れば快刀亂麻を裁つが如き手腕を揮ひ人をして後へに瞻若たらしむるものがある。かのマツダランプ、タンクステン織條特許係争事件に於て氏は大同電氣の爲めに勇躍第一線に立ち遂に同社をして、最後の勝利者たるに導き斯界に萬丈の氣を吐いたことは、近來實業界稀に見る痛快な出來事として世間の視聽をそばだてしめた。當時我邦の電球界は群雄割拠の處に割據して觀戦已まず恰も兵馬戰國の歴史を見るが如き觀があつた。が此の弊に着眼した氏は百方有志者を説服して群小會社の買収を行ひ電球界の大合同を斷行するに至つた。氏が此の合同に於いて發揮した手腕は蓋し鮮やかか目覺しいものがあつた。氏は今や大同電氣の重要な地位にあり乍ら自ら作業場に入つて、従業員と共に質の改善に努力し作業場の士氣を鼓舞すると共に勞をねぎらひ、その眞摯な態度は従業員一同から敬慕されてゐる。産業立國國產獎勵の高唱される秋、氏の如き偉大な人物が吾が實業界に雄飛する事は國家社會の爲め大いに意を強ふするに足るものがある。家庭には信子夫人との間に總輔定夫東逸の三男あり和氣露々としてゐる。

谷川昇

明治廿九年五月廿七日生
府下代々木町七四三番地

東京市役所の文書課にあつて聲望ある我が谷川昇氏は米國仕込みのチヤキノである。氏は廣島縣賀茂郡西志知村を搖籃の地として國藏氏の長男に生れた。大正五年優秀なる成績をもつて縣立廣島中學を卒業したが、若い胸に萌す青雲の志は遂に氏を驅つて遠く颯程万里のアメリカへと遊學せしめたのであつた。先づ加州のハイスクールに籍を置き次いで七年十月シカゴ市のハイスクールに轉じたが負けじ魂の氏は日夜研鑽して毫も倦む處なく級中常に異彩を放つてゐた大正八年二月同校を卒業すると共に進んで州立イリノイス大學に入學して政治經濟學を専攻し、次で十一年B.A.の學位を得て校門を辭するや更に進んで、ハーバート大學院に入つて政治學を學び特に都市行政の研究に力を注いだ。氏の食る様な研究は忽ち認められて同大學から獎學金を送らるるの榮を荷ひ、日本男子の爲めに万丈の氣を吐いた。十二年十一月更に華府に開催された米國都市協會、及び行政調査聯盟會に連り大正十三年貳月同大學より名譽あるA.M.の學位を授與せらるゝに至つた。又紐育市政調査會に入り或はモンローニ教授の膝下に都市行政を、ピアード博士に就て都市教育を研究する等常に食る程の執着と思慕を以て研鑽を怠らなかつた。大正十三年の五月歸朝するや、直ちに東京市に招かれて庶務課に入り調査掛長となり、文書課の調査掛長に榮轉し精勵今日に及んでゐる。氏は性温厚にして襟度廣く閑あれば讀書に眼をさらして、旺盛なる智識慾を満足せしめ兼ねて洋畫に興味を有してゐる。夫人すみ子は、大谷醫博の愛嬢で、山脇高女出の身才色兼備を以て知られて居る。



中村與資平

明治十三年二月八日生
府下杉並高圓寺五三七
電話四谷三五五五番

朝風膚を劈んざく極寒の地に育まれた人と、温暖和煦の天地に生を享けた人とを比較すれば其處に性格の甚しい隔りがあるのを見逃す事が出来ない。環境は人を造る。偉大なる自然が人格を陶冶し人物を構成するといふ事は蓋し千古の至言である。されば我が建築界にあつて信望ある中村與資平氏が東海の名湖濱名湖畔の連々たる水態に成育せられて、玲瓏玉の如き風格と決河の迷るが如き澄潤たる意氣の所有者であるのは毫も怪しむに足らない。夙に青雲の志を抱いて帝國大學に學び拔群の成績をもつて工科建築科を卒業したのは明治卅八年の七月であつたが氏は之れに満足せず更に進んで建築學の蘊奥を極めんと欲し斯界の權威者たる辰野金吾博士の事務所に入り大いに研鑽する處があつた。偶々明治四十一年朝鮮銀行本店の建築に際し氏は選ばれて之が技師となり其の設計施行に當りて天才的技能を遺憾なく發揮して近代的建築の範を垂れ一躍斯界に重きをなすに至つた。かくて四十四年同銀行竣工後鮮銀建築顧問となり傍ら獨立して京城に事務所を設け、一般建築事務に執筆してゐたが大正六年鮮銀の滿洲進出に當り、これと前後して大連に出張所を、設立し滿洲に於ける建築界を刺戟する處が多かつた。大正十年、胸中に鬱勃たる朝心押へ難く多年の宿志たる歐米視察の途に就き新智識を齎らして翌年歸朝し、新たに四谷區新宿二丁目に工務事務所を設けて、大小幾多の建築に指を染め我が建築界の權威者として絶大なる信用を博してゐる。氏は馬術を良くし、きく子夫人との間に二男二女がある。

長繩竹治

明治十二年四月十二日生
京橋區木挽町二ノ十三
電話京橋一四三〇番

世に何れの事業たるを問はず生存競争の激甚なる活社會に於て、創業の困難なるは云ふ迄もない。就中競争熾烈なる斯界に介在して一頭地を抜くことは最も至難である。現に土地賣買業として牢固なる地歩を築き斯界に絶大なる信用を有する我が萬介社々長長繩竹治氏の成功の裏面には血と涙に滲む受難の歴史がなければならぬ。従つて氏が辿り來つた過去の道程は一面涙の歴史であり、血の記録である。氏は岐阜縣の人、明治十二年、伊吹嶺の霞に映ゆる陽春四月、力強い産聲を揚げたが、年齢僅かに十七歳の時、青雲の志を抱いて單身上京し、三十開墾の某製本所に徒弟として入つた。そして他日擡頭の地歩を築く爲めに日夜離職として働き、血の出る様な辛酸も、身を粉にしての勞苦も自らが求めていつたのである。而も業務の傍ら、専心學業に勉め、惠まるゝ日の訪れを心から待ち詫びたのであつた。爾來忍苦の間幾春秋を重ねたが、偶々將來不動産賣買業の有望にして而も極めて幼稚なるに着眼するや、翻然として初志を更へ斯界に一步を踏み入れたのであつた。そして大なる決心と意氣を以つて幾多の慘風悲雨と闘ひ遂に今日の盛大を築くに至つたのである。尙ほ氏は大正十四年區會議員に推選されて以來高邁なる經綸と卓絶せる識見をもつて區政の刷新に精進し區民の信望を一身に集めてゐる。氏資性豪邁思慮周密にして明晰創始の才と統御の徳を備へ而かも前途尙ほ春秋に富む。蓋し將來の發展は期して待つべきであらう。家庭には貞淑の譽れ高いシン子夫人との間に二男一女あり、常春の和氣が變々と漲つてゐる。



谷井陽之助

明治二十五年二月十二日生
市外中野町中野九〇八番地
電話四谷七三三六番

齡不惑に達せざる少壯の身を以つて、早くも今日の要位にあり、而かも令名噴々たるの人に現東京市土木局長谷井陽之助氏がある。日本最古の歴史とヘレニツクな神話の數々が眠る夢の國淡路島を前に控へ、太平洋の暖風薫る和歌山縣海草郡日方町は氏の懐かしい播磨の地である、夙に郷費を卒え、後和歌山中學、第三高等學校等を経て九州帝國大學工科大学土木課に學び、深遠なる學理の研鑽に身を委ね、大正五年同大學を優秀なる成績を以つて卒業するや技師として職を東京市土木課に奉じ、専ら道路敷設改修の業に當る事となり、爾來燃ゆるが如き熱と意氣を以て職務に勵み、大正七年十二月本所押上道路改修工事に關して特に貢獻する處があつたので、功を以て市當局より賞金を授與せられた。大正九年拔擢せられ東京市技師に進み、土木課から更に道路局橋梁課に轉じ、白鳥橋改築工事に功があつた。同十年道路局道路課技師を兼務し、同年六月には設計掛長となり、十一月には調査課技師を兼任し、更に翌十一年十一月には東京市吏員講習所講師に擧げられ、専ら市吏員の養成に力を注ぎ、新進氣鋭の講師として令名を得てゐた。かくて同十三年には橋梁課第一設計掛長に次で十五年一月には橋梁課設計掛長に、更に同年六月には橋梁課長に榮進し、同月街路照明調査委員を兼任するに至り降つて十二月職制變更と共に現職に就いた。其進境の速かなることは實に驚くばかりで氏の犀利なる頭腦、豊富な學殖、卓越せる技能、職務に對する忠實之等のものが相合して何所までも氏を推し進めて行く。



榛葉金吾

明治十七年五月十五日生
深川區伊勢崎町三七番地

稀に見る明るい性格の所有者で、而かも對者に平和な寛ろきを覺えしめ、慎密なる思慮と着實なる性行とを兼備して聲望を擡にしてゐる我が榛葉金吾氏は、桐木縣が産んだ逸材で、那須郡伊野村は其懐しい故郷である。幼にして才智業に優れ、夙に郷費を卒へるや、青雲の志を抱いて上京し、東京主計學校に入學して經理學の研鑽に身を委ね、優秀なる成績を以て卒業するや、明治三十八年職を深川區役所に奉じて會計掛に勤務し、複雑なる區の會計事務に執筆して、その數理的才能の閃めきを見せてゐた。かくて大正八年遂に認められて稅務掛長に拔擢せられ、益々其蘊蓄と特異性とを發揮して事務の進捗を圖り、功績の大に見るべきものがあつた。次で大正十二年十月更に収入役に榮進し、幾多財政の盤革と事務の刷新を斷行して令名を擡にしてゐる。氏は去る明治四十三年の大洪水と、大正六年の海浦に際し、身を挺して罹災民の救助に任じ、晝夜を忘れて飲料水や食糧品の配給に當つた其美はしい犠牲的精神の發露は、尙から予區民を感動せしめたと云ふ。此外大正十二年關東大震災火災の折には、自家の損失するをも顧みず、逃げまどふ區民の安全なる避難所を指示し、區役所にあつては幾多の危険と闘ひつゝ、重要書類を安全地帯に移管する等、勇敢なる行動に出で、更に震災直後は飢渴に若しむ區民の爲に給水の勞を執り、寢食を忘れて事に當つた、市當局から表彰せられた程だと云ふ。徳望の隆々たるも其の決して偶然ではない。ふみ子夫人との間に一女あり、麴町高女在學中で才媛の譽が高い。



蓮田琴次郎

明治十九年十一月八日生
荏字郡駒澤町上馬引澤七三六

岡山縣和氣郡日生町大字日生は、東京市主事地理課庶務掛長たる蓮田琴次郎氏が出生の地である。氏は明治三十四年三月郷里に小學校を卒へ、直ちに中學校に入學して三年に進んだが、物質的に恵まれてゐなかつた氏は不幸中途にて退學の止むなきに至り、父君を助けて家業にいそしんでゐたが、生來智識慾の旺盛なる氏は、仕事の餘暇は勿論、寢食の時間をさいて勉學し他日の雄飛にそなへてゐた。かくて漸く實力を養ひ得た氏は、此ま僻陬の地に踏脚するを肩とせず、志を立て、先づ東京市役所に入り、掃除巡視として日本橋區に勤務し、爾來精勵能く職責を全ふしたので次第に昇進し、大正八年四月遂に保健局掃除課の掃除監督に擧げらるるに至つた。かうした職務は單なる事務に止らず、市内の衛生に重大なる關係を有するだけに、衛生思想に相當の理解を以つてゐる人でなければならぬが、氏は熱心至誠を以て之に當り、よくその實を擧げたのであつた。其の後大正九年の十二月には、東京市事務員として衛生課に轉動し、大正十年七月には本所病院物品出納吏となり、よく物品管理の命を承けて、物品の出納及び保管に關する事務を整理した。大正十四年七月、保健局勤務を経て、同年十一月遂に抜擢せられて東京市主事に進み、次で小石川なる大塚簡易療養所の事務長となり、大正十五年十月地理課に入り現庶務掛長となつたのである。實に氏の如きは獨立自助自己の尊い實力と努力によつて今日の地位を築き上げたので、兎もすれば輕薄に流れ易い現代青年の範とすべきであらう。

今澤慈海

明治十五年三月二十四日生
府下平塚村戸越五八三番地

圖書館は國民の智識の寶庫で、一國の文明は其多寡によつて窺はれるとさへ云はれてゐる。我が東京市當局も夙に此點に留意し、之が充實に力を注ぎつゝあることは寔に喜ぶべきで、現日比谷圖書館長たるわが今澤慈海氏が自ら其衝に當り、而かも數萬の藏書を整理して市民の教養に力めつゝある事は、大に其勞を多とすべきであらう。愛媛縣新居郡神戶村は氏の懐かしい播磨の地である。夙に學に志し、第五高等學校文科を経て東京帝國大學哲學科及倫理學科に學び、深奥なる學理の研鑽に身を委ね、明治四十年優秀なる成績を以て卒業したが、學究心の熾烈なる氏は、更に進んで大學院に學び、益々其學殖を深からしめ、翌四十一年職を東京市に奉じて日比谷圖書館に勤務する事になつた。爾來天賦の才能を發揮して其職に勵み、大正二年には日本圖書館協評議員、並に新刊圖書目錄選定委員等に擧げられて、其造詣の深きを見せ、更に大正四年には日本圖書館協會會長に推薦せらるるに至つたが、其才識は年と共に益々現はれ、同年四月遂に抜擢せられて日比谷圖書館長となり、更に大正十年日本圖書館協會會長に推され、以て今日に及んでゐる。而かも其一度館長となるや、幾多事務の刷新を斷行すると同時に、讀書の普及を圖り、市當局に各區圖書館の建設を建言して用ふる處となり、遂に理想の實現を見るに至る等其功績は擧げて數ふべからざるものがある。氏は清廉至直謙讓有徳の士で、業務の傍ら自己の研究に没頭し、旺盛なる知識慾を満足せしめてゐる。學殖の深き決して偶然ではない。

赤井小市

明治十年二月廿四日生
麻布區宮下町十五番地

裸一貫より身を起して實業界に堅實なる地歩を占め、現に町會の名譽ある顧問格として隣保親睦の實を擧げつゝある人に我が赤井小市氏がある。氏は上杉藩杉田兵部小輔の後裔として、埼玉縣比企郡須賀谷村に呱呱の聲を擧げた。明治二十三年、單身上京して日本橋の老舗、越後屋に入り、霜晨雪夜と雖も離職と働いて、二十年の長い年月を實直に勤めあげたものだ。そして四十二年の二月には現住所たる麻布區宮下町十五番地に獨立開業し、多年鞠射して鍛へ上げた手腕を揮つて活社會の激浪に直面したのであつた。爾來、あらゆる苦難と闘ひ寸進尺退、一退十進して遂に今日の繁榮を招くに至つた。殆んど寧ろ日ない繁務の傍ら氏は公共事業に奔走馳驅して感激の的となり衆望を一身に集めてゐる。氏は去る明治四十五年同志と共に町内に睦會を創立して之が幹事に推選され、更に大正十四年町會の設立と共に副會長の榮職に就き、共存共榮、親睦和合のために精進して貢獻する處が決して少くはない。二度の國勢調査にも委員として奔走し感謝状を受けてゐる。現在町會の顧問役となつて相變らず土地發展の爲めに奮闘して居る。氏は又頗る教育に熱心で又子女に對しては極端なる自由主義を採り力めて子女の個性を育ぐことに心掛けてゐる。教育界に於ても劃一打破の叫ばれる今日、家庭に於て斯うした聲を聞くのは眞に喜ばしい事で、長男通祐氏は家業に従事してゐるが二男隆次郎君は正則中學卒業後美術學校に進み、二女キヨ子嬢は岡田廣瀨氏の門下生として日本畫を研究中である。尙きく子夫人は貞淑の譽れ高く、家庭は至つて圓滿である。

平井新六

明治十六年六月十四日生
府下代々木宮ヶ谷一四六三

土木技術界の權威者として現在目黒川改修工事を指揮しつゝある我が東京府土木課技師平井新六氏は關東の名峰筑波の産んだ俊魁である。氏の生家は附近切つての豪家にして、父は永く村長として公共事業に頗る功勞が多かつた。氏はこうした多恵な環境に順調に生立ち、明治三十四年麻布中學を卒業し三高を経て四十二年東大工學部土木科を抜群の成績を以て卒業した。同年八月直ちに職を内務省に奉じ名古屋土木出張所勤務を振出しに敦賀改良工事々務所を経て、四十四年内務省技師を拜命し利根川改修の大工事に偉功を樹てた。大正五年青森技師に轉じて築港工事に携り工事完成に及び、同七年住友總本店に入社大阪築港事務所棧橋工事を完成し、十年青島守備軍民政部に招聘され鐵道及び港灣事業に従事し、十二年民政部廢止と共に支那政府の請に應じ港灣復興工事の顧問となつて多年の蘊蓄を傾倒して大に天稟の才能を發揮した。かくして大正十四年一月歸朝して直に横濱市河港課長となり在職一ケ年、翌十五年五月東京府に聘せられて目黒川改修事務所長となり、精勵今日に及んでゐる。氏は今日まで各地に轉任して幾多の土木事業を完成し、尙ほ進んで技術に精進せんとする氏の眞摯なる態度は當に以て技術家の範とするに足るものがある。氏となり潤達、熾烈なる犠牲的精神の所有者で、忠直に於て、公正に於て、節儉に於て尊むべく親しむべき多くの美點を有してゐる。氏は、趣味を散步旅行撞球等に有する處、一面亦情操の深きを知るべく、家庭には淑徳の譽れ高き夫人よし子との間に一女があり、常に和氣緩々として團樂の樂に浸つてゐる。

瀧澤梅吉

元治元年六月二日生
淺草區猿若町三ノ六
電話淺草一〇三九番

齡ひ古稀に垂んとするも、今尙鏗鏘として公共事業に奔走し、壯者をして後へに瞻若たらしむる人に我が瀧澤梅吉氏がある。氏は江戸の眞中、日本橋に生れ、明治十六年二十歳の時に或る靴商へ見習として入った。次いで櫻組靴工場に轉じ、十一年間といふもの他日の地歩を築く爲めに朝は未明より夜は深更に至るまで身を粉にして實直に働いた。かくて陸軍製靴部の新設と同時に職を轉じたが、間もなく明治三十九年には遂に獨立するの機運に達し、洗練された手腕をもつて經營の衝に當ることになった。それは今から二十二年の昔、氏が四十三歳といふ脂の乗った働き盛りであつた。此の間、渡り者の多い職人を使つて不穩な空氣の醸されるのを欲せず、世路に行きなやんだ人達を世話して職を與へ徒弟の養成につとめてゐる。そして實直な者には看板を分け與へて自立の道を講じてゐる。其の肉親も及ばぬ氏の好意に感激して生業にいそんでゐる者も七八名あると云ふ。氏が事業に精進すると共に徒弟に對しては溢る、ばかりの温情をもつて督勵し、苦痛を共にし快樂を共にしての協力は優秀な製品を産んで、凡ゆる方面から再三表彰狀賞牌を得てゐる。爲めに三越呉服店の專屬となる等、信用は翕然として集まり、同業者間でも重きをなしてゐる。又出で、は青年團贊助會の副會長となり、大正十三年四月設立された土地の町會には第四期の町會長に推選されて、公共事業の陣頭に立つてゐる。氏は趣味として盆栽を好愛し、家庭にははま子夫人との間に一男一女あり、至つて圓滿であると云ふ。

石川大次郎

慶應三年九月二十日生
深川區東六間堀町二
電話本所三七三九番

赤手空拳よく大事業を遂行し得た人には、いづれも共通的な意思の強固さと、豊かに恵まれたその天才的閃めきとが、はてしなく湧き出づる泉のやうに強く感受される。現に我が石川大次郎氏に接しては愈々その感を深からしめる。氏は千葉縣千葉郡二宮村の農家に生れ、明治八年石川萬造氏の養嗣子となり同二十二年家督を相続するや、氏はかねて夙志を伸ぶべく獨力日進舎を組織して清涼飲料水の製造に従事することとなつた。爾來四十年間奇略縱横の天分を發揮して業務の隆盛販路の擴張に努力し遂に今日の地位を築き上げたのである。かくて事業の隆昌は組織の變更を迫り、後幾何もなくして之を合資會社に改め、現在では店員二十有余名を擁し、販路は遠く東北方面より關東一帯をその主路として更に全國に及んでゐる。而してその精製する花月印高等飲料水の名は美味と良質と材料の精撰と而かもその優秀なる獨特の製造法とによつて普ねく知れ亘り、日に月に信用を高めてゐる。氏はかく自家の事業に精勵する一方多數の同業者に推されて清涼飲料水同業組合長となり一意専心同業者の向上と發展の爲に力を盡し更に水難救濟會特別會員、在郷軍人會名譽會員、東六間堀青年團長等の重任に當つて公共事業の爲め貢獻し、又東六間堀町會長として居町自治向上の爲め奔走して、幾多の功績を擧げてゐる。曾ては大東紙器印刷、富士倉庫兩株式會社の重役たりしこともあり、將に氏の如きは立志傳中の人として現代青年の活教訓たるべき人である。温厚なる長者の風格を備へ書畫骨董を好む。夫人をしげ子と云ひ貞淑の譽が高い。

清水廣吉

明治十年 月 日生
本郷區湯島四の三番地
電話小石川三六六一番

多年苦心慘憺の結果清水式無砂搗米機の發明に成功した我が清水廣吉氏の血と膏を以て彩られた過去の奮闘史は、慥かに現代青年の範とするに足るものがある。氏は四面魏峨たる山脈を以て圍繞せられてゐる飛彈高山に生れたが、幼にして款情、夙に發明に對して天才的閃めきを見せ、年少十五歳の折、早くも現在各新聞社で使用してゐる輪轉機の模造品を製作して近隣の者を驚嘆せしめた程であつた。長ずるに及んで胸中に鬱勃たる霸氣は押ゆるに由なく、前途に輝く希望に驅られ、僅かに一圓五十錢と、別に釋迦八相記及親鸞上人一代記を懐るにして上京したのは氏が二十五歳の時であつた。然し上京後の苦難は實に想像の外で、砲兵工廠の一職工として活苦に喘へきながら好きな發明に没頭して行つた。そしてその間幾多の小發明を完成したが、時偶々食糧問題が擡頭するや、氏は無砂搗米機の發明に腐心した。以來貧苦と闘ひながら寢食を忘れて之が發明に涙ぐましい程の研究を續けて行つた。此間氏の苦心は非常なもので、中途にして幾度か挫折せんとしたが、不撓不屈の精神は能くあらゆる辛苦と艱難に堪へ遂に完全なる無砂搗米機の發明に成功するに至つたのである。氏の喜びはどんなであつたであらう。而して其精巧なる機械の眞價は忽ち認められ東京大阪等の政府經營に係る精米所は勿論各市場等に於て廣く使用するに至り今やその販路は全國に及ぶ。目下下谷西五軒町に宏大な工場を設立し盛んに製造をなしつつある。更に氏は推されて現在本郷區戀町々會長として貢獻する外、區劃整理委員として日夜奔走しゐる。

吉富保之

明治二十年八月十八日市
府下杉並町高圓寺七二四

繁雜なる東京市長の事務を處理し、其の八面玲瓏たる才幹を讃へられたる人に我が吉富保之氏がある。氏は熊本縣の出身、明治二十年鹿本郡大庭村を産土としつ呱呱の聲を擧げた。小學を郷里に卒へて鹿本中學校に學び、拔群の成績を修めて卒業したのは明治三十八年の陽春三月であつた。後幾ばくもなくして普通文官試験に合格し、臺灣總督府屬を命ぜられた。夫れは明治四十五年の事で、氏が公的生活の最初の一頁は此時開かれたのである。先づ土木局を振出しに汀狗水道費所屬前渡官吏、物品會計吏等を經て水道建物工事に當り、竣工後は作業所書記に就任し更に電氣水道營業に關する會計事務に携る等其功績は寔に没すべからざるものがある。大正七年には轉じて總督府官房秘書課に僅務して儀式典例等の事務に執筆し、文官普通懲戒委員會書記、文官普通試驗書記に歴任した。かくて囊中の雖は忽ち認められ大正十三年には拔擢せられて秘書課主幹に任じ専ら機密人事を掌り、越へて十五年七月、遂に多年の勤勞は酬ひられて臺灣總督府地方理事官七等に昇進し從七位に叙せられた。後東京市に聘せられ主事として職を内記課に奉じて職務に精勵し後建築局に兼務し以て今日に及んで居る氏は温厚篤實な人格者だが其の反面には何物をも動かさずんば止まざる底の霸氣が血を環つてゐる。由來豪放を誇る九州男子のシンボルは阿蘇山であつて、其處に血を享け、其の雄姿を仰いで成長した氏が、公吏生活にあつても尙九州人の特性を離れ難くたらしむるものがあるのは當然である。趣味はテニス、園藝、謠曲で家庭にはツネ子夫人との間に三男二女がある。



根本子之助

明治二十一年四月七日生
本郷區臺町五一番地

東京市土木局下水課の技師として、下水道事業中、柳商場の企畫設計、獨特の手腕と技能とを見せてゐる、わが根本子之助氏は、明治二十一年四月七日を以つて、千葉縣佐原町長島村に呱呱の聲をあげた人だ。幼にして學を好み、夙に郷里の中學校を卒業するや、當時我國は日露戦争の後を受け各種の工業が漸く勃興せんとする機運に逢着してゐたので、氏は將來驥足を工業界に延べんと欲し、明治四十二年仙臺高等工業學校に入學して、只管工業の蘊奥を究め、明治四十五年當雪の功空しからず優秀なる成績を以て卒業し、直に東京計器製作所に勤務することになつた。之れ實に氏が活社會へ踏出した最初の一步で、當時生新の意氣と、多年の蘊蓄とを傾けて職務に精勵したが、大正二年八月東京市役所に聘せられ、技師として下水課に入り、大正十五年十二月同課が土木局に併合された後も同課に勤務し、卓越せる手腕を以て今日に及んでゐる。下水は都市の靜脈で、之を措いて到底市の完全なる發達を望むことは出来ぬ。今や復興と共に面目を一新せんとする帝都の下水は、今後氏の力に俟つものが尠くないであらう。氏となり温良、思慮周密にして頭腦明晰、温言能く人をして懐かしむるものがある。氏は又頗る學究心に厚く、事業研究とそれに關する讀書に耽るを以て唯一の樂としてゐる。以て氏が如何に職務に忠實なるかを知り得るであらう。氏は本年齡三十有九歳かゝる少壯を以て早くも重任に擧げられてゐる。働き甲斐ある現職と共に、更に前途に輝かしい未來が残されてゐる。家庭は夫人との間に二人の子があり、圓滿を極めてゐる。

高野勘太郎

明治二十四年三月二十五日生
府下大崎町居木橋四七六番地
電話 高輪 二六一六

大理石加工業として斯界に嶄然頭角を抽んでゐる我が高野勘太郎氏は、茨城縣多賀郡の人、三歳にして父を喪ひ母と共に上京したが、長ずるに及び、實兄小野正雄氏の許にあつて實地に石材業を研究した此間に於ける氏の熱心にして而かも眞摯なる態度は、實兄小野氏をして屢々感嘆せしめた程であるといふ。隨つて技術の熟達も亦著しく、大正二年には此經驗を基礎に芝區南佐久間町に於て現在の大理石加工業を開業するに至つた。其間に於ける力行奮闘は言語に絶したものであるが、大正五年入りて高野家を襲ぎ、爾來家業の發展と經營とに力めた結果、家運益々繁盛を極め、大正八年には工場擴張の必要に迫られ、現在の大崎町居木橋の地に工場を移し今日の隆盛を見るに至つたのである。目下三十餘名の職工を使用して其年産額は十五萬圓を突破すると云ふから、之を創業當時に比すれば實に驚く可き發展と云はねばならぬ。加工用の石材は内地は勿論遠く支那方面に仰ぎ、加工せるものは市内及び札幌東北方面に販路を有すると云ふが、震災後は銀座の山口銀行、銀座ビルディング、千代田生命保險會社、三越呉服店等の大建築の裝飾に供給した。以て同氏の斯界に於ける信用が如何に絶大であるかを窺ひ知る事が出来やう。斯く昔日の無名の一青年が現在の地位と信用とを捷し得たと云ふのも、實に氏の強固なる意志と不撓不屈の精神に基くものと堅實なる意志と云ふ可く、立志傳中の人として推姑するに足る尙技術主任練尾終二氏は優秀なる技能を有し常に氏の股肱として信任を厚うしてゐる。家庭はふじ子夫人との間に一女がありよく和合してゐる。

鈴田周造

明治廿九年四月六日生
京橋區松屋町三ノ五

關東大震災以來急足の進歩と異狀な發達をとげたのは、民族精神の意識に基く熾烈な報國的青年團の勃興であつた。政府は之に愛國盡忠の精神を鼓吹し、民衆は力を擧げて社會倫理運動の根本機關となした。それ程に青年團の社會的價値は、他の何物よりも重且つ大なる意味を含んでゐる。此の國民的新興勢力を提けて、若人の血と熱と力を擁して十字街頭に立ち、社會の改善に向つて勇しく行進曲をかんでつゝある人に吾が鈴田周造氏が在る。氏は京橋區松屋町の生れ、大正三年中學を卒業すると同時に明大の豫科に入學したが、中途近衛歩兵聯隊に徵集されて退學し、後滿期となるや再び明大に學び、大正十年には優秀なる成績を以て目出度く卒業した。かくて氏は官界に志し、職を東京逓信局第一調査課に奉じたが、明哲なる頭腦と溢るゝばかりの才能とは、局内に於て忽ち將來ある人材と矚目されるに至り信望頗る厚いものがある。氏は年齒僅かに三十有二才、而もその豊富なる經驗と、卓越せる識見とは相俟つて松屋町内の先覺者たらしめ、大正十五年には同町會の評議員に推され、次で青年團長の名譽ある地位に推選されて、只管青年團の國家的指導と、團員修養に力を注ぎ社會倫理運動の先驅者として重きをなしてゐる。氏が粉骨碎心の努力は町民や團員の志氣を鼓舞して着々功を奏して居る。氏は今も尙獨身で、家庭に在つては母堂につかへ弟妹五人を慈んで和氣藪々、一家團樂の美しさは近隣一帯羨望の的となつてゐる。氏が向後の對社會的活躍こそ、將に括目に價するものがある。

古賀岩雄

明治十一年五月一日生
京橋區木挽町一丁目一四

印刷術の進歩と共に近年石版製版の技術も著しい進歩を遂げた。目下京橋區木挽町一丁目に廣大なる工場を有し日夜盛業を營んでゐる古賀石版製版所は斯界に於ける東都第一流の製版所として全國に其名聲を博してゐる當主古賀岩雄氏は本年五十歳の男盛り、幾多の公共事業に關與して席の温まる暇もない多忙の身である。明治十一年江戸つ兒として生を現在地に受け、學を卒るや暫くは悠々自適徐ろに形勢を觀望して己の進路を見出しつゝあつたが、性來の趣味は氏を驅つて出版界に導き各方面の情勢と之に關する實際的研究を遂げた結果、氏は出版界に最も密接な關係を有する石版製版業の將來大いに有望なる事を洞察し茲に斯業を開始するに至つた。以來苦節する事幾年、遂に其經營の宜しきと技術の精巧とは大いに世の信用を博し、繁盛今日に及んだのである。氏は現在石版製版全國幹事長、石版製版繪畫紅交會副會長、學校保護者會評議員、京橋商業會評議員、建築助成會特別委員等を兼ね又一方木挽町一丁目町々會長として居町自治の向上發展の爲めに獻身的努力をなし、其功績の顯著なる事は町民の齊しく感激措く能はざる處である。温厚篤實稀に見るの人格者にして、特に文學を愛好し和洋万巻の創作類を涉獵して其識書も頗る多しと云ふ。氏將に圓熟の域に達せんとし其將來は頗る期待されてゐる。夫人つる子は月島製銅會社支配人故杉山喜太郎氏の長女にして四男二女あり、長男は中學卒業後目下小西寫眞機械商店に勤務し長女君枝子は三輪山高女出身にして既に嫁ぎ次男は府立一中五年在學中他は小學在學中にて一門彌や榮に榮へてゐる。

伊藤清一

明治九年拾一月二十八日生
下谷區上根岸町八二番地

普通教育の發達は一國の文化の發達を如實に物語るものである。されば歐米先進國は云ふに及ばず、本邦に在つてもその發達には國を擧げてこれが普及に力めてゐる。爲に直接その衝に當る人に識徳圓滿なる士を得るにあらざれば、その實を擧げ得ないものである。現東京府視學として、普通教育の徹底的普及と教育者指導の任にあたる伊藤清一氏のあることは吾人の意を強ふるに足るものがある。氏は愛知縣寶飯郡赤坂町の名望家に生を享け幼時より俊敏の聞えが高かつた。普通教育、中等教育と學序を追つて常に優秀なる成績を收め、更に東京高等師範學校にて斯學の研究に身を委ね日夜怠ることなかつた。かくて同校を卒業するや、直に東都の育英界に身を投じ、溢るるばかりの學殖を以つてその經となし、圓滿なる人格を以つてその緯とし、常に圓滿なる教育の發達に努力し、就中女子教育に付ては、常に中正穩健なる態度を持し良妻賢母主義の徹底的教育を施し、生徒並に父兄の信頼を一身に聚むるの觀があつた。後大正拾一年東京府學務課に轉じ、東京府視學に任ぜられてよりは専ら普通教育のよりよき發達に意を盡ぎ、最新學理の示す合理的教育の實施と着實なる人格の養成に努力しつあるが氏の理想の實現する日は近き將來であらう。資性温厚眞に教育家としての模範的人物であり、永年の功により從六位に敘せられてゐるがこれ又氏の功績を如實に物語るものである。氏又常に修養を怠らず佛説を聴き佛書を受讀するといふ。これ氏の性格の一端を示すとも云ふべきであらふ。夫人との間に三男三女あり。

堀源之助

明治十五年四月廿二日生
四谷區七軒町一番地
電話四谷三一七五番

氏は愛知縣中島郡旭村西萩原の産、生を源兵衛氏の二男として享け、夙に穎敏をもつて群童に抜んでゐた。裸一貫で活社會に乗り出さんとする燃える様なアンビションに驅られて郷園を辭したのは明治三十三年で實に氏が十八歳の時であつた。氏は將來西洋洗濯業の有望なるに想到し之が業務見習の爲某クリーニング商に入つた。當時氏は凛烈たる寒風に吹きさらされて物干臺に泣いた事も又灼け付くやうな夏の日にアイロンを握つて沁々労働が厭になつたことも一再に止まらなかつた。他日擡頭の地歩を固めるのだと岩をも透す鐵石の意志を持つて氏は凡ゆる苦難に堪へ、よく精勵して遂に現在の地に獨立開業するに至つた。そして渾身の力を其の經營に傾倒し、老練精熟の手腕を揮つて創業の難局を突破し、今日の隆盛を招いたのである。尙ほ氏は繁忙の傍ら公共事業に盡瘁し世の爲、人の爲には進んで粉骨碎心の努力を惜まない。かの大震災當時、罹災せる組合員の救助に日夜奔走し、火災救済組合の積立金一万三千圓と洗濯業組合積立金一万四千圓を五百有余の人達に復興資金として配給した事は、人情紙より薄き現社會に於て正に推稱に値する美談たるを失はぬ。氏は現に公認東京染洗クリーニング業組合長に推選されて其の榮職にあり、組合員相互の親睦組合組織の刷新に腐心して、組合員からは慈父の如く敬慕されてゐる。同組合が模範として注目焦點になつてゐるのも氏の貢献による處が極めて多い。氏は温厚仁慈の好紳士で家庭には菊子夫人との間に長男堅二君外二女がある。

井上幸右衛門

明治二十五年四月三十日生
芝區南濱町九番地
電話高輪三四二一番



先にペンタムの巧利主義的な思潮が、若い日本の學徒によつて輸入せられると、萬事に對してその精髓を極めることを知らぬ人達は、その思潮を單にエゴイズムそのものと鵜呑みして、浮華輕佻のさもししい半獸主義が日毎に蔓延して行つた。昔から仁俠を以つて全生命とした武士道の國もあやうい哉の嘆を吐かずにはおられなくなつた。がそのかみにあつて仁俠を以つて誇つた江戸っ子である。西歐の文化が浸潤して、その殘滓のみが與へられた當今にあつても、純江戸っ子にはやはりその赤い純眞な意氣が繼承されてゐるのを間々見出す。この美風の持主こそ芝區南濱町會理事井上幸右衛門氏と云ふことが出来やう。氏は明治二十五年四月に芝區新堀河岸に呱呱の聲をあげ、父祖傳來の土地に居住し土木請負業の家人となつた。慶應義塾中學校夜學部に入つて普通學を修了後は、先代の遺鉢を繼いで父の名を襲名し、若々しい新進の意氣を以つて、業務に専念し怠るところを知らなかつたのである。やがて芝浦理立地の有望なるを看取し、大正九年に居を芝浦南濱町九番地に移し、海陸運輸と土木請負業とを兼營し、家運は愈々そのクライマックスに達して居る。一方その衆に拔んじた徳望はやがて會の理事に推舉されるに至り、その不屈の手腕と、その佛心慈腸な寛容さとは相俟つて、着々として衆民の心を捉へ、芝濱青年團理事としては、純眞な青少年の指導に任じ、更に芝浦睦會の幹事としては同業者の親睦につとめ、あの大震災の際の如きは、災害の眞唯中にあつて罹災者の救助に努めたといふ譯もある。趣味は角道だといふ。

羽佐間周造

明治二十六年七月二十四日生
麻布區新廣尾町三の八五

石川縣鹿島郡熊木村は思ひ出多い氏の故郷である。小學校を卒業と共に志を立て、上京したのは明治四十一年のこと、氏の十五歳の時であつた。が少年の胸に藪いた世の中と現實とは餘りに其間に隔りがあつた。市内の某金物商の店員として入つた氏は、文字の如くに惡戰苦闘、反覆なき世のあぢきなさを泌々味ふことが出来た。そしてその十餘年の間に學び得た商法のエッセンスで、大正元年にまづ新堀町二番地に小さい店舗を張つた弱年ではあつたが、天與の敏才はその不屈の努力と相俟つて、着々と圖に當り得意先は増加して行き、營業は繁昌し、店舗漸く狹隘を告ぐるに及んで現在の地に移轉し、大々的に擴張したのである。ところがこの歐洲大戰、亂が勃發し、財界は好轉に次々に好轉、特に氏の商賣たる銅鐵の拂底は、一躍して氏に巨萬の富を恵んだのである。會て十五歳の少年時代に、小さい行李に不安の胸を躍らせながら上京した氏が、今では大商店の主人公として實業界に雄飛するを想ふ時、吾等は人事の計り難きを知らると同時に其裏面に黙殺された氏の努力の跡を辿つた今更ら頼に汗する勤勞の尊さを痛切に感ぜざるを得ない。氏は嘗て徴兵に合格して軍務に服し、目出度歸宅後は在郷軍人分會より推されて幹部の要職に就き、同會の評議員として獻替に努めてゐる外に、新廣尾町三丁目町會理事に推舉せられて、町民自治の指導に盡瘁してゐる。年齢漸く三十四歳の氏が、この花々しい活動振りとは隨かに常に空想のみかられて實行の件はない現代の青年に生きた教訓を與へたものと云つてよゝ。



井上 靜彌

明治十三年十一月二十六日生
豊多摩郡澁谷町下澁谷一三五八

西国立志篇の著者スマイルスは、一生の中五度その職をかへたけれど、遂に不朽の名著を出して名聲を後世に傳へたのであつた。澁谷町に電氣機械製作業を営む井上靜彌氏も、またスマイルスのやうに幾度か職を代へて遂に今日の聲名を購つたのである。だから氏の辿り来たつたその半世は、波瀾萬重を極めた苦闘史である。が氏は如何なる難關に處しても所謂先人の言葉であるところの、世路風霜を吾人忍久の地と感じて、一路運命の開拓に邁進した。氏は新潟縣新發田の出身である。由來新潟縣人は、火花の如くに閃めく才氣喚發の性は持たないが、奔々として萬里の遠きをも苦にせず、ついに成功の彼岸に達する不屈な理想力に富んでゐる。この血潮を受けた氏は、青年期にまづ北海道に渡つて漁業に従ふこと約七ヶ年であつたが、同業に従事する者の日常生活は、非常に荒んでゐて、常に洋のやうに放浪を好んでゐるので、その環境に支配されることを怖れた氏は、その群から遠ざかつて横濱に來り潜水事業に八ヶ年間没頭したのである。が健康を害する職業なので、それから各地の工場に入つて機械製作の技を修得し、三十九歳の時に日本安全油株式会社に入社して入社した。が遂に大正七年に現在の場所に工場を設け、獨立して電氣機械工具の製作を開始したのである。ところが製品の優秀と、經營の確實さは、日一日と業績をあげ、遂に今日の如く斯界にその名を知られるやうになつたのである。夫人みや子は糠糟の妻として、始終氏の活動に元氣づけ、氏の今日の成功の半面は夫人に負ふところが多いと云はねばならぬ。



常川 佐吉

明治十一年一月三日生
四谷鹽町三の二八番
電話 四谷三三〇三番

北海の波濤が岸を洗ふ富山縣高岡市は氏の父君佐吉氏の故里である。その怒濤のしぶきと陰寒な風に揉まれて育つた富山縣人は、性來根強い隱忍力が養はれてゐることは、あの賣藥行商人によつても知ることが出来るほどに、挽まず屈せず遙かなる萬里の路を、黙々として辿るところに知られてゐる。この偉大なる地方氣質をうけた氏は、明治八年に上京し現在の地に學業を創め、刻苦精勵して大きい産をなしたのであつた。氏が佐吉氏はその後を襲つてより一層の繁榮を招致したのである。氏はやはり商機を見るに非常に敏感な天質を有し、しかも八面玲瓏、最初の一瞥で他人を魅惑し去る獨特の社交術を持つてゐる。がそれが決して誇衒的でなく、濫茶をすゝるやうに地味であつて内省的であるところが、益々衆望を擔ふに至り、區會議員には三度ぶつ通して當選し、常に四谷區民のために犠牲的奉仕につとめ、公人生活の完璧を期してゐるのみか氏は町内の共榮にも不斷的の注意を拂ひ、町會幹事としてなにくれとなくその善導に資してゐることだ。由來區會も政黨化して、單に反對せんがための反對行動が多くとすると救ふことの出来ぬデレンマに陥り易い感がある時、氏はかくした黨派根性に超越し、區政自治の刷新に専念の歩みを續けてゐるの、他の模範とすべき點であらう。その外氏は同業組合の組合長として、組合員の福利増進に努め、更に信用組合理事として庶民金融の萬全を計つてゐる。夫人さと子との間に六男四女があり、子福長者として圓滿な家庭を營んでゐる。惠まれた精進の人と云ふべきであらう。



久米 甚太

明治十三年十月生
府下杉並町高圓寺七七二番地
電話 四谷一一〇七番

多年鐵道院に職を奉じて貢獻する處多く、現に市電車輛課長として、其豊富なる智識と尊い經驗を以て車輛の改良に精進しつゝある人に、わが久米甚太氏がある。岡山縣宇野港から汽艇を驅つて約一時間四國の要津高松を其故郷とし、玉藻城の白聖海を歴して美しく、柔かなそして明るい感じに充ちてゐる南國特有な都緒の中に育ぐまれた丈けあつて、謹嚴な裡にも何處となく親しみ易い閑雅な性格を思はれてゐる。夙に郷愛を了へて京都に赴き、中學並びに高等學校を卒業して、明治三十三年京都帝國大學に學び、工科の機械工學科に専門學の堂奥を探り、三十六年優秀なる成績を以て卒業するや、直ちに鐵道院作業局汽車部神戸工場に勤務することになつた。以來精勵大に力め、在職五年の後同院中部鐵道管理局運輸課を経て大正二年五月濱松工場に轉じ車輛製作に従ふこと二ヶ年、更に大正四年六月職を中部鐵道局工作課に奉じて、益々天賦の才能を發揮し、大正七年神戸出羽所に赴任するに至つた。大正八年五月遂に拔擢せられて米國駐在主任となり、同地に派遣せられて我が鐵道關係の在米庶務を統轄して大に功績を樹てた。偶々大正十一年四月萬國鐵道會議開催せらるや、特に選ばれて之が席に連り、我が鐵道事業の爲萬丈の氣を吐いたものだ。歸朝後大宮工場長を経て名古屋鐵道局工作課長に進み、令名を擡にしてゐるが、大正十三年十一月東京市に聘されて現職に就き、車輛の工作に腦筋を絞つてゐる。氏清廉潔白にして頭腦明哲、寫眞に興味を有する處、又情操の豊なるを見るべく、夫人を慶子と云ひ、その間に四男がある。



奥田 久七郎

明治二十六年二月十九日生
市外落合町上落合八一五

氏は苦學を以て現在に至るの基礎を築いた人である。苦學といへば貧しくして而も同學の志ある青年が誰でも執らんとする手段であるが、實際となればなかく、容易の業ではない。人間の能力の能ふ限りの努力を以て進取の氣象を培ひ、始終不撓不屈の態度を以てこれに當らねば出来ないことである。だから多くの苦學青年が中途に於いて挫折し、或は自暴自棄してあたら前途を聞くものさへあるのである。この中であつて、わが奥田氏は否ならず、あらゆる艱難辛苦と闘ひつゝ而も初志を翻へさず、敢然として邁進をつゞけて來たのであつて、酬ひられて遂に青雲の梯を上つたのである。氏は明治二十六年二月を以て三重縣飯南郡桶田村に生れた、早くから家業に親しむでゐたが、寸暇を利用して勉學に力め、辛うじて旺盛なる智識慾を満足せしめてゐた。其内に機を得て上京し、先づ東京府廳に入りて農商課に勤務し、その餘暇を以て中央大學に學んだ。これが氏の立志傳を飾る悲壯なる苦闘篇である。かくて大正九年には、あらゆる苦澁に堪へ得て芽出度卒業の榮冠をかち得たのみならず、越へて大正十年には高文試験さへパスするに至つたのである。こゝに於て氏は再び東京府廳に戻りて地理課に勤務し、大正十三年には拔擢せられて官房主事となり、更に同年西多摩郡長に進んだが大正十五年七月郡別廢止と共に三度東京府廳に戻り、事務官として地方課に勤務する事となつたのである。氏は志操堅固にして年齢なほ壯、今後の進展測り難きものとされてゐる。夫人を幸子と云ひ一男一女がある。



佐藤 信哉

明治十九年十一月廿七日生
府立農事試験場官舎
電話 立川 五 五 番

自然の懐ろに抱かれて土に親しみ、伸び行く芽生へに悠久な天地の心を知ると云ふことは、人生にとつて實に尊い事ではなくてはならぬ。現に府立農事試験所長として、將又同じく種畜場長として令名ある我が佐藤信哉氏は、實にこの敬すべき自然の讚美者で、然かもその自然の裡に自己の正しい生活を見出した人である。雪で名高い新潟縣北蒲原郡山村大字長越は、氏の幼時を物語る懐かしい故郷だが、附近は一帶に農業の盛んな處丈に、小さい時から農に對する愛着心は人一倍深いものであつた。そしてそれが體て後年氏を驅つて土に親しむに至らしたものであつた。氏は長ずるに及んで學序を經、明治四十四年東京帝國大學農科を優秀なる成績を以て卒業するや、大正元年農會技師として職を岐阜縣廳に奉じ、農事の改良に幾多の功績を残して、大正四年石川縣農事試験所長に榮轉した。以來氏は多年の蘊蓄を傾けてその發達を計り、而かも在職中五ヶ年繼續事業として施肥標準調査の大業に手を染め、成績の大に見るべきものがあつたが、大正七年東京府に轉するに及び中絶するの止むなきに至つた。かくて氏は東京府に入るや直ちに廣大なるバツクと農場とを有する立川の地に試験場を移すと同時に、分場の有名無實なるを廢し、種畜と農事試験場とを併置して只管之が改良發達に力めた結果毫も間然する處なき施設を得、今や各府縣に範を以て稱するに至らした。農事生産が人類の基本的要件であることは今更はず、たゞ氏の努力の跡の尊さを知るのである。夫人を没子と云ひ、子實はないが鸞鳳の契りは殊に深い。

廣瀬 進

明治七年二月廿二日生
市外田端町五二三番地

同一學校に在つて職を奉ずること二有餘年、その間榮譽を願はず、鏡育府氏の子弟の教育の任に當り、名校長として令名のある人に現府立第三中學校長廣瀬進氏がある。氏は提封百萬石を誇る北陸の雄藩で兼六公園を以て知られた金澤の人である。幼時から好學の志深く、郷里にあつて已に秀才の名が高かつたが、遂に笈を負ふて東都に遊學し、東京高等師範學校英語專修科に入学し、明治三十六年優秀なる成績を以つて卒業し、直ちに府立第三中學校教諭として赴任した。爾來同校に在つて専心育英の任に當つてゐたが、大正八年拔擢せられて同校長に任ぜられ、以つて今日に至つてゐる。氏は教育は智育の練磨と共に德育の涵養をはからなければその實績擧げざるべきを思ひ、常に生徒の個性を尊重し、自治の精神の樹立を計ると同時に之が指導に努力し、各内省的に進路を求めしむるを宜しとし、特に生徒と職員との意思の疎通に重きを置き、出來得る限り兩者の協調を以つて實績を收めやうとしてを。従つて生徒の過失の如きは努めて處罰することを避け、自分の良心に依つてその非を悟らしむるの方針を取つてゐる。又教室教育のみならず、生徒の趣味技藝に依つて人格修養に資せんことを心掛け、學友會を十六部に分ち、趣味技藝を練磨する方法を講じた。爲に日に増し生徒の成績上り、市内優秀中學として信望を博し、模範校としてその名を轟はれるに至つた。これみな氏の條理立つた教育方針と實際指導の當を得たるによるものであつて、一面氏の人格の反影といふべきである。蓋し氏の如きは眞に教育者の典型と云ふべきであらう。

矢田 金三郎

明治六年十一月生
東京市芝區三田豐岡町十三



人生は旅である。東海道五十三次の様に、幾多の喜劇と悲劇とを以て結び付けられた長い旅である。従つて收斂者であらうとも、ダークサイドに生きてゆく人々であらうとも、生きるといふためには、歩むといふ努力をしなければならぬ。各自互に努力し、相闘つて生きてゆくのが人生である。されば人間で、努力しないものはないと云へる、而してこの人間に、成功者と不成功者の區別の出来るのは、畢竟努力の如何にある。不成功者の月並な努力に比較して、成功者のそれはまた何といふ超人間的な努力だらうか、成功者としての榮冠を獲得した我が矢田金三郎氏の努力が實にそれである。氏は麻布區飯倉町に生れたが家庭不如意の爲幼少の頃より働くべく運命付けられてゐた。仍で十五歳の年より二十歳まで井出氏の許に勤め、次で芝浦製作所に入り、十五年間致々として克明に働いたものだ。後砲兵工廠に二ヶ年間、更に大塚榮吉氏の工場に八ヶ年間勤務して、あらゆる人生の酸苦をなめつゝ、益々腕を磨いて行つた。かくして玉成せられた氏は、明治四十四年の青葉若葉の囁き清々しき初夏、獨力を以て現住所に工場を設くるに至つたが、氏の不斷の努力と、尊い經驗とは製品をいやが上に價値づけ、今では年産額實に十萬圓に及び、家運は一路幸運を辿つてゐる。同工場では現在石川島造船所自動車部の仕事で、別に家庭用ポンプ機械の製作でも精巧品として斯界に知られてゐる。蓋し氏の如きは立志傳中の人として現代青年の範とすべきであらう。家庭には手輝夫人あり、長女鶴子は直三氏を迎へ、二女君子は他家へ嫁してゐる。

鈴木 常造

明治十七年九月八日生
東京市芝區三田豐岡町一四

茫々たる平沙、森々たる海洋、一つの岩もなく一つの島もない、砂丘、雜草地、松林、沼、漁村をうしたものが錯落してゐるのが、千葉縣を代表する九十九里濱である。そして地形そのものが非常な鋭角をなして海上に突出し、岬角は悉く岩壁をもつてなり、海中にも無數の巨岩が亂抽し、打ち寄する波頭は更らに其の岩頂に超躍する、この凄絶にして雄大、壯快を極めるのは大吠岬である。九十九里濱と大吠岬の境で、大利根の河口にある銚子の町は、漁港であり、醬油の名産地であると共に、動と靜を兼ねた町である。だから銚子の町が、かつて、強きをくちぎ、弱きを助ける仁侠の人々を生んだのも、怪しむに足らない偉大な環境の力であらう。製菓機械の製造をもつて知られた我が鈴木常造氏は實にこの銚子に生れた人である。夙に上京して四國町の天津機械製作所に入り十六歳まで勤務し、次いで芝浦製作所に轉じ、四ヶ年間致々として働いた。左手製作所に移つたのは廿一歳の時で、以來十有餘年の永の年月、恰も一日の如く精勵し、麻布區新堀町に機械製造工場を獨立經營するに至つた。かくて大正五年の九月現住所に轉じ以て今日に及んでゐる。同工場では目下製菓機械、就中ビスケット製造機械は頗る精巧を極め、内地は勿論、遠く朝鮮、臺灣、滿州、北海道樺太等に大なる販路を有し、年産額は實に二十萬圓の多きに及んでゐる。氏は人格高潔にして光風霽月の襟度を有し、家庭にはナヲ子夫人との間に、日本大學在學中の一郎君高輪中學在學中の四郎君及五郎君の外、靜江、富美子、八重子の三嬢があり賑かである。



村松 喬 雄

明治廿五年十二月七日生
東京市日本橋區彌生町三の八

高山と、溪流に恵まれてゐる信州東筑摩郡麻績の宿に、世々醫業を業とし近隣の人々から限りなき感激を寄せられてゐたのが、我村松喬雄氏の遠い先祖である。村松家中興の祖とも云ふべき玄中氏は、夙に江戸薬研堀に居を構え、産科醫として知られてゐたが、後松平伯耆守の侍醫となり、當時伊東玄朴氏と共に江戸に於ける醫界の双壁として並び稱されたのだ。そうした父祖の血を傳統的に承け繼いで来た、即ち十八代目の我が村松喬雄氏が土地の人々の信望を双肩に擔つてゐるのも、亦當然と云はなければならぬ。氏は明治廿五年の年も押詰つた十二月、日本橋區堀江町に孤々の聲を擧げた生粹の江戸ッ兒である。夙に青雲の志を刀圭界に求め、學序を追ふて慈惠大學に學び、大正三年優秀なる成績を以て同校を卒業すをや、氏は直に職を金杉病院の内科に奉じ、佐伯矩博士の助手として熱心に其職務に勉勵したものだ。後嚴父の業を繼いで日本橋區堀江町に醫院を開業し、業績の大に見るべきものがあつたが、大正十二年不幸にして關東大震災に遭遇し多志を有する氏は、更に之に屈する色なく現住所に醫院を開業して奮闘した結果、今日では一路幸運を辿つてゐる。因に嚴父殉次氏は目下埼玉縣南埼玉郡越ヶ谷に醫院を開業し静かな生活を送つてゐると云ふ。夫人を道子と云ひ、前橋市の機業家高橋亮助氏の令妹で、二人の間に俊雄、博雄の二男ある。令弟當雄氏は醫學士で目下府立松澤病院に勤務し、夫人敏子は女子學習院教授田部隆次氏の次女で、一家頗る繁榮を極めてゐる。

小澤 孝 達

東京市芝區芝浦日ノ出町九

都人士の疲勞した眼に新鮮味を、麻痺した舌に醍醐味を與へてくれるところの、眞赤な大きなルビーのやうな林檎は、青森縣の名産である。そして林檎の色や味をそのまゝの風土と人情をもつてゐるのが青森縣である。たとへば本州の東北端に位して、太平洋と日本海に臨み、幾多の岬灣と遠く連つた平沙に圍繞されて、海の奇勝絶景に富んでゐる事も、また岩木山八甲田山、赤倉嶽の連峯と、岩木川、馬淵川、奥八潮川の清流と、明鏡のやうな十和田湖、小河原沼を持つてゐることも、そして青森縣人が、北國的な理智的な、性格の何處かに、高潔な襟度の程を匂はせてゐる事も、林檎の國として相應しい地と人との和ではないだらうか。我が小澤孝達氏の嚴父繁吉氏は、青森縣北津輕郡板柳町に孤々の聲を擧げた純青森縣人とも云ふべきタイプの人であつた。大正元年縣立中學を卒業するや直ちに上京して、小石川原町の高島組に入り、五年には芝浦日の出町に獨立して土木建築業を營み、やがて出張所を東京府下西新井に設ける程の發展を遂げるに至つた。傍ら運搬自動車部を設置して運送業界にも進出し、東京市役所の指定商たる等、絶大の信用を博したのであつた。また昭和三年二月、震災の生きた教訓に刺戟されて、同志と共に芝浦日の出青年團を創立し、これが團長となり、一片稜々たる氣骨と、男性的氣魄は人の爲、町の爲めに大いに貢献する所があつた。ために土地の人々から絶大な崇敬と信望を得たが、惜しくも昭和三年九月他界して、今では長男孝達君がくに子母堂と叔父君の指導董陶の裡に嚴父の歩ゆんだ道をたどつてゐる。

秋山 源 太 郎

明治七年三月二十八日生
府下品川町北品川六九九

會ては身を千里の曠野に曝し砲煙彈雨の間を馳驅して軍功を樹て、今や品川町の土木委員として只管町政の發展に努力して倦む所を知らざる秋山源太郎氏は、代々品川町に住居し土地の舊家で知られてゐる。嚴父を助八氏と云ひ氏は其長男である。夙に郷愛を終るや、家にあつて只管業務に携つてゐたが、明治二十八年日清戦役の際身を軍籍に投じて超えて三十八年偶々露國と露端を啓くや近衛後備歩兵第四十一聯隊に編入せられて征途に上り遼陽、沙河、奉天の三大激戦に参加し、生死の間を往來して武功をたて功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜つた。平和克復後凱旋して再び家業に就き爾來銳意その繁榮を計り今日に及んでゐる。氏は又深く町政自治の發展に心を砕き、町の爲人の爲盡瘁を怠らざるを、衆望日に加はり推されて品川町の土木委員に擧げられ、道路の修築を始めとして下水の改良浸漑、校舎の建築其他一切の土木事業に携つて實績する處が極めて多い氏は又一方安全組合聯合會々長として組合の牛耳を執り、全幅の經綸とを傾けて組合の平和と福祉を増進し、克く其實を全うして餘す處なく、組合員から多大の尊敬を拂はれてゐる。資性濃厚篤實にして謙讓の美德を備へ思慮益々圓熟して毫も嫌味なく、氏と相對すれば恰も清風吹いて襟に滿つてるの感がある。氏は亦博愛慈善心に富み、從來公共事業に對し金圓を義捐せられし事夥多なりと云ふ。徳望の隆々たるも決して偶然ではない當年五十有三歳、今後品川町政は氏の手腕に特つものが多いであらう、夫人をるく子と云ひ内助の功多く二人の間に四男二女がある。



白石 淺 右 衛 門

明治十九年十二月十九日生
小石川區西青柳町十二番地
電話 牛込 四四〇五番

其の純直情な性格は虚構虚飾を事とせず、都會地の人としては一寸珍しい。人に接するや恰も一見舊知の如く、其の自然的な如何にも天真爛漫な氣分に對者をして胎蕩たる感じを覚えしめるあたり、決して術でも才でもない。自然に具備して居る徳とでも云はうか、それで居て其の間に無限の威を藏し、卓抜な識見を持し、一度問題の公共の利害得失に關せんか家事をなげうち身を挺んで、斡旋するを辭せざる所の奉公の誠意に至つては、近頃異數と云ふべきである。依つて隣保の推重する事久しく、其の人格を景仰し、常に公事を委ねて其の勞を煩はして居る。現今小石川有志中人なしとはしないが、之を熱と力とを以つて數へんか實に氏を以て筆頭指を屈せざるを得ないであらう。宮城縣登米郡朝水村は氏の郷里で、少壯の頃から出で、自己の天地を開拓すべく、雄々しい信條を抱き父君に請ふて漸く其の納付する所となるや、殆んど裸一貫で上京し京橋區に某製本工場を叩いたのであつた。時に日露役未だ酣なる明治三十八年で、之が即ち小石川に開いた白石製本工場主となる最初のコースであつた。而して製本印刷業の從來見るべき所あるを洞見し、拾有餘星霜の苦難を耐へて、大正元年九月現在の地に開業した。多年の經驗に依る熟練さと、獨特の創意とに俟つて逐年發展し、匆忙の中に職工二十有餘名が攷々として従業する今日を見るに至つた。氏は又大正八年頭地町會の副會長に任じ引き續き現在に及ぶまで只管隣保の親善發展のために加へて來て居る、本年不惑、一層の活躍をなすの時はずに實に今後にある。

海老塚 肅

明治十六年八月生
横濱市根岸町西芝生一三二

帝都の交通機關中の主力たる市電が二百萬市民に密切重大なる關係あると同様、此の交通機關の經營にあたる従業者中の樞要な椅子を占める人が亦奈如に重大責務を有するかは云ふまでもない。市電は帝都の生命であり市の活力素である、全市民の活動は殆んど市電を通じて實現すると言つても過言でない。市電當局が有爲なる人物を選擧して其の衝に當らしむるは、よりよき發達を望む自然の數である。氏が夙に卓異な手腕の所有者である事は、關係各方面の定評あるを以て推して知るを得るであらう。氏は横濱市の出身で、早く東大工科學部土木科に學び、明治四十二年卒業して始めて名古屋港擴張計畫調査に參畫したのを提出しに四十四年大阪灣築港、船渠設備の設計及び監督の大任を負ひ、幾許もなく北海道留萌港築港事務所に聘せられて同所技師兼所長として全責任を擔ひ留る事七ヶ年只留防波堤の完成港内洩泄等に努力すると同時に北海航路の發達のため將亦留萌港の發達のために大なる貢獻をもたらしたのであつた。その後横濱運河の整理計畫あるや、氏の參畫を懇願するもの多きに及んで、惜しまれつゝ住みなれし北海の地を辭したのであつた。爾來三ヶ年を閉じ、市電に入つたのは大正十年秋十月の交であつた。先年時運の然らしむる所地下鐵道の必要痛切なるに鑑み、當局は適當者をして之が研究のため海外に派遣することとなるや、氏は選ばれて親しく各國を巡遊し、昨十四年歸朝したのであるが、今や交通機關は加速度的に發達しつゝあるの砌り、氏等の活躍は期待すべきであらう、本年四十四歳、尙春秋豊である。



小林安太郎

明治三年日生
淺草區橋場町二六五番地
電話 淺草 八四七番

實業家として又區會議員として才氣煥發し、八面應酬して行く處として可ならざるなき小林安太郎氏は、仁侠の氣を負ふ江戸ッ子である。氏は夙に將來燃料問題の忽にすべからざるを看取し、曩に瓦斯會社の創設せらるゝや當時コークスの廢物として徒らに山積せらるるを見て、之を一手に引受け燃料としてその價値あることを世間に知らしむると共に一方販路の擴張に力を注ぎ遂に之が卸商として今日の股賑を見るに至つたのである。氏は又早くより公共の事に心を潜め區の爲に貢獻する處頗る多く、曩に區會議員の改選行はるるや、推されて之が候補者となり、衆望の歸する處大多數を以て當選の榮を擔ひ教育の振興、衛生設備の改善等幾多區政の刷新を斷行し克く其職責を全うして餘す處がない。其他區劃整理委員として復與の途上にある帝都の建設に力を注ぎ、又東京市方面委員として温情を以て親切に細民の保健救療相談指導等、殆んど席暖る暇のない位であるが、常に食する程の執着と思慕を以て事に當り毫も倦む處を知らない。斯く多忙の氏は、尙一方夙に町會設立の必要を説き有志と共に橋場町々會を組織して之が副會長に推され、専ら町内の平和と福祉を増進して町勢の發展に資する處多く、又現に青年團の副團長として青年の指導誘掖に力むる等、其功績はまことに没すべからざるものがある。氏は清廉潔白で利の爲に志を變じ財貨を思ふて節を屈するが如きことを敢へてしない。眞に公人の範とするに足るものがある、夫人は昨年逝去し、家庭には二女があり共に才媛の譽が高い。



野村 嘉七

慶應元年七月廿二日生
東京府下馬込町二四〇一

最近郊外の異常な發達は、清淨な空氣を求めて、靜かた落ちつきを見せようとする近代人の、半流行的な欲求によるところも、決して少なくないだらう、また、文化住宅、文化生活、文化村、田園都市といった言葉の魅惑や、そうした生活様式にふさはしい、ひろくとした大空と、緑の地平が塵芥に塵芥に奔走してゐる人々の献身的な努力を見る時、其の人々の努力こそ、異常な發達に値する唯一の要素だと知ること出来る。現馬込町の間町村自治のために闘つてきた勇士である。今も尙、壯者を凌ぐの意氣をもつて自治のために先陣に立つたあつたのは、明治四十三年の事であつた。氏の人で、はじめて村會議員に當選したのは、明治四十三年の事であつた。温厚にして溢るゝやうな慈愛をもつてゐる氏はまた仁侠の血にも富み、自治のために、村民のために貢献したところも少なくなかつた。大正五年收入役となり、續いて大正十年には助役に進み、また大正二年、六年、十四年の三回互つて村會議員に當選したのである。昭和三年一月一日をもつて町制が施行せられ、馬込町となるや氏は推されて名譽町長となり、爾來町民の信望を一身に集めてゐる。氏となり温厚篤實にして統御の徳を備へ、人のため町のために身を粉にしても惜まない、稔々たる氣骨を持つてゐる。氏を町長に持つ馬込町の人々は眞に恵まれたりと云はなければならぬ。長男元一氏は氏に似た人格者である。

豊浦 與七

明治廿一年四月一日生
東京市牛込區藥王寺町八〇

さきに名商工課長として令名あり、又電氣局理事として重きをしてゐた豊浦與七氏は、香川縣三豊郡觀音寺町が其懐しい搖籃の地である。香川縣の觀音寺町と云へば、風光明媚な瀬戸内海に面した靜かな町である。鳥の胸毛をなでるやうにしなやかな、そして柔らかな感じに満ちた、所謂兩國情緒の濃かた瀬戸内海の風光は、何んなに氏の少年時代を樂しませた事だらう。而して氏の魂に、燃ゆるが如き熱情と、勇氣と、公正な明るい氣分とを焼き付けずには置かなかつた。氏が眞に電氣局の理事として、上下の信望を一身に集めてゐたのも、實に少年時代の賜である。學序を追つて香川縣立三豊中學校を卒業したのは明治四十年の春であつたが、胸中常に奮動たる向上心を以て滿されてゐる氏は最も難關とせられてゐる、第一高等學校の入学試験に應じて見事に合格し、秀才の名を擡にしたものだ。かくて明治四十四年同校を卒業後、直に京都帝國大學法科大學英法科に學び、優秀なる成績を以て校門を辭するや、直に職を日本興業銀行に奉じ實社會に最初の一步を踏出したのであつた。越えて大正六年十二月山下合名會社に轉じ、大に其前進を嚆望せられてゐたが、十一年四月電氣局經理課長の椅子に就き格別の譽が高かつた。後都合により一時閑地に就いたが、大正十五年十二月東京市商工課長を拜命し、昭和三年更に電氣局の理事に拔擢せられ快刀亂麻の手腕を見せてゐた、同年十一月都合により辭職するに至つた氏は明るい性格の持主で、稀に見る友愛の人である。



新家 借三

明治二十四年十二月五日
東京市芝區二本榎町一ノ一九

下醫は病を治し、中醫は人を生し、上醫は國を醫するとは、古人の言つた味ふべき言葉だが、今や醫學思想は、個人的から漸次對社會的へと向ふ新しい傾向を帯びて來た。最近識者の中に喧しく論議せられてゐる産兒制限とか、或は優生學とかは即ちそれで、多數多死の憂ふべき状態より、小産小死の理想へ進めんとする近代の醫術こそ、將に國を醫するものといふべきだらう。とまれ、これに最も關聯した産科婦人科及び小兒科専門醫として知られてゐる我が新家借三氏の前途こそ正に祝福すべきであらう。氏は明治二十四年十二月五日を以て、愛知縣幡豆郡上横須賀村に孤々の聲を擧げた。長ずるに及んで將來國手たらんと志し、大正九年前途に輝く希望に胸を躍らせつゝ帝都に出で、櫻井病院に勤務した。爾來同院に於て熱心に其職務に精勵する傍ら、慶應大學醫學部産科婦人科に學び、専心醫學の研究に力めた結果、後幾許もなくして醫界の登龍門たる醫術開業試験に合格し、遂に多年の宿望を達するに至つた。かくて大正七年現住所に、産科婦人科及小兒科専門の醫院を開業するに至つたが、篤學にして、然かも然ゆるが如き向上心を以て滿されてゐる氏は、慶大附屬病院開設以來引續き同院に於て實地研究に餘念がない。氏は趣味として庭球を好愛する丈あつて、スポーツマンに相應しい明るい性格の持主で、殊に信義を重んじ、友情に篤く、一度意を決すれば何事でも徹頭徹尾初志を貫徹せんば已まざる男性的氣魄と、實行力とを蔵してゐる。眞に親しむべく敬すべき人格者である。夫人をとめ子と云ひ、貞淑の譽高く、二人の間に子實はないが、家庭は至極圓滿である。

中村 虎五郎

明治二十三年二月十二日生
東京市芝區三田豊岡町六

社會はピラミット式に形成されてゐる。一人のスパアマンをつくる爲に幾何級數的に多くの人が、其階臺とならなければならぬといふニイチエが言つてゐる。然しその惠まれたスパアマンこそ、實に超人間的の努力を以て榮冠をかち得た所謂人生の闘士で、其裏面には、懦夫をして起しむべき幾多の英雄的事實が秘められてゐる。我が馬來工業株式會社取締役兼工場長として令名ある中村虎五郎氏の過程が即ちそれである。氏は仙臺市に可成り知られた相當の商家に人となつたが、偶々嚴父の失收から、一家は忽ち没落の軌道を走つて、苦難のどん底に投げ出されて了つた。然し性來不羈轉の勇氣と、鐵石の如き鞏固なる意志を有する氏は、毫も之に屈せず、あらゆる艱難と闘ひつゝ仙臺市立工業學校に學び、遂に明治三十九年優秀なる成績を以て同校を卒業するに至つた。かくて卒業後氏は直に上京して海軍造兵廠に入り、一ヶ年間致々として世の荒波と闘つたが、明治四十年偶々馬來見氏が電氣局を退き、獨力を以て馬來製作所を創立するに及び、氏は招かれて同所に勤務し、馬來氏と共に具さに辛苦を嘗めたものだ。然るに大正五年馬來氏が一朝病を得て死するや、氏は自ら之が經營の術に當り業績の益々擧るに及んで、遂に大正十三年之を株式組織に改め、取締役兼工場長に就任するに至つた。同會社の事業は、主として電氣鐵道設計並に工事請負、架設材料、電氣用品一式の製造販賣等で、氏の卓越した手腕と共に業績は益々擧つてゐる。氏は稀に見る温情の持主で、家庭には貞淑の譽高き育子夫人との間に誠君及千代野嬢がある。

設樂 熊藏

明治拾五年七月十六日生
府下杉並町高圓寺五一

帝都の心臓とも云ふべき京橋の區役所にあつて、明哲なる頭腦と該博なる智識を以て噴々たる令名を馳せつゝある人に、我が設樂熊藏氏がある。氏は秋田縣の人、巍然として聳えたる奥羽山脈、滔々として岩を噴んで走る雄物川の流れ、轟々として岩に碎ける日本海の荒波、斯うした環境に育まれて、氏は雄大な體格と、豪放な資質を惠まれて人となつた。夙に縣立秋田中學を優秀なる成績で卒業するや、明治四十年普通文官試験に合格し秋田縣廳屬を拜命した。之れ實に氏が活社會に乘出した最初の一步で、以來事務に精勵すること十有六年、大正十二年東京市に事務員となり勉勵大に力めたものだ。氏の此際日なたのない精勤振りが永く上司の眼に映らぬ筈はなく大正十年の五月には忽ち拔擢せられて京橋區役所の庶務掛長に擧げられ、東京市の主事に昇進した。爾來多年の經驗と蘊蓄とを傾けて繁雜なる事務に執筆し、快刀亂麻を截つが如き才腕を揮ひ令名を擲にしてゐる。氏は容貌魁偉、膽斗の如く、光風霽月の襟度と、抱擁力のある親分肌の人だ。而かも人に接するに毫も城府を設けず、忠道に於て友愛に於て、親しむべく、敬すべき人格者である。曾て一夜強盜氏の邸を襲ひ、白刃を閃かして金錢を強奪するや、氏は大喝して其不心得を諭し、所持金を悉く與へて追放せりと云ふ。以て氏が如何に沈勇にして、而かも溢るゝが如き人間味の所有者たるかを知り得るであらう。氏は薩摩琵琶に堪能で、時に興至れば琵琶を弾じて情操を養ひ、平生の鬱を散すと云ふ。夫人をさだ子と云ひ、二人の間に長男幸一長女春枝の一男一女がある。

荻原 峰太郎

慶應三年九月十八日生
麻布區龍土町廿三番地
電話青山五一二五番

甲州葡萄の本場、山梨縣山梨郡は氏が懐しい搖籃の地である。青雲の志を抱いて單身上京したのは明治廿五年の事、先づ親戚に身を寄せて陸軍御用達の見習となり、獨立して被服及び雜貨の御用達を勤める様になつたのは、夫れから三年の後であつた。かくて渾身の力を業務に傾倒し、日清、日露の兩戰役には、赤誠を披瀝して軍需品を供給し、區々たる小利を争ふ御用商人の間に介在して常に一異彩を放つてゐた。爲めに時の第一聯隊長小原正恒氏より感謝状を送られた程で、單に此一事を以てするも氏が如何に有徳の士たるかを知り得るであらう。爾來不斷の努力を續けて世路風霜と闘ひ常に名利に超越して信用を重じ、模範御用商人として聲望を擡にしてゐる。氏は又國勢調査市勢調査及び震災人口調査等には何れも委員として其の重責を完ふし感謝状を受けたことは、枚擧に遑がない。此の外氏は龍陸會を設立して之が幹事となり更に大正十二年の秋町會を組織して副會長に推され常に町民の中堅として共存共榮の爲に大に與つて力があつた。かくて昭和二年の三月改選と共に同町會會長に推選されて今日に至り、又青少年團の團長にも就任して、町民敬慕の的となつてゐる。氏資性温良圓滿の長者にして旅行に興味を有し、暇あれば勝地に杖を曳いて浩然の氣を養ふと云ふ。家庭には貞淑の譽高いのぶ子夫人との間に二男四女あり、長男正君は野砲聯隊を退いてからは家業に従ひ、父君を助けて斯業に精進してゐるに、長女及び次女は山脇高女出身の才媛で他家に嫁してゐるが、羨しい程の羨々たる和氣が醸されてゐる。

森 秀

明治廿五年三月廿八日生
府下松澤村赤堤四五七番地

該博なる智識も、健全なる身體に依らなければ其價値を充分に發揮する事が出来ない。實に智育と體育は車の兩輪の様なもので、茲に兩々相俟つてはじめて其の全きを得るのである。此の意味に於て多年體育の向上に目覺しい奮闘を續けて來た我が森秀氏を府の學務課に有する事は、府民の大きな誇りと云はねばならない。氏は四國徳島市の産、父は徳島阿波銀行に支店長として參拾年間勤続し、温厚仁慈をもつて聞えた徳望家であつた氏は其の次男として生れたが夙に教育界に名をなさんと欲し、徳島縣立師範學校を卒業するや胸中に鬱勃たる覇心は遂に氏を馳つて東都へと上らしめ、東京高等師範學校に入學せしむるに至つた。以來蠶雪の功を積むこと四星霜、優秀なる成績を收めて同校を卒業するや大正六年講師として職を東京府立第四中學校に奉じ、多年の蘊蓄を傾けて實地教育に當つた。後幾何もなく拔擢せられて、東京府の視學に任じ、精勵今日に及んでゐる。此外氏は現に日本體育學會理事、日本體育聯盟幹事、日本青年會囑託等の重職を兼ね、傍ら毎年夏季に開かれる各府縣の小中學校青年團並に處女會等の講習に文部省國立體育研究所講師として出席し、専ら體育の向上に不斷の努力を注いでゐる。氏人と爲り質實剛健にして襟度潤く、稀に見る明哲なる頭腦の所有者である。氏は運動に趣味を有してゐるが、就中旅行を好む時に山河を跋渉して自然の懷ろに抱かれ浩然の氣を養ふと云ふ。家庭には夫人との間に二男一女あり孝悌の道をふんで母堂に仕へてゐる。

近藤 駒吉

慶應貳年 月 日生
淺草區千束町一丁目

人は善行を何故に積まねばならぬか、それは丁度善音のレコードのやうなものだ。善美なレコードは善の美音を放ち、惡を刻んだレコードは惡音を放つ。佛敎の過去、現在未來の罪業宿世の説に従へば、善因には善果あり、惡因には惡果あるといふ。佛の慈悲を心として善く正しく生んとする人に近藤駒吉氏がある。氏は熱烈な佛敎の信者で、常に善根を積んで清淨な信仰三昧の生活を送り、諸事圓滿をモットーとしてゐる。氏は明治二十九年市内に古着商を營んで競争殊に激烈なる斯界に於て、一頭地を抜き且つ實篤な人格者として一般に廣く知られてゐた。が、佛心厚い氏にとつて偉大な刺戟が與へられた。それは關東大震災であつた。氏は之に依て人生の何物なるかを悟つた。即ち氏は佛の道その生活線迄及ぼし年來の職を廢して現在の佛具商を營んだ。公共慈善の觀念は厚いが佛心を以て佛心の發展に力その思想的根據だつたのである。宗教諸團體を組織し氏は町内に相應して卒先町會に立て直した。氏のかゝる獻身的努力は町内一般の感謝となり、町會創立と同時に氏は全員一致を以て町會長に推薦され、爾來同町會を牛耳り信望を博しつゝあるが、更に氏は八日會を組織して毎年各府縣の公共事業を視察する爲め有益な旅行を企てゝゐる。氏は斯く社會の凡ゆる事業に奉仕するの外趣味また頗る多方面にわたつてゐる。家庭に於ては夫人との間に一女あり現に藏前實科高等女學校に通學中である。

石田 小太郎

明治十一年十一月生
東京府下羽田町字羽田一〇六四



何處からともなく聞えてくる二つの大きな聲、それは山と海の懐しい聲であると、西洋の詩人が描畫の中で聞いた聲を絶えず思ひ起してゐた様に恐らく故郷の山河ほど人々にとつて忘れられないものはないであらう。またそれだけに自然が人を感化し陶冶する力が強いのである。従つて山梨縣八代郡に生を受けた前羽田町長の石田小太郎氏が山高く水清い山梨の風光を偲ばしめるやうな高潔な人格の持主たる事に於て何の不思議もない筈である。氏は山梨縣立甲府中學校を卒業すると共に上京して、日本醫科大學に學び、蠶雪の功成て同校を辭したのは大正四年の春であつた。卒業後直に神奈川縣防疫吏となり細菌學を研究して、間もない大正六年の一月には現住所に開業したのであつた。副院長は石田繁氏で患者入院の設備もあり氏の高潔な人格と卓越した技能は忽ち信用を購つて遂に隆盛に赴いたのである。かくて氏は羽田町第一小學校の校醫となり、大正十四年には、町會議員に當選するに至つた。次いで十五年には推されて町長の椅子を占め、身を忘れて町民の利福、町政の刷新に力め殆んど席の暖る暇もない程であつた、即ち、現在三萬有餘の人口を抱擁する羽田町將來のため、五間道路を新設して交通の便を計り、或は衛生施設及び耕地整理に全力を傾注して其の實をあげる等、その功績は實に擧げて數ふべからざるものがあつた。昭和三年五月遂に町長を辭職したが、尙ほ愛町心の熾烈なる氏は引續き公共の爲に力を盡し、現に町の中堅たる青年の誘掖指導に當つて倦む處がない。氏の如きはまことに町民の誇りと云ふべきであらう。家庭にはせん子夫人との間に子供一人がある。

志村 清右衛門

明治十三年十二月生
東京市赤阪區新坂町

大洋の波を思はせるやうな、ゆるやかな、大きな丘陵のうねり、青々とよく肥えた地肌、白砂のうへに打ち上げられた海草と、靜かな東京灣の波の中から漂つてくる海の香り、千葉市は、おとづれる人々に、なごやかなムードを與へずにはをかない町である。そしてこの千葉市から選出された代議士の我が志村清右衛門氏が、また接する人々に、こうした氣分を與へるところの人である。氏は明治十三年十二月、志村清右衛門氏の二男として、この地に生れ、三十一年三月家督を相続すると共に、舊名兵吾を改めて先代を襲名したのであつた。夙に學序を追つて、東京高等商業學校に學び日夜研鑽のかひあつて芽出度く、同校を卒業したのは、明治四十一年の春であつた。かくて氏は直ちに職を住友銀行に奉じて實社會に乘出したが、胸中常に鬱勃たる覇心を以て滿されてゐる此若き青年は永く行員として止まるとを欲しなかつた。後幾許もなく辭職して故郷に歸り、暫く大自然の懷に抱かれて閑日月を楽しんでゐたが、自己の特異性を政界の裡に見出し、縣會議員に當選したことによつて此の政治的生活の第一頁は茲に開かるゝに至つたのである。次で縣會議員から縣會副議長、縣會參事會員と氏の公的生活はそれからそれへと展開し、遂に大多數を以て衆議院議員に當選するに至つたのである。氏は稀に見る犠牲的精神と美しい友情の持主で、政界にあつては常に床次竹次郎氏と行動を共にし、現に新黨クラブに屬して重きをなしてゐる。此外氏は株式會社大橋堂製菓會社々長を始め二三會社の重役として實業界にも令名がある。



鈴木半兵衛

明治十九年 月 日生
東京府下六郷町字八幡塚一〇七一

成功は暖かい褥の上から生れるものではないと知つてゐたから、かの大西郷は、可愛い、子孫のために、敢えて美田を買はふとはしなかつた。されば大きな材木販賣業でありながら、十有餘歳といふ頑固な子孫を、深川の木場に見習奉公に出した我が鈴木半兵衛氏の両親は、偉い人であつたと云へるだらう。嚴父とは十六歳の時死別したが、母堂よし子刀自は鞭撻に鞭撻して、五年間といふものに忍従の修業を續けさせたものであつた。二十一歳の時歸つて文政十年十一月創業の家業を繼ぎ、粉骨碎身して働いた。されば家運は忽ち幸運の一路を辿つて隆盛に赴き、現在では店員八名の多きに及び、主なる納入先は、内務省、清水組、竹中工務店、戸田組、橋本組、大倉土木建築會社等である。東京材木問屋同業組合代議員、川崎材木問屋同業組合幹事等の要職に擧げられて、斯界の重鎮として重きをなしてゐる。此外氏は家業の傍ら、町村自治のために献身的の努力を惜まず、大正十年には信用組合創立委員となり、更に學務委員をもつとめ、或は六郷小學校後援會副會長として永年其の職にあつた。昭和二年九月には推されて町會議員となり、また耕地整理組合長、信用組合長に就任して今日に及んでゐる。この外六郷郵便局長、觀音寺總代等で本年退いたが十餘年といふ長きにわたつての六郷神社子總代でもあつた。氏は謙讓の美德を有し、ダイナミックな活力も持つてゐる。趣味には旅行、大弓等があり、家庭には同村の醬油製造業三代田商店より迎へた貞淑な夫人との間に二人の子女あり、極めて圓滿である。

安藤順作

明治二十年一月生
東京府下蒲田町御園二四

梅園と花卉栽培を以つて僅かに其名を知られてゐた一寒村の蒲田が、松竹梅影所をもつて若き人々の憧憬の地となり、各種の工場が勃興して多くの人々を吐吞するやうになつた。其のダイナミックな發展は、何を物語るものだらうか、其處には都會より郊外へと流れ行く文化生活者の群れと、近代的傾向に魁して土地の發展を策したる隠れたる有志の努力と苦心とを見通すことは出来ない。我が蒲田町會議員安藤順作氏は大正十六年以來土地の發展に志し常に第一線に立つて活躍した自治の功勞者である。氏は明治二十年一月、安藤金吾氏の四男として埼玉縣比企郡今宿村に呱呱の聲をあげた。郷里の小學校を卒へると共に單身上京して、文字通りの苦學力行を續け、辛じて普通學を修むることが出来た。後益々之が研鑽に身を委ね、遂に専門學校の入學試験に應ぜんと志したが、時恰も徵兵適齡にて、歩兵第六十六聯隊に入營した結果、中途にして初志を斷念するの已むなきに至つた。かくて退營後四十五年より二ヶ年間、逆境の裡に轉々としてゐたが、性來の負けじ魂と、苦學の中に鍛え上げられた奮闘心とは、氏を能く零丁の裡に鞭撻し、大正四年遂に意を決して日本齒科醫學專門學校に學び、六年見事に齒科醫學開業試験に合格した爲め、現住所に獨立して齒科醫を開業するに至つた。後幾何もなくして氏は青年會長兼義勇團長に推されたが、大正十四年更に町會議員に當選するに及んで會長並に團長を辭し、専ら町政の刷新に献身的の努力を續けてゐる。趣味は書畫骨董、浮世繪の研究で、かつ子夫人は横須賀高女及共立女子職業出身の才媛である。

内藤 靜

明治十三年一月一日生
芝區三田四國町二
電話高輪一九五九番

氏は明治十三年一月一日を以つて、尾張國金鏡城下に生れた。家業が代々の染色業であつた爲め、氏も幼時より染色に趣味を持ち、自然にこれが技を會得する様になつた。だから氏が家業を助けなければならぬ年頃となつた時分には、相當の技術を染色の上に見せてゐたものだ。併し研究心に富んだ氏は、斯界の本場たる京都に出て、同地染色業の特徴を探査し世人の愛好に副ふ所以の秘技を究め、優秀なる技術を修める事が出来たので獨立して此の地に開業した。所が氏の技術は他の優秀なる同業者間にあつて毫も遜色なきのみか、却つて壓倒的人氣を収めたので、氏は東京に迄已が業務を擴張せんとして、京都を子弟に譲りて明治三十年上京し、暫く形勢を傍觀してゐたが、遂に翌年現住所に開業するに至つた。果然氏の優秀なる技術はたちまち滿都の好評を博し、常に山なす顧客を店頭に見るに至つた。氏は京染一切を取扱ひ、又京都の子弟と連絡をとつて、所謂真正本場染に好評を博してゐる。氏の最も得意とするものは紋章染揚で、その鮮明なる染出と精緻なる技巧とは全く驚嘆に値すべきものがある。かくて氏は大正六年神田の武田上繪師と共同して紋匠組合を組織し、その評議員に推されて斯業興隆に非常なる貢獻をした。この外三十八九年の頃より家作にも手を出し、貸衣裳の業も兼ねて家運をいやが上にも隆盛ならしめてゐる。又町事にも心を砕き、自治公共の爲に盡す所多く、三田四國町にとつては逸すべからざる人として町民に推稱されてゐる。

石井 磯五郎

明治六年四月十四日生
荏原郡蒲田町 番地

夙に身を公職に致し、其の格調と態度の眞摯なる斯界罕に見る人として令名を馳せ、終始一貫營々として町民の福利を思ひ絶えて名利を逐はず、蒲田町民渴仰の的となつて居る人に石井磯五郎氏がある。氏の生家は蒲田に於ける舊家で、古昔時代より名家を以て知られ、同町の開拓者たるの地位にあり、其の子孫の連綿として代を果ぬる事茲に一千有餘年に上ると云ふ。その名門たる家に生れたる氏は、學を慶應義塾に受け、業成りて學窓を去るや、同村の有力者として早くも村會議員に推されて自治政の樞機に參與し、よく改善刷新の實を擧げ、其の手腕頭腦は衆人認められ、爾來氏の名聲は村内を壓し、赫々たるもの他に比すべくもなく、若し氏にして名利を欲するならば、或は邦家の選良として當選するが如きは易々たるものがあつたと云はれて居るが、名利に超越せる氏は只管同地發展の事業に粉骨碎身したのであつた。その業績は一般の信望を繋ぐに充分なるものあり、遂に助役に推され、幾何もなくして町長の要職を占め助役新田五郎氏と共に現時急足の發展に向ひつゝある同町の自治充實の衝に當り、或ひは學校問題、或ひは町制施行後の變改等の解決に對して之が整理處決の大任に當り、而かも此間一點の私心を挾まず、誠心誠意町事民福に力を致すことは、將來同町發展の爲町民にとつて如何ばかりか心強く感ぜられることであらう。斯くも町政に自己を没却して奔走する氏反面は極めて濃厚篤實、頃日夫人に死別し七人の子女を扶掖するに餘念がない。今や漸やく老境に達せんとするも、塵襟として隨社者を凌ぐの概がある。



湯澤直藏

慶應二年一月十四日生
府下千駄ヶ谷町五二九番地

國民教育は國家として最も重要視すべき事の一つであらねばならぬ。堅實なる國民の思想は全く之によつて培はれるからである。殊に現今我國の思想が渾沌たるの時、國民教化の任に當る教育者の使命たるや、重大大と云はねばならぬ、此時に當つて忠君愛國、質實剛健をモットーとして都下教育界に一異彩を放つてゐる人に一橋高等小學校校長市立神田實科女學校校長たる湯澤直藏氏がある。福島縣相馬郡豊村百槻字蓮田は氏の懐しい幼時を物語る故郷である。夙に學を好み明治十七年福島師範學校を優秀なる成績を以て卒業するや、直に校長として職を同縣細谷小學校に奉じたが、當時氏が師範學校を卒業し一躍して校長に拔擢せられたことは、全く異數と云ふを得べく、以て氏の凡骨にあらざるを最も雄辯に物語るものである。其後氏は同縣下に於ける二三小學校に歴任して、山形縣の郡視に擧げられたが、後幾何もなくして上京し、神田、錦華、今川等の各小學校を経て一ツ橋高等小學校長に任じたのである。氏は又夙に補習學校の必要を認めて之が實現に力めた結果、東京市に於ける補習學校の創設を見るに至り、現に神田、錦華、一ツ橋等の各補習學校は何れも氏の力によつて生れたもので、其功績は定に没すべからざるものがある。此外氏は兼に神田商工學校の講師となり、現に神田實科女學校校長を兼任し、生徒をして堅實なる家庭の主婦たらしむる事に力めてゐる、尙ほ氏は震災當時危険を冒して区内に於ける二三小學校の御眞影を自宅に奉安し、夫人と共に晝夜を忘れて守護した爲特に府知事から表彰せられたと云ふ。夫人をちよ子と云ひ、二男がある。

鈴木金松

明治十三年十二月三十日生
府下千駄ヶ谷三八〇番地

日に月に發展して止む處を知らない府下千駄ヶ谷町に、終始一貫正々の論を奉じて謹嚴の態度を示して常に町民よりその正義を推稱され、公共問題に對しては熱心これに當るの士に同町々會議員鈴木金松氏がある。氏は夙に事業開拓の志に燃え、若くして郡下屈指の竹材商として知られ、明治三十九年四月住所に開業して爾來十數年、遂次繁盛をなし今日に至つて居るが、その業務に熱心なる氏の偉大なる努力は、遂に酬ひられて同業者間に重きをなし、今日の如き鞏固なる根柢を築き上げるに至つた。由來千駄ヶ谷町は住民の激増に伴ひ町政の繁忙を極めたる結果、常に圓滑なる事務の進捗を見ることが出来なかつたが、氏が一度町民の衆望を荷ふて立つや、天稟の奇才と明晰なる頭腦、而かも硬直正義の特異性を發揮して之に當り、よくこれを董督して少からざる寄與をなし、常に町民渴仰の的となつて居る。氏はその持論として「唯私慾私利を捨てよ、其處に正しき覺醒が起り行ふべき道が與えられる」との一言を把持して居る。如何にその人格が高潔で而かも公共的奉仕の觀念に厚きかを窺ふに足るものがある。更に氏は斯くの如く硬直無比の士として名聲を馳せて居る一面に、温容他に比すべきものがない程の穩健振りを發揮して居る。常に貧困者を救ひ、公共的施設には率先して之を當るの外、入つて家庭の人としては良く子女の教育指導に専心する等、全く社會の範とするに足るものがある。本年未だ四十七歳、春秋多く、多事多端なる千駄ヶ谷町政に盡す餘地は多く、一般から多大の期待を以て迎えられて居る。



帆足文八

明治二十二年三月十八日生
下谷區豊住町五七

強烈な刺激を好む近代人にとつて、巻煙草の需要は日に日に嵩んでゆく。今では生活嗜好品としても大きい役割を演ずるやうになつた。従つて、その吸煙に必要なパイプも多くの製造高を示すのは理の當然である。帆足文八氏は早くもこの點に留意して、パイプ製造に着手し、嶄然として頭角を現した人である。氏の郷里は群馬縣邑樂郡梅島村で、幼ない時に父君作太郎氏に従つて上京し、下谷小學校に學んだのであつた。それから松島氏の經營する下坂巻煙草製造所に入つて職工となつた。ところで同町が益々發展して府下灘谷に分工場を設置するやうになつたので、同分工場の製造所を擔任して經營の衝に當つた。大正九年六月に同工場が日本紙器株式會社に買収せられるやうになつたところ、氏の技能の優秀なことを見込んだ同社は、引續いて氏の留任を懇望し同工場の主任に聘して工務の一切を監督せしめたのであつた。次いで會社集鴨工場の工場長に進めて同社の幹部級にまで拔擢した。で氏はその知遇に感じて粉骨碎身ベストをつくして之に酬ひたものだ。大正十二年には會社を辭して多年の宿望である獨立のスタートを切り、自ら匿名組合豐盛舎を組織して煙草用パイプの製造を開始した。今では精巧な紙巻機械三十有餘臺と三臺の蠟附機とを設置し、年額五億萬本の製造高を突破し、その製品の全部は東亞煙草株式會社及びアジア煙草株式會社の兩社に納入して噴々の好評を博してゐる。一方氏は豊住町の町會幹事としてまた協和會委員として、自治の根幹を培つて倦むところがない。家庭には夫人とみ子との間に二男二女がある。



中島勝五郎

明治二十五年六月二十九日生
荏原郡品川町南品川五八二
電話 高輪 二二九九番
三三二二三番

氏は府下品川町中島電機製造所の經營主であるが、氏が今日の地歩を占むるに至つたその過去は、文字の如く不遇轉進によつて埋められてゐる。福井縣坂井郡青江村の出身であるが、幼ない頃から非常に勝気で、聰明な頭腦の持主であつた氏は、僅か十六歳の時に故里を去つて遙々上京したのであつた、そして市内の某電氣店の店員として實習に従ひ、長い歲月を苦闘したものである。がやがて蚊龍の雲を得た如く、遂に自ら獨立して電氣機械製作所を芝區白金志田町に營み、次で事業の好轉すると共に、第二工場を、三光町に増設し、只管にその製品の堅實優秀を旨としたために需要は日に日に激増し、遂に現在の品川町に二千有餘坪の廣い敷地を購入して、茲に機械捲線試驗鐵心火造の六工場と、二棟の洋館事務所を建築したのは大正十年のことであつた。十年と云へば既にこの世界禍の煽りを受けた財界の好況期も夢と過ぎ、九年の大變動で大低の事業家は一敗地にまみれて終つた頃である。この財界の沈淪期に際しての活躍は、實力を有する者でなければ、成し得られない事業である。同工場の設備たるや非常に完備し、小は十五分の一馬力より、大は五百馬力の發電機を製作し、毎月の生産高四百臺を超え斯界の權威たる明電社芝浦製作所の製品と並び稱せられてゐる。しかも技師を歐米に派して研究を重ねしめ、または優良職工の養成に努めると共に、大崎に工場を増設して、翻を業界に唱へてゐる。この繁忙の間に氏は品川町々會議員として、町民相互の福利に盡瘁してゐるとは、稀に見るダイナミツクな人といへやう。

桑原 矢次郎

明治二十三年三月十三日生
淺草區千束町二の三八三
電話 淺草 二二三二五番

言論は思想傳達の樞機である。最近思想問題社會問題と簇々湧き出する諸問題は眩しい程に多く、是に依つて惑はされ歸する所を喪ふ世の人は決して少なくない。併し社會の實情は各自の自覺の上に完全な自治の實現を要してゐる。さればこの機會に際して、遺憾なく自家の所信を發表し、相互意見交換に資せ様とするには言論を措いて外に簡且要を得たものはない。こんな見地から近時各方面の有志に依つて言論訓練の目的で雄辯講習會が組織されるのを見るが、氏の牛耳を執る立憲城北雄辯研究會も實に此の趣旨に外ならない。君はかく言論訓練に依つて公共に加へ様と努めて居られる外に、頭記の聯合青年團副團長として青年子弟の薫陶に注がれて居る有志の一異彩であるが、職業的にも同業の自覺を叫んで、裨益が多い。即ち君は區内有数の刀圭家で此の頃しきりに賣出して居る人である。九州南端、鹿兒島の出水郡阿久根町に生れた氏は、薩摩軍人の精悍な血をくんで、地方の學苑に學んだ後上京して日本醫專に入學し、専門學の滿蓄に砥勵し、四十四年卒業して醫師試験に登第したが氏は之を以て満足せず更に百尺竿頭一步を進めて其實力を養成すべく帝大醫科の撰科に進んで再び技能を磨き大正四年功成つたが、三度進んで同校國家醫學會に研究を累ね、大正五年初めて現在の地に開業を見るに至つた稀に見る篤學の士である。經歷に於ても技倆の程を想像するに難くない氏は又現に區内醫政調査會委員として、醫師の民衆化を説いてしきりに新しい所を標榜して居る。後來俟つもの多き人と思はれる。きん子夫人との間に一男三女がある。

石塚 利助

明治二十二年二月七日生
日暮里元金杉一五三三
電話 下谷 八二五番

氏は福井縣大野郡荒土村字中清水の出身である。大野と云へば同下縣では最も邊陲の地であるが、その朴訥なこと、剛毅なことで知られ、多くの俊才を出してゐる。越前の人は商才に秀でており、人をそらさぬことに妙を得てゐる關係上、商人としては持つて來いの性格を有してゐる。その風格を受けた氏が上京したのは十九歳の時であつた。先づ銀座彌左衛門町の恩田電氣製作所に入つた。そして隱忍自重し職務に勵んで倦むところを知らず、何時も模範工として稱せられたものだ。が根が骨太たる覇心を抱く氏のことである。一職工として朽ち果つべきではなく、遂に大正五年に同所を辭して榮ある獨立のスタートを切つた。入所した時が明治四十年二月であるから、實にその間十箇年の長い離伏期がひめられてゐるのであつた。以て氏の重厚な人格が窺知されやう。まづ氏は下谷竹町に一小工場を構へ、お手の物の電球製造に着手すると共に、更に新機軸を劃して豆電球製作を開始したのである。何分にも長い間熱慮に熟慮を拂つて着手したことだから、計畫に寸分のゆるみがなく、日を逐ふて販路の擴張を示し、工場が狹隘を告げて來たので、大正十年に現在の地を選んで工場を擴げ、今や人形印豆電燈は各商店や藥房等の裝飾點燈用として、他製品を壓倒して一大聲價を購ふやうになつた。なほ外に五倍豆電球十倍豆電球の始祖として知られ、クリスマス裝飾用電球は殊更に好評を博してゐる。で目下は二十名を超える職工がめまぐるしい程にその製作に追はれてゐる。徹頭徹尾流汗主義の人だと云はねばならぬ。



鈴木 宇宙

明治十二年八月十八日生
東京市芝區伊皿子町六十三

曾てグラツトストンは「我が家の入口に立つた時、その日一切の勞苦を忘れる」と云つたさうだが、實際眞の休養は平和な家庭に於てのみ恵まれるものである。健全なる精神と、健康なる肉體、それは平和な家庭生活を營む爲に缺くべからざるものだが、就中婦人の健康が、家庭生活の上に齎らす影響は尠くない。此意味に於て暗い家庭に更生の喜びを與へる産科婦人科醫が人生に寄與する處は極めて大なりと云はなければならぬ。我が伊皿子醫院を長たる鈴木宇宙氏は、産科婦人科醫として名がある人で、長野縣更級郡村上村はその懐しい搖籃の地である。學序を追ふて醫學學校に學び、明治三十六年三月、優秀なる成績を以て卒業するや、直に陸軍に入つたが、時偶々日露戰役に遭遇したので、翌年六月遂に征途に上り、四十二年陸軍一等軍醫に任じ、正七位勳五等に叙せらるゝに至つた。かくて大正二年三月除隊となつたが、滿身向上心を以て充されてゐる氏は、更に進んで傳染病研究所を始め、國家醫學講習、大學選科、日本赤十字社病院等に於て實地研究を遂げ、十二年四月遂に多年の宿志たる瑞西及獨逸等に留學し、ベルリン大學教授ブム博士指導の下に、産科婦人科の蘊奥を極むるに至つた。次で十四年四月ドクトルメヂチネの學位を得て歸朝するや、直に現住所に醫院を新築し、爾來精勵今日に及んでゐる。人となり温厚、人格高潔にして、趣味を西洋音楽、書畫骨董等に有し、豊かな情操を培つてゐる。家庭には市立中學在學中の重明君、府立第三高女の三重子嬢の外、八重子、多重子の兩嬢及び重弘君があり、賑かである。

守屋 銀次郎

明治二十八年九月生
東京府下入新井町不入斗七四八

趣味は純一無雜なる自己内心の要求から生れたものである。周囲や外界の羈絆に煩ひされず、物質とか義務とか云ふ社會的關係からの強制束縛を超越して、純眞なる自我の生活を建設し、創造することである。だから其の人の性格を知らうと思へば、其の人の趣味をみればよい、趣味の中には全裸的な性格が躍動してゐるからである。入新井町向區々長代理の名譽職にある我が守屋銀次郎氏は、旅行、殊に山岳を跋渉するのが唯一の趣味であつて、乗鞍嶽、黒部の白馬山、越後の三國岳等に氏の足跡の印せられぬ處はない位である。最近登山家の憧憬となつてゐる日本アルプスを、はじめて踏破したのも、實に氏であつたと云ふ。従つてこうした趣味に生きてゆく氏の性格は、登山家にのぞましい理智的な沈着さがあり、半面には多血質的な勇敢さがある。されば氏は大森第一小學校前に文房具店を營む傍ら、町政のために東奔西走し、常に町民の中堅となつて陣頭に立つてゐる。また氏は近衛歩兵第一聯隊に服役して、在郷軍人會の常務理事の職にあり、大正十二年に推選されて土木委員となり、致々として其の職責を完ふしたが、十三年入新井町向區々長代理となるに及んで自ら其職を辭した。然し氏の公的生活がこれによつて斷たれた譯ではなく、現在では區長代理であると共に、第一小學校保護者會幹事、磐井神社社委員、眞了院世話人等を兼ねて、町民崇敬の的となつてゐる。近き將來に於て氏は町會議員に進出するといふが、氏の如き人が中原に鹿を射た場合には、町民の恵まるゝ處もまた多いだらう、家庭は夫人と二人の子女の四人暮りで圓滿である。



玉木長之輔

明治二十年八月五日生
東京市芝區明舟町十九番地

何事によらず、水平線上に抽んでると云ふ事は容易な業ではない。従つてこの至難な一線を越えて、頭角を現した人こそ、所謂人生の勇者として大に畏敬し、祝福さるべきであらう。人生は苦痛の褥でもなく、さりとして修羅の巷でもないと言つた詩人があるが、艱難を忍び辛苦に耐えてこそ、初めて麗かな幸運の日が訪れるのである。電氣館の支配人として斯界に令名ある我が玉木長之輔氏は、忍苦の修業を積んで今日の成功を勝ち得た人生の勇者である。氏は明治二十年八月五日を以て大阪市南區清水町に孤々の聲を擧げた。夙に青雲の志を抱いて關西大學に學び、優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に身を劇界の霸王として知られたる白井松次郎氏の許によせ、松竹合名會社大阪事務所の一員として活社會に最初の第一歩を踏出したのであつた。爾來致々として同所に勤務し、格闘の譽が高かつたが、大正九年映畫事業開始と共に白井氏に抜擢せられて東京詰となり大に精勵する處があつた。然しさうした氏の努力と、眞摯な執務振りが何時迄も重役の目に止まらぬ筈はなかつた。かくて同年三月映畫事業視察の爲め海外に赴き翌年六月には一躍して大阪支店の支配人に、次で松竹劇部創立部長に擧げらるゝに及んで、氏は益々その藝術的天分の豊かな才能を發揮し大に其前途を嚆望せらるゝに至つた。職に止まること二ヶ年、後東京本社に宣傳部長となり、更に電氣館の支配人に擧げられ精勵今日に及んでゐる。氏は創始の才と統御の徳を備へ稀に見る明晰なる頭腦の持主で、家庭には千代子夫人との間に、博、愛三の兩君と靜子、政子の二嬢がある。

森正由藏

明治十六年十一月十五日生
東京市芝區三田四國町十九

人生のある處、必らず其處に悲哀ありとは、世の中といふものを、絶えず偏狭な陰鬱な眼で見えて來た厭世家のショペンハウエルが言つた言葉である。従つてそれは、髪ながければ、智恵短かしく同様に、彼の極端で強情な、そして侮蔑を含んだ歸納から生れたものかも知れない、だがいかに富める人といへども、また貧しき人といへども、人生即ち幸福なりと斷定できるだらうか、生きるといふ事のためには、誰しもが有形、無形に闘つてゆかねばならない、そして闘争には、常にたとへ血が流れなくとも、悲哀が伴ふものだ、勝利の悲哀にしろ、敗戦の悲哀にしろ、人生のある處には、必ずとは云へないでも、悲哀があることは確かだ。殊に力強く人生を歩み續けて、脂や汗を惜まなかつた處の成功者の過去は悲哀といふ文字で埋られてゐる。我が森正由藏氏の過去かさうである。氏は東京府下月島に生れ、夙に芝浦製作所に入つて具さに人生の酸苦をなめたものだ。同所に致々として精勵すること實に十ヶ年、明治四十年更に池貝鐵工所に轉じ、春風秋雨十有三年と云ふ長の年月恰も一日の如く、汗と膏の中に望れて眞黒になつて働き、他日擡頭の地歩を築いて行つた。かくて多年辛苦の甲斐あつて現住所に獨立開業するに至つたのは大正九年の黨風青葉を渡る夏の最中であつたが、氏の眞摯なる態度と、高潔な人格とは遂に今日の隆盛を招くに至つた。製品は、醫療機械その他の諸機械で、田中稔次郎氏の外、各會社各商店に納入してゐるが優秀品の聲が高い。氏は鞏固な意志と熱の持主で、家庭にはその子夫人との間に、正則中學在學の周治君、東京女學校在學の秋子嬢がある。

星合啓之助

明治十二年八月二十八日生
下谷區上野町二ノ二二
電話 京橋二〇六二番

泉に茂る菩提樹の陰に釋伽は衆生濟度の願を發し、日蓮は白刃の閃めく下に在つて立正安國を叫んだ。その本願とする處、そは何れも惡魔に魅され廢類した人心を醫さんとするに外ならなかつた。吾が濟生會の星合啓之助氏は多年の蘊蓄を傾倒して困窮者の病魔を醫せんとする人、之が診療に注ぐ不斷の努力は、敢て前者のそれに劣らぬ尊い社會的奉仕である。氏は千葉縣の産、家は代々市原郡の素封家として知られ、殊に氏の祖父及び嚴父は名國手として郷間に令名を謳はれてゐた。其由緒ある名家に生れた氏の幼少時代は、誠に恵まれた生活ではあつたが持つて生れた負けじ魂は自ら他の兒童と異なるものがあつた。氏は中學の課程を終ると共に祖父嚴父の遺志を繼いで醫學に志し、籍を日本醫學專門學校に置いて勉學を怠る處がなかつた。斯くて螢雪の功なつて同校を卒へたが學究心の熾烈なる氏は尙も研究を捨てず、更に北里研究所に入所して日夜醫學の研究に没頭した。大正六年同所を出て更に我國日本の最高學府たる東京帝大醫學部研究科に學び、他日擡頭の地歩を築かんとして血の出る様な勉學を續けて行つた。大正七年研究科を卒業した氏は、同年東京府の招聘に應じて濟生會に入り、専ら社會の裏面に泣く貧困者の診療に當り、天才の手腕を以つて貢獻した處も少なくなかつた。ついで現職たる南北千住診療所長に榮轉し、千葉縣人會支會長、青年團長上野町、町會衛生顧問、下谷醫師會理事其他等々の名譽職を兼ねて嘖々たる令名をはせてゐる。家庭にはひで子夫人との間に一男三女がある。

池田稔

明治九年一月四日生
小石川區關口町二〇七
電話 牛込五六一番

豪宕磊落多年我國建築界の重鎮として貢獻するところ頗る多く、今や斯界の元老を以て遇せられ、聲望一代に高き我が池田建築事務所長工學士池田稔氏は、幽遠清秀の地舊松本藩の出にして、幼にして穎悟、壯裡寸にして人を呑むの概を藏し郷望を一身に集めてゐた。學序を経て東京帝國大學建築科に斯學の研鑽を積み、明治三十五年抜群の成績を以て世に出づるや、東宮御所造營局出仕を振出しに、農商務省技師、全國勸業博覽會技師、明治神宮外苑原案設計委員等に歴任して到る處に功績を擧げた。是より先明治卅七年日露戰役勃發するや、乃ち露國膺懲の矛を取り遠く南滿の曠野に馳驅し武功を樹て、目出度凱旋した。大正三年五月官を辭して獨立し事務所を日本橋々畔村井銀行樓上に設置し、爾來十四年間多年の蘊蓄と經驗とを傾倒し専ら建築設計の業務に従事し來つた。その優秀なる手腕と技術とは世評を呼び、果然頭角を現はして、日毎に殷盛を呈してゐる。嘗ては三菱本社設計懸賞競技會に一等當選、又鐵道省同競技會に二等當選しその優れた手腕の程を裏書きせられた。尙これまで諸博覽會共進會、都市計畫建築顧問、東京建築信用利用購買組合監事、日本建築士會員、建築士法委員會等に擧げられ盡瘁する處が極めて多い。氏將に圓熟の域に達し、その將來は國家的に期待されてゐる。多年の功勞に依り正七位勳六等に叙せられ又明治神宮奉贊會より特別賞を授與されてゐる。資性豪放の氏は、山野に獵し斗酒猶辭せざるも、亦一方バステルのスケッチを能くし、謠曲長唄に素人放れの喉を有し、家庭は夫人朝子との間に四男あり秀才の譽れが高い。

中井 富藏

明治十八年五月二十二日生
京橋區因幡町一三
電話京橋六六四番

崇高なる人格と高邁なる識見とを以て帝都法曹界に噴々たる令名を馳せてゐる我が中井富藏氏は名潮琵琶に程近き滋賀縣甲賀郡水口町に生れ、生家は附近切つての豪家として累代横田川源寺庄郷の大庄屋であつた。幼にして穎悟、學績常に群を抜き、郷望を一身に集めてゐた。長ずるに及び、遂に辯護士試験に及第し、幾何もなく辨理士試験にパスした俊才である。爾來現在地に事務所を設置して法律事務所の特許事務所に益々才幹を發揮し、現に法曹界一方の重鎮として重きをなすに至つた。氏は日常の誠言として『本業外他の一切の事業に關係すること勿れ、一度署名捺印すればその責は一切自己に負へ、金貸して返金なきを恨む勿れ』の三箇條を信奉し、以て處世上の訓としてゐる。又氏は智識階級に見る熱烈なる觀世菩薩の信仰者にして、毎年一回必ず西國三十三箇所の巡禮を欠かしたことはなといふ。亦以て氏の性格の半面を窺知するに足るであらう。氏が今日あるは即ちかくの如き氏の敬虔なる人格によることは云ふ迄もなく、従つて居町民又氏を渴仰すること慈父の如く遂に推されて因幡町々會創立以來の町會長として今日及び一方第十七地區整理委員に選ばれ、自治公共の爲め貢獻する所甚大である。園藝に興味を有し家庭には夫人たき子との間に長男景君長女てる子次女まさ子三女喜子四女和子五女因子六女貞子の一男六女あり團樂の楽しみに浸つてゐる。

本田 保次郎

明治十三年七月十日生
赤坂區丹後町五六

最近著しい變遷と發達をとけたのは、近代都市に於ける建築界であつた。本田保次郎氏はこの建築界に身を投じ、刻下の急務とされてゐる東京市各小學校舎の復興事業に多年の蘊蓄と努力を傾注して令名を馳せてゐる。氏は山陽第一の大郡廣島市を搖籃の地とし、夙に秀才としてその英邁非凡の素質を現し、其の將來を深く囑望せられてゐた。斯くして廣島中學を卒業した氏は、將來自己の開拓すべき境地を崇高なる藝術境—建築學に求めて東京高等工業學校建築科に入り、明治三十七年卒業すると共に海軍省建築局に奉職した。しかし氏の胸底に燃ゆる熾烈なる學究心は遂に氏を驅つて瀧大工學士に就て建築學を學ばしめ、遂に其蘊蓄を究むるに至つた。大正九年の吳工廠の建築に際しては、從來の建築と全然異つた處の近代的色彩の濃厚な所謂氏獨特の美術的創造を加味して一新紀元を劃し、斯界の第一人者として聲名を擡にした。大正十四年海軍建築部技師となり更に同年の九月東京市に招聘されて日本橋區役所の建築技師となり、爾來震災後の區内小學校復興事業に従事し、非凡な才腕を揮つて、その完成に邁進してゐる。既に氏の設計に成るものに濱町、有馬、日本橋等の各小學校があり其功績は遂に没すべからざるものがある。氏は明るい性格と明晰なる頭腦の所有者で、而かも技術者には珍らしい温かい人間味を持つてゐる。蓋し今後の活躍は期して待つべきものがあるであらう。諷曲に興味を有する處其情操の豊かなるを知るべく、富子夫人との間に三男あり、何れも氏の血を享けて秀才の譽が高い。

水町 實程

明治廿七年八月廿五日生
東京市麻布區本村町一五〇



人間の生に對して直接交渉を持つ醫師の其使命は極めて重大だが、就中小兒科醫は、何しろ相手が頑強でない小兒だけに、完全に其使命を全うするには、人一倍明かな頭腦と、尊い幾多の經驗を持たなければならぬ。我が水町實程氏は、多年米國に留學して最新醫學の蘊奥を究めた文けに、小兒科醫として令名のある人である。氏は芝區愛宕町二丁目十四番地に生れた生粹の江戸ついで、綠濃き芝山内は氏の少年時代を樂しませて呉れた。夙に輻輳小學校を卒業するや、進んで芝中學校に學び、優秀なる成績を以て同校を卒業したが、將來自己の歩むべき途が刀圭界に展けつゝあるを見て、國手たらんとし、慈惠大學に學んだのであつた。爾來専心醫學の研鑽に身を委ね、芽出度く同校を卒業したのは、大正六年の春であつた。かくて卒業後直ちに職を淺草の内田病院に奉じ、臨牀醫學に付いて大に研究することなく、遂に大正七年、萬里の波瀾を越えて遠く北米合衆國に學んだ。同地に止まること三星霜、其間加州醫術開業試験に合格し、大正十年新知識を齎らして歸朝するや、直に現住所に小兒科専門の醫院を開業するに至つた。爾來該博なる知識と、多年の蘊蓄を傾けて、誠心誠意業務に精進した甲斐あつて、今では逐日隆昌を極め、斯界に巍然頭角を抽んでゐる。氏人と爲温厚にして同情心深く、忠直に於て友愛に於て敬すべき人格者で春秋に富む氏の前途こそ、大に刮目して見るべきものがあらう。夫人をとし子と云ひ、貞淑の譽高、家庭は極めて圓滿である。

守屋 荒美雄

明治五年五月十五日生
東京市牛込區矢來町三九
電話牛込四一七六番

日本は世界の日本である。従つて日本の問題は、たゞ日本のみによつて決定せられる孤立的なものではない。世界と共に解決されなければならぬ、人口、食糧問題に於て然り、思想問題に於て然りである。されば政治家は勿論、苟も日本を背負つて立つ國民は須らく世界の動きを見極めなければならぬ。こゝに於て多年地理書の編纂と地理學の研究に精進してきた地理學者我が守屋荒美雄氏が國家への貢獻は、寔に推稱に値ひするものがある。氏は岡山縣淺口郡西河内町の人、守屋鶴松氏の三男に生れたが夙に穎敏をもつて知られ、十五歳にして準教員、次で尋常高等小學校教員の免許をえた。後上京して、二十四歳の時には、地歴の中等教員檢定試験にパスし、獨逸協會中學に奉職した。然し好學の氏は更に其の傍ら、欣求と思慕をもつて日本大學、法政大學に學んで研鑽する處あり、間もなく高等成師學會を設立して中等教員養成のため修身教育法制經濟地理歴史等の講義録を發行するに至つた。かくて大正七年帝國書院を創立して圖書雜誌の出版を營み、十五年七月同院を株式組織と改め、其の監査役となつて精勵今日に及んでゐる。現在日本の中等教科書、殊に地理に關するもの、大半は氏の編纂になつたもので斯界に重きをなしてゐる。氏は繁務の傍ら日本大學其他各學校の理事及び顧問助員等に推され後輩指導のために寧日ない。人となり聰明、稀に見る人間味の持主で、餘暇をぬすんでは地理學の研究、讀書旅行等の趣味に豊かな情操を養つてゐる。家庭には貞淑の譽高きマツ子夫人との間に八男二女あり、何れも氏に似た秀才である。



宮坂 式郎

明治三十年四月八日生
東京市芝區伊豆子町十五

長野縣の諏訪郡下諏訪町と云へば、冬の訪れを、心から待ちあぐんでゐるスポーツマンにとつて、限らない懐しみと思出を與へてくれる町である。四圍の翠嶺が解けるでもなくハツキリと寫つた明鏡のやうな諏訪湖と、ユミアンスの深い、あたりの風光は、また山や湖を求めて杖を現く人々に、明るい快さと、強い印象とを與へずにはおかない。さうした人々の思慕と憧憬の裡に平和な姿を宿してゐる諏訪の町は、我が宮坂式郎氏が夢寐だにも忘れえない播種地である。郷愛を了へると共に氏は將來醫を以て身を立てんと欲し、前途に輝く希望を抱いてはる／＼千葉醫學專門學校に學んだ。爾來この燃ゆるが如き情熱を以て滿されてゐる若き學徒は、コッポやウキルヒヨウの姿を胸に畫きつゝ、専ら醫學の研究に心身を捧げ、優秀なる成績を収めて同校を卒業したのは、大正十一年の柳楊綠ならんとする彌生の頃であつた。かくて卒業後氏は直に職を日本橋村松町なる竹内小兒科病院に奉じ、醫學博士竹内薫眞氏の下にあつて實地研究を遂げ、學業、技術共に其蘊奥を究むるに及んで遂に大正十四年の初夏、現住所に醫院を開業するに至つた。専門は内科及小兒科だが、就中小兒科は氏の最も得意とする處で、その該博なる知識と、優秀なる技能とはいやが上に信望を高からしめてゐる。氏は明るい性格の持主で、學生時代には柔道の選手として知られ、又スポーツに興味を有する半面に於て、尺八其他の音楽を好愛する處を見れば氏も亦涙の人たるを失はない。美都子夫人との間に蘊子嬢があり家庭は極めて圓滿である。

黒木 元次郎

明治十六年八月十六日生
東京府下大森町二七二五

九州と云へば豪放そのものゝやうな九州男子發祥の地で、幾多の英傑を輩出しただけに、雄大な、壯麗な天地をもつてゐる。殊に、阿蘇山、三神山、霧島山の峨々たる高嶺を連ねた九州山脈を背負つて、澎湃たる太平洋の怒濤に洗はれてゐる宮崎縣は、九州の縮圖とも云ふべく、九州の代表的な風光をもつてゐる。従つてこの土地に育成された所謂宮崎縣人は、また典型的な九州男子である。大森署長として嘖々たる令名ある我が黒木元次郎氏が實に宮崎縣兒湯郡三納村の生れであつて、親しむべく、また敬すべき人格者である。郡立高鍋公立學校を中途退學して小學校の代用教員となり、檢定試験に合格して準訓導に進み、後長崎の要塞重砲兵隊に入つて軍曹となり、退營後檢定試験をうけて、尋常正教員となつた。後幾許もなくして警視廳巡査試験に合格し、青雲の志を抱いて明治四十一年上京したのであつた。かくて日本大學法科に登壇の功を積んで、警視廳巡査部長試験にパスし、更らに警部試験に、普通文官試験に合格する等、徹頭徹尾獨力をもつて邁進し、次で警部補となり、警部に昇進して、淺草龜湯署勤務となつたのであつた。後警視廳保安部、警務課に歴任して、中野分署長となつたが、それは氏が署長としての最初であつた。かくて千住署長に轉じ、警視廳に歸任して、警務課長の椅子を占め、大正十五年、目出度く警視に進んで小松川署長に榮轉したのであつた。それより氏が大森署長に轉じたのは昭和二年の六月だが、今では氏の高潔なる人格と卓絶した手腕に町民は安住の喜びにひたつてゐる。家庭にはきみ子夫人との間に一男がある。

安藤 儀三

明治二十五年一月二十三日生
京橋區月島東仲通五ノ五番地
電話 銀座 四七一八番

未だ四十に至らざる壯年にして、而も獨力を以て現今の鐵工業界に重きを爲す至つた安藤鐵工所主安藤儀三氏の經營は、全く涙ぐましい迄の奮闘努力に依り飾られてゐる。氏は鴨飼にその名高き長良の地に呱呱の聲を揚げ、青二才を以て呼ばれる十六の年に、此の時の如き美はしい長良の流れに別れ、大望を抱いて上京した。併し氏の理想は餘りに高遠であつて現在精神的にも物質的にも餘りに貧しい自己をかへり見て歎いた。それで氏は、一月島の月島機械株式會社に身を低うして給仕となり、七圓の薄給を以て貧しい、併し希望に輝いた生活の第一歩を踏み出した。獨身生活とは云へ餘りに少ない七圓の中から、氏は二圓の授業料を削ぎ、給仕を務める傍、築地工手學校機械科に通學し勉學これ力めた。そして氏の努力と俊才は氏をして優秀な成績を揚げしめ卒業に導いた。氏は尙引續き同會社に勤務し、次第にその才能を認められ、設計、會計等に重要な位置を占める様になつた。時は大正六年我が國の經濟界は歐洲大動亂の影響を受けて未曾有の好況を來し就中鐵工業界の如きはその高潮に達したものであつた。茲に於て氏は好機逸すべからずとなし、大正七年機械、鐵骨、汽罐、橋梁、鐵塔等の鐵工材の製作を始めた。勿論始めはさゝやかなものであつたが、氏の奮闘努力は數年を出でずして今日の如く職工五十餘名を有する一大工場たらしめたのであつた。因に京濱電力の運搬用索道工事、郡山市役所水道部の高架水栓工事、三鷹村新天文臺無線電柱工事等の大工事は氏の手に爲されたものである。家庭、ふじ子夫人、一男一女がある。

小島 勘一

明治十八年生
本郷區林町一六一
電話 小石川 一三五六番

氏は本郷區内有數の有力者であり、可成りの資産家であるが、十八歳の時父君を喪ひ、直ちに家督を相續して苦勞の數々を嘗めてきてゐる。都立館中學の出身で、その才幹秀でゝゐる事と謙讓の徳を以て朋輩から敬仰され、附近町民の信任は大なるものであつた。氏は早くから人口稠密な大都市の市民の健康に及ぼす弊害の甚大であることを嘆じ、私かに衛生施設の重要なるを察し、衛生組合の設立を提唱してゐた。漸く町を擧げて氏の説に賛成し衛生組合の成立を見るに至るや氏は推されて之が會長に選ばれたのである。氏は亦近く震災後町會の設立を見るや、業議に推されて會長となり、誠意以て住民の共存共榮を圖り効果實に見る可きものがあつたが、大正十三年辭して顧問となり、引續いて後援に努めてゐる。我國古來の美德である敬神崇祖の風漸く衰へつゝある今日氏の如き敬神崇祖の念篤き人を見ることの出来るのは實に悦ぶ可きである。氏は何處迄も信仰に生きる人であつて、早くから天祖神社町總代として、その造營修繕等には率先して寄進してゐる。同時に亦御林神社信徒總代として盡すところ實に大なるものがあり、その年老いた母堂につかへての孝養振りの如きは眞に人をして感激せしめずにはおかない。氏の家庭が常に和氣霽々いとも春風の野を渡る如き平和の感を抱かしめるも實に家長としこの人格者を戴いてゐるからである。男子七人、長男宮彦君は本郷中學に存學中で父君の血を受けその才幹の豊かなるを囑されてゐる。

熱田芳松

明治二十一年九月二十一日生
南千住町三河島
電話 下谷 二五九〇番

熱田工場主として化學機械製造界に重きをなしてゐる氏は、三重縣一志郡天白村の出身である。三重縣は由來惠まれた風光明媚な國である。この麗しい自然を後に氏が上京したのは、明治三十年の春で十二歳の頃であつた。まづ氏は同郡の人熱田由藏氏を淺草區燒若町三丁目を訪れ、その工場に徒弟見習として入つた。かくて只管主家のために精勵すること二十有餘年の久しきに及んだと聞いては、氏の不撓不屈の人となりが見せられやう。しかも氏はこの長期間に亘つて零細な貯蓄をなし、遂に相當の資金を得たので大正五年五月に主家を辭して、現在の場所に獨立し工場を建設し、理科學使用一切の化學用器の製造に着手した。特に氏は性來發明的の技能を以てゐるところからして、その製作品の優秀新なることは遙かに他製品を凌ぎ、需要は日に日に多くなつて行つた。その一例としての温度計は、由來内地品は非常に不完全で到底外國品に拮抗出来ないものとされてゐたのを、氏によつて今では完全な製品を見るやうになり、舶來品の輸入防止に効を奏してゐる。同時に体温計も同様であつて、我國製作者のために萬丈の氣を吐いてゐる。その外に優秀な注射管の發賣等でも益々認められてゐる。従つて氏は常に優れた技術者の採用に心を砕き、現に山田、原兩氏の駿秀を配して、研究製作に没頭してゐる。現下職工十數名を使用して年産額四萬八千圓を超へ、なほ益々その驥足を伸べやうとしてゐる。夫人はいね子といひ、その間に二男がある。和氣篤々として絶えず春風の吹くが如き團樂をつよけてゐる。



古賀麻五郎

明治十五年生
京橋區木挽町三丁目二十一番地

時勢の變遷に伴ひ、一般社會の間に漸次其共存共榮の思想が高まり、相寄り相扶くることを基調とする町會若くは青年團等各種の自治團體が近來著しく増加し、大に其實績を擧げつゝあることは邦家の爲定に喜ぶべき現象である。古賀麻五郎氏の如きも之に洩れず夙に木挽町青年團を組織して之が幹事長となり常に皇室中心主義を標榜して團體の擁護に任じ能く働ける能く修め以て一意惠心健全なる團體の發達を企圖して餘念がない。氏の現在牛耳を執つてゐる木挽町青年團は震災直後夜警及自衛を目的とした團體を一週年の後正式に青年團の組織に改めたものである。従つて比較的成立の早かつた他の團體と伍して行くには其處に人知れぬ苦心が、團體の組織から會則の起草等に至る迄、精神的物質的に多大な犠牲が拂はれた事は云ふ迄もないが、殊に氏は團員の修養に資せんが爲、時々有益なる講演會を催し、或は射撃會を開いて軍事思想を鼓吹する等、常に欣求と思慕を以て青年の指導に任じ結束固く益々強固に遂に今日の如き發展を見るに至つたのである。氏の父君は古賀彦四郎氏と云ひ、曾て久留米藩に於て久しく殉國隊の劍道師範を勤め、明治四十年上京し爾來筆硯を友とし清境に悠々餘生を送つてゐる。こうした豪邁不屈な父君の感化を受けた氏は隨かに熱の人であり意志の人である。聞く處によると氏は團員の修養に資せんが爲各所に有益なる講演會の開かる毎に出席して自ら養修に力めるとの事だが、單に此一事を以てするも氏が如何にその責任觀念が熾烈で且つ青年の指導に心を砕いてゐるかを推知し得るであらう。

杉林健次郎

明治二十三年九月八日生
府下品川町二日五丁目一四六
電話 高輪 一三八番
電話 一八五四番

兎角發達の遅々たりし我國の工業界に、最近突如彗星の如く出現して、異彩を放つてゐるものに杉林黒滿鉛銻會社がある。而かも同社の礎石を盤石の安きにあらしめた我が杉林健次郎氏は、富山縣長岡市を其の懐しい掃箒の地とし、杉林與八郎氏の長男として生れた。幼にして穎悟、夙に商業に志を立て、叔父君同姓庄七氏が、本邦化學工業の進歩に従つて、黒鉛滿脩需要の大に見るべきものあるに着目し、明治三十三年未該製煉業に若心經營せるに協力し、遂に今日の隆盛を見るに至つたのである。而して現在同社の主なる事業は、黒鉛、滿脩、炭素、土砂其の他諸礦物の採掘製煉調合金の精鍊、販賣及之に附隨する諸工業、並に運輸本業だか、就中各種合金は從來海外より供給を仰ぐべく餘儀なくせられてゐた。然るに歐洲戰亂の苦き試練に鑑み、大正三年以來之れが製鍊に幾多の苦心と研究を重ねて、遂に一般鐵合金及鋼合金類は勿論、最も其の製鍊の至難なる純金屬滿脩を初め「タングステン」「モリブデン」「クロム」等の如き高級金屬材料の製鍊に成功し、今や國內自給自足の域に到達すべく、歐洲戰亂の劃期的時代として益々研鑽を積み、設備の改善を施し、目下斯業の大成を期しつゝある。氏人とり清廉、光風霽月の襟度を有し、稀に見る人格者である。趣味を美術、工藝に有する處、一面情操の豊かなるを見るべく、家庭には母堂みよ子、夫人梅子、弟孝三郎氏、長男泰作氏の外一男二女あり團樂の樂みに浸つてゐる。

三樹樹三

明治二十八年一月三十日生
小石川區原町二〇番地
電話 小石川 四五八番

復雜なる復興局の會計事務に執掌して快刀亂麻を截つが如き概を示し、名書記官の名を擅にしつゝある三樹樹三氏は、神奈川県津久井郡中野町の生れである。嚴父一平氏は夙に出版界の先覺者として重きをなし、現に明治書院社長、東京書籍株式會社専務、大日本製紙株式會社取締役等を兼ね傍ら東京出版協會々長、中等教科書協會々長、東京書籍商組合長等の要職に推され、而かも一方小石川區會議員として區政の樞機に參畫すること前後六星霜の多きに及んでゐる。こうした聰明な父君の血を承けて人となつた氏は、早くも少年時代より理智的閃めきを其天分に見せ、東京開成中學校から第一高等學校を経て東京帝國大學法學部政治科に學び、大正七年七月優秀なる成績を以て卒業した。而かも此若き秀才の法學士は、卒業後直に屬として職を岡山縣に奉じたが、忽ち拔擢せられて翌年理事官に進み、會計課長兼社會課長となり、新銳の意氣と理智的才能を以て事業の刷新を斷行し、名理事官として鳴らしたものだ。大正十一年六月長野縣社會課長に轉じ、後に商工課長を兼務して大いに腕を揮つたが、大正十二年九月臨時震災救護事務局に聘せられて事務官となり、以來日夜寢食を忘れて救護事務局の事務官に任じ、整地部施業課を振出しに庶務課、官房文書課等を経て同十五年十一月現職に擧げられ精勵今日に及んでゐる。資性高邁睿智、高潔なる人格と明晰なる頭腦を有し、閑あれば讀書に耽り旺盛なる智識慾を満足せしめてゐる。夫人を道子と云ふ。

荒文雄

明治十一年十月十四日生
市外澁谷町下澁谷

森山徳十

事業家は國家にとつてあらま欲しい人だ。蓋し彼等の才能から社會的國家的に必要な種々な事業が企劃され經營せられるからである。とは云へば數多い事業家の中にあつて果してどれだけが眞に事業家たる素質を有し且自覺する處があるか疑はざるを得ぬのである。此の意味に於て我が荒文雄氏の如きは眞に國家社會が要求する典型的事業家たるを失はない。氏は仙臺の人、精一氏長男に生る。明治三十六年出の法學士で爾來歐米に遊學すること前後三度に及び、卓越せる力量をして層一層新智識、新經營法の蘊蓄を深らしめん。かの財界の巨頭早川鐵治氏の知遇を得、大正三年より六年迄三千町歩に渉る大農場の經營に従事して巨腕を見せ、業績の大に見るべきものがあつた。其他關係せる諸事業は十數種に及んだが、行く處として可ならざるなき、その八面玲瓏たる才能は到る處に發揮せられて、毫も餘す處がない。而して其事業たるや何れも世の所謂輕薄なる投機的な事業と其趣を異にし、頗る堅實で而かも氏獨特の創業の才明哲なる頭腦、人心收攬術、經營の妙等と相俟つて著々業績を擧げてゐる。氏は明るい性格と高潔なる人格の所有者で、稀に見る友愛の士である。而かも温良玉の如き半面に於て一片稜々の氣骨を有し、義の爲には水火をも尙ほ且つ辭せざる大なる氣魄と仁俠の持主である。氏や齡と共に思慮益々圓熟し、將來の發展は蓋し刮目に値ひするものがあるであらう。夫人を鶴壽子と云ひ貞淑の譽が高い。

涙ぐましい奮闘と、努力によつて今日の地位を勝ち得た森山徳十氏が歩み來つた過去の道程は現代青年の範とするに足るものがある。氏は明治維新以來幾多の人材を輩出した鹿兒島縣大島の人、夙に青雲の志を抱いて學にいそしみ、明治三十七年大藏省、文官試験に合格し翌年二月同省稅務屬となり、更に同四十年裁判所書記登用試験に合格して同四十三年十一月同省を辭し、翌四十四年警視廳巡查を拜命した。之れ實に氏が警察界に乗り出した最初の第一歩であつた。かくて大正元年巡查部長を、同一年警部補となり更に警察講習所の本科を優秀なる成績を以て卒業し、同六年警部に進み警視廳保安課勤務を命ぜられた。併し心中常に向上の意氣を以て満されたる氏は自ら小成に安んずることなく同十年日本大學法科を卒業して翌年同課長に拔擢せられ、傍ら文部省社會教育調査委員を兼ね、大に天賦の才能を發揮した。大正十二年三月戸塚分署長となり、職に留ること五ヶ月、再び本廳に舞戻つて官房統計係長等警察講習所教官に命ぜられた。而かも學究心の熾烈なる氏は此間更に進んで明治大學法律研究科に入り同十三年優秀なる成績を収めて同校を卒業し、尾久警察分署長を振出しに月島警察署長を経て昭和二年六月北紺屋署長に榮轉し、精勵今日に及んでゐる。資性剛毅稀に見る高潔の人格者である。因に月島署の歴代署長は、警部、島谷英雄、同満留金藏、同岡崎豊治、同中山力太郎、同廣瀬壽太郎、警視川淵治馬、同久保田清、同田中省吾、同鷲見公明、同高野多助、同虫明嘉源治、同堀部作信、同八塚利三郎、同菅野茂、同森山徳十の諸氏である。

柳澤富右衛門

明治八年四月十日生
麻布區森元町三ノ十三
電話青山四〇六四

我が柳澤富右衛門氏の過去の道程は徹頭徹尾流汗主義によつて今日の成功を勝ち得たのである。氏の生れ故郷は長野縣の上諏訪町だが經濟的に恵まれなかつた氏は、尋常小學校の四年を修了すると、直ぐ家業に手傳はなればならなかつた。併し何とかして一廉の人間になりたいたと明暮念じてゐた氏は、青年となつた時途に輝く希望を抱いて上京したが、氏の腦裡に畫いてゐた社會と現實とは少くとも其間に大きな隔りがあつたが、氏の不撓不屈の精神は能くあらゆる苦難に堪へ遂に治三十九年七月同志三人で合資組織を以つて、新福井町の藥屋の六坪ばかりの納屋を借り受けそれを工場として僅かに九十圓の資本で、バルブ、コック水道用水栓類の鑄造製作を始めたのであつた。以來日夜寢食を忘れて業務の刷新に力を注いだ結果信用日に加はり業務次第に擴張して、遂には工場の狹隘を來すに至つたので、擴張の爲芝罘平町の土屋工場の一部を貸り、更に三田四國町に移り、大正元年遂に現地に工場住宅を新築し、九年には志田町に鑄造部を創設し、今日の隆盛を見るに至つたのである。氏は又夙に自治公共の事に力を注ぎ大正十年森元町青年團の創設せらるると共に推されて之が理事となり、更に十三年には團長十五年には顧問となり青年の指導誘掖に力めて寄與する處極めて多く、又町會創立以來副會長として町民の共榮福祉に不斷の努力を續けてゐる彼の大震災當時身を挺して罹災民の救助に狂奔した等は氏が如何に人情美の豊かなるかを最も雄辯に物語るものである。今は夫人わか子との間に三男一女を擧げ美しい家庭を營んでゐる。



平野義貞

明治二十一年三月七日生
府下世田ヶ谷町上町二五二

或る一つの仕事に自信を持つと云ふ事は、生活の上に非常な力となる従つてその仕事はその人の生活の大部分である場合、その人の生命ともなるべきものである。即ち云ひ代へれば適材適所とも云ふべきことであつて、それは何處迄も向上し得る可能性を持つてゐるものだ。わが平野義貞氏は即ちその人ではあるまいか、氏が現在その職にある經理事務に強い自信を持つてをり、此の方面の事務家として稀に見る才能を發揮し、久しく優秀なる成績を上げてゐるのは適材適所ではなくて何であらう。氏は生を富山市に享け偉大なる自然の感化裡に育つて來た。長じて後上京し、將來世に出る爲に英語の必要なることを痛感し國民英學會に學び、只管語學を専攻して卒業したが、就學心の切なる氏は更に進んで日本大學に入りて法律を研究した。そして優秀なる成績を以て同校を卒業するや直ちに氏を市役所に奉じ、財政事務に與る事十年、その後電氣局に轉じて十年の間精勵働働よくその職責を全ふした。その間氏は職務の餘暇を以つて専心學に勵み、全く獨學を以つて明治四十一年、市吏員試験に更に明治四十三年には普通文官試験に應じ、何れも好成绩を以て合格した。かくて氏は東京市にあつてその才能を認められ、次第に累進して遂には現職たる電氣局電燈課の庶務掛長となり精勵今日に及んでゐる現資性熱實にして勤直而かも謙讓の美德を有し稀に見る奮闘家である、殊に多藝多趣味で圍碁、檯球、玉突、テニス等に秀で、一面謠曲を好む處愛情の反映とも見ることが出来る、家庭では母堂に奉じて篤く夫人と共に霽々和樂をつとけてゐる。

高木勇吉

明治十二年八月二十七日生
赤坂區新町四ノ二二
電話青山五五五六番

勤儉力行額に汗して今日の成功を贏ち得た人に我が高木勇吉氏がある、氏は大倉喜八郎男を始め安田善次郎等幾多財界の大立物を産んだ新潟縣の人、夙に郷費を了へ十九歳の折、青雲の志を抱いて上京し、某酒類商の徒弟となり、茲に斯業の修業を積むこと六ヶ年、其間誠心誠意主家の爲に忠勤を抽んで、未たのもしき青年として其前途を囑望せられたものだ。かくて漸く機熟するに及び獨力を以て酒類商を開業し、朝は未明より夜は深更に至る迄、銳意家業の發展に邁進し、其間に於ける奮闘は實に涙ぐましい程で、骨を刻み肉を削ぐものがあつた。成功は畢竟勤勞の賜である。晝夜を別たす奮闘した其努力は纏て報ひられて、信用日に加はり、業務次第に擴張して遂に今日の繁榮を見るに至つた。思ふに氏が上京以來今日に至る迄過去二十有餘年の道程は、實に血と膏を以て綴られた一篇の苦闘史で今更ら努力の尊さを知るのである。氏は又公共に志篤く業務の傍ら町民の共榮福祉に寄與する處極めて多く、彼の大正十二年の大震災火災當時の如き氏は自家を放擲して罹災者の救護に當ると共に、一方自警會を組織して之が副會長に推され、町内の安寧秩序を維持する等其功績は擧げて數ふべからざるものがある。爾來今日に至る迄その職を奉じ、致々として町事に力めてゐるが、其信望の厚いことは永年副會長たるの事實に徴するも明かである、此外氏は曩に國勢調査委員其他の公職に推されて貢獻する處多く、今後の活躍は期して俟つべきものがある。夫人との間三男四女あり長男勇氏は府立第六在學中長女愛子は澗町高女に通つてゐる。



北川文三

明治十六年四月三十日生
芝區南濱町一三番地
電話高輪三三一八番

古來我が國に於ける都市發達のあとを見るに、先づ花柳界の發達となり、之に従つて都市の發展となつたのである。此の事實は現在に於ても幾多の例をあげる事が出来る。そして今や芝浦の地が實にこの階梯にある即ち芝浦の地は今や大都市計畫に依つて、東市樂港の中心となり、進んで東京の門戸となり支關とならうとして日に月に隆盛に赴きつゝあるのであるが、此の地をかく迄に隆盛に赴しめんとする重大なる要素としては、どうしても花柳界の素晴らしい發展を擧げねばならぬ。そしてかく迄に花柳界を發展せしめた功勞者に北川文三氏がある。氏は三業組合役員としてまだ當時微々として、その存在すら定かならぬ花柳界の發展の爲に盡し其結果が今日の隆盛に赴かしたものである。だからこれまでの芝浦の發展は直接間接共に氏の努力があつたものと見られるのである。氏は明治十六年四月三日を以つて、佐賀縣杵島郡橋下村に生れた。中學を佐賀に終へ、直ちに上京して慶應の理財科に入り、優秀な成績を以つて卒業した。後横濱某會社の支店長となり、大いにこの社の爲に盡す處があつたが、炯眼早くも芝浦の將來を察し、こゝに藝者屋を始めた。所が氏がかうした方面には稀に見る學識の所有者であり磊落な性格の所有者であつて、抱へ藝者に對しては慈父の如く客に對しては懇懇親切を旨としたので、自然客足も繁く此地に誘致したものである氏は後待合業に轉じて今日に至つてゐるが別に實業界のあらゆる方面にその敏腕を振ひ、この方面にも多大の貢獻をしてゐるといふ。夫人をはる子と云ひ、その間に一女がある。



大谷博隨

明治七年 月 日生
東京府下入新井町新井宿一〇三三

政治の理想は、國民の最大多數が最大幸福を得ることである。然るに政治家は徒らに政權爭奪を事とし、一般國民の福利を考慮せぬのみか、自治體にまでも憎むべき魔手をのびして、其發達を阻害せんとするの有様である。之が爲め入新井町會議員大谷博隨氏は、夙に自治體の政黨化を憂ひて自治の獨立を高唱し庶民金融機關の設置を始め、公益質屋並に職業紹介所設立等の社會的施設及思想指導等の輝けるスローガンをかゝけて、之が實現に邁進してゐる。福井縣今立郡上池内村は氏が夢寐にだも忘れ得ざる懐しい故郷である。氏は農家の三男坊に生れたが、長ずるに及んで將來國家の干城たらんとし、明治二十七年陸軍教導團に入り下士官となつた。後日露戰爭に参加して少尉に任ぜられ、勳六等旭日章を授けられたが、感ずる處あつて中途にして軍籍を退き、芝浦製作所に勤務して精勵實に十有五年の永きに及んだ。當時氏は麻布區西町に居住してゐたが、大正十一年現住所に宏壯なる邸宅を新築して移轉し、越えて大正十四年以來衆望の歸する處、推されて町會議員となり以て今日に及んでゐる。此外氏は現在入新井町美奈見區第十一部長をも兼ね、常に公共の爲め第一線に立つて華々しい活動を續けてゐるが、其の献身的努力と、犠牲的精神とは町民の信望をいやが上に高からしめてゐる。蓋し氏の如きは眞に自治の先覺者とも云ふべきであらう。氏は細心周到の好丈夫、常に中正穩健の意見を把持せる果斷實行の人である。趣味としては觀世流の謡曲に長じ、兼ねて園藝を好くし家庭には貞淑なよね子夫人あり、長男榮君は立教大學の商科に在學中である。

佐多芳久

明治十九年十二月廿三日生
東京市芝區西久保明舟町十九
電話青山六九五〇番

科學と人生の全面的接觸が醫學であると云はれる程、醫學が科學の粹を蒐めて、人生に寄與する處は極めて多い。醫學博士として名ある我が佐多芳久氏は多年醫學界にあつて天才的閃めきを見せ、優秀な技能を有する高潔な人格者である。氏は明治維新以來幾多の英傑を産んだ鹿兒島縣は薩摩郡高城村を其懐しい搖籃の地とした所謂九州男子である。生家は餘り裕福でなかつた爲め、氏は郷費を終ると共に、文字通りの苦學力行を續けて中學を卒業し、秀才として大に其前途を囑望せられたものだ。卒業後大鵬の志を抱いて千葉醫學專門學校に學び、醫學の專攻に幾春秋を重ねて、芽出度同校を卒業したのは明治四十四年の春であつた。然かも此前途有爲の若き青年醫師は、後幾許もなく副院長として築地なる腦脊髓神經科の山田病院に招聘せられ、爾來大正十一年に至る迄、實に十有二年間を、恰も一日の如く精勵し、學理に臨床にその蘊蓄は益々深きを加へて行つた。而かも生來篤學の氏は毫も小成に安んずる事なく、傍ら大正三年より五年まで京都帝國大學醫學部醫學化學教室及生理學教室に於て、荒木、石川兩博士指導の下に不斷の研究を續け、遂に大正十年論文を提出して醫學博士の學位を得るに至つた。後赤坂溜池に獨立開業したが、偶々創業日尙ほ淺き大正十二年、かの大震災火災に遭遇して一切を烏有に歸した爲め、更に現住所に病院を新設して隆盛を誇つてゐる。氏は文學殊に短歌に秀で、また怪物幽靈の研究に深き趣味と、造詣を有し、家庭には母堂とめ子刀自及鶴子夫人と外に一男三女がある。



榎本惣太郎

文久三年 月 生
東京府下蒲田町新宿四三九

多年農商務省の官吏として重きをなしてゐた榎本惣太郎氏を、蒲田町會議員に有する事は、過渡期にある蒲田町の爲に大に祝福すべきであらう。氏は日本橋區數寄屋町に生れた生粹の江戸つ兒である。夙に學序を追ふて藏前高等工業學校に學び、優秀なる成績を以て同校を卒業するや、明治二十九年職を農商務省に奉じた。以來、建築課を始め各課に歴任し、實に大正十三年に至る迄前後二十有餘年間一日の如く精勤し、殆んど省内の生字引として信望を一身に集めてゐた。其間氏は遠く桑港及セニルイス五國博覽會等へも出張を命ぜられた程で、其功績は寔に没すべからざるものがある。爲に三十六年功により藍綬褒章を賜り、後高等官三等に進み、正五位勳五等を授けらるゝに至つた。之より先き氏は、大正二年蒲田に居を移すや、町民は舉つて、氏を町會議員に選舉すること二期に及んだので、氏は心からは等町民の意氣に感奮し、目下町政の刷新と、自治の發展に献身的の努力を續けてゐる。動々もすれば輕蕩浮薄に流れんとする現代に於て稀に見る美談と云へやう。此外氏は、明治天皇御遺跡保存會の監事を始め、新宿衛生組合蒲田信用組合等の各監事として重きをなしてゐる。氏人となり剛毅、一度意を決すれば何物をも動かさずんば已まざる男性的氣魄と、烈々たる犠牲的精神の所有者である。氏の趣味は旅行で、越後の三國岳等は勿論、普ねく日本全國の山岳を踏破して質實剛健の氣風を涵養してゐるが、特に鐵道の敷設されない地方の旅行を唯一の樂としてゐる。家庭にはしま子夫人との間に一男あり、満圓である。

木曾小源次

明治十三年八月廿日生
東京府下蒲田町御園一三九

木曾義仲の後裔で、正三位源頼義郷より二十九世目に當る木曾源太郎は源太郎初旭健と稱し、攝州高槻城主として七千石を領してゐた。人爲り慷慨大志あり、文久元治年間國事に奔走し、英風突々、平野國臣、眞木保臣等と澤水正宣嘉卿を奉じて但州生野に義兵を擧げ、その參謀たり、維新の大業成るに及んで藩の知事に任ぜられ、大正七年歿する時正四位を贈られた。我が木曾小源次氏は實に其の長男として赤坂區檜町に生れたのであつた。學序を追つて日本大學師範科に學び、明治三十九年優秀なる成績を以て卒業するや、直に同大學より米國留學を命ぜられて渡米し、同地に留ること數年、四十三年新知識を齎して歸朝し、直に貿易業に従事した。偶々大正三年世界の大戦争が勃發するに及んで業績大いに擧り一躍して數百萬圓の巨利を占むるに至つた。然るに俄然大正九年の物價大暴落に遭遇せるのみか、後幾許もなくして關東の大震災に見舞はれ、打撃く不幸に少なからざる打撃を蒙つたが、堅忍大度の氏は餘裕綽々として毫も怯む處がなかつた。かくて大正十一年蒲田に居をトするに及び三等郵便局の昇格運動を皮切りに、次いで踏切工事に関して鐵道當局を動かす等蒲田町民の爲めに盡す所極めて多く爲めに推されて大正十四年町會議員となり、町政調査委員、町會計検査委員、共和會理事長及び治水委員等の名譽職を兼ね犠牲的精神と献身的努力とをもつて町政の刷新に邁進してゐる。氏は又大正十三年より昭和二年迄蒲田特設電話組合長の椅子を占め、別に玉川水道値上げ反對運動の急先鋒たりし事は普ねく人の知る處である。家庭にはしま子夫人との間に田鶴子嬢あり、精華高女を卒へ音楽學校に在學中である。

大藁今朝吉

明治廿二年二月九日生
麻布區森元町一ノ二七
電話青山三一六七番

「アダムは耕し、イブは織る」亦手空拳遂に社會の勝利者たる事を得た人々は皆この經路を辿つて來た。麻布森元町に獨力工場を經營する大藁今朝吉氏も亦人生多難の行路を辿り、生活戦線への曠野を耕した今日の成功者である。氏は信州松本大藁新吉氏の二男に生る。市を繞る日本アルプスの秀嶺物言はざれ共蒼空の下さんとて輝く白衣巨人の雄姿は恐らく氏をして幼少より或る靈感を感じしめたであらう。知らず明治卅四年松本小學卒業した一少年の氏は信州健兒の名に背かぬ豪毅と不撓の精神とを以て大志を抱き同年四月上京神田錦町高原釋療工場に職工見習として初めて實生活への第一歩を踏出したのであつた。爾來一職工として刻苦奮勵その技を練る事實に十有餘年、然して此の習練の時機こそ彼の將來に於ける成功の卵となつた事は想像に難くない。氏は飽く迄も自己を信じた而して此ならば愈自立出來ると確信した秋資金一千圓を投じて金禹榨出工場を現地に設立したが實に大正六年三月であつた。以來夙夜奮闘努力の結果業務遂日隆盛に赴き現在では職工數名を役使し而かも自ら第一線に立つて目覺しい活動を續けてゐる。此外氏は大正十四年以來同町青年團協議員に推され同年三月初音森元町會評議員となり、現今に至つた。かの大震災當時には避難民の救済に獻身的盡力をなす町内の感謝する所となつた。氏人と爲り温良にして忠直部下を愛すること極めて篤く稀に見る謙讓有徳の士である。趣味を園藝盆栽に有する處又情操の豊かなるを見ることが出來やう。家庭には春子夫人との間に一男あり至つて圓滿である。

野川喜八

明治十七年十一月十二日生
京橋區鈴木町八
電話京橋一二四〇

藪と更科は東京人が好んで足を運ぶ名うての蕎麥屋の老舗だ。氏は即ち藪蕎麥で知られた主人である。併し氏が今日の如き磐石の基礎と絶大なる信用を築き上げる迄には血の滲むやうな努力と、人知れぬ幾多の苦心とが拂はれてゐることを見通してはならぬ。氏は明治十七年福島縣に生れた。由來福島縣は多血多感な熱情家を生み維新以來河野盤洲翁の如き幾多の偉人傑士を輩出してゐる。こうした雰圍氣に人となつた氏が、幼にして胸中に鬱積たる霸氣を藏してゐたことは云ふ迄もない。氏は將來實業によつて身を立てんと欲し、前途に輝く希望を抱いて上京したのは恰かも日露の大戦漸く附はならんとする明治卅七年、實に氏が二十才の時であつた。かくて上京後直に斯業を開始し日夜奮闘努力の結果信用日に加はり業務月に開け遂に今日の有名な東京の一名物とはなつた。氏は熱烈な日蓮主義の信仰者、浩信と號して皇室中心主義を唱導し何者にも屈せぬ硬き信念とそして強い正義感を有して居る。かくて氏が福島縣人特有の政治癖は彼をしてよく政界の名士と相周交せしめ、故河野盤洲翁、箕浦勝人翁等政界の長老と相識ること深く、談たまゝ政治に及べば熱して以て國士の風あり、堂々社稷を論じて一角の見識を立つ。今や家業は家人に任せ己は只管彼が現住する鈴木町の繁榮策と隣保親善に心を傾け、町會設置の急務を感じてその創立者となり、現に副會長として活動し又區劃整理委員となつて専ら公的方面に力を盡す。然し氏は未だ五十に満たざる春秋に富むの士、向後の活躍は蓋し期して待つものがあらう。

木村清五郎

明治十年十二月八日生
四谷區東信濃町一
電話四谷四四〇二番

後年英國の殖民政策をして世界に冠絶せしめた大天才小ピットは、年齢僅かに二十一歳を以て代議士に選ばれ、イングランド議會の華として誇々の辯を振ひ、雄渾なる思想と概世的氣魄は當時英國のみが持つ時代人であつた。時代は相違し人情風俗に差異あれど明治文化燦然と輝く時若年僅かに十九才の身を以て一郡の青年團長に推舉され、國家の第一線に立つて青年の思想教育指導の任に當り、自治の發達に貢献した木村清五郎氏は尊い血と膏の犠牲を拂つて遂に今日の地位を築き上げた立志傳中の人である。氏は埼玉縣兒玉郡七木村に生れ、幼時早くも神童と稱されその將來を囑望されてゐた。長ずるに及び社會の情勢に鑑み將來砂利事業の益々有望なるを洞察して斯業を開始し涙ぐましい迄の奮闘と努力の結果搖るぎなき富の礎を築き遂に斯界に嶄然頭角を抽んずるに至つた。かくて震災後業界の發展に鑑み同志と共に關東砂利商聯合會を組織して之が會長に推され更に十五年九月第二回總會に際し氏は其任にあらざるとなし、會を固辭したけれども、容れられず滿場一致を以て再び會長に推された。以て氏が如何に斯界に人望あるかを窺知し得るであらう。此外氏は立川砂利鐵道株式會社取締役東武砂利株式會社監査役、日東砂利株式會社相談役、東京砂利商組合長其他等々の會社組合に關係し、吾が斯界の重鎮として昭和實業界に益々その驥足を伸しつゝある。氏は世路風霜を経た苦勞人、従つて義侠の涙にもろくまた温厚篤實の人、書道には秀れて一家を爲してゐる。家庭に於ては雪子夫人との間に一子正五郎君がある。

遠藤宗一

明治十五年生
四谷區内藤町一番地
電話四谷四四五二番

玲瓏たる芙蓉の峰、輝煌たる萬葉の櫻は我が國の誇りである。と同時に皇國の爲めには水火も辭せない大和魂も亦我が國の誇りである。この大和魂は時に觸れ事に當つて烈々たる愛國の焔となり我が國威をいやが上に發揚するのであつた。就中環海の一島國が一躍して先進國に伍する様になつたのは實に日露戦役で當時北滿の天地を背景に演じた日東男子の活躍は尤に凄じいものがあつた。我が遠藤宗一氏も其の一人である。氏は三重縣の人、青雲の志を抱いて上京し明治三十六年外國語學校の露語科に入學した。折しも日露の風雲は急を告げて、盡忠報國の念は國內に漲つた。氏は愛國の至情押へ難く翌三十七年退校して直ちに參謀本部に勤務し通譯官となり軍國の榮ある征露の途に着いた。かくて出征中は通譯の傍ら支那人に變裝して硝煙彈雨の中を敵地深く潛入し軍事探偵の職責を完ふして勇名を轟したものだ。それは血湧き肉躍るの痛快事であると同時に國家への尊い奉仕で功により勳七等に叙せられた。次で戦争終結後尙も奥地に残り重大なる使命を全うして國家へ貢献する處が尠くなかつた。が大正七年考ふる處あつて、自ら參謀本部を辭し翌八年現在の砂利商を開業したのである。本來斯業に精進する氏の奮闘は涙ぐましい程で、爲めに信用日に加り業務月に榮え、遂に今日の如き牢固たる地盤を築くに至つたのである。氏資性剛毅内に溢るゝばかりの温情を湛へた稀に見る人格者である。家庭には泰子夫人との間に一女あり、賢々たる和氣を以て満されてゐる。

鈴木梅四郎

文久二年四月生
東京市麹町區四番町三番地
電話四谷二三二二番

秀峯と清流に恵まれたところの長野縣は、其の絶佳な環境の陶冶のためにか、幾多の人材を、政界に財界に、教育界に輩出した。我が鈴木梅四郎氏も、長野縣の誇りとして、實業界に令名高らかな人である。氏は裾花川の流に添ふた上水内郡安茂里村の人、鈴木龍藏氏の三男に生れたが、郷費を了ると共に上京して慶應大學に學んだ。大に研鑽するところあつて同校を卒業するや、直ちに操觚界に入り、時事新報に勤めて健筆を揮ひ後聘せられて横濱貿易新報社々長に就任した。かくて變轉常なき斯界に、健實な歩みをつづけて、次第に頭角を現はし、其の確實なる内外經濟界の情報は財界の信用を購つたのであつた。現在氏は日本殖民會社々長として國民の海外發展の道を講じ、國家的難題たる人口食料移民問題に貢献をなす外、王子製紙株式會社取締役、臺南製糖、日本鑛業各會社の社長として實績をあげ、臺南森林工業株式會社、晚成事業株式會社の取締役として重きをなす等、有数の實業家として知られてゐる。尙この外にも共同火災保險、小彌谷ホテルの取締役、三越呉服店、東洋印刷、赤尾商會、帝國通信社、第一海上保險會社等の監査役として、夙夜東奔西走して、寧慮するいとまがない有様である。又氏は明治四十五年以來、國民の要望を荷つて、國會議員たること四回、其の功勞によつて勳四等を賜つたのであつた。人となり聰明、公共心の極めて篤いことは、普ねく人の知る處で、家庭には養嗣子安佐君及び愛孫の實君があり、賢々たる常春の和氣は、絶えず一家を包んでゐる。

田幡鐵太郎

明治七年五月一日生
東京市外中根岸町一八番地
電話下谷五二六番

美術家から世界の電信王となつたモールスは知らず、現在我が實業界の大立物、大川平三郎氏無二の懐刀として、事業經營の樞機に參劃してゐる田幡鐵太郎氏が、軍人畑に育つた武人と聞いては、今更ら其商才の鮮かなのに驚かされるだらう。氏は長野縣の出身で、眞田家の上田城下に呱呱の聲を擧げたのであつた。夙に上田中學校を優秀な成績で卒業するや、將來國家の干城として、身を立てんと志し、當時の陸軍教導團を出で、軍務に従ひ、昇進して特務曹長となり、上官の信任も殊の外篤かつたが、自己の資質が多く實業家に適するを見て、中途實業界に投ずるに至つた。以來氏は各方面に活動して敏腕を振つてゐたが、大正二年偶々大川氏の知る處となり、その經營にかゝる會社に勤務して、大に忠勤を抽んでたものだ。氏はその眞摯な態度と、功利を超越した忠實なる働き振りが、大川氏の眼に頼母しく映らぬ筈はない。氏は後幾許もなく拔擢せられて秘書に擧げられ大川氏の智慧叢として、非凡の才能を振ひ、其の前途を囑望せられてゐる。現在丸の内、高く天を摩する大川田中ビルに於て、終日要務を辨じづゝある氏の過去には、實にこうした奮闘の歴史が、潜んでゐるのである。氏は水晶のやうに透徹した頭腦と、明るい性格の持主で、相當に熱もあり、ねばり氣もある。殊に謙讓の美德と、創始の才を備へ、稀に見る友愛の人だ。前途尙ほ春秋に富む、蓋し氏の如きは、行詰まれて我國の實業界に明日を期待される人で、將來の發展は期して待つべきものがあるであらう。

矢澤 弦月氏

明治十九年四月生
東京府下世田谷太子堂三三九

冬を愛するもの、アルプス畫家セガンテイニの描く世界を憧憬れるものにとつて諏訪湖は忘れられないもの、一つであらう。そして空高く岸をめぐりて崩れかゝる大浪のやうな山の麓に、湖の傍に、靜かに眠つたかのやうに横たはつてゐる上諏訪町の姿もまた深い印象の一つだらう。山ぐに、冬みえて、人々から懐かしがられるところのこの町は、日本畫壇の雄、我が矢澤弦月氏にとつて亦、忘れない橋梁の地である、氏の生家は石版印刷業の開祖として知られ、嚴父磯治郎氏は、村芝居を組織して美濃大地震の義捐金を得るために奔走した義侠家で、また藝術愛好家であつた。氏は二歳の時慈母に死別し、ついで父君の夭折に逢つた爲、小學校を優等で卒業すると直ちに代用教員となつて、ひたすら青雲の志をのぼす日を持つたのであつた。後上京して時の大藏大臣渡邊武子の學僕となり、傍ら英語學校に學び、後十七歳にして久保田全徳氏の門に入り丹青の道を學んだのであつた。明治四十年九月氏は東京美術學校の選抜試験に合格して、更に彩管の技を練り、四十三年には卒業記念作品として「昔嘶」を製作し、美術研精展覽會に出品して賞牌を得、入神の技に人々を驚ろかしたものだ。かくて卒業の翌年、はじめて子爵邸を辭し、藝術家として世に立つたが、忽ち經濟的困窮に苦しめられたのであつた。然し氏は飽迄これと闘ひつゝ、技を磨き、幾多の力作を帝展等に出品して一躍名を馳せ、現に帝展審査委員として重きをなしてゐる。尙氏は今回藝術研究のため渡歐したが、今後の發展こそ期して待つべきものがあらう。

菊地 休松氏

東京府荏原郡大森町

激烈にして間斷なき生存競争と、怒濤のやうに押寄せる生活難とは、一般に經濟的觀念を助成し、それは總て人々の金融事業に對する理解となり更に生活の經濟的不安と共に良き金融機關の出現を求めてやまない。されば堅實なる内容をもつた無盡會社が最近ダイナミックな發展の過程に入つたのはこれが爲めであつて、我が大明無盡株式會社も、大衆の要望を荷つて立ち、堂々と發展の途を辿つてゐるもの、一つである。同社は京濱國道に沿ふ宏壯な三層ビルディングで、明治四十五年三月の創立にかゝり、爾來、健闘に健闘を重ねて、金融機關の生命とするところの信用を高め、契約者の數の激増を見、現在では契約高實に約一千萬圓に近く、加入者に對しては年額十萬圓の利益配當と、毎期一割以上の株主配當を行ふの隆盛を極めてゐる。無盡會社の内容は、契約者の缺口の多寡によつて、價值づけられるが、獨り大明無盡は、この點に大なる強味を有し、假令缺口及び落札者があつても之に對して毫も法律行爲を行つた事がなく、そうした場合は何時でも資産を有する土地の加入者が引受けるといふ特殊な事情の許に經營されてゐる。従つて同社の經營方針は、釋尊宗理想實現の第一歩としての所謂「初轉法輪」を理想とし、株主配當、重役給、賞與等は總て従業員評議會の協賛を経て行ふと云ふ協同一致の美しさを見せてゐる。因に同社取締役たる菊地休松氏は、稀に見る人格者で、一流會社の重役でありながら借家住ひをして、私利私慾を捨て人々の利福のために精進してゐる氏が主宰する同社の發展も當然の事であらう。

久米民之助

文久元年八月生
府下上目黒東山一〇〇番地
電話 青山 六六番

日本土木建築界の權威であり、耆宿である工學博士久米氏は、東京府士族久米權十郎氏の長男として生れた。建築界の前途に大きい望を屬した氏は、學序を経て時の最高學府である工部大學に入り、明治十七年卒業く優等で卒業するや、斯界の新人として囃されものであつた。そして直ちに皇居御造營事務局御用掛を拜命し、九重の雲深い神苑に通ずるあの二重橋の麗しくして嚴かな構造は、實に氏等の畢生の心血を注いで設計せられたものである。明治十九年には早くも工部大學校長の重職に推され、若き學徒の誘掖薫陶につとめたものである。が間もなく教壇を去つて實業界に乗出すこととした。氏の豪放な性格が象牙の塔にのみ立て籠つてゐるに堪えなかつたからである。氏は先づ土木建築界の權威である大倉組に入つて、佐世保鎮守府開港工事の大業を擔當し、一點の非難も見出されなく彼の成果を得て、斯界を驚倒させたものだ。それから氏は明治二十二年には先づ朝鮮、支那の地に遊び、その東洋趣味に充ちたクラシツクな建築様式を視察し、更に歐米各國を巡遊しエキゾチックな諸建築や、機械應用等を具さに研究し、かつ大家の門を叩いて親しく知見を求め、同二十八年以後は臺灣で専ら諸般の事業を經營し、同地の文化的開發に裨益した。やがて故里の群馬縣下より推され衆議院議員に當選し、國家の選良として虹のやうな抱負を吐露したとの事である。目下金剛山電氣鐵道會社社長、利根貯蓄銀行、日本製氷會社の各取締役等を兼ね實業界に雄飛してゐる。賢夫人との間に三男三女あり何れも健かやに人生謳歌の喜びを享けてゐる。

岩塚 松太郎

元治元年十二月十八日生
麹町區平河町一ノ一四
電話 四谷 五〇九二番

裸一貫から身を起し、多年父兄と共に困苦と奮闘して赤手食縁によらず、碎勵運命を開拓し、着々と産を興し、今日の成功を致すに至つた、わが岩塚氏の努力は亦偉とすべきである。見よ其の苦闘の跡を、膏血したる努力の結晶は吾人をして不屈忍辱の氏の性格に肅然として感嘆させずには置かないのである。氏が家は現今に於ては電燈器具製造業を以て股盛を極めて居るが、幼時は本所に居り、近邊の人、關八氏の門下に居り螢雪の苦を積んだが、後家事次第に窮乏を告ぐるに至つて止むなくみだを呑んで中途退學し、一家を支へなければならぬ立場にあつて、弱年よく收入の途を計つて奮闘したが、憔悴い少年に取つては、たへ難い苦難の試練であつた。轉沛意氣いよく昂りよく忍んで數年の間を切り抜けて明治二十八年某銀行に入る事を得たのであつたが、氏は熱心格勸業を奉じて倦む處がなかつた、かくて明治三十五年に至る間には幾許かの産を作り次第に重要な位置に置かれる様になつた。此の年同所を辭したが、當時から氏は電化の急激な進歩のあるのを機敏に洞察した。そして其の資金を擧げて電氣機器の研究に没頭し遂に精巧機の發明に成功して今次新案特許の登録を経て愛用家の間に聲價を高め、爾來高級家庭に高評を以て普及され、多年の目的遂に達せられて茲に所期の成果を収める事を得たのであるが、氏はいつもこれ迄の徑路を回想して其の今日あるは不撓堅忍のたまもの外ならぬと連懐して居る、家庭には老齡饒饒なる氏を擬て妻女のりき子と一女あり和合懸々たるものがある。



原 徳 次 郎

明治十二年十月十八日生
浅草玉姬町十五番地

市の東北隅も最早郊外に近い千住飛地三丁目、當時牛田村と云はれた町はづれの田圃を縫ふて流れて行く小川の上に、架せられた橋柱には大原橋と銘打つてあるのがある。地名に相應しからぬ名と一寸怪訝に思はれるが是には曰くがある。原氏の先代友七氏はもとの地に住んで居つた。道行く人の難儀の種となつて居つたのは、前記の河川の氾濫で村民の胸にも其の不便はいつも痛感されて居たが少額な村費は堅固な橋梁の架設を容さなかつた。時に私財を投じたのが友七氏で村民其の美譽を讃え且つ記念せんがために大原橋の名を附した。友七氏の性格は是を以てしても片鱗を覗ふ事の出来る如く公共心に満ちた人であつた。併し事業家である氏は幾多の大事業を企圖したが、不幸天運至らず失敗を累ね、財産盡盡の破目に至つた。其の後を繼いだ徳次郎氏は奮然家門の挽回を計り、父君の志を襲いだのが書籍表紙の製造業であつた。時恰も出版物激増に際會して經營亦妙を得たため、多少の波瀾隆替はあつたが、操業着々發展し、加ふるに出版界變遷の時流を豫察して製法意匠に不斷の創意改良を施した所から次第に名聲を馳するに至り、關係者の眷顧を蒐めて遂に六ヶ所に工場を經營する大組織にまで築きあげた。其の鮮かな事業的手腕は餘人の追踵を許さない所である。氏は同業組合の重鎮たるばかりでなく先代に劣らない公共志心に富み、従来居町の爲に盡瘁せること頗る多く、現在玉姬町會理事の一人として會計事務所その他の庶務を處理し、町會の主動力となつて奔走して居る。本年が四十九歳、夫人美奈子との間に一女初江子がある。

羽 間 銀 太 郎

本郷區湯島一丁目十番地
電話 不谷 四〇〇五番

邦人の犠牲的愛國心は實に萬邦無比で、有史以來三千年の史蹟に燦爛として輝いて居る所の國民性の精華である。彼の維新以來再度の國難に遭遇し、神國興廢の危機に當つて、男女老幼心を一にして之に奉じたのはこの故であつた。彼の日露戰爭當時、この殉國の美譽の數多き中、世間に喧傳された義舉が一人の愛國青年に依つて企てられた。其のヒーローは是ぞ羽間銀太郎氏であつた。説き起す氏は越中富山の出生で八尾町が其の産地の地である。二十二で單身東京に出で神田小川町の加藤酒造店に入り、二十年の星霜を陰忍勤め上げて主家の信望を擔ひ、支配人と云ふ地位にまで漕ぎつけたが、此時君は茲で獨立して家屋賣買金融業等に手を染め、膏と汗とで積み上げて財産六千餘圓を得た。折しも日露の風雲急を告げ、兵士は家を後にして出征した。丁度此の時「出征兵士及遺族をして後顧の憂なからしむる爲に血兵の資の一端に加へられたし」として全財産を投げ出した人があつた、これぞ本編の人であつて其の金額こそ巨額ではなかつたが是に刺戟されて當時赤熱して居る國民の愛國心を一時に喚起し血兵部の設置となり公債應募者激増の誘因となつた。尙君は兵士の一員に加はつて滿洲の野に戦ひ、夫人は白衣を着けて懇に傷病兵をいたわつた。春秋移つて陰陽報の日來り、周囲の聲援と自分の努力とで相當の成功を見るに至つたが、常民猶貧民者賑恤を忘れず、其店子に對する態度などは甚だ熱篤である。かの歴史の舊い湯島一丁目町會が震災當時の團體行動や、青年團の美舉など他町に例のなかつたことは是れ實に氏等の努力に負ふ所が多いのである。

青 木 美 一 郎

明治二十三年二月二十六日生
愛 知 縣 愛 知 市

竊に東京府土木課技師として、都市計畫の樞機に參畫し、現に愛知縣土木部道路課長として多年の蘊蓄を傾けて道路の改良に非凡の才能を發揮しつ、ある人に我が愛知縣土木部道路課長青木美一郎氏がある。氏は神奈川縣足柄郡眞臨村の名望家青木方之助氏の長男として生れ、父君は農業、運送業、石材商を廣く營み今日迄に郡會、村會に選ばれて議員となり更に幾多の公共事業に貢獻する所が多かつた。氏幼にして穎悟、學績常に群を抜き、大に其前途を囑望せられてゐた。後幾何もなく懐かしき父母の膝下を離れて上京し、大森中學に學び明治四十二年優秀の成績を以て同校を卒業するや、直ちに八高の難關を突破して大正六年京都帝國大學工學部土木科を卒業した。氏は高鳴る胸を抑へて暫く故山に英氣を養ひ、同十年七月技師として職を警視廳に奉じ精勵二年に及び大にその敏腕を謳はれた。同十二年三月東京府に轉じ土木課道路技師として都市計畫に多年の蘊蓄を傾倒して益々天稟の才能を發揮してゐたが、昭和二年愛知縣土木部道路課長に榮轉し今日に及んでゐる。學府を出で在職僅かに六年大東京都市計畫の大任に當つて、優秀なる成績を挙げ、嘖々たる令名を馳せたものだが、新任地に於ける今後の活躍こそ將に期して待つべきものがあるであらう。性温厚にして篤實、明晰なる頭腦と熾烈なる責任觀を有し上下の信望を一身に集めてゐる。園芸、讀書に興味を有し、夫人鈴枝氏は横濱高女出身にして活花に堪能である。未だ子實はないが、鶯鶯の契は頗る睦じいものがある。

肥 後 盛 熊

明治十五年一月三日生
小石川區林町七十番地

澎湃たる大洋の蒼波に洗はれる薩南の地は、維新以來幾多の人傑を生んだ由緒ある歴史と、豪放そのもの、氣質を薩摩軍人の胸深く刻みつけてゐる。我が肥後盛熊氏も當時村長の名譽職にあつた善一氏の次男として此地に生を享け、誇るべき霸氣を多分に恵まれたのであつた。氏は將來自己の歩むべき途を教育界に見出し、明治三十七年鹿兒島師範學校を優秀なる成績で卒業するや、直ちに職を同附屬小學校に奉じ、三ヶ年の星霜を眞摯なる態度をもつて教鞭に親しんだのであつた。然し持つて生れた霸氣は西海の涯てに朽つる事を屑とせず刻苦勉勵見事文檢に合格、東京高等師範學校附屬小學校訓導となり勤続する事實に十二年に及んだ。後東京高等師範學校科を卒へ大正十二年學習院初等科の助教員に任命され専ら貴族子弟の教育指導の任に當つた。斯て二ヶ年の後東京府立女子師範學校教諭に擧げられ同時に府立第二高等女學校の教諭を兼任して女子教育の任に當り多年の經驗と該博なる蘊蓄とを傾倒して大に力むる處があつたが、囊中の雖は忽ち認められ、遂に技擢せられて東京府の視學に任じ精勵今日に及んでゐる氏資性豪放、光風霽月の襟度を有し、名利に超越してゐる處、確かに九州男兒の面目が躍如としてゐる。氏は又斯した性格の半面に於て慈父の如き温情を湛へ、崇高なる人格に一段と奥床しい潤ひを見せてゐる。氏は庭球に興味を有し、ボールを自由にコントロールする處等は頗る堂に入つたものだ、又日本畫を好み、時に彩管を揮つて靜境に浸ると云ふ。家庭には花子夫人との間に盛夫、又雄、淑人君の三男及敏子澄子嬢の二女がある。

井上孝太郎
明治十三年五月十八日生
豊多摩郡澁谷町下澁谷一六八四
電話 高輪 五一八五番

科學文明の發達に伴れて、特に著しく進歩したのは電氣事業であつた。だから之に従屬する各種の製造工業は、千態萬狀とも云ふほどに勃興して殷盛を誇つてゐるが、特に電線の製造で名譽を購つてゐるのは、わが井上孝太郎氏である。氏は府下千駄ヶ谷の生れであるが、餘り家計が豊かになかつたから、まづ一労働者として電氣業に従つた。そして彼の日露戦争が起つた頃、沖電氣商會に轉じて技能の進歩に同輩を驚かしたものである。が大志を抱いた氏は、戦後遂に獨立して機械工場を設け、電氣機械の製作を始めた。一徒弟から工場主、この間の徑路を考へるならば、氏がどんなに苦闘したかを想像し得られやう。明治四十三年には澁谷町神原に移り、更に翌年現在の場所に移轉し、大々的に工場を擴張し發達する注文に應じてゐる。と同時に電話機械の製作と電線の製造を主なるものとし、特にコード用電線は、舶來品に比しても何等遜色がないと需要者間で定評されてゐる。目下電話の製作方面には令弟留吉氏が專任してゐるので、氏は主として電線の製作に従ひ、職工を督勵して能力の増進、製品の優良を念としてゐる。なんと云つてもその長い過去に於て、自らも一介の徒弟として苦酸を嘗めつくしただけであつて、職工を愛することわが子にも等しいので、職工も氏は慈父のやうに敬慕し、勞資間の反目が高潮期に達してゐる。昨今にも拘らず、工場内は常に和氣霽々として共存共榮の氣に充ち溢れてゐる。夫人をやる子と云ひ三男一女があり、長男は赤坂中學校に學び、秀才として將來を囑望せられてゐる。



辻松次郎
明治十九年六月二日生
麴町區麴町九丁目一三
電話 四谷 五八八六番

氏はわが國特産の銘茶商として卸し及び小賣りを營んでゐる。山來都會人になるほど萬事に刺戟を逐ふのは事實が雄辯に物語つてゐる所で、延いては豊醇な薫りを持つ銘茶の需要も日毎に増加を示しつゝある状態である。殊に性來淡泊な嗜好癖を以てゐるわが國民にとつては茶は生活必需品中重要な一つとなつてゐる。かくて氏の營業も日一日と繁昌し、今では押しも押されぬ斯業の權威としての地盤を築き上げて終つた。特に氏の生家は小御所久世御入久保村でその附近一帯は我國でも著名な銘茶の産地として讃へられてをり、そこに代々の茶商として近郷に知られてゐたものである。この事情からして、氏の現在あるは避けることの出来ぬ必然性であると云へる。氏は京都府立農學校出身で、農産物研究には一隻眼を有してゐた關係上、一時は輸入肥料に着眼して、上京後は深川區佐賀町小谷肥料商店に入つて實際を學んだこともあるが、同業が都會での營業に適してゐないのを知つて傳家の業を營むこととし、直接郷里から入荷して大正二年現在の地に茶舗を開いたのである。氏は春秋を通して産地の栽培方法にまで周到な注意を拂ひ、ひたすら精撰品の提供に努めてゐる。一方氏は公民としての身を忘れず、町内の隣保共榮に不斷の貢獻を拂つて來たので早くから町會庶務課長に推舉され、一切の切り盛りを當つてゐる。これこそ純潔な性格の持主である氏の信用を裏書きしてゐると云へやう。夫人をひさ子と云ひ、賢妻を以て知られてゐるが、子女がないので、共に對外的な奉仕をもつてその寂寥を慰め合つてゐるとは麗しい話だ。

秋澤吉藏
明治二十一年二月二十五日生
荏原郡品川町步行新宿四四
電話 高輪 二五三六番

すべての事が民衆に基調を見出して來た現今では、民衆それ自身の和衷協力によつての自治的訓練をもつとも必要とする。昔の專制政治にあつては一人の偉人が多數のものを統御してゐたのであるが、今は民衆各自の要求を綜合し、其上に現れたる一つの勢力を以つて時務の遂行を期せねばならぬ。だから現下の立憲政治下に在つては、その國家の興亡はひとへにこの自治精神の如何によつて決定づけられてゐる。民衆の自治的精神を無視した羅馬や、さてはロマノフ王朝は、儼なき殘骸を歴史の文字に刻んでゐるではないか。この意味からして國家自治の伸展に、身を以て善處する人は國運發揚の礎石を築く人だと云へる。府下品川町々會議員として自治政治に參畫し、致々として公人の責務を完ふしてゐるわが秋澤吉藏氏は、この自治精神の金字塔を築く人として、最も相應しい人物だ。氏は神奈川縣鎌倉郡深澤村内海長太郎氏の次男に生れ、幼少の時代からその聰明のほどを郷黨の間に謳はれてゐた。縣立師範學校を卒業後は故里の小學校に若い先生として、その理想家肌の熱情を幼い兒童の薫陶に捧げ、ピュリタントのやうに度ましい生活を續けたが、明治四十年秋澤家に養嗣子として入籍し、それと同時に教職を退いたのである。が舊幕時代から貸座敷業である養家先の稼業に對し、かなりの不満を抱いてゐた氏は、時代思潮とを深く洞察し、同業者の覺醒に留意し、かつは同町の自治的訓練に奔走し、ついに町政參畫の先輩と尊敬せられてゐる。趣味は論曲、新思想の理解者としての半面の幽しさを窺ふに足りやう。

藤田信次郎
明治三年七月十九日生
豊多摩郡澁谷町下澁谷四八二

名鏡にさも似たる濱名湖の水が、靜かに眞實の夢をみてゐるとでも形容すべき明媚なる湖畔、靜岡縣濱名郡豐西村宇石原一五五一氏はの生れ故郷である。靜岡縣立師範學校を卒業するや、まづ最初に月俸十二圓で高見村高等小學校の訓導を拜命した。明治二十七年のことである。和かた湖水にも優つた圓滿の風格は上長の認めることになり、異數に拔擢され、靜岡縣視學官たること七ヶ年、次いで一躍して引佐郡長に榮轉した。靜岡師範同窓生の中で高等官にまで累進したのは、氏を以つて嚆矢とする。次いで周智、磐田の各郡に轉じて前後十ヶ年の間を郡長として、非常な才腕をふるひ地方行政の刷新に資したので、郡長では最高級にまで累進し勳五等に叙せられたものだ。ところが周智郡出身の著名な實業家福川忠平氏に乞はれて、米國地方に八哩四方の大森林を有する福川商事株式會社重役に推されて、常盤線入山炭礦所長をも兼ねて經營の衝に當るに至り、更にセミ肥料株式會社、秋田縣二田製造所長等に赴任したが、二田製造所の解散と共に福川重役のみを守つて、靜かに風雲を展望してゐた。然るに郡長時代より内務省方面に多くの知己があつた關係上大正十三年懸望されて澁谷町助役となり、間もなく同年十二月に町長の要職に推され、多望な町政事務を掌握して流るゝやうな名裁決ぶりを示してゐる。家庭には夫人謙子との間に二男二女があり和氣霽々とした團樂を告げてゐる。謹嚴な人格者、事務家肌の堪能家として氏の前途は、今後はより洋々たるものがあらう。

天野七三郎

明治七年三月十七日生
本郷區眞砂町一五番地
電話小石川二〇二〇番

交通機關の發達如何は、その國の文化を物語るバロメーターである。此意味からして鐵道關係の諸事業は、重大な使命を有するものと看做し得られる、と同時に非常に有望な事業だと云へるだろう。この國家的使命の下に隆盛を物語つてゐるのは鐵道車輛機械製造株式會社である。が、かく同社が隆盛を告げるやうになつた半面には、副社長天野七三郎氏の敏腕と努力と、そして苦心が織り込まれてゐることを見通すことが出来ない。氏は鴨川の清冽な流れが祇園情緒を囁く、京都八幡町の生れで、花井宗蓮氏の第二子である。青少年時代をあの同志社に學んだが、やがて上京して最高學府の東京帝大工科大学機械科に入り、その蘊奥を極めたのであつた。卒業と共に天野仙輔氏にその逸材を見込まれて、同家の養嗣子になつたのは實に明治三十五年十二月のことであつた。やがて氏は、將來の日本は機械文明の建設によつてのみ、歐米先進國を凌駕するものであると云ふ積年の抱負を實現し、天野工場を創立して優秀な機械の製作を開始した。次で前記の會社を設立してその副社長に就任し、學理と實地との融和した識見を以て、作業の指揮監督に没頭し今日の盛大を招致したのである。何分にも鐵道車輛機械の製作のこと、その經費は非常に高み、その技術は卓越したものでなければならぬ。この間に處する氏の苦闘は實に名狀し難いものであつたであらう。一面氏は眞砂町々會長として只管町勢の發展に盡瘁しその寛容な人格美を謳歌されてゐる。…延は三男四女の子福者であつて團樂を物語つてゐる。

藤井利譽

明治五年十二月二日生
本郷區上富士前町一四二
電話小石川六四四〇番

質朴剛毅な氣風の漲つた地方として知られてゐる福島縣石城郡湯本町は氏の出身地。幼ない頃から教育者を志し、漠然と大臣や大將を胸に畫き勝な少年時代に、早くも教壇に立つて人の子に道を教ゆる高邁な人格者をなつかしんだものだ。かくして明治三十四年三月には目出度く東京高等師範學校を卒業して、同年四月に教諭として福島師範に赴任して行つた。謹嚴直行な氏の風格と、奥行きその學殖とが如何に生徒の私淑を購つたかは茲に改めて記すまでもない。明治四十一年八月には早くも東京女子師範學校教授に拔擢せられて、同輩の羨望の的になつた。次で大正六年一月には米國、英國、其他歐米各國へ留學を命ぜられ、各國教育界の狀勢を觀察し同八年三月に歸朝した。かくて氏は歐米より得たる新智識を傾けてわが國教育界に寄與するところ頗る多く、遂に大正十三年三月三十一日付を以て勅任官に任ぜられ、大に面目を施したが、更に翌月東京市視學となり、視學長を経て翌年四月學務課長に進み、多忙な東京都教育界の刷新に不斷の努力を拂つてゐる。復活途上にある我東京市は今や其創痍を癒すべく各方面に全力を傾けてゐるが、就中刻下の急務とも云ふべきは、學校々舎の新設である。氏は夙にこの點に留意し、一意専心その達成に邁進し、着々として成果を收めつゝあるは、邦家のためまことに慶賀に堪えない。氏は清廉潔白にして思慮周密、その高潔なる人格と脚底の經綸とはやがて市の教育界に美しき花としても出づるであらう。夫人との間には三男一女があり、加ふるに母堂亦健在で、家庭は和氣霽々として朝樂してゐる。

小島達太郎

明治十九年六月十四日生
本郷區弓町一ノ二五
電話小石川二七〇〇番

復興途上の帝都は恰かも一大土木事業場の感がある。まして將來大東京都市計畫の實施されんとするに當つては益々その感を深からしめる。今後帝都は將に技術家の鮮やかな手腕を發揮すべき晴れの槍舞臺と化するであらう。我が小島達太郎氏はまさに正に晴れの選手としてその舞臺に選ばれた技術家の一人である。氏は目下東京府土木技師兼道路技師として都市計畫係に勤務しその秀れた技能と蘊蓄とを傾けて、噴々たる名聲を馳せて居る。氏は前東京帝國大學教授從三位勳二等小島憲之氏の次男に生れ、父君の薫陶を受けてすこやかに育ち明治三十七年東京高等師範附屬中學を卒業した。同年赤羽工兵隊に一年志願として入隊し翌年十一月豫備陸軍工兵少尉に任ぜられて除隊し、越へて四十五年職を内務省に奉じ土木局技師として天稟の才腕を揮ひ幾多の治績をのこした。かくて大正十一年東京府技師に任ぜられて土木課勤務となり爾來精勵今日に及び目下は都市計畫に係る近郊地の土地區劃整理に關する技術方面に執筆してゐる。氏は一方居町にあつては弓町々會評議員として町内自治の爲め盡瘁して幾多の貢獻を寄與してゐる。氏は流石に軍隊生活をしたゞけあつて明るい性格の所有者だが殊に物事に對しては頗る凡帳面で業務の進捗は廳内隨一といはれてゐる。音楽演藝、運動、寫眞、撞球、等廣く趣味嗜好を有してゐる。家庭には淑徳の譽れ高いふさ子夫人がありが未だ子實がない。

小山新平

明治十八年九月十三日生
府下隅田町一三〇四

あはれ、獨帝の雄圖も一敗地に墜れ、凡ゆるものを聯合國から擄取されて疲弊は其の極度に達した、しかし、此の危機に望んで、尙新興獨逸の名を世界に冠絶せしめたものは、ゲルマニア民族が一日もおろそかにしなかつた國民教育の力であつた。誠に教育の力は國家民族發展の源泉であり、配力である。此重要な教育の衝に在つて、混沌たる時代の思潮を睥睨し、複雑な社會の情勢を究め、もつて昭和時代の國民教育に腐心しつゝある、吾が東京府視學小山新平氏の生涯こそ、けに一國の思潮を支配し、國家の興亡に關する至大な職責と云はねばならぬ。氏は上州尾島村の生れ、お國氣質の任侠と膽勇は氏の、勤勉實直な性格に調和して、常に衆人の意表に出で、吾が教育界に健實な地歩を築きつゝある。氏は明治四十年青山師範學校を卒業すると、直ちに教育界の人となり、隅田小學校の訓導として兒童の教養に力を捧げ、ついで田ヶ代、淺草の各小學校に兼任し早くも良教師の名を博した。かくて大正四年府下本田小學校長に拔擢され、大島小學校長に榮轉したが氏は此の間兒童と生活を共にして、其の特質を研究し一意専心兒童教育に没頭し父兄の大なる感激を購つたものだ。大正九年南葛飾郡々視學に昇進し、次いで北豊島、荏原の郡視學に歴任し、大正十五年には東京府視學となつて、震災後の教育に精進し、今や名視學として教育界に君臨してゐる。氏が茲に至るまでの刻苦勉勵は、實に世の龜鑑として推稱に値するものがある。氏は智識慾が旺盛で常に讀書に耽り或は時に草花園藝に親しんで情操を培てゐる。家庭には夫人と間に一男がある。

五月女 求

明治廿五年九月十六日生
府下中野町二七三番地

良き國家は常に良き國民よりなり、良き市民が良き都市を建設する事は今更論を俟たない。最近府市の社會教育課が成人教育に力を注ぐ様になつたのは實に喜ぶべき現象である。我が五月女求氏は府の社會教育課の主事として又視學として専ら其衝に當つてゐる第一人者である。氏は村會議員を父として埼玉縣北埼玉郡井泉村の今泉に呱呱の聲を擧げた。夙に聰明をもつて群童に拔んで常に、優秀なる成績を収めたが、學序を追つて埼玉師範學校を卒業したのは大正三年の事であつた。後ち更に廣島高等師範學校に進んで營養の功を積み大正十年同校を卒へると共に東京市外中野なる桃園尋常高等小學校に校長として招聘され、教鞭を執る事となつた。同十三年には選ばれて西多摩郡の視學となり、翌十四年には南多摩郡の視學に榮轉したが其の卓越せる才腕と眞摯なる態度は忽ち認められて、同年早くも東京府主事兼視學に拔擢せらるゝに至つた。越へて十五年十月、現在の樞要なる椅子を占むるに至り、爾來社會の向上發展を理想とする成人教育の實際に執筆して精勵格闘以つて今日に及んでゐる。其の經歷に於て其の學識に於て、將に又其の玲瓏玉の如き人格に於て、氏の如き人物を社會教育課に有する事は、民の幸福とも云ふべきであらう。創設未だ日尙淺い東京府の社會教育施設が忽ち長足の進歩を遂げて、斯界注目目的となつてゐるのも、氏の獻身的な努力に寄る處が決して少なくない。氏は頭腦頗る明晰にして才氣煥發、温厚仁慈の好紳士である。氏は趣味として讀書、洋樂を好み、夫人かつ子は埼玉女師出身の才媛で、一女がある。

中川 安太郎

明治十四年四月八日生
京橋區築地一ノ七
電話京橋四、八八〇番

出ては區會の曉將として畏敬され 入つては一家の慈父として敬慕されてゐる人に、吾が京橋區の中川安太郎氏がある。氏は明治十四年芝區に生れた生粹の江戸ッ兒で家は代々繪物を業として、江戸美術の粹と稱されてゐた。氏が此業を繼ぐに及んで、家業大いに發展し、惠まれた天才的美術眼と意匠稀な技巧の手腕とは、遺憾なく發揮され、東京有數の繪物師となり、陸軍御用商に指定された。氏は由來江戸兒の誇る義俠的精神の所有者で夙に青年の指導に任ずると共に町内の發展を期し、共存共榮の實を圖つて常に社會奉仕に盡す處が多かつた。殊に關東大震災の混亂時に際し、氏が罹災者救済に寢食を忘れての活動は、社會美談として衆人の龜鑑に値するものがあつた。斯くして氏が社會的地位は一步一步と築かるるに至り、大正十三年には築地一丁目の青年團長に推薦されると共に、町會相談役に選ばれ、次で大正十四年の區會改選には、壓倒的大多數を以て當選の榮を担ひ、爾來區會の樞機に參畫して遠大な經綸と高遠な抱負とを述べて巋然區會に頭角を現し、今や氏が公的の生活は、將に華々しい時代を劃せんとしてゐる。氏は現在繪物業を子弟に譲つて、悠々自適の裡に町の長老として區政町政に精進し事に當つては終始一貫飽く迄初志を徹するの概を持つて着々効を奏してゐる。夫人トク子は長唄の名師匠として令名あり、數十人の弟子に敬慕されてゐる。氏との間に一男一女あり、平和な家庭と幸福な生活を送りつゝある。蓋し積善の家に餘慶ありとは氏の如き一家を讃へるに相應はしい言葉ではあるまいか。

峰 五十雄

明治二十七年六月十九日生
東京市日本橋區葺屋町九



ヒポクラテスは、人生は短く技術は長しと云つてゐる。げに究めても及ばざるものは醫術だが、自己の熾烈なる責任觀から、人類濟生の尊い使命を自覺し、常に學究的態度を以て、醫術の堂奥に健全な歩みを續けてゐるものかあるとしたら、それは少くとも推稱に値するであらう。産婦人外科醫として令名ある我が峰五十雄氏が即ちそれである。氏は明治二十七年六月十九日を以て、淺草區地方今戸町に呱呱の聲を擧げた生粹の江戸ッ兒である。豊山中學を卒業すると共に將來刀圭界に驥足を延べんと志し慈惠大學に學んだ。かくて大正八年營養の功成り優等の成績を以て同校を卒業するや、食る程の執着と、思慕を以て慈惠病院に於て、臨床醫學の研究に没頭すること一ヶ年、後職を濟生會病院の婦人科に奉じ、孜孜として其職を勵み、他日擡頭の手腕を磨いて行つた。然し自己の職業に對して大なる責任觀念を有する氏は、在職四ヶ年の後、更に進んで母校の細菌學教室に於て一ヶ年間實地研究を遂げ、遂に現住所に産婦人外科専門の病院を開業するに至つた。爾來赤誠を披瀝して之が經營の衝に當つたが、氏の洗練された手腕と、患者に對する懇切な治療振りとは忽ち信用を購ひ一路幸運を辿つてゐる。因に氏の令兄たる峰正意氏は夙に帝國大學を卒業して、淺草區地方今戸町一〇四番地に病院を經營し、氏の病院は之が分院となつてゐるが、今では病室其他の設備も、始んど間然する處のない位行届いてゐる。氏人となり温厚、明晰な頭腦と仁俠の持主で、春秋に富む其將來こそ、將に刮目して見るべきものがあるであらう。

町 田 晋

明治七年九月十五日生
府下入新井町新井宿一三七三

有産對無産、支配者對被支配者の鬭争は、其の罪社會にあるだらうが、これ程、醜惡なそして悲惨なものはない、社會の進展を阻止するの甚しきものである。と云つて、被支配者に飽迄も忍從的たれ、内省的たれと強ひるものではない、またタイラントのやうな支配者の態度に決裁を叫ぶものでもない、だがプロとブルが階級意識を超越して、固く握手することは、美しいシーンでなければならぬ、それは社會といふ大きな立場から見ても、まことにのぞましい事である。然してこれは社會だけではなく、市町村の小さなグループに於ても、よく起こる現象であつて、過般入新井町の當事者をなやましたのも、この問題であつた。こうした紛争の間に立つて日夜東奔西走し、遂に入新井町をして再び平和の町に甦らしめたことは、一に我が町田晋氏の力に待つ處が極めて多い。氏は入新井生えぬきの人、夙に小學を卒業後専ら町政の刷新に力を注いだ結果、大正八年區制施行と共に根岸區長代理に推選せらるゝに至つた。かくて大正十四年衆望を負ふて町會議員に當選し、昭和二年中區々長に推された。越えて三年、林龍八郎氏の後任として、土木委員の榮職に擧げられ、別に村社熊野神社氏子總代をも兼ね、常に終始一貫自治の發展に精進して毫も倦む處を知らない。此外氏が町政に齎らした功績として逸すべからざる事は、町會費未納者の改善濟生思想鼓吹電灯の設備道路の擴張等擧げて數ふべからざるものがある。眞に氏の如きは自治の功勞者と云ふべきであらう。家庭は八人の多勢でしか子夫人は貞淑の譽高く、長男惣一郎君は青年團の中堅として重きをなしてゐる。

中村廣道師

明治十二年一月三十日生
東京市小石川區大塚上町七

釋迦の説いた「慈悲」キリストの教へた「愛」凡て宗教は博愛の大精神から生れたものである。従つて宗教はたゞ死者を弔ふだけでもなければ、人類のみといふ狭義の上に全生命を有するものでもない。如是畜生發菩提心」とか、生きとし生けるもの、凡てが佛性を持つてゐるのであつて、人類に限らず、犬猫を問はず、草木によらず同等に施される時はじめて佛典に永遠の生命があり、パイルに不滅の光があるのである。されば生類愛護の心に燃え、宗教の大精神から奮起して、家畜埋葬院を創立した我が中村廣道師こそ、稀にみる典型的宗教家であると云はねばなるまい。氏は愛知縣中島郡起町の機織家中村清藏氏の三男として生れたが明治二十四年、僅か十二歳の身をもつて單身上京し、淺草松葉町の正法寺に住職たりし叔父中村實道師の弟子となつた。三年の後、芝中學の前身たる増上寺第一教校に入り、更に中央大學の前身、法學院に進んだのは明治三十二年の三月であつた。越えて三十四年愛知縣の淨土宗立第四教校に學んで同校を卒業し、三十六年淺草老松町の空巖院の住職となつた。時に年齢僅かに二十有五歳であつた。在ること五年、後西信寺に轉じた。同寺は三百餘年前に建立された古刹であるにも拘らず師が第二十一世の法燈を襲いだ時は實に見る影もなく荒れ果てゝゐた。そこで師は八方奔走して翌四十一年には伽藍の大改築を行ひ、府下長崎村に犬猫埋葬地を設置するに至つた、かくて動物愛好家は勿論、多くの人々に其の高徳を稱へられ、六十餘軒の檀家が一躍して三百有餘軒に増加し、師は大正六年大僧都に進んだのである。

森田敏一

明治十年十二月三十日生
東京市本郷區駒込林町九

寶玉をつらねた様な甲州葡萄の一房を眺めても、其の産地の山梨縣が、どんなに美しい自然に恵まれてゐるかを想像することが出来る、天空を劃する放膽な山岳の起伏、岩に激する奔流、こうした美しい大自然の懷に抱かれて人となつた我が森田敏二氏が溢るゝばかりの人間味と、玲瓏玉の如き人格の持主たることに於て何の不思議もない。氏は西代郡榮村の人、郷里の小學校を卒業するや直に甲府中學に進んだが、長ずるに及び、將來刀圭界に身を捧げんと欲し上京して慈惠大學に學んだ。然し胸中燃ゆがる如き向學心に満された氏は、進んで日本醫學專門學校に入り、螢雪の功なるに及んで、更に東京帝國大學醫學部選科に入學し、醫學の蘊奥を究むるに至つた。業成るや後職を和泉橋病院内科に奉じて實地研究に心を砕いたが、遂に大正二年機の熟するに及んで現住所に内科専門の醫院を開業するに至つた。爾來専ら温い同情と慈惠の念を以て、患者に接すると同時に、その優秀なる技能は忽ち信望を博し、嶄然斯界に頭角を抽んずるに至つた。將來の大成は期して待つべきものがある、氏人格高潔にして謹嚴、内に溢るゝばかりの温情と、犠牲的精神とを堪え、稀に見る篤學の士である。氏は亦後進の子弟を愛撫すること極めて篤く、中には氏の指導誘液の下に人となり、現に醫院を開業してゐる者も少なくない云ふ。實に氏の如き人にして初めて醫は仁術なりと言ひ得べきではあるまいか、家庭には貞淑賢の高いまつ子夫人との間に、哲司、啓司、精司君の三男、及び壽子嬢があり鶴々たる和氣を以て満されてゐる。

服部市太郎

明治三年五月生
本郷區林町一七六

京橋宗十郎町の生れたと云へば、生粹の江戸つ子である。張りと意氣とを尊んだ江戸つ子の氣魄は、今もなほ氏の胸に高鳴りを告げてゐるのだ。幼ない頃鳥森小學校に學び卒業後僅か十二歳で、神田今川橋龜屋商店に入つて、二十三歳の長い歳月を、主家のために精勵したのであつた。かくて同年に獨立して芝區兼房町に修得した紐糸業を開始したのである。大正四年に現在の場所に移居して、店舗を擴張し、層一層業績をあげるやうになつた。扱てかく氏の辿つて來た過去を描寫すると、如何にも平凡ではあるがただ之は平面的であつて外形的な現れにしか過ぎず、一步奥深く内面を凝視するならば、其處には血みどろになつて運命の開拓に邁進した氏の長い苦闘史が、燦として光輝を放つてゐるだらう。字の如くに氏は徒手、拳で發足し、飽迄も自己の額に汗して一步一步と成功の彼岸に達した人物である。その間には名状し難い逆境に處して、その守る部署を放棄したいとまでの絶望に憫んだことも一再ではなかつた筈だ。がその度に忍耐強く謙遜な氏の人格が、氏自身を救つたのであつた。かくて今では町内での有志として、町會創立に參與しては實現後その理事の要職に就いて現在に至つてゐる。更に十四年度の國勢調査、市勢調査には委員として寄與するところが尠少でなかつた。加ふるに天祖神社の町總代として、敬神の美風を涵養するため、私的生活をまで犠牲にして奉仕してゐる。それでゐる飽迄も謙遜で、常に温順な潤ひを以て物事に處して行く。輕薄な現代には見出し難い人物である。夫人きく子との間には靜治(一四)君がある。

岩本藤吉

明治六年五月十七日生
日本橋區本石町三の二
電話 大手 一一〇〇番

君は水郷霞ヶ浦の邊り、茨城縣土浦町の人、舊土浦藩士忠藏氏の二男として生れた。山紫水明、たしかに土浦は詩の町である。筑波加波の連山は雲にはえ、霞ヶ浦の水、また清らかにして、蘆荻よく生ひ茂り、水郷としての趣きが深い。君の少年時代はこうして温い自然の懷に抱かれ、父母の慈愛のもとに、のびのびと育つて行つた。今や君南畫をよくし、木彫又素人の域を脱すといふ。この人となりはおして知るべきであらう。土浦中學に學んでから東京高等商業學校に入り、明治廿七年同校を卒業した。當時君はかうして、商業關係に身を立てやうとすれば、機會はいくらでもあつたのである。しかし幼にして他に異つた君の性格は、その儘、勤め人たるを欲しなかつた。そして一廉の腕を持ち乍ら、君の全然、從來没交渉だつた醫療機械の研究に身を投じた。従つて當時友人知己からは殆んど變りもの扱ひにされてゐたものである。しかし君の着眼は間違つては居なかつた。どこ迄も我が國醫療器械の完全を期したいといふ努力は、遂に在來品と異なる精巧品を製造するに至つた。君が多年の努力の尊さを見る、君今やいわしや醫療器械店主として斯界に名聲を博するに至る又故なしとせぬ。なほ震災後は、復興途上の帝都醫療界に一新生面を打開する目的のもとに、約一年間を歐米各國に遊び、大いに見聞を弘めて歸國した等、君の努力は一日として止む所がない、將來、又大いに望みを囑するに足るものがあらふ。

家庭には夫人との間に三男一女がある。

波多野次三郎

慶應二年十月生
本郷區元町一の二〇

中等教育を終つた氏は、向來支那大國への雄飛を目標け、まづ東京外國語學校に入つて南京語を學んだ。ところがその後清國は政變の結果として北京語を以て支那の國語に改めた關係上、氏は語學校を中途退學し、中央大學に轉じて法政經濟の學を専攻することにした。そして同校を優秀の成績で卒へるや内務省に職を奉じたのである。明治二十六年の頃であつた。が創業の才に富んでゐた氏は、到底薄給なサラリーマン生活に甘んずることが出来なかつた。で同志を糾合して明治二十九年には早くも横濱煙草會社を創立、更に横濱野毛貯蓄銀行創立にも關與して、縦横の奇才をふるつた。が煙草會社は官營と共に解散し、貯蓄銀行の方に在ること三四年にして退いて閑雲野鶴の身を樂み、悠々自適して今日に至つてゐる。抑も氏は現住所である本郷區生れで、生家は同區内の著名な舊家であるのと、加ふるに氏の實業家肌的な才能は益々家産を増し、現在では多くの地所と家作とを有して、何不自由なく生活を樂しむことが出来るので、氏は有り餘る熱情を公共事業に注ぎ、大正十三年四月三日には町民と計つて青年團を創立し、自らその團長として後進の指導に全力を傾けつくし、更に町民の懇請によつて元町一丁目町會の町會長として自治體のため不斷の努力を惜まない。その外元町小學校保護者會幹事、第二十八地區々劃整理委員に推されて、貢獻するところが尠少でなく、眞に公人としての生活の完璧を期してゐる次第。夫人八榮子との間に二男二女あり、長男經吾君は目下京華中學に在學して、その逸材を囑望せられてゐる。

稻葉愿

明治七年九月十四日生
芝區伊皿子町四五番

安來節で名高い島根縣松江市北田町は氏の故郷である。清澄な安道湖の淡水と、中海灣の海潮とが靜かに磯を洗ふ松江市は、情緒の町であり、唄の町であるに違ひない。郷里の中學俊を卒へてから京都に上り、第三高等學校工科を出たのが明治三十二年七月のことである。當時の高等學校は現在の如く單に大學の豫備校に過ぎぬのとは事變り、既にそれ自體に於て獨立的な地歩を占めてゐたから、氏は直ちに東京市技手となつて赴任し、更にその翌三十三年には福井縣技手に轉じ、それより千聖縣に至り同縣技手に拔擢せられた。かくて秋田縣技手を経て海軍省技師に榮轉したのは明治四十四年十月のことである。大正九年には舞鶴海軍建築第一課長兼第二課長に累進し、翌十年三月には歐米留學を命ぜられ、遠く先進國の建築工業界の視察をとげた。そして豊富な學識を培つて同十一年二月に歸朝し、直ちに横濱須賀海軍建築部長に命ぜられ、至難な要職に在つて勤しの遺漏をも生ぜしめなかつた。が大正十三年十二月には深く路を後進に譲つて退職し、東京市技師に任ぜられ道路局に入つて、第二道路課工事係長を兼ねてゐる。多年の功勞によつて從四位勳四等に叙せられ、層一層將來の大成に向つて倦むところがない。氏の人となりは濃厚篤實そのもので、部下を愛するに慈父の如き暖かい襟度を以てし、常に和氣藹々裡に業績を擧げてゐるとのこと。夫人との間に一男三女があり長男は中學卒業後目下北海道帝國大學に在學し、秀才の譽れが高いと云ふ。近く工學士として社會に巢立ち大いに敏腕をふるふことゝならう。

藤井庄一郎

文久三年四月十三月生
本所區向島須崎町一七八

貧しくとも働き得る人は幸福である。然るに貧しい人が病み傷いて働くことは勿論醫藥をさへ求むることが出来ないとしたら、それは何んなに哀れにも又痛ましいことであらう。かゝる悲惨な境遇におかれてゐる人々に温かい同情と慈惠の念を以て親切に手當を加へ、闇黒より光明へ失意より希望へと甦らしむる施療病院の事業は又となく尊いものである。此麗はし、い大きな社會事業に其半生を捧げて倦まず高遠なる理想の下に今尙老體を擧げて世の爲人の爲に精進を惜まざる人に我が東京市主事藤井庄一郎氏がある。氏は兵庫縣の出身で、嚴父を政経氏と云ひ播州森の藩士、人呼んで今様太閤と云つた位、稀に見る才氣喚發の人であつた嚴父の血を承けた氏が幼にして穎悟志操高邁にして才氣の卓越してゐたことは別に不思議はない。氏は早くより典籍に親しみ學者藤澤南岳氏に隨ひ漢學を修めてゐたが明治二十年遂に上京し、獨逸協會學校に學び、更に轉じて攻玉會に入り研磨して後政界の人となり、西郷從道、桂太郎、澁澤榮一等の名士と交り、郷土の後進を指導誘掖するもの多く、二十六歳の頃未だ我が國では會社などの珍らしかつた時代、自ら社長となつて資本金一百萬圓の會社を創立するなど識見手腕と共に出色するものがあつた。明治三十三年官途に就き市衛生部に入りてより、夙に細民救済の要を唱へ、全國醫師會の猛烈なる反對にも怯まず、明治四十三年施療病院を建設して其事務長となり、星霜こゝに拾有六年、一貫して救恤に努めてゐる。近時社會事業の勃興しつゝある時、氏の事蹟は感謝に値する。

淺香豐次郎

明治六年三月三日生
芝區二本榎町一丁目
電話高輪 一一六番

芝の「淺香」と云へば乾物屋として近隣に聞えた老舗で淺香豐次郎氏の商賣名である。勿論氏は生粹の江戸ッ兒丈けにその氣質を完全に具備し、機敏で伶俐で、そして任侠の氣に富んで居る。従つて犠牲的觀念が熾烈で人の窮狀を黙つて見てゐられない位、満身に赤い血潮が燃えてゐる。常に穩健中正の所説を把持し節を持すること高潔公共の事は苟もしない所など町民の信任を重くしてゐる所以であらう。氏は早くより家業に精進し、常に着實なる營業方針の下に粉骨碎身の努力を惜まない爲、日に業務の繁榮を來し、今日では押しも押されぬ乾物商として同業者間に重きをなしてゐる。氏はこうした忙しい家業の傍ら、自分の出た臺町小學校保護者會の會計として、前後十有五年間同校の爲に力を注いでゐる。氏又夙に町の發展と、町民の慶福増進の爲、強固なる自治團體設立の必要を感じ、有志と共に東奔西走して二本榎町會を組織し、之が副會長として町内の保健衛生を始めとし、下水道路其他百般の事業に率先して力を致し其の功績は定に没すべからざるものがある。かの關東大震災當時の如き氏は自ら身を挺して罹災民救助の任に當り、不眠不休の華々しい活動を續けて實績を擧ぐる等公共の爲に盡瘁する所多く、亦以て一面麗はしい氏の仁侠的義氣と熾烈なる責任觀念の現はれと見ることが出来る。氏は當年五十有四歳、思慮圓熟、町會の事將來益々氏の力に俟つものが多い。家庭は夫人こと子との間に一女三男があり、協力して家事に従ひ和合極めて濃かである。

福原七郎

明治十四年生
日本橋區本銀町二の三
電話大手二七〇九番

多事多端な經濟界に處して盛んに東奔西走し、致々として全幅の才腕を發揮せるのみか、他の一面にあつては公人生活に力を盡し、一日として倦意の色を示さないのを、日本橋區本銀町二丁目三番地に醫家用ゴム専門の間屋を營むわが福原七郎氏に見る。氏の生家は幕府當時に在つてはあの田中藩の藩士として、藩主に扈從して東上し、主に東京に在つた相で、郷里は靜岡縣なのである。明治維新以來、從來社會人としては下層に置かれてゐた商工階級が、一躍新興階級として頭を擡げ、經濟戰の自由競争の下に着々として覇權を握るやうになつたので、氏の嚴父は早くも氏の將來を實業家たらしめやうと發念し、中等教育を終了せしめると同時に、氏を本郷區の大磯商店に入れて實務を修得せしめたのであつた。かやうにして靜かに財界の表裏を洞察してゐた氏は、その頃護謨の用途が非常に盛んになり原料は勿論加工品の總てが輸入に依るや驟然と立つて先づ醫家用護謨商として一步を踏み出したのであつた。そして一般醫家の需要を充たすと共に、輸入防遏の一助たらしめたが、偶々平和博覽會に出品し、全國最高の優秀品として金牌を愛領の光榮に浴したのにも、如何に其優秀なこかを知り得るであらう。なほ氏は東京ゴム工業株式會社關東總代理店、東京ゴム同業組合三部副部長、東京醫療器械同業組合評議員、日本醫療器學界常任委員、保健衛生器卸賣同業組合理事等護謨製造界の重鎮となつてゐる。外に本銀町二丁目會副會長及日本橋區和會常任幹事として、自治團體の指導に任じてをり區會議員としては區政刷新のため貢獻してゐる。

天野敬一

明治七年生
本郷區東竹町二二三
電話小石川三〇三番

淡路國三原郡は氏の故郷である。淡路と云へば昔から多情多恨な歌人達によつて、その幽勝を詠ぜられた島國なのである。この海士を後に上京した氏が學序を経て明治大學法律科に入學したのは、明治二十七年のことであつた。そして同十年には優秀な成績を以つて目出度く卒業し、同年直ちに辯護士試験を受け、さしもの難關を一度で突破し月桂冠をかち得たのであつた。そしてその頃研究會幹部として政界に雄飛してゐた三好退藏氏の辯護士事務所に入つて實地の研鑽に精勵した後、現在の東竹町に獨立して開業し、主として民事事件を取扱ひ、多士儂々の法曹界に馳騁したものだ流るゝやうな雄辯、火をも踏む俠氣、整然とした法理論、明哲な頭腦、對者をさらさぬ人心收攬術、それ等氏に備はつた才能や美德は、徐々と氏の位置を根強く築き上げて、嘗ては東京辯護士會副會長にまで推されて手八丁口八丁の法曹界での重鎮となつた。目下は丸ビル三階に事務所を設けて、民事繁争の諸事件に關しては氏の右に出づる人がないとまで好評を受けてゐる。一方氏はその才腕を實業界方面にまで伸べ、南洋製糖株式會社監査役、日吉自動車株式會社監査役として、董督の實を擧げてゐるのみか、外七八社の顧問辯護士を兼ねてゐる。なほ氏は町内の事にも氣を配り、其共榮を謀りて現に東西竹友會の會長として十數年に及んでゐる。趣味は和氣實生流の壽曲で玄人も裸足だと云ふ。夫人てる子との間に三人の子女があり、長男一男(二)君は父君の母校明治大學に在學し、法學の研修に餘念がないとのこと。

小岸彦作

明治十五年一月二十日生
府下世田ヶ谷町世田谷二四四

去る明治四十一年小岸彦作氏を始め、農學士大場氏等は世道人日心に月に頽廢するを憂ひ、在郷軍人の統一と軍人精神を振興せしめんが爲に在郷軍人會なるものを創立し、時の聯隊區司令官の賛成を得て全國に向つて之が成立を宣言したのであつた。之れ即ち我國に於ける在郷軍人會の最初のもので、氏は實に之れが先覺者なのである。單に此一事から見ても氏が如何に社會公共に篤く、而かも高邁なる理想を抱いてゐるか判るであらう。氏は生を世田ヶ谷に享け、その祖先は遠く三百年前此地に移住し、其初め小西と呼ばれてゐたが、後姓を小岸と改めたと云ふ。明治四十一年先代元次郎氏の長逝するや、直に家督を相続し、父祖傳來の農を業としてゐたが、業務の傍ら力を公共の事に注ぎ、遂に衆望の歸する處推されて町會議員となり、以來今日迄十有九年間、恰も一日の如く町政の發展に努力して倦む處がない。其他氏は世田ヶ谷信用購買組合を設立し、之が理事となり、更に大正十三年には區畫整理評議員、翌十四年には世田ヶ谷青年團副團長に推され、又學校建築委員となり、在郷軍人會名譽班長となるなど、あらゆる公職に擧げられ、殆んど席を占めるの暇なき程である。而かも一度事に當るや、私事を擲つて之に當り、精勵寸時も捨てないと云ふ熱心さで、其眞摯なる態度は他の見る眼も氣の毒な位である。實に氏の如きは其生涯を擧げて社會公共の爲に奉仕するものと云ふべきであらう。夫人を多加子と云ひその間に長男勇喜君(世田ヶ谷中學校卒業)次男正雄君(同中學校在學中)三男三男君長女孔子、二女菊枝があり、賑々しく團樂してゐる。

田中三郎

明治十八年六月廿一日生
府下西巢鴨宮仲二二〇八



多年教育界にあつて盡瘁し、現に東京市教員講習所長として名を擡げてゐる我が田中三郎氏は、東京高師出身の逸材である。新潟縣中頸城郡高士村を播種地とし、雪の如き純潔なる氣風を郷土に受け、中學時代はスキーで名高い高田の地で剛邁なる英氣を培ひ、學識の琢磨を累ねて明治四十年東京高等師範學校に入學し、明治四十四年優秀なる成績を以て卒業するや、直に職を府立女子師範學校に奉じ、物理化學教諭として教鞭を執り、同時に附屬小學校主事として兒童教育の任に當つた。以來職に止まること十星霜、其間専ら心血を盡いで育英の業に當ると共に、施設の充實に力めたが、時偶々歐洲戰亂によつて殆んど萬能に近い科學の偉力を克明に見せ付けらるるに及び、政府は俄かに科學教育の必要なるを痛感し、多額の費用を支出して之が充實を計る事となつたので、同校に於ても大正七年十萬六千圓の國庫支出を仰ぎ、科學室を始め實驗室、準備室、寫眞室、デビン室等を新設して萬全を期するに至つたが、當時之等の施設に關して氏を煩はした事は非常なもので、其功績は頗る大なるものがある。かくて大正十年九月被擢せられて視學に任じ、教員講習所新設と共に講師となり現に之が所長として高邁なる學識と犀利なる頭腦とを以て斯界に重きをなしてゐる。その間氏は理化學研究會を興して都下教育界の爲に貢獻する處多く、其他全國聯合保育會、東京保育協會、東京市保育會等に關係して益々信望を馳せてゐる。蓋し氏の如きは我が教育界の偉材であらう。夫人なを子は高師理科出身で賢夫人として知られ、其間に二男三女がある。



三村鶴太郎

明治十二年五月二十二日生
牛込區若松町一 二八番地

本所區が震災より受けた打撃は最も激甚であつた。それだけに同區役所の震災の後始末が如何に困難であつたかは想像するに難くない。此の第一線に立ち粉骨碎身の努力を以つて盡瘁しつゝある人に我が三村鶴太郎氏がある。當時同區役所の戸籍掛長だつた氏は、一度かの大震災の襲來するや、上司の命を受けて臨機の處置をとり、能く吏僚を督して災害の防止に力め、震災直後は累々たる死屍の處置に萬善の策を講じたが、其體はしい犠牲的精神と熾烈なる責任觀念の發露は區民の感激の的となつたと云ふ。氏は岡山縣上房郡巨瀬村を懐かしい搖籃の地とし、夙に青雲の志を抱いて上京し、日本大學に法律を専攻して明治三十七年卒業し、同四十年職を京橋區役所に奉じて書記となつた。爾來職に止まること十有二年、其間格動其ものやうな奮闘は次第に氏を樞要なる地位に進ましめたが不幸病の爲中途にして休職の止むなきに至つた。かくて健康回復の後志を續して實業界に入り、合名會社玉置商會の總務部長となり、更に調査部主任を経て合資會社日本電氣計器製作所代表社員となり、玉置商事株式會社監査役、日不フキラメント株式會社監査役、山形木材株式會社取締役並に支配人等に歴任し、實業界に敏腕を盡へられてゐたが、十年四月、遂に時の本所區長齋島氏聘せられて同所の書記となり、後幾何もなく拔擢せられて戸籍掛長に任じ今日に及んでゐる。氏人格高潔にして稜々たる氣骨を有し、趣味として園藝を好み旅行を愛し、時には俳句によつて雅懷を述ぶと云ふ。家族、夫人貞子、長男俊彦(神戸高等商業出身、大林組勤務)二男達磨。



平野忠太郎

元治元年七月九日生
芝區田町一ノ八

老齡既に隱居として靜かに後生を送るべきを普通とする身であるのに、なほ壯者を凌ぐの活動力を以つて町の發展自治公共の爲に盡して倦まない田町一丁目友隣會副會長平野忠太郎氏は、維新回天の業も漸く緒に就かんとする元治元年の七月九日を以つて群馬縣邑樂郡に呱呱の聲をあげた。始め郷里にあつて家業に勵んでゐたが、維新後江戸が帝都となつて總ての中心となり、旭日のぼる勢を以つて伸展し來り、在郷有爲の士の憧れの的となり、磁鐵の如き力を持つて此等の諸士を吸引した時、氏も又不屈の志を抱いて上京したのであつた。時維れ、明治十六年氏が二十三歳の最も理想に燃へ向上心はその頂點に達した時であつた。氏は倒れて後止むの悲壯なる決心を以つて、先づ煙草、化粧品、雜貨商を現在地に開き、幾多の苦患を嘗めて相當の成果を修める様になつた。併しこれのみにては未だ足らずとなし、家業をばこう子夫人に任せ、明治二十三年三田郵便局に職を奉じた。以來大正十年に至る迄精勵格動よくその職責を全うし、大正九年の逓信省五十週年紀念の折は、二十年以上勤続の故を以つて銀杯を受くる迄に至つた。大正十年職を辭したが、生來活動家として生れた氏は、家業に精を出すと共に町の發展にも意を注ぎ、前に立太子式を卜して區會議員勝俣俊太郎氏等と共に幾多の努力の後つくり上げたる友隣會の副會長となり、今なほ壯者を凌ぐの活動振を見せてゐる。かく活動を好む氏はよく、温泉に遊びて保健に努むるといふ。家庭にはこう子夫人との間に一男(大倉商業通學中)があり、二女は既に嫁して他家にある。



石井孝三郎

明治十五年五月生
東京府下入新井町不入斗三三三

新舊思想が混沌として、我が國は今や、思想的國難に遭遇してゐる。この危機に自覺した人々によつて、左翼傾向の主義には撲滅の鐵鎚が下され、思想善導の聲は識者の間に高唱されてゐる。この秋を早くから洞察して、思想の悪化を防遏するため、町民の自覺を促がし、在郷軍人會の充實に努力したのは、現在入新井在郷軍人會名譽會員の我が石井孝三郎氏であつた。また、鐵道省に先んじて、全國運送業者の合同を提唱し、其の實現に奮闘したのも亦、大森倉庫株式會社事務としての氏であつた。實に氏は獻身的努力と、犠牲的精神によつて終始して來た聖者の如き人格者であり、功勞者である。氏は東京府下小山に呱呱の聲を擧げ、長ずるに及んで近衛聯隊に入り、日露戰役には黒木軍に参加して鐵嶺迄轉戦し功により勳八等白色桐葉章を賜つた。明治三十九年即ち凱旋の後、現住所に獨力を以て酒雜貨商を營み涙ぐましい程の大奮闘を續けて行つた。かくて家業に精進する傍ら、町の共存共榮に力を注ぎ大正八年には推されて町會議員となつた。氏が入新井町區制施行の功勞者として町民崇敬の的となつたのも此時である。また此年、氏は大森倉庫株式會社を創立して其の事務となり、倉庫業の附帶事業として運送業を開始したのであつた。後幾何もなく合同運動を起して之が實現を圖り、十五年大森驛前に合同運送株式會社を創設して其の社長となつた。此外氏は在郷軍人會の幹部たりし時會の爲に獻身的努力を敢えてし、爲に帝國在郷軍人會長より名譽會員に推薦せらるゝ等其功績は没すべからざるものがある。氏資性濃厚篤實家庭にはらく子夫人との間に一男二女がある。

蓮沼一雄

明治二十二年二月九日生
東京市芝區南佐久間町一丁目一

醫師は尊い人間の生命と直接の交渉を持つ丈けに、完全に其使命を全うするには幾多の經驗を必要とする。就中小兒科は相手が無邪氣な小兒丈けに、小兒に對する同情と理解と、而して經驗から芽ばえた優秀なる技能を要することは云ふ迄もない。我が蓮沼一雄氏は多年慈惠及東京病院等に於て實地研究に力め、内科及小兒科醫として卓越せる技能を有する人である。埼玉縣大里郡長井村は氏の懐しい搖籃の地である。夙に熊谷中學を卒業するや、將來刀圭界に活躍せんと志し、上京して慈惠大學に學んだ。かくて大正五年氏は螢雪の功成つて同校を卒業すると共に、直に慈惠病院に入りて、専ら臨牀醫學の研究に耽り、他日活社會に雄飛すべき地歩を築いて行つた。然し自己の責任觀念から尊い人命を取扱ふ醫師が、より以上經驗を要することを痛切に感じてゐる氏は、更に轉じて東京病院に勤務し、常に學究的態度を以て實地研究に餘念がなかつた。止ること三星霜、大正十一年遂に現住所に獨立して、内科及小兒科専門の醫院を開業するに至つたが、氏の明哲なる頭腦、溢るゝばかりの温情、該博なる知識、優秀なる技能等は相俟つて漸次信用を高め、患者から多大の感激を以て迎へられてゐる。之が爲め氏は從來の醫院を改築するの必要に迫られ、昭和四年の春堂々たる病院を新築する豫定で、目下着々之が準備に忙殺せられてゐると云ふ。氏の前途こそ正に祝福すべきであらう。人となり廉潔、犠牲的精神と、正義の念が極めて強く、家庭には貞淑の譽高き喜久子夫人との間に、一郎君を始め、美代子、いね子、愛子の三嬢があり、常春の和氣が漲つてゐる。

六車修

明治二十三年五月一日生
東京府蒲田町女塚四四六

アルス・ロンガ・ヴィタ・プレヴィス——藝術は永く、人生は短し——とか、かの文豪オスカ・ワイルドも、藝術は人生を模倣するものにあらずして、人生が藝術を模倣するものなりと、藝術の偉大さと、尊敬とを誇つてゐる。まこと、人類は藝術によつて、自己の生命の歡びを知り、人生に感激の糧を得てゐる。若し我々の人生に、藝術がなくなつたならば、色も味ひも、匂ひも潤ひもない、全くの無味乾燥な人生が、出来上るに相違ない。實に藝術は、人生に對して、人生の華なりとも云ふべき、大なる使命と、價値とをもつてゐる。而して、この藝術にして、最も親しみがあつた最も親しまれるのが、第八藝術の映畫である。されば、我が六車修氏が、次長として令腕を揮ひつゝある松竹キネマ蒲田撮影所の、人生に寄與する處も亦大なりと云はねばならない。城戸撮影所長を助けて、蒲田を今日の隆盛に到らしめた我が六車修氏は静岡縣富士郡今泉村の生れである。夙に其の穎敏を、現在松竹の社長たる大谷竹次郎氏に認められて、大谷氏と共に終始し、吾妻座、歌舞伎座等に勤め、事務に精勵と、卓絶した才腕とをもつて儕輩に拔んでゐた、大正十三年、諸口十九氏と共に世界一周して、大いに映畫に對する新知識を得、歸朝後、直ちに蒲田撮影所次長に拔擢されて今日に至つたのである。氏人となり襟度廣く一面に於て熱の人であり、亦涙の人でもある。將來我が映畫界は藝術的天分の豊かな氏の活躍に待つものが少くないであらう。家庭には貞淑の譽高きは子夫人との間に、進、隆君の二男及び幸子嬢がある。



下田徳三郎

明治十四年十一月十二日生
東京市日本橋區芳町十

多年食る程の執着と、黒幕を以て醫學の研究に身を委ね、毫も倦む處のない我が醫學博士下田徳三郎氏の如きは、蓋し稀に見る處であらう。神奈川県足柄郡東村關本は氏の懐しい故郷である。氏は夙に秀才の譽高く上京して東京府立第一中學校に學び、同校を卒業したのは明治三十七年の春であつた。かくて卒業後氏は將來國手として刀圭界に名をなさんと志し慈惠大學に入學して専ら醫學の研鑽に心を砕き、明治四十一年優秀なる成績を以て校門を辭するや、直に職を朝倉病院に奉じ、親しく朝倉博士の膝下にあつて實地研究に力むる處があつた。後斯界の權威宇野博士の經營にかゝる樂山堂病院に轉じ、大に其前途を囑望せられてゐたが、性來旺盛なる知識慾と、燃ゆるが如き向上心とを有する氏は、遂に大正五年、遠く萬里の波濤を越えて米國へ留學するに至つた。最初氏はニューヨークのコーンピア大學に入學し、親しくチンザー教授に就て細菌學を究め、更に進んでシカゴのジェナー醫科大學に學び、遂に醫學の蘊奥を究め、M.D.の學位を授けらるゝに至つた。かくて大正七年最新知識を齎して歸朝するや、直に現住所に醫院を開業し、該博なる知識と、優秀なる技術とを以て専ら之が經營の衝に當ることとなつた。然し氏は毫も之に安んずる處なく、繁忙の傍ら母校の醫化學教室に閉ぢ籠つて不斷の研究を續け、昭和三年泌尿器科に關する博士論文を提出して、我が學界の最高名譽たる博士の學位を授けらるゝに至つた。氏は公正に於て、忠直に於て、友愛に於て親しむべく敬すべき人格者で、その將來こそ刮目して見るべきものがあらう。

村瀬英雄

明治二十年十月二十二日生
神田區皆川町二十七番地



曩に濟生會板橋診療所長として、其蘊蓄を傾け患者より救世主の如く尊敬せられ、今亦東京市教育局學務課技師として學校衛生の重要な職に執掌し、その八面玲瓏たる才腕を揮つて、各方面より崇敬せられつゝある人に吾が村瀬英雄氏がある。氏は風光明媚の地たる千葉縣鴨川町を搖籃の地とし、幼にして秀才の譽高く、前途を囑目されてゐた。明治三十三年而かも年齒僅かに十三才の時早くも青雲の志を抱いて帝都に遊學し同三十七年中等學校の課程を終るや、將來醫學界に貢獻せん事を期して直ちに日本醫學專門學校に入り、同四十五年拔群の成績を以て同校を卒業したが責任觀念の強い氏は之を以て直に活社會に出づる事を屑しとせず引續き同校短期講習科に入り孜孜として研究を續け、更に大正七年斯界の權威たる帝大醫學部外科に入りて研鑽の功を積むこと實に一年有半に及んだ。茲に於て始めて實社會に其蘊蓄を振ふべく決意し、大正十二年招かれて警視廳防疫員となり、更に東京府濟生會醫師として招聘せられた。高潔なる人格と優秀な技能とは、相俟つて忽ち識者の認むる處となり異數の拔擢を受けて、更に同會板橋診療所長に任せられた。爾來強固なる責任觀念と、熱烈なる犠牲的精神とを以て終始し、患者より恰も慈父の如く思慕せられてゐるが、昭和二年東京市教育局學務課衛生掛技師として迎へられ、精勵今日に及んでゐる。其間氏は激務の傍ら欲求と思慕を以て日本醫科大學研究科に學び、昭和二年一月之れを卒業したのに徴しても氏が如何に篤學の士たるかを知らし得るであらう。家庭には夫人千代子との間に一子がある。

中村銀藏

文久元年八月十五日生
中澁谷青山南町七の二
電話 青山二〇三九番

常に殉教者の如き敬虔なる態度を以て活社會に處し、今日の地位を贏ち得た人に我が中村銀藏氏がある。神奈川県橋本郡橋本村は氏の夢寐にだも忘れ得ざる懐かしい搖籃の地である。氏は十六才の時前途に輝く希望を抱いて上京し、西郷家を始め得能兩家に仕へ只管主家の爲に精勵を抽んで、毫も倦む處を知らなかつた。この際日向のない忠實な氏の姿が、主人の眼に頼母しく映らぬ筈はなく、忽ち主家の信用を博し遂に現在では四百五十有餘戸の差配をなし徳望家として知られて居る。氏は繁忙なる業務の傍ら力を公共事業に注ぎ、澁谷町が未だ見る影もなき村制時代に於て、鋭意土地の發展に努力し、或は通路の修築に、或は衛生の施設に心を砕き、遂に今日の如き殷盛を齎らすに與つて大に力があつた。かくて衆望の歸する處推されて澁谷町々會議員となり、常に中正穩健の意見を把持して町政の伸展に盡瘁する所極めて多く、其他大正十四年八月以來第一區長に選ばれて隣保共睦、共存共榮の實を發揮する等其功は枚擧に遑のない程である。爲に表彰狀を贈られたること一再に止らずと云ふ。氏は又敬神崇祖の念極めて厚く、金玉八幡神社の氏子總代として社殿の修復、社務の整理に精進すること二十有餘年、爲に銀盃を贈られた程で、此外各所の神社佛閣等に寄進し、賞狀並に感謝狀を贈られたことが尠くない。氏資性温雅、思慮圓熟、而かも常に正義を愛し人をして自ら欣慕の念を深からしむ。趣味を畫畫骨董に有する處、又優雅なる心根を知る事が出来やう。